一般国道 201 号行橋インター関連関係埋蔵文化財調査報告　第４集

延永ヤヨミ園遺跡
－Ⅳ区Ⅱ－

福岡県行橋市大字延永・吉国所在遺跡の調査

２０１５

九州歴史資料館

延永ヤヨミ園遺跡－Ⅳ区Ⅱ－　国道201号行橋インター関連関係埋蔵文化財調査報告第４集　二〇一五　九州歴史資料館

一般国道201号行橋インター関連埋蔵文化財調査報告　第４集

延永ヤヨミ園遺跡

－Ⅳ区Ⅱ－

福岡県行橋市大字延永・吉国所在遺跡の調査

序

福岡県では、平成 20 年度から国土交通省九州地方整備局北九州国道事務所の委託を受けて、一般国道 201 号行橋インター関連建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。本報告書は、平成 20 ～ 25 年度にかけて行った福岡県行橋市延永・吉国に所在する延永ヤヨミ園遺跡の発掘調査の記録で、国道 201 号行橋インター関連に伴う本遺跡の調査報告書の３冊目となります。

本遺跡は、京都平野に突き出す低丘陵上～斜面及び谷部に立地し、近隣には県指定史跡ビワノクマ古墳などが位置しています。

今回の調査では、弥生時代終末～古墳時代初頭、古墳時代後期を中心とした大規模な集落跡と古代～中世の遺構・遺物を確認しました。中でもⅣ-Ｃ区谷から出土した木簡類及び墨書土器などから、本遺跡は『類聚三代格』に記された「草野津（かやののつ）」と考えられることなど、この地域の歴史を知る上で大変貴重な資料を得ることができました。

本書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

平成 27 年３月 31 日

九州歴史資料館
館長　杉光 誠

例　言

1．本書は、一般国道201号行橋インター関連建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県行橋市延永・吉国に所在する延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ−Ｂ２区及びⅣ−Ｃ区の記録で、一般国道201号行橋インター関連関係埋蔵文化財調査報告の第４集にあたる。

2．発掘調査は国土交通省九州地方整備局北九州国道事務所の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課及び九州歴史資料館が実施し、整理報告は同所の委託を受けて、九州歴史資料館が実施した。

3．本書に掲載した遺構写真の撮影は進村真之・大庭孝夫・下原幸裕が、遺物写真の撮影は九州歴史資料館が行った。空中写真については、九州航空株式会社・東亜航空技研株式会社・有限会社空中写真企画に委託し、撮影を行った。

4．本書に掲載した遺構図の作成は、進村・大庭・下原が行い、発掘作業員が補助した。

5．出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、小池史哲･城門義廣･小川泰樹の指導の下に実施した。なお、一部の木製品の実測は公益財団法人元興寺文化財研究所に委託した。

6．出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。

7．本書に使用した分布図は、国土交通省国土地理院発行の 1/25,000 地形図「行橋」、1/50,000 地形図「行橋･蓑島･中津・田川」を改変したものである。

8．本書で使用した方位は、世界測地系による座標北である。

9．樹種の鑑定は小林啓が行った。

10．本書の執筆は進村・大庭・下原・城門・小林・酒井芳司・岩橋由季・株式会社古環境研究所・公益財団法人元興寺文化財研究所が行い、大庭が編集した。

目　次

巻頭図版
序
例言
目次
図版目次
挿図目次
表目次
文中写真目次
Ⅰ　はじめに（大庭）……1
　1　調査に至る経緯と経過……1
　2　調査・整理の組織……4
Ⅱ　位置と環境（大庭）……6
　1　地理的環境……6
　2　歴史的環境……6
Ⅲ　発掘調査の記録……10
　1　遺跡の概要（大庭）……10
　2　延永ヤヨミ園遺跡及び関連遺跡の既往の調査（大庭）……10
　3　Ⅳ-Ｂ２区の遺構と遺物（大庭・下原・城門・岩橋）……14
　　(1)　調査の経過……14
　　(2)　調査区の概要……17
　　(3)　竪穴住居跡……20
　　(4)　掘立柱建物跡……71
　　(5)　土坑……71
　　(6)　井戸……81
　　(7)　不明遺構……81
　　(8)　ピット……84
　　(9)　遺構面等……84
　　(10)　特殊遺物……84
　　(11)　小結……90
　4　Ⅳ-Ｃ区の遺構と遺物（進村・城門・酒井）……92
　　(1)　調査の経過……92
　　(2)　調査区の概要……92
　　(3)　土坑……92
　　(4)　井戸……101
　　(5)　溝……109
　　(6)　包含層……109

(7)　墨書土器 …… 120
(8)　特殊遺物 …… 120
(9)　木製品 …… 120
(10)　木簡釈文 …… 154
(11)　小結 …… 159
Ⅳ　科学分析 …… 159
1　胎土（粘土）分析（株式会社古環境研究所）…… 159
2　延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ区における種実同定報告（株式会社古環境研究所）…… 166
3　延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ-Ｃ区出土木製鞍に伴う分析報告（元興寺文化財研究所）…… 168
Ⅴ　総括（大庭・城門・酒井・小林）…… 169
1　Ⅳ-Ｂ２区及びⅣ-Ｃ区の遺構の変遷について（大庭）…… 169
2　延永ヤヨミ園遺跡周辺の古墳時代初頭前後竪穴住居の構造（大庭）…… 173
3　カマドの廃絶行為について（大庭）…… 177
4　木製品について（城門）…… 179
5　延永ヤヨミ園遺跡における津の考古学的状況（城門）…… 182
6　木簡・墨書土器からみた延永ヤヨミ園遺跡（酒井）…… 186
7　出土木製品の樹種同定（小林）…… 189
8　延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ区の調査成果のまとめ（大庭）…… 195

図版目次

巻頭図版１　１ Ⅳ-Ｂ区122号竪穴住居跡（西から）　２ 延永ヤヨミ園遺跡出土手焙形土器
巻頭図版２　１ Ⅳ-Ｂ区134号竪穴住居跡（東から）
２ Ⅳ-Ｂ区134号竪穴住居跡カマド出土状況（東から）
巻頭図版３　１ Ⅳ-Ｂ区137号竪穴住居跡（南から）
２ Ⅳ-Ｂ区137号竪穴住居跡カマド（南から）
巻頭図版４　１ Ⅳ-Ｂ区140号竪穴住居跡（南から）
２ Ⅳ-Ｂ区140号竪穴住居跡カマド出土状況（南から）
巻頭図版５　１ Ⅳ-Ｃ区出土木製鞍　２ Ⅳ-Ｃ区出土木簡類
巻頭図版６　１ Ⅳ-Ｃ区出土墨書土器　２ Ⅳ-Ｃ区包含層出土「津」銘墨書土器
図版１　１ Ⅳ-Ｂ区全景（空中写真、西から）　２ Ⅳ-Ｂ区全景（空中写真、上から）
図版２　１ Ⅳ-Ｂ区基本土層（西から）
２ Ⅳ-Ｂ区120・121・130号竪穴住居跡、32号土坑（北東から）
３ Ⅳ-Ｂ区120号竪穴住居跡カマド（東から）
図版３　１ Ⅳ-Ｂ区122号竪穴住居跡出土状況①（南西から）
２ Ⅳ-Ｂ区122号竪穴住居跡出土状況②（東から）
３ Ⅳ-Ｂ区122号竪穴住居跡炉跡（南から）
図版４　１ Ⅳ-Ｂ区131号竪穴住居跡（南から）　２ Ⅳ-Ｂ区131号竪穴住居跡カマド（南から）

3 Ⅳ-Ｂ区132号竪穴住居跡出土状況①（南東から）
図版５　1 Ⅳ-Ｂ区132号竪穴住居跡出土状況②（北西から）
2 Ⅳ-Ｂ区132号竪穴住居跡屋内土坑（南東から）
3 Ⅳ-Ｂ区132号竪穴住居跡完掘状況（南東から）
図版６　1 Ⅳ-Ｂ区133号竪穴住居跡（南から）
2 Ⅳ-Ｂ区133号竪穴住居跡カマド（南から）
3 Ⅳ-Ｂ区133号竪穴住居跡出土状況（西から）
図版７　1 Ⅳ-Ｂ区134号竪穴住居跡（南東から）
2 Ⅳ-Ｂ区134号竪穴住居跡カマド完掘（南東から）
3 Ⅳ-Ｂ区134号竪穴住居跡カマド断ち割り（Ｃ-Ｃ′）（東から）
図版８　1 Ⅳ-Ｂ区137号竪穴住居跡出土状況（北西から）
2 Ⅳ-Ｂ区137号竪穴住居跡カマド断ち割り（Ｄ-Ｄ′）（南西から）
3 Ⅳ-Ｂ区137号竪穴住居跡カマド断ち割り（Ｉ-Ｉ′）（南西から）
図版９　1 Ⅳ-Ｂ区138Ａ・Ｂ号竪穴住居跡（北から）
2 Ⅳ-Ｂ区138Ａ号竪穴住居跡カマド（北から）
3 Ⅳ-Ｂ区139号竪穴住居跡（東から）
図版10　1 Ⅳ-Ｂ区139号竪穴住居跡カマド検出状況（南東から）
2 Ⅳ-Ｂ区139号竪穴住居跡カマド完掘状況（南東から）
3 Ⅳ-Ｂ区140号竪穴住居跡付近（南から）
図版11　1 Ⅳ-Ｂ区140号竪穴住居跡（南から）　2 Ⅳ-Ｂ区140号竪穴住居跡カマド（南から）
3 Ⅳ-Ｂ区141号竪穴住居跡（東から）
図版12　1 Ⅳ-Ｂ区141号竪穴住居跡カマド（東から）
2 Ⅳ-Ｂ区141号竪穴住居跡P1出土状況（南から）
3 Ⅳ-Ｂ区143号竪穴住居跡カマド出土状況（東から）
図版13　1 Ⅳ-Ｂ区143号竪穴住居跡カマド完掘状況（東から）
2 Ⅳ-Ｂ区144号竪穴住居跡（南東から）　3 Ⅳ-Ｂ区31号土坑（北東から）
図版14　1 Ⅳ-Ｂ区33号土坑（西から）　2 Ⅳ-Ｂ区34号土坑（南から）
3 Ⅳ-Ｂ区35号土坑（南から）
図版15　1 Ⅳ-Ｂ区36号土坑（東から）　2 Ⅳ-Ｂ区37号土坑（南から）
3 Ⅳ-Ｂ区43号土坑（南から）
図版16　1 Ⅳ-Ｂ区45号土坑（東から）　2 Ⅳ-Ｂ区46号土坑（西から）
3 Ⅳ-Ｂ区47号土坑（北東から）
図版17　1 Ⅳ-Ｂ区48号土坑（南から）　2 Ⅳ-Ｂ区48号土坑出土状況（南から）
3 Ⅳ-Ｂ区４号井戸（南から）
図版18　1 Ⅳ-Ｂ区SX01（南西から）　2 Ⅳ-Ｂ区P820（西から）
3 Ⅳ-Ｂ区P851（北から）
図版19　Ⅳ-Ｂ区出土遺物①　図版20　Ⅳ-Ｂ区出土遺物②
図版21　Ⅳ-Ｂ区出土遺物③　図版22　Ⅳ-Ｂ区出土遺物④

図版23　1　Ⅳ-Ｃ区東側全景（北から）　2　Ⅳ-Ｃ区全景（北から）　3　Ⅳ-Ｃ区全景（東から）
図版24　1　Ⅳ-Ｃ区東側全景（東から）　2　Ⅳ-Ｃ区土坑集中部分（東から）
3　Ⅳ-Ｃ区1002号土坑（西から）
図版25　1　Ⅳ-Ｃ区1003号土坑出土状況（南東から）　2　Ⅳ-Ｃ区1008号土坑（東から）
3　Ⅳ-Ｃ区1009号土坑（南東から）
図版26　1　Ⅳ-Ｃ区1010号土坑（東から）　2　Ⅳ-Ｃ区1011号土坑（西から）
3　Ⅳ-Ｃ区1012号土坑（西から）
図版27　1　Ⅳ-Ｃ区1013号土坑（西から）　2　Ⅳ-Ｃ区1014号土坑（南から）
3　Ⅳ-Ｃ区1015号土坑（北から）
図版28　1　Ⅳ-Ｃ区1016号土坑（西から）　2　Ⅳ-Ｃ区1号井戸（北から）
3　Ⅳ-Ｃ区2号井戸（北西から）
図版29　1　Ⅳ-Ｃ区包含層①（北から）　2　Ⅳ-Ｃ区包含層②（南東から）
3　Ⅳ-Ｃ区包含層③（北から）
図版30　1　Ⅳ-Ｃ区包含層④（東から）　2　Ⅳ-Ｃ区包含層⑤（南から）
3　Ⅳ-Ｃ区包含層⑥（北東から）
図版31　1　Ⅳ-Ｃ区包含層⑦（南から）　2　Ⅳ-Ｃ区包含層⑧（南東から）
3　Ⅳ-Ｃ区包含層⑨（南から）
図版32　1　Ⅳ-Ｃ区包含層⑩（北から）　2　Ⅳ-Ｃ区包含層⑪（東から）
3　Ⅳ-Ｃ区包含層⑫（南から）
図版33　Ⅳ-Ｃ区出土遺物①　図版34　Ⅳ-Ｃ区出土遺物②　図版35　Ⅳ-Ｃ区出土遺物③
図版36　Ⅳ-Ｃ区出土遺物④　図版37　Ⅳ-Ｃ区出土遺物⑤　図版38　Ⅳ-Ｃ区出土遺物⑥
図版39　Ⅳ-Ｃ区出土遺物⑦　図版40　Ⅳ-Ｃ区出土遺物⑧　図版41　Ⅳ-Ｃ区出土遺物⑨
図版42　Ⅳ-Ｃ区出土遺物⑩　図版43　Ⅳ-Ｃ区出土遺物⑪　図版44　Ⅳ-Ｃ区出土遺物⑫

挿図目次

第１図　延永ヤヨミ園遺跡の位置 …… 1
第２図　国道201号線行橋インター関連路線図と調査地点位置図（１/25,000）…… 2
第３図　調査区割図（１/2,000）…… 3
第４図　周辺遺跡分布図（１/50,000）…… 7
第５図　延永ヤヨミ園遺跡等関係図（1/6、1/60、1/120、1/200、1/500、1/600）…… 11
第６図　延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ-Ｂ・Ｃ区区割図（1/1,000）、Ⅳ-Ｂ２区遺構切り合い関係図 …… 14
第７図　延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ-Ｂ２区全体図（1/200）…… 15・16
第８図　延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ-Ｂ区基本土層（1/60）…… 18
第９図　Ⅳ-Ｂ区120号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 19
第10図　Ⅳ-Ｂ区120号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）…… 20
第11図　Ⅳ-Ｂ区120・121号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 21
第12図　Ⅳ-Ｂ区121号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 23

第13図　Ⅳ-Ｂ区122号竪穴住居跡実測図（1/60）……25
第14図　Ⅳ-Ｂ区122号竪穴住居跡出土遺物実測図①（1/3）……27
第15図　Ⅳ-Ｂ区122号竪穴住居跡出土遺物実測図②（1/3）……28
第16図　Ⅳ-Ｂ区122号竪穴住居跡出土遺物実測図③（1/3）……29
第17図　Ⅳ-Ｂ区122号竪穴住居跡出土遺物実測図④（1/3）……30
第18図　Ⅳ-Ｂ区122号竪穴住居跡出土遺物実測図⑤（1/3）……31
第19図　Ⅳ-Ｂ区122号竪穴住居跡出土遺物実測図⑥（1/3）……32
第20図　Ⅳ-Ｂ区122号竪穴住居跡出土遺物実測図⑦（1/3）……33
第21図　Ⅳ-Ｂ区130号竪穴住居跡実測図（1/60）……34
第22図　Ⅳ-Ｂ区131号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60、1/30）……35
第23図　Ⅳ-Ｂ区131・133・135・136号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……36
第24図　Ⅳ-Ｂ区132号竪穴住居跡・屋内土坑実測図（1/60）……37
第25図　Ⅳ-Ｂ区132号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）……39
第26図　Ⅳ-Ｂ区132号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3、1/4、1/8）……40
第27図　Ⅳ-Ｂ区132号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/3）……41
第28図　Ⅳ-Ｂ区133号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60、1/30）……43
第29図　Ⅳ-Ｂ区134号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60、1/30）……45
第30図　Ⅳ-Ｂ区134・138号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……47
第31図　Ⅳ-Ｂ区135・136号竪穴住居跡実測図（1/60）……48
第32図　Ⅳ-Ｂ区137号竪穴住居跡実測図（1/60）……51
第33図　Ⅳ-Ｂ区137号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……52
第34図　Ⅳ-Ｂ区137号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……53
第35図　Ⅳ-Ｂ区138A・B号竪穴住居跡・138A号カマド実測図（1/60、1/30）……55
第36図　Ⅳ-Ｂ区139号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60、1/30）……57
第37図　Ⅳ-Ｂ区140号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60、1/30）……59
第38図　Ⅳ-Ｂ区139・141・143号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……60
第39図　Ⅳ-Ｂ区140号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……61
第40図　Ⅳ-Ｂ区141号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60、1/30）……63
第41図　Ⅳ-Ｂ区142号竪穴住居跡実測図（1/60）……65
第42図　Ⅳ-Ｂ区142号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）……66
第43図　Ⅳ-Ｂ区142②・144・145号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……67
第44図　Ⅳ-Ｂ区143号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60、1/30）……68
第45図　Ⅳ-Ｂ区144・145号竪穴住居跡実測図（1/60）……70
第46図　Ⅳ-Ｂ区146号竪穴住居跡実測図（1/60）……71
第47図　Ⅳ-Ｂ区146号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）……71
第48図　Ⅳ-Ｂ区９号掘立柱建物跡実測図（1/60）……72
第49図　Ⅳ-Ｂ区29・31・32号土坑実測図（1/30、1/60）……73
第50図　Ⅳ-Ｂ区29・31・32号土坑出土遺物実測図（1/3）……74

第51図　Ⅳ-Ｂ区33～37号土坑実測図（1/30）……75
第52図　Ⅳ-Ｂ区35～38・43・45・48号土坑出土土器実測図（1/3）……77
第53図　Ⅳ-Ｂ区38・43・45・48号土坑実測図（1/30）……79
第54図　Ⅳ-Ｂ区46・47号土坑実測図（1/30）……80
第55図　Ⅳ-Ｂ区46号土坑出土遺物実測図（1/3）……81
第56図　Ⅳ-Ｂ区４号井戸実測図（1/60）……81
第57図　Ⅳ-Ｂ区SX01、820号ピット実測図（1/60、1/30）……83
第58図　Ⅳ-Ｂ区SX01出土土器実測図①（1/3）……85
第59図　Ⅳ-Ｂ区SX01出土土器実測図②（1/3）……86
第60図　Ⅳ-Ｂ区ピット出土土器実測図（1/3）……87
第61図　Ⅳ-Ｂ区遺構面等出土土器実測図（1/3）……87
第62図　Ⅳ-Ｂ区出土特殊遺物実測図①（2/3、1/2、1/3）……88
第63図　Ⅳ-Ｂ区出土特殊遺物実測図②（1/3）……89
第64図　Ⅳ-Ｂ区出土特殊遺物実測図③（2/3、1/2）……90
第65図　延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ-Ｃ区全体図（1/40、1/200）……93・94
第66図　Ⅳ-Ｃ区1001～1007号土坑実測図（1/60、1/40）……97
第67図　Ⅳ-Ｃ区1004・1007・1008号土坑出土土器実測図（1/3）……99
第68図　Ⅳ-Ｃ区1008～1016号土坑実測図（1/20、1/40）……100
第69図　Ⅳ-Ｃ区1009号土坑出土土器実測図（1/3）……101
第70図　Ⅳ-Ｃ区1010号土坑出土土器実測図（1/3）……102
第71図　Ⅳ-Ｃ区1012・1013・1015・1016号土坑出土土器実測図（1/3）……103
第72図　Ⅳ-Ｃ区１・２号井戸実測図（1/60）……105
第73図　Ⅳ-Ｃ区１号井戸出土土器実測図（1/3）……106
第74図　Ⅳ-Ｃ区２号井戸出土土器実測図①（1/3）……107
第75図　Ⅳ-Ｃ区２号井戸出土土器実測図②（1/3）……108
第76図　Ⅳ-Ｃ区11号溝土層・出土土器実測図（1/40、1/3）……109
第77図　Ⅳ-Ｃ区包含層出土土器実測図①（1/3）……110
第78図　Ⅳ-Ｃ区包含層出土土器実測図②（1/3）……111
第79図　Ⅳ-Ｃ区包含層出土土器実測図③（1/3）……113
第80図　Ⅳ-Ｃ区包含層出土土器実測図④（1/3）……114
第81図　Ⅳ-Ｃ区包含層出土土器実測図⑤（1/3）……115
第82図　Ⅳ-Ｃ区包含層出土土器実測図⑥（1/3）……116
第83図　Ⅳ-Ｃ区包含層出土土器実測図⑦（1/3）……117
第84図　Ⅳ-Ｃ区包含層出土土器実測図⑧（1/3）……118
第85図　Ⅳ-Ｃ区出土土・石・鉄製品実測図（1/2、1/3、2/3）……119
第86図　Ⅳ-Ｃ区1001号土坑出土木製品実測図（1/4）……121
第87図　Ⅳ-Ｃ区1002号土坑出土木製品実測図①（1/4）……122
第88図　Ⅳ-Ｃ区1002②・1003・1005号土坑出土木製品実測図（1/4、1/8）……123

第89図　Ⅳ-Ｃ区1006・1008号土坑出土木製品実測図①（1/4）……124
第90図　Ⅳ-Ｃ区1008号土坑出土木製品実測図②（1/4）……125
第91図　Ⅳ-Ｃ区1009号土坑出土木製品実測図（1/4）……126
第92図　Ⅳ-Ｃ区1010号土坑出土木製品実測図（1/4）……127
第93図　Ⅳ-Ｃ区1011・1012・1014号土坑出土木製品実測図（1/4）……128
第94図　Ⅳ-Ｃ区１号井戸出土木製品実測図①（1/8、1/4）……129
第95図　Ⅳ-Ｃ区１号井戸出土木製品実測図②（1/8）……130
第96図　Ⅳ-Ｃ区１号井戸出土木製品実測図③（1/8）……131
第97図　Ⅳ-Ｃ区１号井戸出土木製品実測図④（1/8）……132
第98図　Ⅳ-Ｃ区１号井戸出土木製品実測図⑤（1/8）……133
第99図　Ⅳ-Ｃ区１号井戸出土木製品実測図⑥（1/8）……134
第100図　Ⅳ-Ｃ区１号井戸出土木製品実測図⑦（1/8）……135
第101図　Ⅳ-Ｃ区１号井戸出土木製品実測図⑧（1/4、1/8）……136
第102図　Ⅳ-Ｃ区１号井戸出土木製品実測図⑨（1/4）……137
第103図　Ⅳ-Ｃ区１号井戸出土木製品実測図⑩（1/4）……138
第104図　Ⅳ-Ｃ区１号井戸出土木製品実測図⑪（1/4、1/8）……139
第105図　Ⅳ-Ｃ区１号井戸出土木製品実測図⑫（1/4）……140
第106図　Ⅳ-Ｃ区包含層出土木製品実測図①（1/4）……141
第107図　Ⅳ-Ｃ区包含層出土木製品実測図②（1/4）……142
第108図　Ⅳ-Ｃ区包含層出土木製品実測図③（1/4）……143
第109図　Ⅳ-Ｃ区包含層出土木製品実測図④（1/4）……144
第110図　Ⅳ-Ｃ区包含層出土木製品実測図⑤（1/4）……145
第111図　Ⅳ-Ｃ区包含層出土木製品実測図⑥（1/4）……146
第112図　Ⅳ-Ｃ区包含層出土木製品実測図⑦（1/2、1/4）……147
第113図　Ⅳ-Ｃ区包含層出土木製品実測図⑧（1/4、1/2）……148
第114図　Ⅳ-Ｃ区包含層出土木製品実測図⑨（1/4）……149
第115図　Ⅳ-Ｃ区包含層出土木製品実測図⑩（1/4）……150
第116図　Ⅳ-Ｃ区包含層出土木製品実測図⑪（1/4）……151
第117図　Ⅳ-Ｃ区包含層出土木製品実測図⑫（1/4、1/8）……152
第118図　Ⅳ-Ｃ区出土木簡類実測図（1/2）……153
第119図　遺跡周辺の地質……164
第120図　粘土試料と薄片の偏光顕微鏡写真……165
第121図　延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ-Ｃ区包含層出土の種実……167
第122図　資料写真（保存処理前）と採取箇所……168
第123図　黒色塗膜片のＡＴＲ-FTIR結果……168
第124図　黒色塗膜片の断面観察（右図：左図の拡大）……169
第125図　毛様観察箇所の断面観察（左図：横断面、右図：断面）……169
第126図　Ⅳ-Ｂ１区・Ⅳ-Ｃ区遺構変遷図（1/800）……171

第127図　分析対象竪穴住居跡一覧 ･･174
第128図　延永ヤヨミ園遺跡周辺における竪穴住居跡の変遷（1/6、1/160）････････････････175
第129図　竪穴住居跡カマド廃絶行為の事例（1/60、1/120）････････････････････････････178
第130図　Ⅳ-Ｃ区出土木製品割合 ･･180
第131図　Ⅲ・Ⅳ区出土木製品割合 ･･180
第132図　古代遺構概略配置図（1/2,500）･･183

表 目 次

第１表　一般国道201号行橋インター関連埋蔵文化財調査地点一覧 ･････････････････････････ ２
第２表　延永ヤヨミ園遺跡の調査区と期間 ･･ ４
第３表　延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ-Ｂ２区遺構一覧・対照表 ･･････････････････････････････････17
第４表　Ⅳ-Ｂ区出土特殊遺物一覧表 ･･91
第５表　Ⅳ-Ｃ区遺構一覧・対照表 ･･92
第６表　Ⅳ-Ｃ区出土特殊遺物一覧表 ･･119
第７表　Ⅳ-Ｃ区出土木製品一覧表 ･･155～158
第８表　分析試料 ･･160
第９表　胎土中の微化石類と砂粒物の特徴 ･･162
第10表　胎土中の粘土および砂粒組成の特徴 ･･163
第11表　岩石片の起源と組み合わせ ･･163
第12表　住居跡出土粘土の蛍光Ｘ線分析による化学組成 ･･････････････････････････････････163
第13表　延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ区における種実同定結果 ･･････････････････････････････････166
第14表　「津」銘資料出土一覧 ･･184

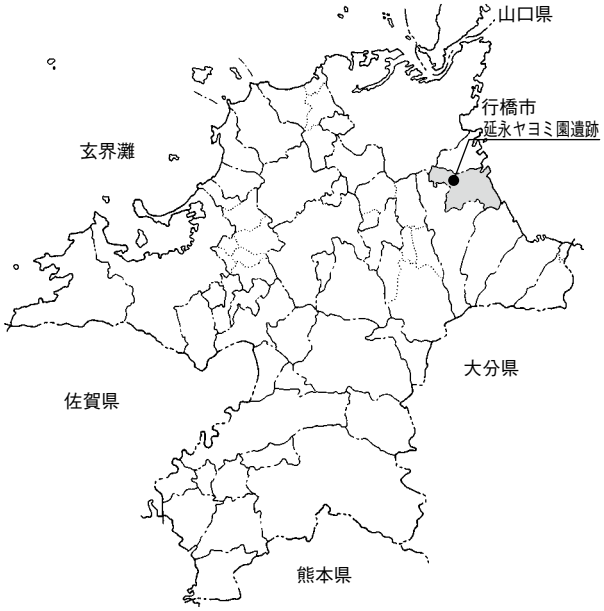
文中写真目次

文中写真１　馬ヶ岳城跡
文中写真２　旧飴屋門
文中写真３　旧百三十銀行行橋支店
文中写真４　稲童１号掩体壕
文中写真５　稲童無蓋掩体壕
文中写真６　稲童地下通信司令部壕
文中写真７　122 号住居跡出土状況①
文中写真８　122 号住居跡出土状況②
文中写真９　132 号住居跡出土状況
文中写真 10　133 号住居跡出土状況
文中写真 11　134 号住居跡屋内土坑
文中写真 12　134 号住居跡カマド検出状況
文中写真 13　137 号住居跡出土状況①
文中写真 14　137 号住居跡出土状況②
文中写真 15　137 号住居跡カマド断ち割り①
文中写真 16　137 号住居跡カマド断ち割り②
文中写真 17　138 Ａ号住居跡カマド
文中写真 18　144 号住居跡付近
文中写真 19　1005 号土坑木製品出土状況
文中写真 20　包含層木製品出土状況
文中写真 21　Ⅳ-Ｂ・Ｃ区現況写真
文中写真 22　本遺跡の現状

Ⅰ　はじめに

1　調査に至る経緯と経過

一般国道201号は、福岡県福岡市を起点として飯塚市・田川市などの４市８町を経由し、福岡県京都郡苅田町に至る、延長約64kmを測る福岡県中央部の横断幹線道路である。当路線は、古くは篠栗街道として栄え、明治以来の日本の近代化・工業化を支えた筑豊炭田の幹線道路としての役割を果たしてきた。しかし、昭和30年以降の石炭から石油への転換に伴う産業基盤の著しい衰退により、現在当路線は九州縦貫自動車道福岡インターや国道200・211・322号、東九州自動車道行橋インター等と連結し、かつ近年では緊急輸送ネットワークに位置づけられる主要な幹線道路となっている。



第１図　延永ヤヨミ園遺跡の位置

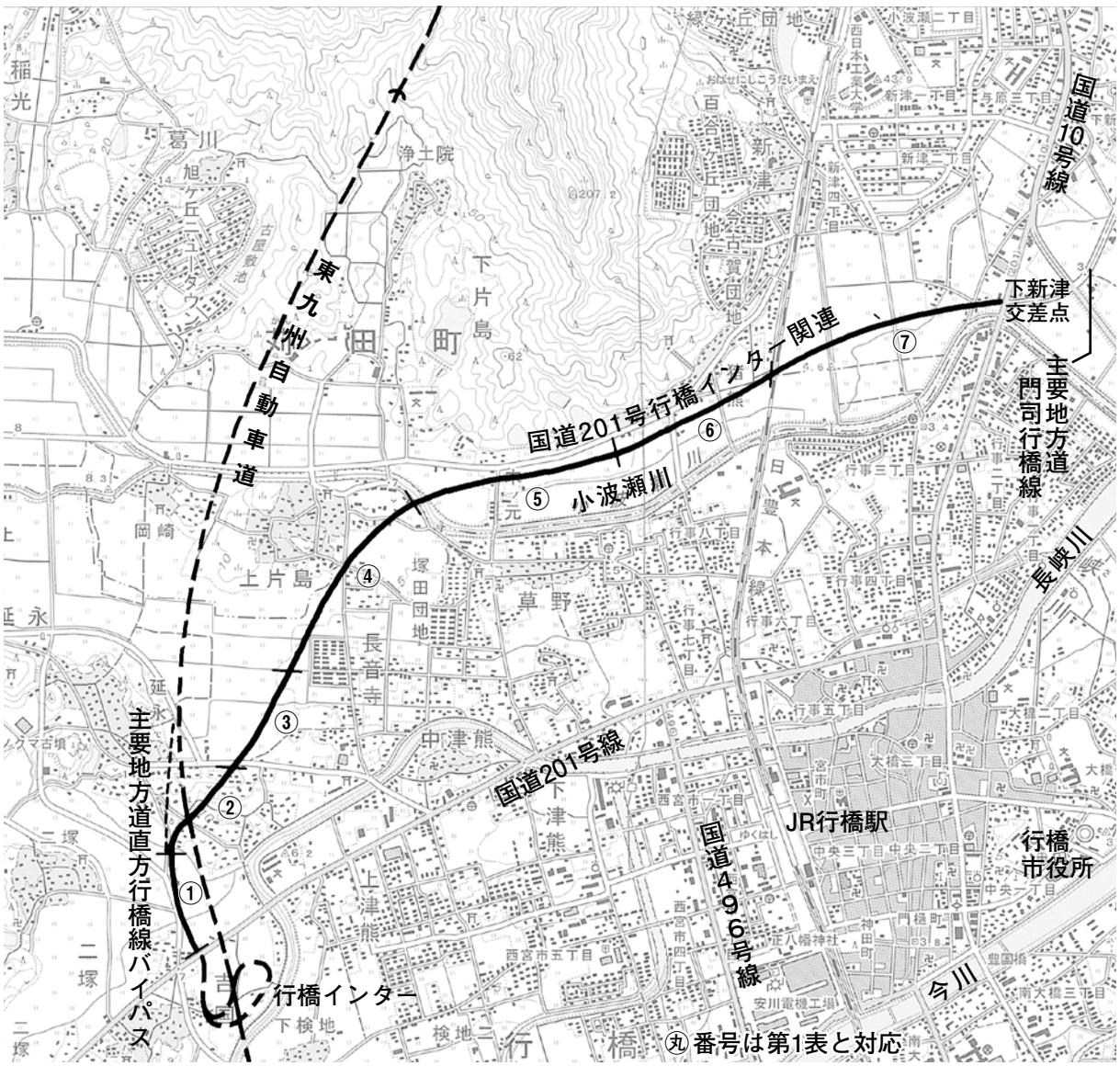
一般国道201号行橋インター関連は、国道201号の終点部に位置し、国道10号と連絡する。当路線は、行橋市及び苅田町市街地の交通混雑の緩和並びに東九州自動車道や新北九州空港と筑豊地域とを結ぶ重要な路線として、平成12年度に事業着手された延長4.5kmの区間である。

道路建設に係る経緯は、平成14年９月に当路線の建設計画についての説明が初めて国土交通省九州地方整備局北九州国道事務所から福岡県教育庁総務部文化財保護課にあったが、日本道路公団（現西日本高速道路株式会社）の民営化の問題もあり、具体的に事業が動きはじめたのは平成19年度からである。平成19年５月に行橋市大字吉国の終点側の試掘調査を行ったのを契機として、平成20年３月24日付国九整北調第57号で行橋インター関連予定地の埋蔵文化財の確認について依頼があった。その依頼に対し、平成20年７月20日付20教文第2474号で、同路線を任意に７地点に分割し、その取り扱いについて回答している（第１表、第２図）。

延永ヤヨミ園遺跡が所在する丘陵については、埋蔵文化財の包蔵地として周知化されていたこと、その当時すでに近接する東九州高速自動車道予定地の発掘調査が文化財保護課を担当として実施され、その非常に高い密度の遺構分布から、丘陵全体に遺構が所在すると判断し、確認調査は行わず、平成20年６月より本調査を行うこととなった。発掘調査は、平成25年度まで継続して実施した（第２表）。

本遺跡の発掘調査は路線内の用地買収が終了し、発掘調査が実施可能な地区から調査を進めた。本遺跡付近は東九州自動車道行橋インター予定地北側の隣接地であることから、西日本高速道路株式会社が施工する東九州自動車道とそのアクセス道路で福岡県行橋土木事務所（現京築県土整備事務所）が施工する県道直方行橋線バイパスと本路線の３路線が複雑に入り組む形となる（第３図）。

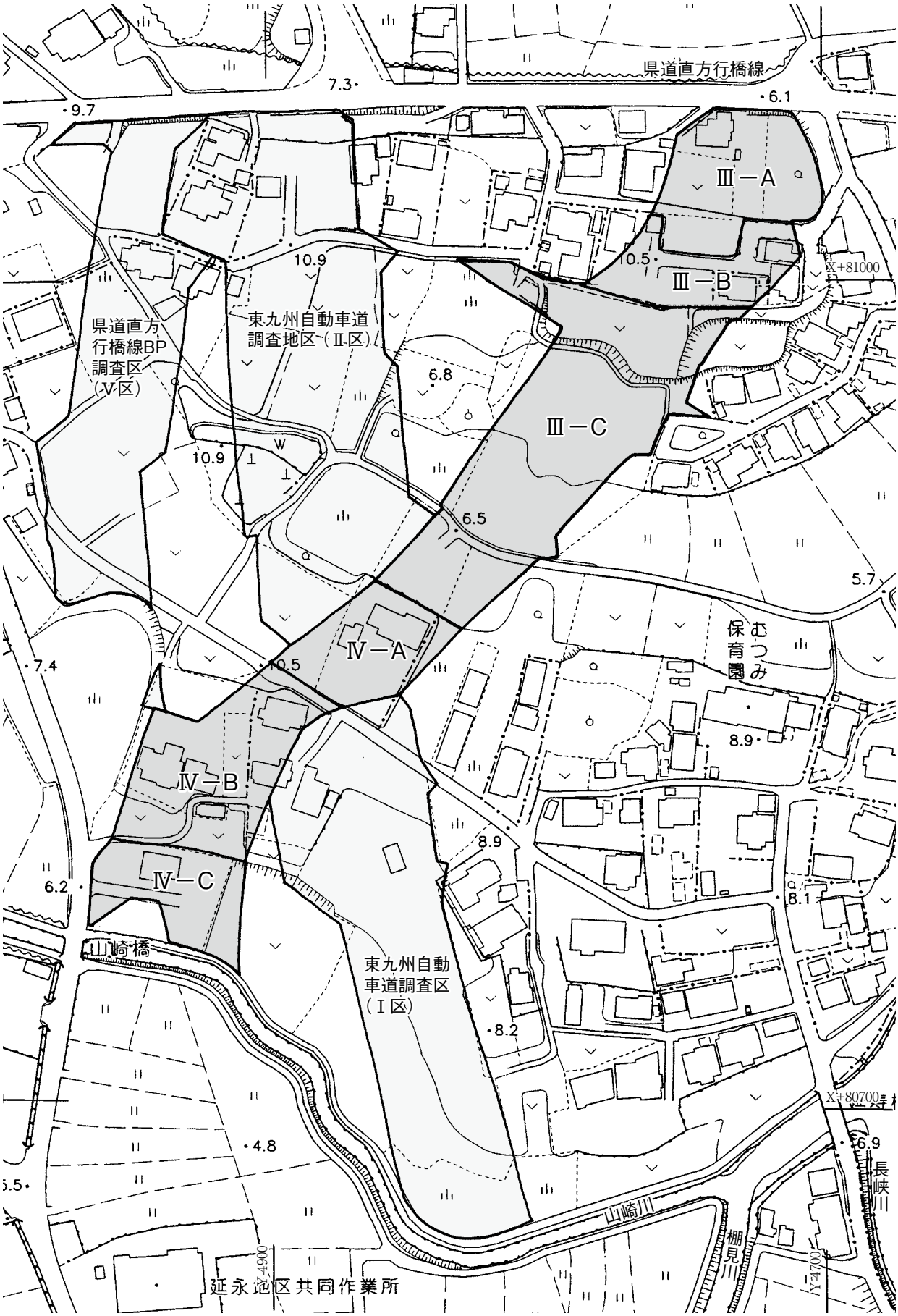
そのため、当初に大きく事業ごとにⅠ～Ⅴ区という区分けを行い（第２表）、本路線は台地と谷の落ち際でⅢ・Ⅳ区と区分けを行った。またその区の中で、調査を実施した順番と現道などを考慮し、Ⅲ区は北からＡ・Ｂ・Ｃ区に、Ⅳ区も北からＡ・Ｂ・Ｃ区に小区分けを行っている。



第２図　国道 201 号線行橋インター関連路線図と調査地点位置図（1/25,000）

地点	遺跡名	所在地	地点範囲	回答(H20. 7. 10)	試掘年度	発掘調査面積	調査年度	報告年度	既刊報告書番号	その後の対応
1		行橋市大字吉国	行橋インター交差点(現国道201号、終点)～山崎川	遺跡なし	H19･20					遺跡なし
2	延永ヤヨミ園遺跡	行橋市大字吉国・延永	山崎川～県道直方行橋線	発掘調査		約19,000㎡	H20～25	H24・26	第1・3～5集	発掘調査
3		行橋市大字吉国	県道直方行橋線～長音寺団地横	要試掘調査	H21					遺跡なし
4	上片島遺跡群	行橋市大字延永 京都郡苅田町上片島	長音寺団地横～小波瀬川	要確認調査	H24	約900㎡	H24	H26	第2集	発掘調査
5		京都郡苅田町上片島	小波瀬川～都市計画道路猪熊行橋線	要試掘調査	H21					遺跡なし
6		京都郡苅田町下片島	都市計画道路猪熊行橋線～JR日豊本線	要試掘調査	H22					遺跡なし
7		京都郡苅田町新津	JR日豊本線～国道201号接続部(下新津ランプ、始点)	要試掘調査	H23					遺跡なし

第１表　一般国道 201 号行橋インター関連埋蔵文化財調査地点一覧



第３図　調査区割図（1/2,000）

事業主体	事業名	調査担当	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25
国土交通省北九州国道事務所	国道201号行橋インター関連	進村		Ⅲ-C	Ⅲ-C、Ⅳ-C				
		下原			Ⅳ-A	Ⅳ-A・B	Ⅳ-B		
		城門		Ⅲ-C		Ⅲ-C		Ⅲ-B	
		大庭					Ⅳ-B Ⅲ-A・B	Ⅲ-B	
		吉村							Ⅲ-B
西日本高速道路株式会社福岡工事事務所	東九州自動車道	飛野	Ⅰ区	Ⅰ-1、Ⅰ-3、Ⅰ-4、Ⅰ-5	Ⅰ-1、Ⅰ-3、Ⅰ-4	Ⅰ-2、Ⅰ-3、Ⅰ-4、Ⅰ-7			
		城門		Ⅱ-1	Ⅱ-2	Ⅱ-1～3	Ⅱ-4		
福岡県京築県土整備事務所	県道直方行橋線	岡田			Ⅴ-A・B				
		宮地				Ⅴ-2～4			
		飛野					Ⅴ-5・6	Ⅴ-5・6	

第２表　延永ヤヨミ園遺跡の調査区と期間

２　調査・整理の組織

平成 20 ～ 25 年度の発掘調査関係者及び平成 23 ～ 26 年度の整理作業関係者は以下のとおりである。なお、平成 23 年度からは組織改革により、九州歴史資料館にて事業者との契約から整理報告までを行っている。

国土交通省九州地方整備局北九州国道事務所

	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
所長	後藤　徹	後藤　徹	世利正美	世利正美	赤星文生	赤星文生	靏　敏信
副所長	柳田誠二	上村一明	上村一明	大成和明	大成和明	大成和明	福崎昌博
			大成和明			福崎昌博	
建設監督官	樋口洋一	松永鉄治	松永鉄治	松永鉄治	松木厚廣	松木厚廣	二口卓史
				松木厚廣			
調査課長	池田稔浩	池田稔浩	大榎　謙	大榎　謙	大榎　謙	森山安夫	森山安夫
専門職	渡辺幹夫	渡辺幹夫	渡辺幹夫	渡辺幹夫	東　昌毅	東　昌毅	羽田史郎
専門調査員	徳重俊博	徳重俊博	徳重俊博	徳重俊博	秋田賢一	秋田賢一	猪井知明
				秋田賢一			
国土交通技官			山本陽子	山本陽子			
工務課長	今田一典	谷川征嗣	谷川征嗣	谷川征嗣	松元勝美	松元勝美	松元勝美
							桜井敏郎
専門官			鍬　淳司	鍬　淳司	児玉祐一	児玉祐一	石橋　正

福岡県教育委員会（平成 23 年度の機構改革により、発掘調査業務は九州歴史資料館に移管）

	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
総括							
教育長	森山良一	森山良一	杉光　誠	杉光　誠	杉光　誠	杉光　誠	城戸秀明
教育次長	楢崎洋二郎	亀岡　靖	荒巻俊彦	荒巻俊彦	荒巻俊彦	城戸秀明	西牟田龍治
理事兼総務部長							川添弘人
総務部長	荒巻俊彦	荒巻俊彦	今田義雄	今田義雄	西牟田龍治	西牟田龍治	
副理事兼文化財保護課長	磯村幸男						
文化財保護課長		平川昌弘	平川昌弘	平川昌弘	伊崎俊秋	伊崎俊秋	赤司善彦
				伊崎俊秋			
同　副課長	池邉元明	池邉元明	伊崎俊秋	伊崎俊秋			
参事兼課長技術補佐	小池史哲	小池史哲	小池史哲				
課長補佐	前原俊史	前原俊史	日高公徳				
参事補佐兼調査第二係長	飛野博文	飛野博文	飛野博文				

	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
庶務							
管理係長	富永育夫	富永育夫	富永育夫				
主事	野田　雅	野田　雅	仲野洋輔				
調査							
調査第二係							
主任技師	進村真之	進村真之	下原幸裕				
		下原幸裕	城門義廣				
技師	城門義廣	城門義廣					

九州歴史資料館

総括	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
館長	西谷　正	西谷　正	荒巻俊彦	杉光　誠
副理事兼副館長				伊崎俊秋
副館長	南里正美	篠田隆行	篠田隆行	
参事（文化財調査室長）			飛野博文	飛野博文
企画主幹（総務室長）	圓城寺紀子	圓城寺紀子	圓城寺紀子	塩塚孝憲
企画主幹（文化財調査室長）	飛野博文	飛野博文		
企画主幹（文化財調査室室長補佐）		吉村靖徳	吉村靖徳	吉村靖徳
技術主査（文化財調査班長）	小川泰樹	小川泰樹	小川泰樹	秦　憲二
庶務				
企画主査	塩塚孝憲	長野良博	長野良博	山﨑　彰
事務主査		青木三保	青木三保	南里成子
			南里成子	宮崎奈巳
主任主事	熊谷泰容			
	近藤一崇	近藤一崇		
主事	谷川賢治	谷川賢治	三好洸一	秦　健太
調査				
企画主幹			吉村靖徳	
主任技師	大庭孝夫	大庭孝夫		
	下原幸裕	城門義廣		
整理報告				
企画主幹				吉村靖徳
参事補佐	小池史哲	小池史哲		
技術主査				小川泰樹
				酒井芳司
	加藤和歳	加藤和歳	加藤和歳	
	進村真之	進村真之	進村真之	進村真之
				大庭孝夫
主任技師	大庭孝夫	大庭孝夫	大庭孝夫	
	下原幸裕	下原幸裕	下原幸裕	下原幸裕
		小林　啓	小林　啓	小林　啓
	城門義廣	城門義廣	城門義廣	城門義廣
整理指導員				岩橋由季

なお、発掘調査・整理報告にあたっては、九州大学坂上康俊教授、福岡市経済観光文化局山口譲治氏、熊本県教育委員会村崎孝宏氏、奈良文化財研究所小田裕樹氏をはじめ、地元の吉国区、延永区の方々、国土交通省九州地方整備局北九州国道事務所、戸田建設（株）、行橋市都市政策課国道・高速道対策室、行橋市教育委員会文化課の皆様よりご協力を賜った。記して感謝いたします。

Ⅱ　位置と環境

１　地理的環境

行橋市は、福岡県北東部の周防灘（瀬戸内海）に面した場所にあり、東経 130° 54′ ～ 131° 3′、北緯 33° 40′ 20″～ 32° 45′、面積は 68.65㎢を測る。東は周防灘、北は京都郡苅田町と北九州市小倉南区、西は京都郡みやこ町、南はみやこ町と築上郡築上町に接する。行橋市は昭和 29 年 10 月に行橋町、蓑島村、今元村、仲津村、泉村、今川村、稗田村、延永村、椿市村の９町村が合併し、成立した自治体で、人口は現在 70,000 人余りを数える。

行橋市は、地形的には臨海盆地に位置づけられ、その中央部には京都平野が発達し、市街地を形成している。その盆地の周囲を見てみると、北西部は国指定天然記念物である平尾台カルストに接し、周防変成岩類、平尾花崗閃緑岩類が広く分布する。この平尾花崗閃緑岩類の風化・浸食面上には第四紀更新統の河川堆積層が高～低位段丘地形を形成し、本遺跡は東・南を長峡川、北を小波瀬川によって形成された平尾花崗閃緑岩類を基盤とする砂礫台地である河成の低位段丘上に立地する。本遺跡が立地するこの低位段丘は、河川堆積物である黒添砂層が約 5.5 m堆積し、その上には阿蘇４火砕流堆積層が約 0.5m ～３m厚く堆積し段丘を形成する。

長峡川・小波瀬川流域の低湿地の地下には海成層である行事層が分布するが、この海成層は行橋市草野の地下２mでも確認されていることから、推定旧海岸線は深く湾入していることが判明している。

２　歴史的環境（第４図）

本遺跡周辺の歴史的環境は、国道 201 号に係る本遺跡調査報告書１冊目『延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ区Ⅰ』（2013）で旧石器～古墳時代、４冊目の『延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ区Ⅱ』（2015）で古代、２冊目の『延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ区Ⅰ』（2015）で中世、３冊目（本報告）の『延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ区Ⅱ』（2015）で近世～現代について取り扱う。以上、本巻では、近世～現代について概観することとしたい。

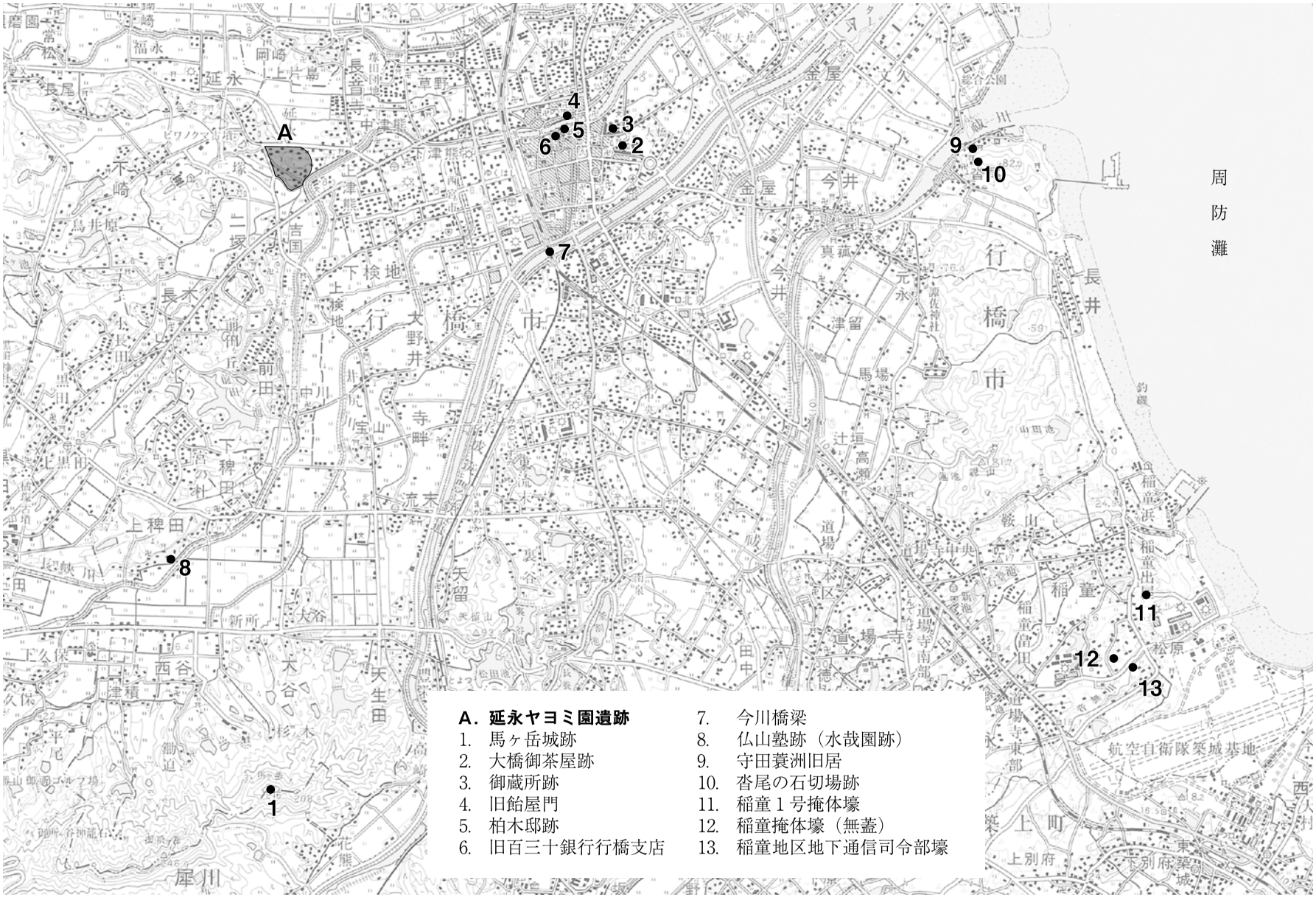
近世

豊臣秀吉の九州平定を受け、天正 15 年（1587）に豊前国京都・仲津・築城・上毛・下毛・宇佐の６郡 16 万石は、黒田孝高（如水）に与えられ、子息の黒田長政は馬ヶ岳城に入った。

この馬ヶ岳城跡は、行橋市とみやこ町の境に聳える標高 216 mの馬ヶ岳とその山麓に築かれた山城で、山頂には大小２つの曲輪群とそこから山麓に至る尾根上には、約 700 mにもわたる土塁や畝状竪堀群、横堀が確認されている（文中写真１）。

文中写真１　馬ヶ岳城跡（北から）

慶長５年（1600）の関ヶ原の戦いののち、黒田氏は筑前国福岡 52 万石に転封となり、代わりに豊前国と豊後国国東・速水の２郡 39 万石の領主として、丹後国宮津から細川忠興が豊前中津城に入った。細川忠興は、慶長７年（1602）から小倉



第４図　周辺遺跡分布図（近世・近現代）（1/50,000）

文中写真２　旧飴屋門（行橋市指定文化財）

城を本拠とする。

寛政９年（1632）には細川氏が肥後国熊本54万石に転封となり、代わりに小笠原忠真が、播磨国明石から豊前国企救・田川・京都・仲津・築城郡と上毛郡の一部計15万石を与えられ、幕末までこの地を治めた。

小倉藩は、「手永制」という十数～二十数ヶ村を一つの手永とし、地方支配のための行政区画を設けた。京都郡には、久保・黒田・延永・新津の４つの手永をおき、京都郡代の支配のもと、手永内の村々の民政を行っていた。

長峡川（江戸時代は行事川・大橋川と称される）の河口である京都郡行事村・仲津郡大橋村は、江戸時代初期まで半農半漁の村落にすぎなかったが、長峡川と中津街道（中津往来）、田川郡に至る東西道が交わる場所であることから、その後大橋御茶屋や御蔵所、手永宿、高札場など様々な公的施設が設けられ、小倉城下を除けば領内屈指の在郷町として発展する。

この在郷町には、行事村の飴屋と新屋、大橋村の柏屋などの在郷商人が、藩から許可を得て、米や綿実、櫨蝋、酒、醤油などを商うことで、小倉藩を代表する豪商に成長し、郡内通用の私札の発行さえも許されている。特に行事村の飴屋は、小倉藩屈指の豪商であり、現在もその屋敷跡には領内視察の際に小倉藩主を迎えるために建てられた旧飴屋門（文中写真２）があり、ありし日の姿を伝える。

このように在郷町として栄えた当時の行橋には、儒学者・漢詩人である村上佛山が天保６年（1835）に開いた、全国的に知られた私塾「水哉園（仏山塾）」がある。「水哉園」には、九州をはじめ全国各地から約1,300人余りの入門者があり、現在も「仏山塾跡（水哉園跡）」として塾関係資料とともに県指定を受け、保存されている。

さらに周防灘を望む沓尾には、「水哉園」で学び、初代塾長を務め、その後大庄屋、区長、県会議員として干拓事業など地域の発展に力を尽くした守田蓑洲の旧宅が「守田蓑洲旧居」（市指定史跡）として、当時の趣を伝えている。また「守田蓑洲旧居」の裏山にあたり、長峡川河口に位置する沓尾山は古くから石切り場として利用され、江戸時代初期には小倉藩主の命令によって、沓尾山から切り出された石材の一部は、船で大坂まで運ばれ、大坂城の石垣の一部に使用された。現在も沓尾山には石を切り出した跡がいくつも残る。

文中写真３　旧百三十銀行行橋支店

近現代

明治４年（1872）、廃藩置県により豊津（小倉）藩は豊津県となり、同年11月には豊津県は小倉県、明治９年（1876）には福岡県となった。明治11年（1878）に京都郡仲津郡役所が当時の行事村に置かれるが、明治22年（1889）の町村制施行により延永村が成立し、昭和29年（1954）10月に行橋町、蓑島村、今元村、仲津村、泉村、今

川村、稗田村、延永村、椿市村の９町村が合併し、行橋市が誕生した。現在、行橋市は京築地域の中心都市として発展している。

明治時代になっても行事村や大橋村は地域商業の中心で、柏屋の柏木勘八郎が明治 11 年（1878）に第八十七国立銀行を設立する。また大阪に本店を置いた百三十銀行の行橋支店として、辰野金吾が設計に関わった、大正３年（1914）竣工の煉瓦造りの建物である旧百三十銀行行橋支店（県指定建造物）は、本地域の近代化の歴史を物語る重要な遺産であり、現在は市民ギャラリーとして利用されている（文中写真３）。

文中写真４　稲童１号掩体壕
（行橋市指定文化財）

また明治 28 年（1885）には九州鉄道株式会社の鉄道が開業し、町の発展に大きな役割を果たした。なお現在でも今川に架かった鉄橋の赤レンガ橋台は使用されている。

戦時中には、旧築城海軍航空隊基地に隣接していたため、周防灘沿いの稲童地区には敵の空襲から軍用機を守る格納庫である掩体壕や地下通信司令部壕（文中写真６）などの軍事施設が建設された。また掩体壕は、大型・小型、天井の有無等で分類されるが、市指定史跡の稲童１号掩体壕は、鉄筋コンクリート製の大型の有蓋掩体壕で、旧日本軍の大型爆撃機である「銀河」や「一式陸上攻撃機」、夜間戦闘機「月光」が格納されていたとされる（文中写真４）。

【引用・参考文献】

行橋市史編纂委員会　2006 『行橋市史　中・下巻』 行橋市

行橋市教育委員会　2007 『行橋市の文化財』 行橋市教育委員会

行橋市歴史資料館　2009 『明治の元勲を感動させた男　守田蓑洲』
行橋市教育委員会・（財）行橋市文化振興公社

行橋市歴史資料館　2010 『生誕二百年記念　村上佛山』 行橋市教育委員会・（財）行橋市文化振興公社

行橋市歴史資料館　2011 『周防灘沿岸の掩体壕と戦争遺跡　写真展』
行橋市教育委員会・（財）行橋市文化振興公社

行橋市歴史資料館　2013 『在郷町を彩った人々』 行橋市教育委員会・（財）行橋市文化振興公社

行橋市文化遺産活性化実行委員会・行橋市教育委員会　2014 『行橋の歴史遺産　ゆくはし歴史ガイドブック』

文中写真５　稲童無蓋掩体壕

文中写真６　稲童地下通信司令部壕

Ⅲ　発掘調査の記録

１　遺跡の概要

延永ヤヨミ園遺跡は、福岡県行橋市大字延永・吉国に位置し、平尾台カルストから東西方向に伸びた、東・南を長峡川、北を小波瀬川によって形成された砂礫台地である中位～低位段丘上に立地する。昭和 22 年撮影の空中写真（『延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ区Ⅰ』参照）や試掘・確認調査から、遺跡のすぐ北側には小波瀬川の支流と想定される旧河川があり、本遺跡南側は現在の数倍の川幅が想定される山崎川、西側には現在より大きく蛇行した長峡川が流れ、かつて丘陵三方は河川や湿地帯で囲まれた状況であったと考えられる（第 132 図）。

本遺跡は、福岡県文化財地図（福岡県教育委員会 1976『福岡県遺跡等分布地図（行橋市･京都郡）』）ではヤヨミ園遺跡（県登録番号 140140・140141）、文化庁遺跡地図（文化庁文化財保護部 1984『全国遺跡地図　福岡県』）ではヤヨミ園遺跡Ⅰ・Ⅱと登録されていたが、平成 21 年度に刊行された行橋市内遺跡等分布地図（伊藤昌広・中原博 2010『行橋市内遺跡等分布地図』行橋市文化財調査報告書第37集　行橋市教育委員会）では、市登録番号14115010の延永ヤヨミ園遺跡として登録された。

本遺跡は丘陵の先端部に位置するが、周知の遺跡の分布からこの丘陵のビワノクマ古墳付近まで弥生～古墳、中世の集落跡が広がっていることが推測される。

２　延永ヤヨミ園遺跡及び関連遺跡の既往の調査

●延永ヤヨミ園遺跡Ⅰ区

東九州道自動車道建設に伴い、平成 19 ～ 22 年度に福岡県教育庁総務部文化財保護課が発掘調査を行った。

弥生時代末～古墳時代前期、古墳時代後期を中心とする竪穴住居跡 74 棟以上等を検出した。調査区内における標高が高い部分の竪穴住居跡はほとんどが削平され、残っている竪穴住居跡も非常に浅いものが多く、本来は丘陵頂部を中心に濃密に竪穴住居跡が営まれていたと想定される。

集落の変遷においては、Ⅰ区 54 号竪穴住居跡が弥生時代後期後半まで遡ることが確認された。また出土遺物では、Ⅰ区 25 号竪穴住居跡から河内産と思われる庄内型甕数点が出土し（第５図）、Ⅰ区 45 号竪穴住居跡から新羅系陶質土器のつまみ付き蓋が出土したことは注目される。

・飛野博文編 2013『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告－９－　福岡県行橋市延永ヤヨミ園遺跡Ⅰ区の調査Ⅰ』九州歴史資料館

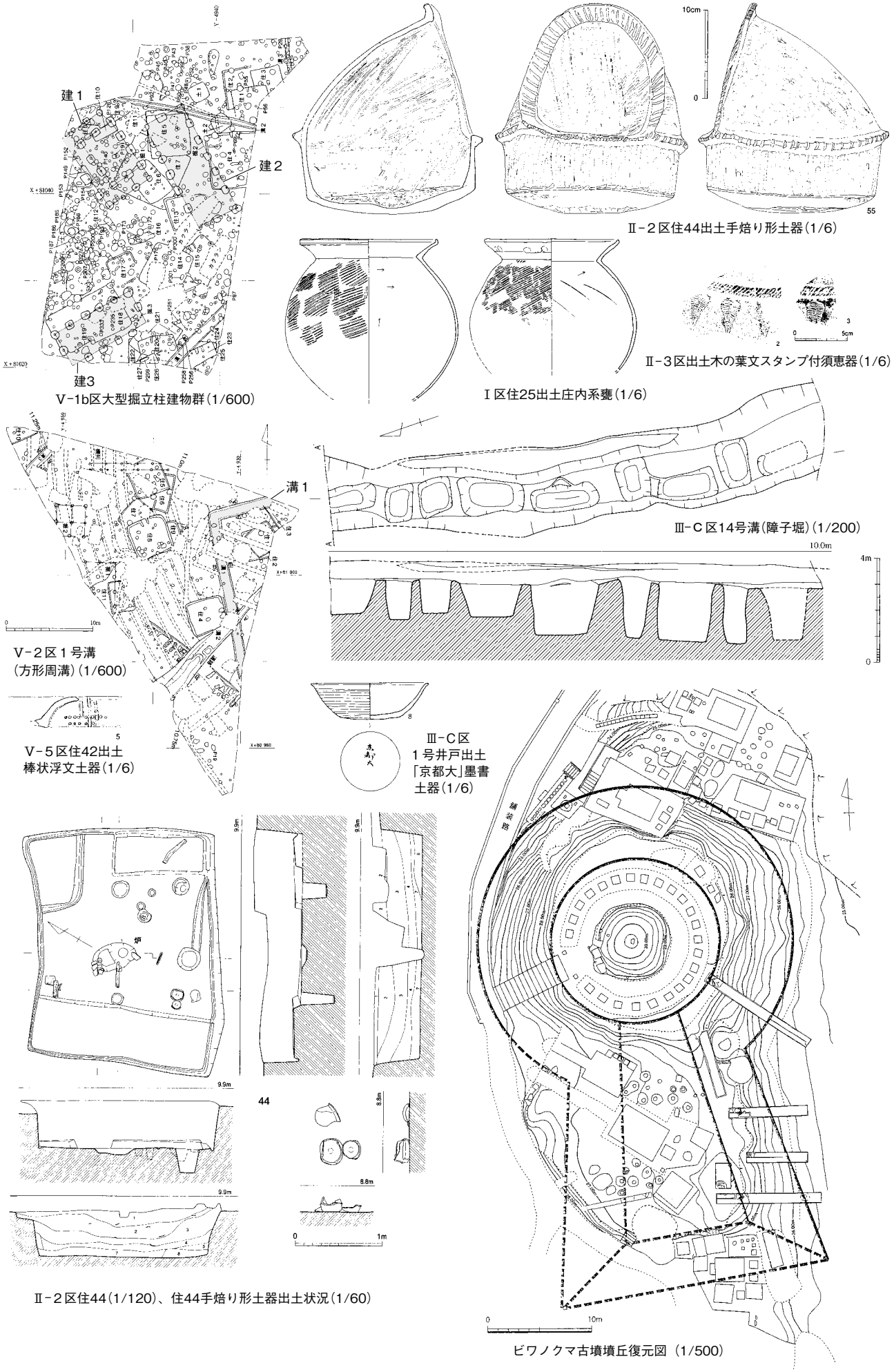
〇延永ヤヨミ園Ⅰ区の２：今年度報告。

●延永ヤヨミ園遺跡Ⅱ区

東九州道自動車道建設に伴い、平成 20 ～ 24 年度に福岡県教育庁総務部文化財保護課・九州歴史資料館が発掘調査を行った。

〇Ⅱ－１区

弥生時代末～古墳時代前期、古墳時代後期を中心とする竪穴住居跡26棟以上等を検出した。波板状痕跡及び帯状硬化が認められる道路状遺構や、井戸と考えられるⅡ－１区８号土坑からは京都郡



第5図　延永ヤヨミ園遺跡等関係図（1/6、1/60、1/120、1/200、1/500、1/600）

大領であった物部氏に関係する可能性がある「京郡物太」銘墨書須恵器坏身が出土した。同じく井戸と考えられる12号土坑からは、馬骨１頭分が出土した。

・城門義廣編 2012『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告－２－　福岡県行橋市延永ヤヨミ園遺跡Ⅱ区の調査Ⅰ』九州歴史資料館

〇Ⅱ－２～４区

弥生時代末～古墳時代前期、古墳時代後期を中心とする竪穴住居跡 174 棟等を検出した。

古墳時代前期前半のⅡ－２区44号竪穴住居跡は、深さが約1.2m残る、非常に深く掘られた竪穴住居跡で、住居内からは吉備系の土器や手焙り形土器が出土した（第５図）。

弥生時代後期終末～古墳時代前期前半のⅡ－２区の10・13号溝と庄内系甕が出土した同時期のⅡ－２区７号溝は、南北36m以上×東西20m以上の「ヒ」字形を呈し、方形周溝の中に区画溝を持つ構造となる。区画内部の同時期の主な遺構は竪穴住居跡１棟のみであり、同時期の竪穴住居跡は区画外に造られる。本遺跡は弥生時代後期終末～古墳時代前期前半に集落内に複数の方形周溝を持つ構造であることが判明しており、注目される。

また古墳時代中期前半のⅡ－２区30号竪穴住居跡は、カマドはないものの、多孔式甑が出土しており、土師器としては非常に珍しい土師器樽形瓲も出土した。

Ⅱ－２区２号掘立柱建物跡は、２×５間以上で、Ⅴ－１区１・２号建物跡とほぼ主軸が揃うため、一連の建物群になると考えられる。また２号建物跡を切る方形区画溝となる８世紀の20号溝を検出したが、同時期の溝内部施設は不明である。Ⅱ－３区11号竪穴住居跡と19号溝からは、木の葉文スタンプのある壺胴部片が出土した（第５図）。

・城門義廣編 2014『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告－11－　延永ヤヨミ園遺跡Ⅱ区２』 九州歴史資料館

●延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ区

国道 201 号行橋インター関連建設に伴い、平成 20 ～ 25 年度に福岡県教育庁総務部文化財保護課・九州歴史資料館が発掘調査を行った。

〇延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ－Ｃ区

弥生時代末～古墳時代前期、古墳時代後期を中心とする竪穴住居跡 17 棟等を検出した。

８世紀の１号井戸からは京都郡大領を示すと思われる「京都大」銘墨書土師器坏が出土した（第５図）。また中世前期の 14 号溝は障子堀であり、中世屋敷地の区画溝として注目される（第５図）。

・大庭孝夫編 2013『延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ区Ⅰ』国道 201 号行橋インター関係関連埋蔵文化財調査報告第１集　九州歴史資料館

〇延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ－Ａ・Ｂ・Ｃ区：今年度報告

●延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ区

国道 201 号行橋インター関連建設に伴い、平成 21 ～ 23 年度に福岡県教育庁総務部文化財保護課・九州歴史資料館が発掘調査を行った。

今年度２分冊で報告。

●延永ヤヨミ園遺跡Ｖ区

県道直方行橋線バイパス建設に伴い、平成 21 ～ 24 年度にかけて、福岡県教育庁総務部文化財保護課・九州歴史資料館が、約 5,700㎡を発掘調査を行った。

○Ｖ－１～３区

弥生時代末～古墳時代前期、古墳時代後期を中心とする竪穴住居跡49棟等を検出した。Ｖ－２区１号溝は、調査区内でL字状に屈折する古墳時代前期前半の南北20m以上×東西10m以上となる方形周溝で、土層から溝外側土塁が想定されている。Ⅲ－Ａ・Ｂ区で検出された陸橋を持つ方形周溝との関係が注目される（第５図）。またＶ－２区２号竪穴住居跡では、古墳時代中期の土器がまとまって出土した。

Ｖ－１区では、７世紀後半と考えられる２×３間三面庇の１号掘立柱建物跡、２×６間の２号掘立柱建物跡、２×５間の３号掘立柱建物跡が検出された（第５図）。ほぼ直角に配される２・３号建物跡と１号建物跡は時期差が指摘されている。また１号建物跡に併設されたと想定される大型土坑の１・２号土坑内からは、畿内系暗文土師器が出土した。

・岡田諭編 2013『延永ヤヨミ園遺跡 － Ｖ区－ １・２・３区－』福岡県文化財調査報告書第 238 集　九州歴史資料館

○Ｖ－４～７区

弥生時代末～古墳時代前期、古墳時代後期を中心とする竪穴住居跡100棟以上を検出した。集落の変遷については、Ｖ－５区 44・82 号竪穴住居跡は弥生時代後期後半まで遡ること、調査区から５世紀代の初期須恵器片が少数出土しており、古墳時代中期にも小規模ながら継続して集落が営まれていたこと、本遺跡の竪穴住居跡の下限となる７世紀後半のＶ－５区15号竪穴住居跡を確認したことなどが明らかになった。出土遺物では、古墳時代前期前半のＶ－５区42号竪穴住居跡から、近江系と思われる棒状浮文が付く壺が出土した（第５図）。

・飛野博文編 2014『延永ヤヨミ園遺跡 － Ｖ区－ ４～７区－』福岡県文化財調査報告書第 244 集　九州歴史資料館

●ビワノクマ古墳（福岡県指定史跡）

本遺跡東の独立丘陵上に立地する。昭和 30 年に墓地造成時に竪穴式石室が発見され、九州大学の鏡山猛氏らが石室及び一部墳丘の発掘調査を行った。未盗掘の石室内からは銅鏡・刀剣・靫・鉄鏃・甲冑小札等の副葬品、墳丘下部からは古墳築造以前のものと思われる箱式石棺や土坑、銅鏡片が発見された。本地域の歴史を考える上で重要な古墳（円墳）として、同年中に福岡県指定史跡に指定されている。

その後古墳の範囲と形状を把握するため、平成 20 ～ 23 年度にかけて、行橋市教育委員会が墳丘のトレンチ調査を実施した。墓地や樹木のためかなり制約を受けたトレンチ調査であったものの、前方部トレンチから墳丘積土が確認されたこと、前方部墳裾と思われる地山成形の傾斜変換点を検出したことから、全長 50 m程度の前方後円墳である可能性が指摘されている（第５図)。また報告書では副葬品から４世紀末まで遡らせる意見もあることから、本遺跡との関係が注目される。

・鏡山猛 1959「福岡県行橋市琵琶隈古墳」『日本考古学年報８』 日本考古学協会

・山口裕平 2013『ビワノクマ古墳』行橋市文化財調査報告書第 47 集　行橋市教育委員会

３　Ⅳ−Ｂ２区の遺構と遺物

延永ヤヨミ園遺跡は、京都平野に突き出すように東に延びる丘陵の先端部に位置するが、今回調査を行った付近で丘陵は二股に分かれている。

この二股に分かれた北側丘陵からその南の谷部分がⅢ区、南側丘陵から南斜面〜谷をⅣ区として大きく区分けし、Ⅳ区は丘陵上を東西に走る道路及び斜面・谷を隔てるコンクリート壁で、北からＡ･Ｂ･Ｃ区と小区分けを行った（第３図）。さらに、調査年度及び調査担当者が交代したことから、平成23年度に主に調査を行った南東部をⅣ−Ｂ２区（本報告）、平成22年度に主に調査を行った部分をⅣ−Ｂ１区（報告は『延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ区Ⅰ』）とし、分けて報告する（第６図）。

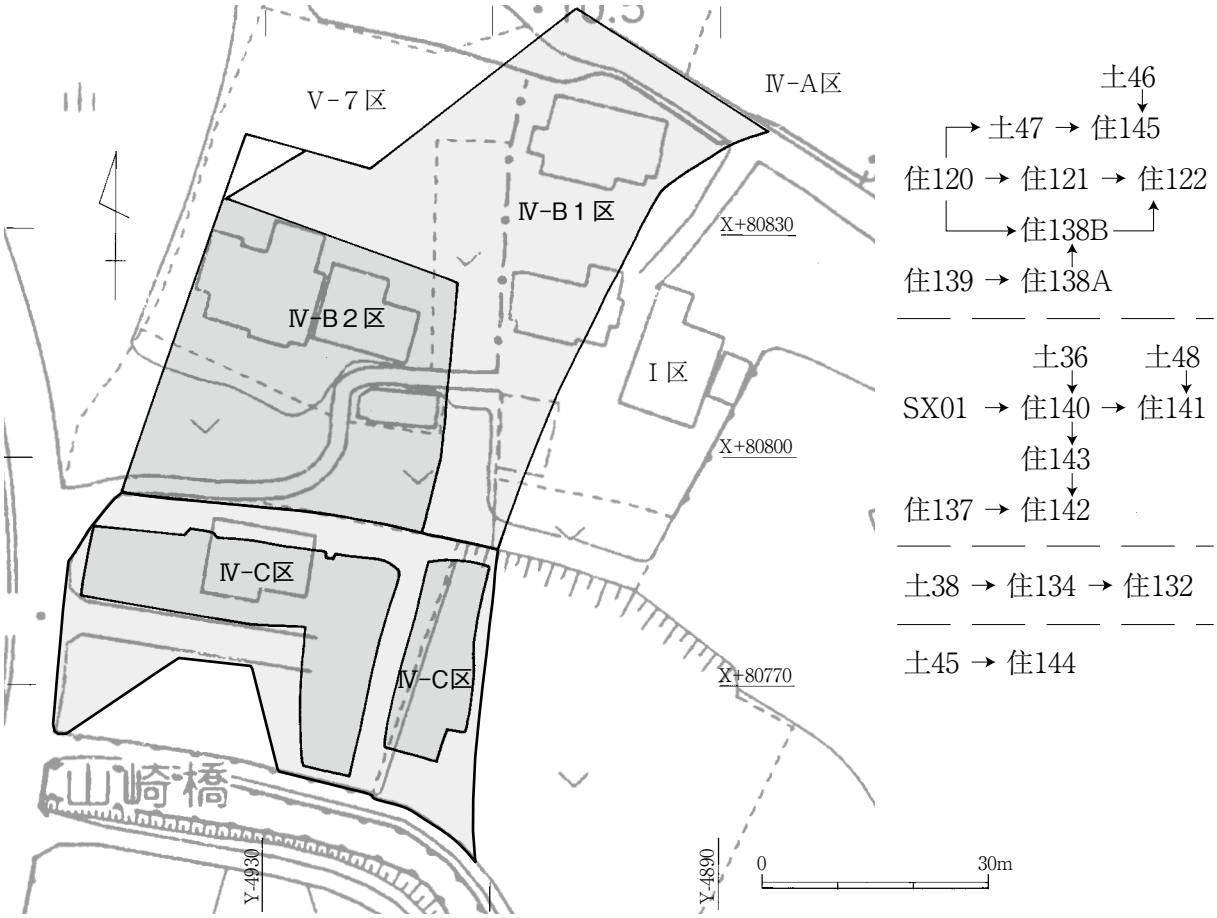
なお、以下で報告する遺構名の前には、いずれも区名を明示しているが、Ⅳ−Ｂ１・２区は通し番号で調査を行い、遺構が重複することはないため、報告する遺構名には「Ⅳ−Ｂ区」のみ付けて報告することとしたい。

（１）調査の経過

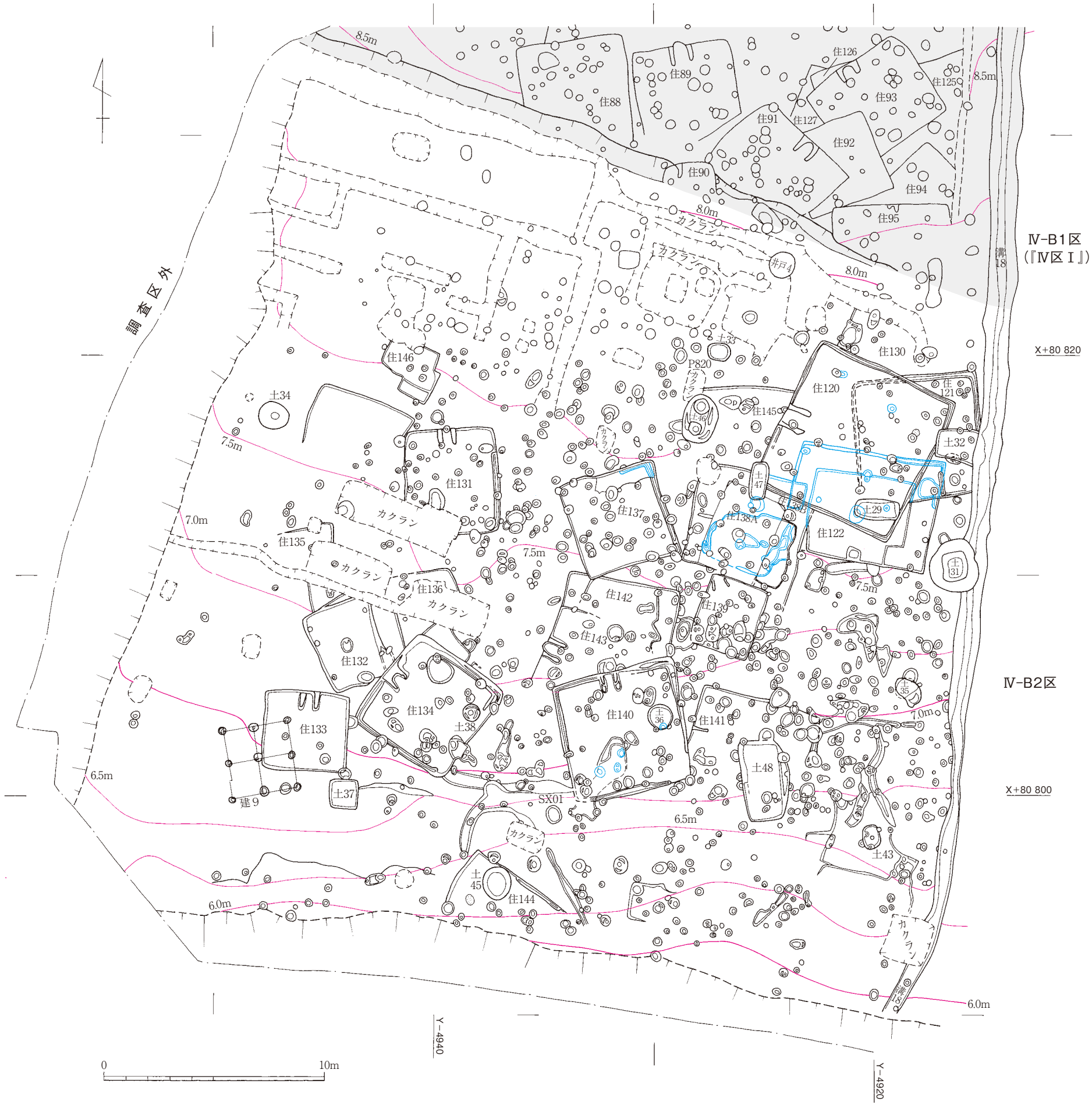
先述したように、本報告に関係する平成23年度の調査の経過のみ以下で記述する。

平成23年４月に機構改革があり、本事業の調査担当部署が福岡県教育庁総務部文化財保護課調査第二係から九州歴史資料館文化財調査室文化財調査班になり、調査担当者もこれまでの下原に加え、新たに大庭が担当することになった。

平成23年度のⅣ−Ｂ区の発掘調査は、５月10日にプレハブ･機材搬入等を行い、開始した。しかし、平成22年度に調査終了したⅢ−Ｃ区の排水処理の関係で、地元との調整に手間取り、実際の掘削作業は６月22日から開始した。その間、５月22日に安全パトロールがあり、西谷正九州歴史資料館



第６図　延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ−Ｂ・Ｃ区区割図（1/1,000）、Ⅳ−Ｂ２区遺構切り合い関係図



第7図　延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ−B2区全体図(1/200)

長、荒巻俊彦教育次長、今田義雄総務部長、伊﨑俊秋文化財保護課長他の来訪を受けた。

まず調査にあたっては、表土剥ぎのみ終了していた南西部の遺構検出と、あわせて平成22年度からの継続調査である古代道路の調査を開始した。遺構検出から始めた南西部も遺構密度が高く、遺構検出に手間取ったが、７月14日からピット、７月15日からは131～134号竪穴住居跡の掘削を開始した。古代道路については、７月５日から調査を再開したが、溝状に深く掘りこんでいるため、度々雨水がたまり、調査は難航した。７月25日には佐賀大学重藤輝行准教授、26日には九州大学辻田淳一郎准教授の来訪を受けた。

８月17日には九州歴史資料館で行った発掘報告会での報告を受け、平成22年度に調査を行ったⅢ−Ｃ区の木製導水施設の記事が毎日新聞朝刊の一面に、８月18日には西日本新聞に記事が掲載された。８月18日には、元第一経済大学教授の田中正日子氏他が来跡された。８月19日に道路工事の関係でプレハブ等の作業ヤードをⅣ−Ａ区からⅢ−Ｃ区の調査終了地に移動した。９月７日には、延永小学校３年生60名が体験発掘を行った。10月８日に東亜航空技研による空中写真を撮影した。10月17日には福岡大学武末純一教授の来訪を受けた。

その後，Ⅳ−Ｂ区の補足調査及び実測作業をⅢ−Ａ・Ｂ区の調査と並行して行い、平成24年３月26日に埋め戻しを含めて調査が終了した。

（２）調査区の概要

今回報告する延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ−Ｂ２区は、南側丘陵の南斜面に位置し、南の谷部はⅣ−Ｃ区にあたる。Ⅳ区で検出された遺構はいずれも後世の田畑及び宅地造成により削平を受けており、標高が高いⅣ−Ｂ１区よりは総じて遺構の残りは良いものの、壁の残りが５cm程度の竪穴住居跡も存在するため、本来はさらに多くの遺構が存在したものと推測される。特に竪穴住居跡については斜面に位置すること及び後世の削平により、遺構北側の残りが良く、南側の残りは悪い。

検出した遺構は、調査区中央付近では切り合うが、南側及び南西側では切り合いが少ないことから、集落の南端にあたることが確認できた。

今回報告するのは、竪穴住居跡21棟、掘立柱建物跡１棟、土坑14基、井戸１基、不明遺構（SX）１基、ピット多数である。遺構及び遺物は、概ね弥生時代後期後半～古墳時代前期、古墳時代後期、古代、中世に分かれ、他の調査区の傾向と同一である。

以下に、遺構ごとの報告を行うが、調査担当者の大庭・下原に加え、城門義廣・岩橋由季も執筆しているため、文末に筆者名を付している。

区	遺構種	報告時遺構名	調査時遺構名	備考(名前は報告者名)
Ⅳ−B	住居	住居120	住居120	下原
Ⅳ−B	住居	住居121	住居121	下原
Ⅳ−B	住居	住居122	住居122	下原
Ⅳ−B	住居	住居130	住居130	下原
Ⅳ−B	住居	住居131	住居131	大庭
Ⅳ−B	住居	住居132	住居132	大庭
Ⅳ−B	住居	住居133	住居133	大庭
Ⅳ−B	住居	住居134	住居134	大庭
Ⅳ−B	住居	住居135	住居135	大庭
Ⅳ−B	住居	住居136	住居136	大庭
Ⅳ−B	住居	住居137	住居137	大庭
Ⅳ−B	住居	住居138A	住居138	大庭
Ⅳ−B	住居	住居139B	住居138	大庭
Ⅳ−B	住居	住居139	住居139	大庭
Ⅳ−B	住居	住居140	住居140	大庭
Ⅳ−B	住居	住居141	住居141	大庭
Ⅳ−B	住居	住居142	住居142	大庭
Ⅳ−B	住居	住居143	住居143	大庭
Ⅳ−B	住居	住居144	住居144	大庭
Ⅳ−B	住居	住居145	住居145	大庭
Ⅳ−B	住居	住居146	住居146	下原
Ⅳ−B	建物	建物9	名称無し	大庭
Ⅳ−B	土坑	土坑29	土坑29	下原
Ⅳ−B	土坑	土坑31	土坑31	下原
Ⅳ−B	土坑	土坑32	土坑32	下原
Ⅳ−B	土坑	土坑33	土坑33	大庭
Ⅳ−B	土坑	土坑34	土坑34	大庭
Ⅳ−B	土坑	土坑35	土坑35	大庭
Ⅳ−B	土坑	土坑36	土坑36	大庭
Ⅳ−B	土坑	土坑37	土坑37	大庭
Ⅳ−B	土坑	土坑38	土坑38	大庭
Ⅳ−B	土坑	土坑43	土坑43	大庭
Ⅳ−B	土坑	土坑45	土坑45	大庭
Ⅳ−B	土坑	土坑46	土坑46	下原
Ⅳ−B	土坑	土坑47	土坑47	下原
Ⅳ−B	土坑	土坑48	土坑48	大庭
Ⅳ−B	井戸	井戸4	井戸4	下原
Ⅳ−B	SX	SX01	落ち2	大庭

第３表　延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ−Ｂ２区
遺構一覧・対照表

なお、出土遺物の年代観については、以下の論考を参考にしたが、もし各遺構・遺物の年代観に誤りがあれば筆者の責任である（大庭）。

弥生土器：武末純一・上田龍児 2006「弥生土器の編年と地域間交流」『行橋市史　資料編　原始・古代』 行橋市

古墳時代土師器：宇野愼敏 2006「豊前北部の土師器と編年」『行橋市史　資料編　原始・古代』 行橋市

古墳・古代の須恵器：小田富士雄・長直信 2006「豊前の須恵器生産」『行橋市史　資料編　原始・古代』 行橋市

古墳・古代の須恵器・土師器：佐藤浩司1995「豊前の６～９世紀の土器」『古文化談叢』第34集　九州古文化研究会

中世土器：山本信夫・山村信榮 1997「中世食器の地域性－九州・南西諸島－」

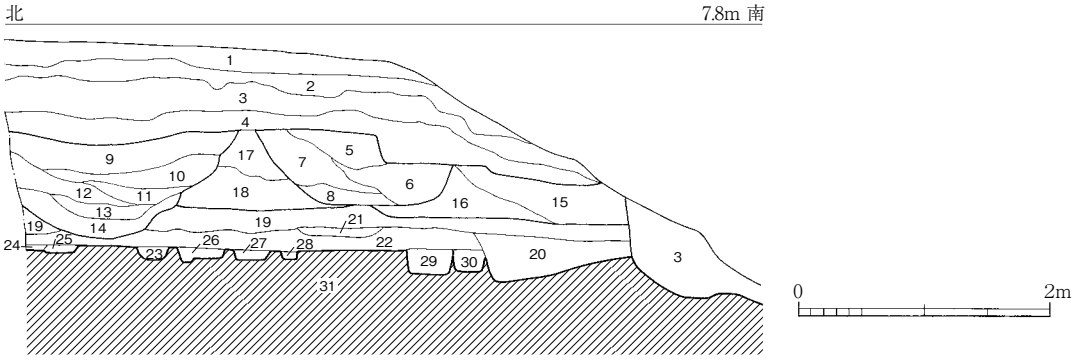
『国立歴史民俗博物館研究報告』第 71 集　国立歴史民俗博物館

基本土層（図版２、第８図）

基本土層を示した箇所は、本来なら『Ⅳ区Ⅰ』の範囲となるⅣ−Ｂ１区の南東壁際にあたるが、斜面に形成された当区の状況をより明確に示すと考えられるため、本報告に掲載した。

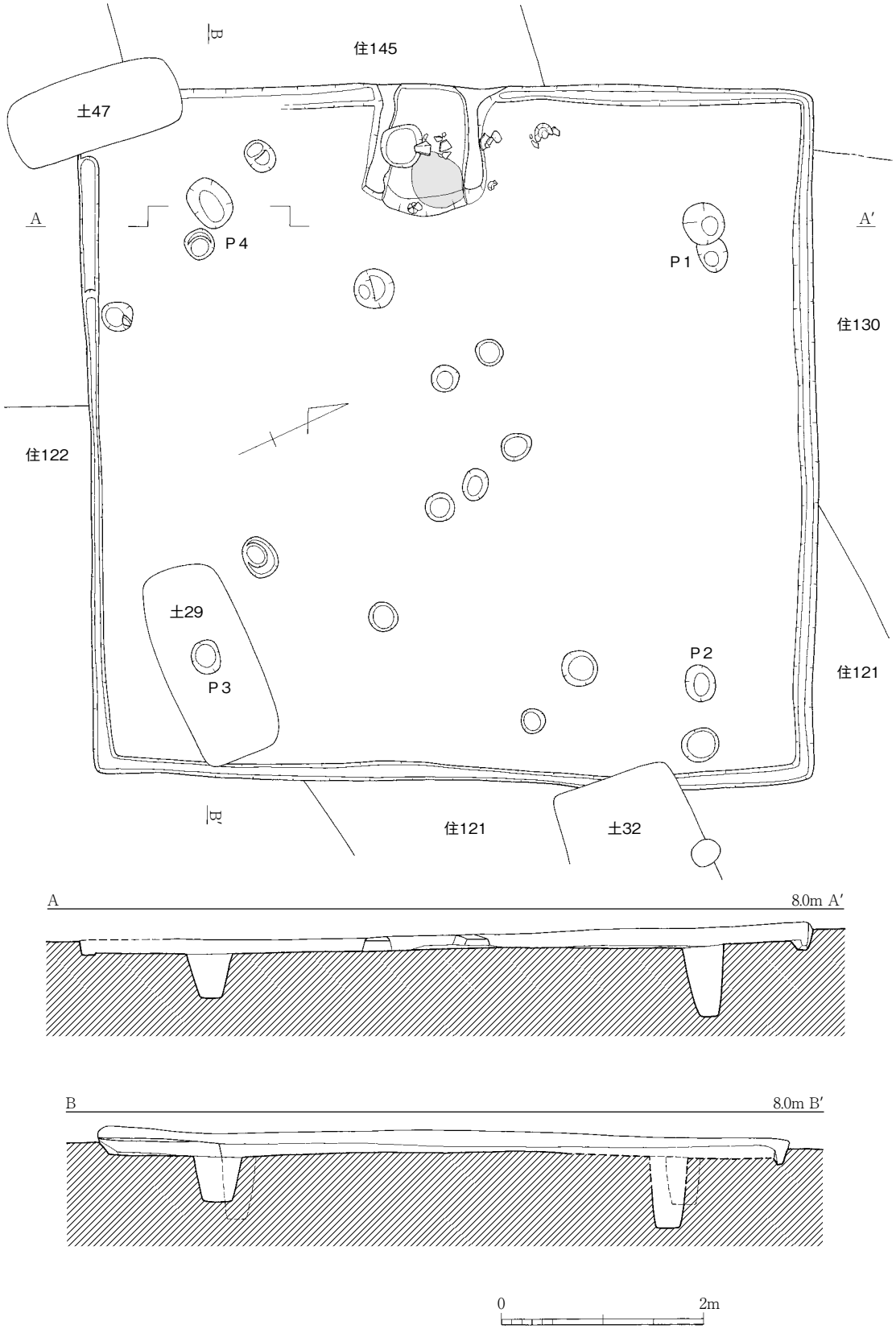
調査区南東部の東壁によって基本土層を記述する。現地は低層住宅の宅地造成の際に表土を失っていたが、土層で示す箇所には表土まで残っていた。表土の下は旧表土（２層）で、その下に近世から現代にかけての整地層（３・４層）があり、これを除いたところが中世期の遺構面となる。この面では 12 号溝（９～ 14 層）やこれと並行するとみられる溝（５～８層）が掘りこまれていたが、19 層以下の古代の遺構面上に堆積した中世の遺物包含層（15 ～ 18 層）に切り込むものであった。

中世の包含層の下に古代以前の遺構面（19 層上面）があり、この土層を作成した箇所では古代道路があったため、道路内の堆積土がみられた。ただし、古代道路のない部分では同じ標高で茶褐色から明褐色の地山となり、この面が弥生～古墳時代、そして古代にかけての遺構面といえる。Ⅳ−Ｂ１区の北側半分については弥生・古墳時代の住居の床面付近まで削平が及ぶほどに造成されており、中世の遺物包含層は既に失われていた（下原）。



基本土層
1　暗灰褐色土（整地土）→表土
2　黒褐色土（締まりなし）→旧表土
3　灰茶褐色土（粘質、やや締まる）
4　灰褐色土（粘質、締まる）　遺物包含層（中世以降）
5　にぶい灰褐色土（粘質、締まる）
6　明灰黄褐色土（粘質、やや締まる）
7　暗褐色土（粘質、締まる）
8　明褐色土（粘質、若干炭粒含む、締まる）　溝埋土（土層でのみ確認）
9　黒灰褐色土（粘質、締まる）
10　灰褐色土（粘質、締まる）
11　暗灰褐色土（粘質、締まる）
12　灰褐色土（粘質、締まる）
13　暗灰褐色土（粘質、若干黒褐色粘質土ブロック含む、締まる）
14　明灰褐色土（粘質、締まる）　溝 12 埋土
15　暗灰褐色土（粘質、やや締まる）
16　黒茶褐色土（粘質、締まる）
17　暗灰褐色土（粘質、締まる）
18　暗茶褐色土（粘質、締まる）　道路廃絶後の堆積
19　黒褐色土（粘質、締まる）→道路埋土（１面目）
20　にぶい灰褐色土（粘質、やや締まる、若干炭粒含む）→ 溝 14 埋土
21　灰褐色土（粘質、やや締まる）
22　暗灰茶褐色土（粘質、マンガン含む、締まる）　道路埋土（２面目）
23　暗灰褐色土（やや砂質、砂礫含む、かたく締まる）→帯状硬化か
24　茶褐色土（粘質、締まる）
25　灰茶褐色土（粘質、若干砂礫含む、締まる）
26　灰褐色土（粘質、砂礫含む、締まる）
27　にぶい灰褐色土（粘質、若干砂礫・マンガン含む、締まる）
28　灰褐色土（粘質、若干砂礫含む、締まる）　波板状遺構
29　暗灰褐色土（やや粘質、やや締まる）
30　暗茶褐色土（やや地山由来の明褐色土含む、やや締まる）　ピット
31　明褐色土（粘質、締まる）→地山

第８図　延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ−Ｂ区基本土層（1/60）



第９図　Ⅳ－Ｂ区 120 号竪穴住居跡実測図（1/60）

（３）竪穴住居跡

120 号竪穴住居跡（図版２、第９図）

調査区の北東側に位置し、121・122・130・138 Ｂ号・145 住居跡を切り、29・32・47 号土坑に切られる。規模は東西 6.7 ｍ、南北 7.24 ｍで、深さは 0.18 ｍほどが残る。主柱は４本柱で、やや外寄りの位置に柱穴があり、南東側の主柱穴は 29 号土坑による削平のため下部のみが遺存していた。北西壁の中央にカマドを備え、カマド以外の壁際には幅 10 ～ 15cmほどの壁溝が巡る。貼り床はなかった。遺物は住居全体から出土したが、カマド付近からの出土が目立って多い。

埋土から仕上げ砥石１点（第 62 図 12）及び台石（第 63 図 21）が出土した。

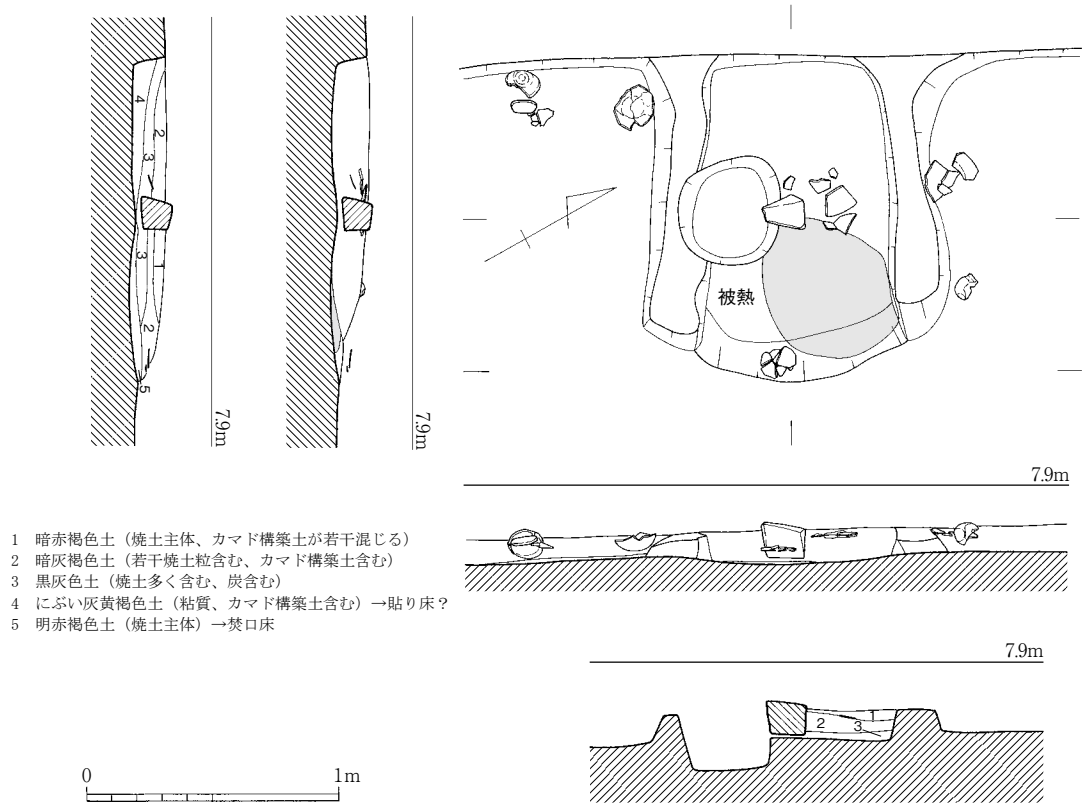
カマド（図版２、第 10 図）

北西壁の中央に位置し、右袖 1.13 ｍ、左袖 1.18 ｍを測る。既に上部を削平されていることは、左袖脇に残る土師器甕の底部からも窺える。燃焼部の中央に長さ 15.6cm・幅 18.3cm・高さ 11.4cmの箱形に近い斑岩系石材が据えられていた。本来は台石であったものをカマド支脚として転用したものとみられ、表面にはわずかに被熱痕跡を残す。その石材の手前側の床面にのみ被熱により赤変した範囲が広がることも支脚であることの傍証となろう。カマドが構築された範囲のみ僅かに掘り窪められて、カマド構築土である黄灰色土を含むにぶい灰黄褐色土で平坦に均されており、前述の石材はその面に据えられていた。

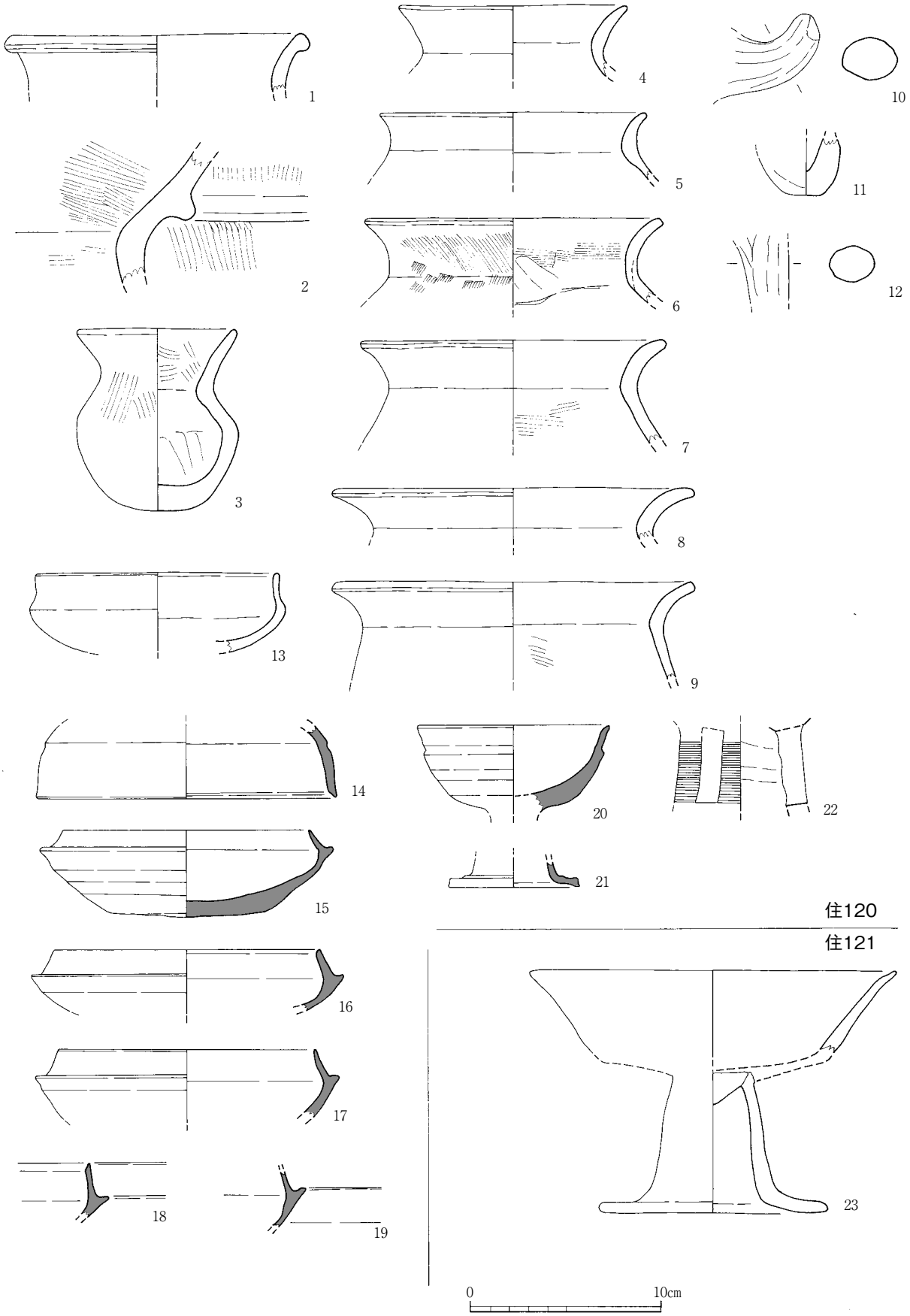
カマド構築土内から滑石製の不明石製品１点（第 62 図７）が出土した。

出土遺物（図版 19、第 11 図１～ 22）

１～３は土師器壺である。１は口縁部片で、端部を丸く肥厚させる。内外ともヨコナデである。径に対して、やや厚手の印象を受ける。２は大型壺の頸部付近の破片で、口縁部が屈曲する形態と考えられ、屈曲する付近に突帯を貼り付ける。外面はタテハケ、内面はヨコハケによる調整である。



第 10 図　Ⅳ－Ｂ区 120 号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第 11 図　Ⅳ－B 区 120・121 号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

３は小型の丸底壺である。全体的に厚手である。体部はナデ調整で、外面上半のみタテハケ調整を行う。口縁部は内面にハケ調整を行った後に、ヨコナデで仕上げる。

４～９は土師器甕の口縁部片である。４は小型で、口縁部がやや直線気味に広がる。内外の調整は磨滅により不明であるが、口縁部はヨコナデによる仕上げである。５は頸部付近が肥厚し、口縁端部に向かって薄くなり、緩やかに外反する。内外の調整は磨滅により不明である。６は器壁がほぼ一定で、口縁部が緩やかに外反する。外面はタテハケ、内面はヨコハケで、頸部付近のみナデを行う。７も器壁はほぼ一定であるが、６に比べて若干厚手である。磨滅により調整が不鮮明であるが、胴部内面はヨコハケの痕跡が残る。８も７と同様に若干厚手であるが、口縁部が急激に外反して開く。内外とも磨滅が著しい。９はやや薄手で、器壁もほぼ一定の厚さである。内外とも磨滅しているが、胴部内面にヨコハケの痕跡が残る。

10 は甑の把手である。断面楕円形で、上方に向かって緩やかに反る。11 は手捏ねのミニチュア土器で、厚手である。12 は 120 号住居跡周辺で出土した足鍋の脚部の破片で、明らかな混入資料である。ナデで仕上げている。13 は須恵器模倣土師器の坏の破片で、口縁部を屈曲させる。内外とも磨滅により調整は不明である。

14 ～ 19 は須恵器坏である。14 は坏蓋で、天井部と口縁部との境に僅かな段を有し、口縁端部も段をなす。内外とも回転ナデである。15 は坏身で、16 ～ 19 に比べて口縁部の立ち上りが短い。底部は回転ヘラケズリを行う。16 は坏身の口縁部片で、立ち上がりはやや高めで、端部の内側に若干の面をつくる。外底部の調整は不明である。17 もやや高めの立ち上りであるが、端部は丸く収めている。外底部の調整は不明である。18 は口縁部の小片であるが、立ち上がりはほぼ垂直で、端部内面に段を有する。19 は 120 号住居跡周辺の検出で出土した資料であるが、17 などと同様の形態になると考えられる。

20 ～ 22 は須恵器高坏である。20 は無蓋高坏の坏部片である。口縁部付近に凹線を廻らせることで段を作り出している。坏部外底部は回転ヘラケズリで、その他は回転ナデで調整する。21 は小型高坏の脚端部片である。薄い作りで、脚端部を嘴状につまむ。内外とも回転ナデである。22 は高脚高坏の脚部片である。外面にカキメを施した後に、長方形透かしを三方に穿っている。

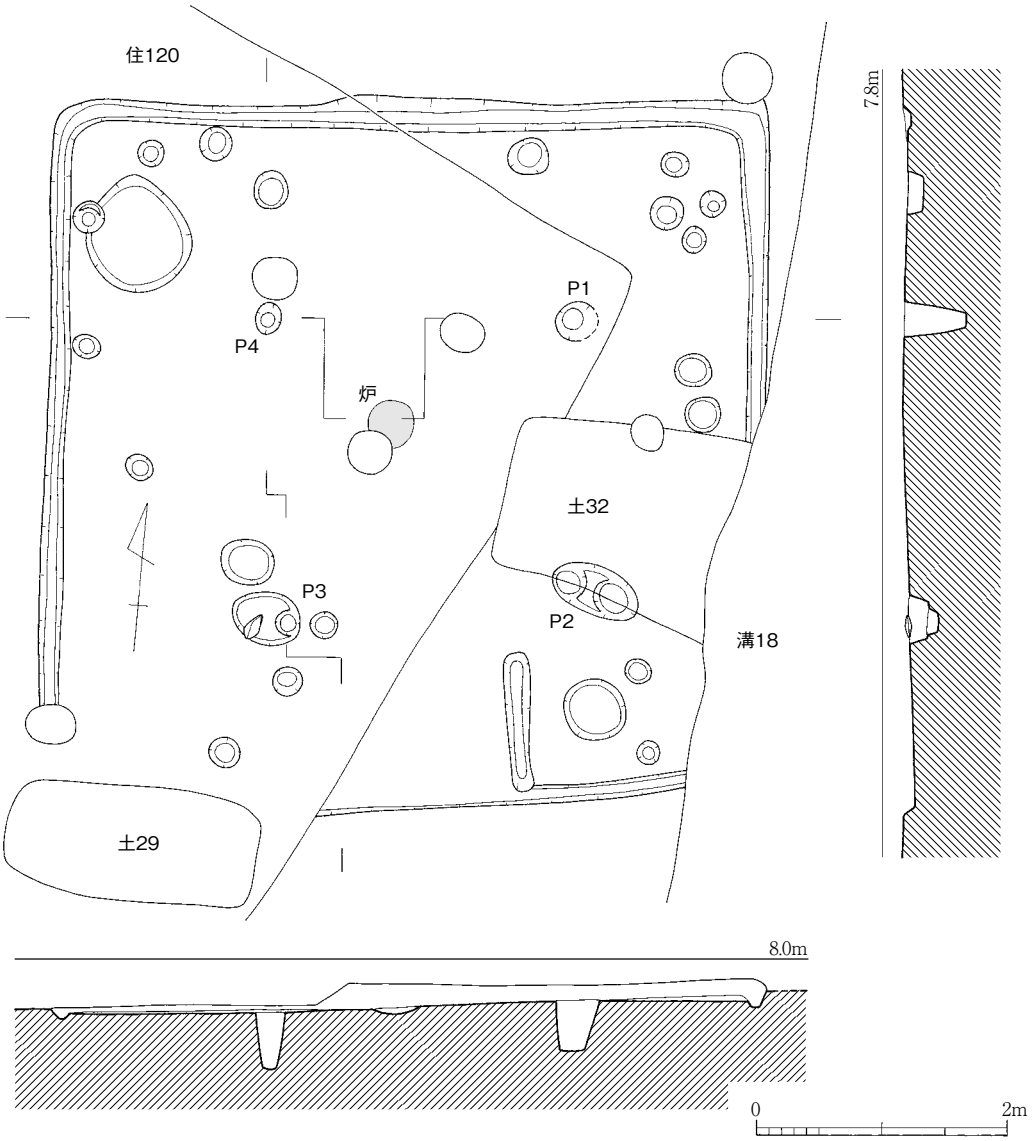
住居の切り合いや出土遺物から、時期は古墳時代後期後半に位置づけられる（下原）。

121 号竪穴住居跡（図版２、第 12 図）

調査区の北東側に位置し、122 号住居跡を切り、120・130 号住居跡、32 号土坑、18 号溝に切られる。規模は東西 5.66 m、南北 5.65 mで、深さは残りの良い北東部で 0.12 mである。主柱は４本柱で、柱痕跡は確認できなかったが、柱穴の規模から柱径は 10 ～ 15㎝程度に復元できよう。壁際には幅 10 ～ 15㎝ほどの壁溝が巡り、南壁のやや東寄りの位置から北に 1.1 mほど溝が掘られている。中央に径 35㎝ほどの被熱痕跡があり、炉跡と考えられる。住居の埋土は黒褐色土で、貼り床はなかった。削平が著しかったこともあり、図化できる遺物は少なかった。

出土遺物（図版 19、第 11 図 23）

23 は土師器高坏で、同一個体とみられる口縁部片と脚部片により図示した。坏部は逆台形で、底部は不明であるが、口縁部は直線的に外上方に開き、端部付近を僅かに外反させる。脚部は中膨らみ状の筒部で、裾部は平坦気味のラッパ状に広がる。坏部との接合は充填法である。



第 12 図　Ⅳ－Ｂ区 121 号竪穴住居跡実測図（1/60）

僅かな遺物しかないが、住居の切り合いやカマドを持たない点などから、時期は古墳時代中期前半ごろと推定される（下原）。

122 号竪穴住居跡（巻頭図版１、図版３、第 13 図）

調査区の北東側に位置し、120・121・138 Ｂ号住居に切られる。規模は東西 6.66 m、南北 5.07 m、深さ 0.27 mで、南西側は住居の切り合いによって失われている。南壁の中央付近を除いてベッド状遺構が巡るが、西壁側の中央には南北 1.18 m、東西 0.7 m、深さ 0.06 mの土坑状の掘り込みがある。主柱は２本柱で、柱穴の間に東西 0.64 m、南北 0.78 mほどの炉があり、炉内は底面を中心に被熱により赤変していた。炉の北西側にも焼土の分布が認められたが、炉との関係は不明である。南壁沿いの中央には東西 0.62 m、南北 0.55

文中写真７
122 号住居跡出土状況①（南から）

文中写真８
122 号住居跡出土状況②（西から）

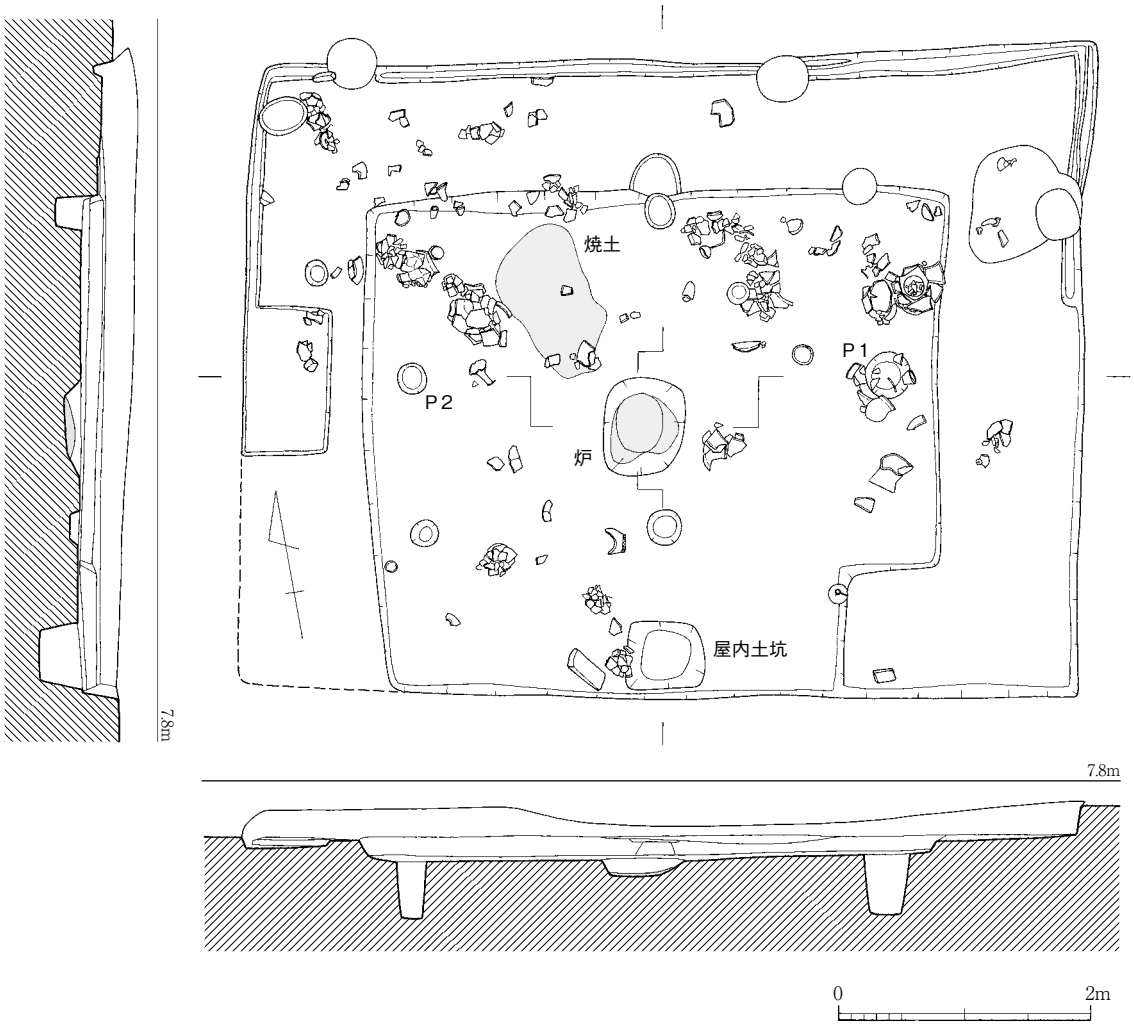
m、深さ 0.34 mの屋内土坑を備える。住居の埋土は黒褐色土で、貼り床はなかった。遺物は他の住居に比して多量であるが、半数ほどは床面よりも 10 cm以上浮いており、最終的な埋没に伴う遺物とみられる。

埋土から、持ち砥１点及び置き砥１点、計砥石２点（第 62 図 13・14）が出土した。

出土遺物（図版 19・20、第 14 ～ 20 図）

１～６は壺である。１は広口壺で、口縁部と胴部に分かれ接合しなかったが、一括して出土しており同一個体とみられる。口縁部は僅かに外反しながら上方へ伸びる。胴部はほぼ球形であるが、若干肩部に張りがあり、底部は僅かながら平底気味である。内面は磨滅しているが、外面はタテハケ調整である。外面肩部付近に黒斑がある。２は小型の壺胴部で、断面形は扁平気味の楕円を呈し、やや上方に最大径がくる。外面はハケメの後、底部のみ手持ちヘラケズリを行う。内面は底部に工具調整の痕跡を認めることができるが、基本的にナデ調整で仕上げる。３は中型の壺で、頸部にキザミを施した突帯を廻らせる。肩部は緩やかで、外面はタテハケ、内面はヨコハケの後部分的にナデで仕上げる。４・５は複合口縁壺である。４は口縁部片で、頸部から外反して立ち上り、一度強く屈曲して口縁端部まで外反する。内外とも剥離や磨滅が著しく調整は不明瞭である。５は口縁部から胴部中位にかけての資料で、頸基部に突帯を有し、大きく外反する口縁部が先端付近で一度強く屈曲して端部へと至る。屈曲部は突帯状に張り出すが、口縁端部の貼り付け位置が内側気味になっているためである。肩部から胴部中位までは緩やかな球形で、外面にタテハケ調整がみられる。内面は剥離等により調整が不明瞭である。６は球形胴である点を考慮し、壺として報告する。口縁部は短く直立気味で、端部を丸く収める。胴部は若干縦長の球形を呈し、底部は丸底である。胴部は内外ともタテハケ調整で、内面上半はヨコハケで調整する。口縁部はヨコナデである。口縁部外面および底部外面に黒斑が認められる。

７～ 22 は甕で、７～ 13 は小型甕、14 ～ 22 は中型甕である。７は口縁部の小片で、薄い器壁のまま外反して端部に至る。８は頸部の締まりが比較的緩やかで、全体に薄手である。口縁部は緩やかに外反し、体部は縦に伸びる。内外ともタテないしナナメのハケ調整で、胴部外面に黒斑が認められる。９は８よりも頸部に締まりがなく、若干厚手である。内外とも磨滅が著しいが、工具による縦方向の調整痕が僅かに認められる。口縁部には指頭痕も残る。胴部下半の外面には煤が少し付着している。10 は口縁部の開きに対して、胴部が細身である。口縁部はほぼ直線的に開くが、端部付近は僅かに内湾する。外面はタテハケないしナナメハケで、内面はヨコハケで仕上げる。11 は頸部から底部の破片で、10 と同じく胴部最大径よりも口縁部径のほうが大きいとみられ、底部は尖り気味である。外面は磨滅しているが、内面にはナナメハケの調整痕が残る。外底部付近に黒斑が認められる。12 は口縁部が直線的に伸びて広がる。外面はタテハケ、内面は胴部下半をナナメハケ、胴部上半から口縁部にかけてヨコハケを主体に行う。13 は外面に粗い平行タタキを行う資料である。頸部に締まりがなく、口縁端部まで薄い作りのまま外反する。胴部は長胴気味で、底部は若干平底である。外面は粗いタタキを行った後、下半部のみタテハケで仕上げる。胴部下半の



第 13 図　Ⅳ－B 区 122 号竪穴住居跡実測図（1/60）

外面には黒斑が認められる。

14 は口縁部が平坦気味に外反する。胴部外面は平行タタキ、内面はヨコハケないしナナメハケで調整する。胴部の一部に黒斑がある。15 はほぼ完形に近い資料である。胴部は長胴気味で、底部は尖りながらも平底状である。胴部外面は平行タタキ、内面はタテハケである。口縁部内面は外面をタテハケ、内面をヨコハケで仕上げる。外面の肩部と底部の付近に黒斑があり、外面には二次被熱による赤変部分が認められる。16 は底部片であるが、外面に平行タタキの痕跡があり、内面は底部をナデ、胴部をタテハケで調整する。

17 は口縁部から胴部上半にかけての資料で、直線的に広がる口縁部に、肩の張らない胴部が接合する。内外ともハケ調整である。18 はやや薄手で、口縁部は直線的に伸び、端部側を外反させる。内外ともハケ調整の痕跡が明瞭に残る。口縁部と胴部の一部に黒斑がみられ、胴部外面には僅かに煤が付着する。19 はやや厚手の作りであるが、器壁の厚みは全体的に均一である。口縁部はヨコナデで、胴部の外面がタテハケ後下半のみヘラケズリで、内面はヘラ状工具による掻き上げである。

20 は胴部下半の破片で、外面はハケ状工具による縦方向のナデ調整、内面はタテハケによる調整である。21 は略完形品で、口縁部は外上方へ真っ直ぐ伸び、胴部は卵型を呈する。内外とも磨滅が著しいがハケ調整とみられ、外面にはタテハケの痕跡が窺える。外底部には黒斑がある。底部は尖り気味の丸底である。22 は他の資料に比べかなり長胴であるが、器高の割には胴部最大径は

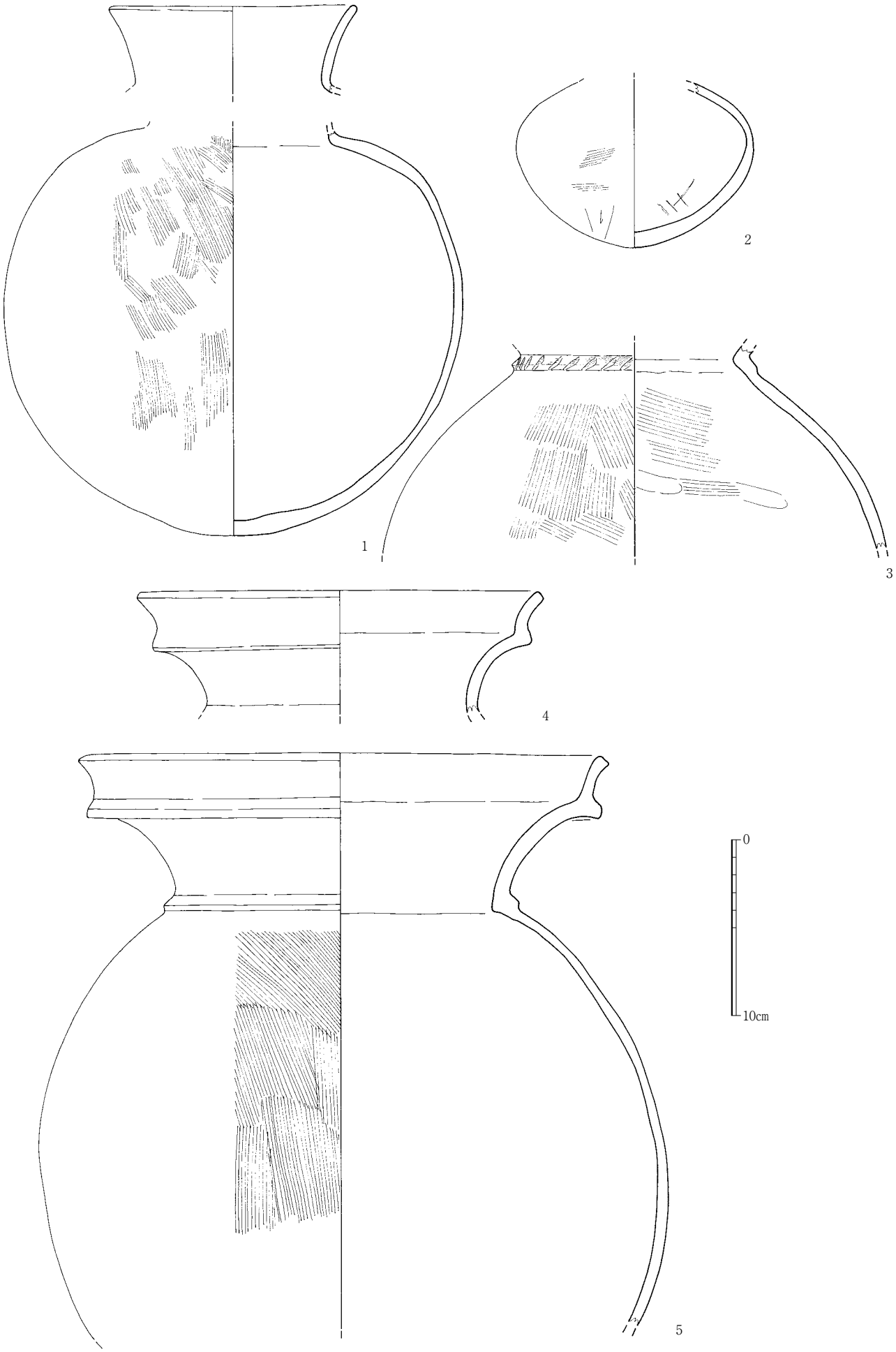
他の資料とほぼ同じで、中型の範疇で捉えられるだろう。底部は欠損するが尖り底になる可能性が高い。内外ともハケ調整で、胴部の下半部はタテハケ、上半部はナナメハケで仕上げている。

23 ～ 32 は高坏である。23 は鉢状の坏部が特徴で、浅い皿状の底部に、直線的に外上方へ伸びる口縁部が付く。内外ともナデ調整とみられるが、内面底部には放射状のミガキの痕跡が残る。口縁端部付近には黒斑が認められる。24 も鉢状の坏部であるが、口縁部が直立気味に伸びる点が異なる。内外とも磨滅が著しく調整が不鮮明であるが、ミガキによる調整が行われていた可能性がある。外面の一部には黒斑が認められる。25 は有段高坏で、坏底部の法量は 23・24 と近似するが、口縁部が大きく直線的に広がる。内外とも摩滅が著しいが、外面には僅かにタテハケ調整とみられる痕跡が残る。脚部はほとんど欠損しているが、内面には工具による調整痕がみられ、坏部との接合は付加法である。26 は 25 と同じ有段高坏であるが、僅かに厚手である。内外とも磨滅が著しいが、口縁部外面に放射状のミガキ、坏部内面に横方向のミガキの痕跡が認められる。27 は有稜高坏で、浅く広がる坏部に外反する口縁部が付加される。脚部は中実の柱状で、裾部がラッパ状に広がる。裾部との境付近に二段の円孔を三方向に穿っており、配置からすると四方向であった可能性もある。内外ともハケ調整を行い、坏部は放射状のミガキ、脚部はタテ方向のミガキで仕上げている。なお、脚部の頂部には坏部との接合のためのキザミが行われている。口縁部内面と脚部外面の一部に黒斑が認められる。

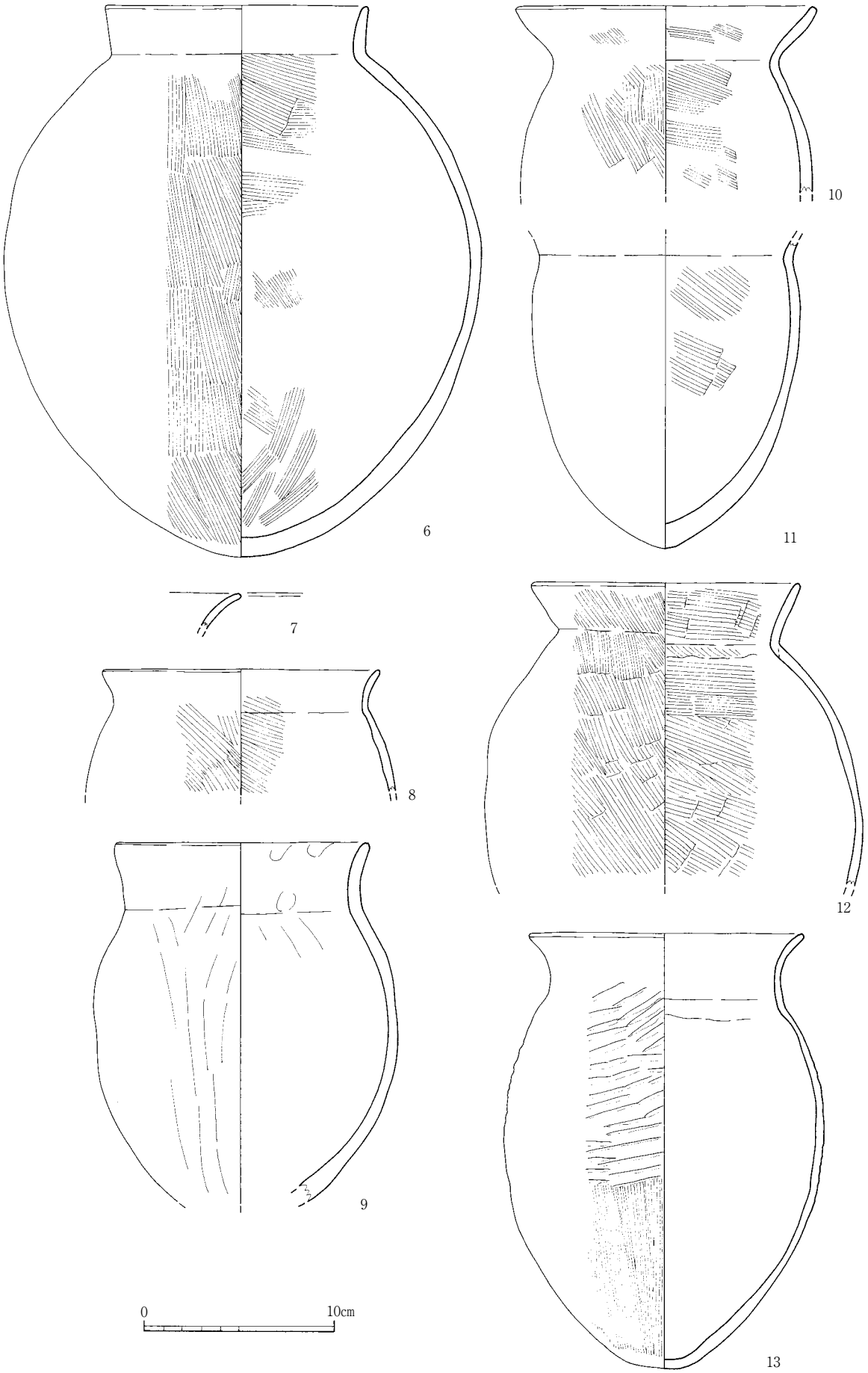
28 は低脚高坏の脚部である。脚部は短く筒状に伸び、裾部はラッパ状に広がる。円孔が三方向に穿たれ、内外ともハケ調整が行われる。脚基部には坏部との接合のためのキザミがみられる。裾部の一部に僅かに黒斑がみられる。29 も低脚高坏の脚部で、中膨らみ気味の筒状部に強く屈曲して外に広がる裾部が伸びる。外面は磨滅のため調整は不鮮明であるが、筒状部の内面には工具によるケズリの痕跡が残る。30 は長脚高坏の脚部片である。裾部へと移行する付近には三方向に円孔が穿たれている。脚部の内面は工具によるナデ、外面はタテハケの後に縦方向のミガキで仕上げる。坏部には内外ともミガキの痕跡が残る。31 は長脚高坏の脚部で、中実気味の筒状部から裾部がラッパ状に広がる。内面は工具によるナデとみられるが不鮮明である。外面はタテハケである。裾部との境付近に三方向に円孔が穿たれている。裾部外面の一部に黒斑がみられる。32 は長脚高坏の脚部で、細長く柱状に伸びて脚端部に向かってラッパ状に広がる。裾部との境付近には円孔を三方向に穿っている。外面はタテハケの後に縦方向のミガキで仕上げ、内面は筒状部をナデ、裾部をヨコハケで調整する。裾部付近には黒斑がみられる。

33 ～ 35 は杯である。33 はほぼ完形の小型杯で、器壁も薄めである。内外ともナデ調整を行い、外面には黒斑が顕著にみられる。34 は 33 より一回り大きな杯で、器壁が厚い。内面は磨滅しているが、外面にはハケ状工具による調整の痕跡が認められる。外面に黒斑がある。35 は法量や器壁が 34 と近似する資料で、口縁部を欠く。外面はナデ調整とみられ、内面は指ナデの痕跡が部分的に残る。

36 ～ 38 は鉢である。36 は直口の鉢で、扁平な体部にほぼ垂直に立ち上がる口縁部が付く。内外とも磨滅が著しいが、外面にはミガキとみられる痕跡が僅かに残る。37 は小形甕の可能性も考えたが、平底であることから鉢とした。底部に向かって器壁が厚くなり、口縁部側は欠損する。内外ともタテハケ調整である。38 は台付鉢である。鉢部は椀状を呈し、口縁部は緩やかに外反し、端部を丸く収める。台部分は直線的に外側に向かって伸びる。内外とも磨滅が著しいが、胴部外面

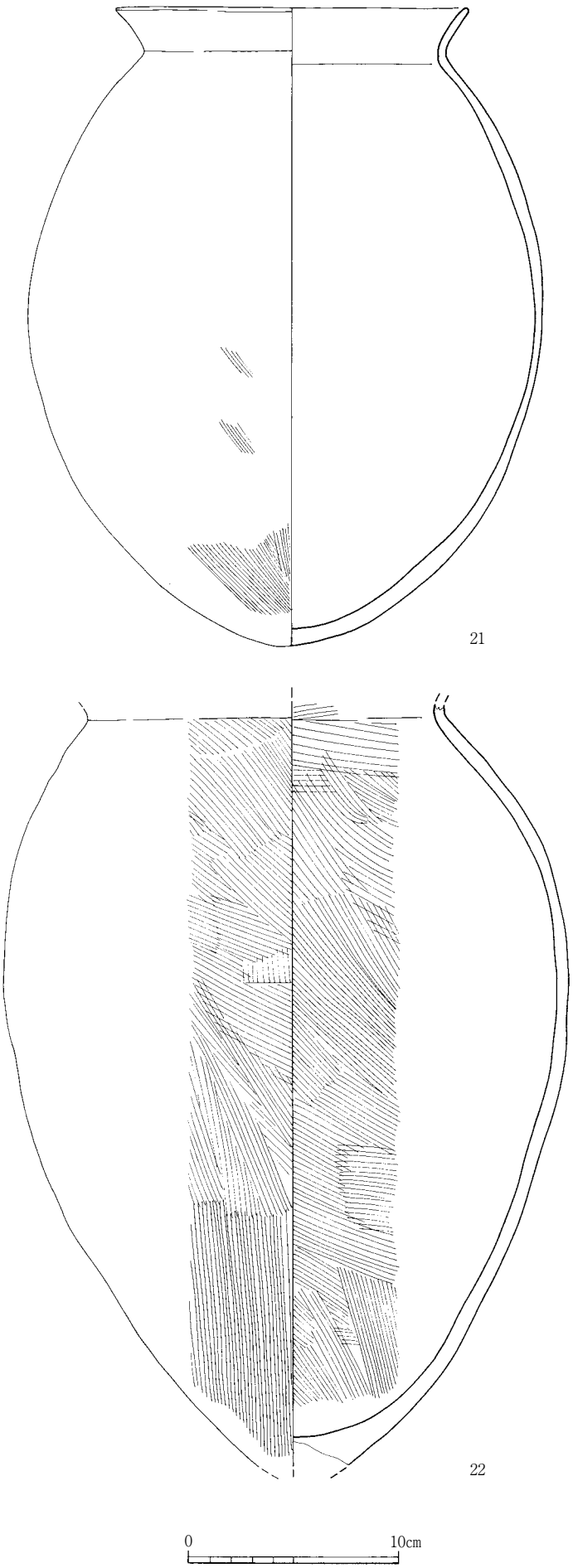


第 14 図　Ⅳ－Ｂ区 122 号竪穴住居跡出土遺物実測図①（1/3）



第 15 図　Ⅳ－B 区 122 号竪穴住居跡出土遺物実測図②（1/3）

第 16 図　Ⅳ－Ｂ区 122 号竪穴住居跡出土遺物実測図③（1/3）



第17図　Ⅳ-B区122号竪穴住居跡出土遺物実測図④(1/3)

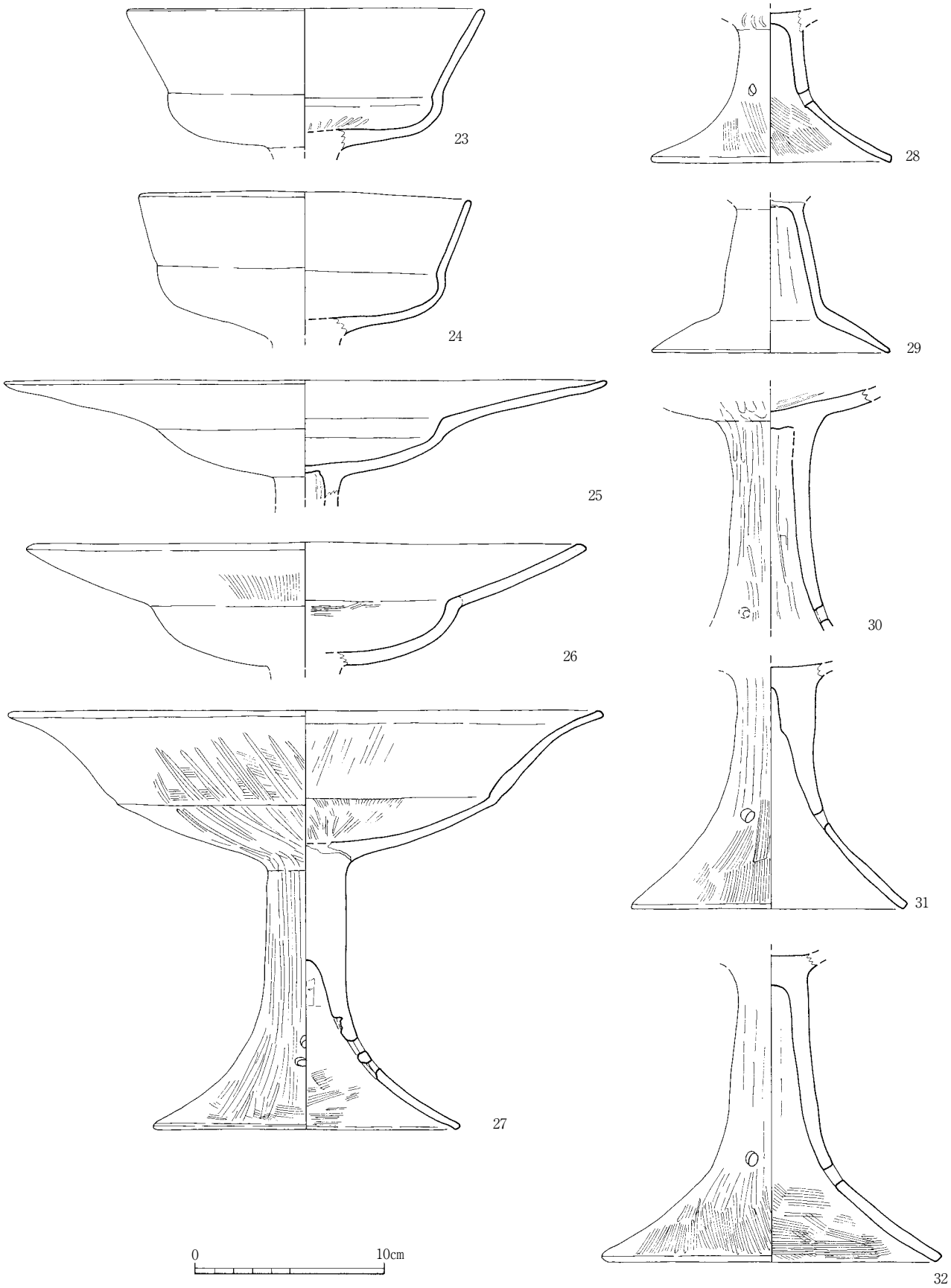
にはタテハケの痕跡が僅かに残る。

39は支脚、40～42は器台である。39は小型であるが、完形品である。全体的に器壁が厚く、上面は斜めながらも平坦で、一方向に突出箇所がある。内面は工具によるナデ、外面はナデ調整である。上面には焼成後に円孔を穿っている。40は大型器台で、一方にやや丸味のあるV字状の抉りがある。外面はタテハケ調整で、内面は下半部をハケ状工具による横方向のナデ、上半部は縦方向のナデの後、ヨコナデで仕上げる。口縁部および下端部付近に黒斑が認められる。41も40と同様の器台であるが、法量は一回り小さい。上半部が欠損しているが、抉りの一部が残っている。内外とも細かなハケ調整の痕跡があり、下端部のみヨコナデを行う。42は抉りを持たない器台で、下端部に向かってやや内湾気味に広がる。外面は単位の広い叩きを行った後、上半部のみ縦方向のヘラケズリを行う。内面はヨコハケである。

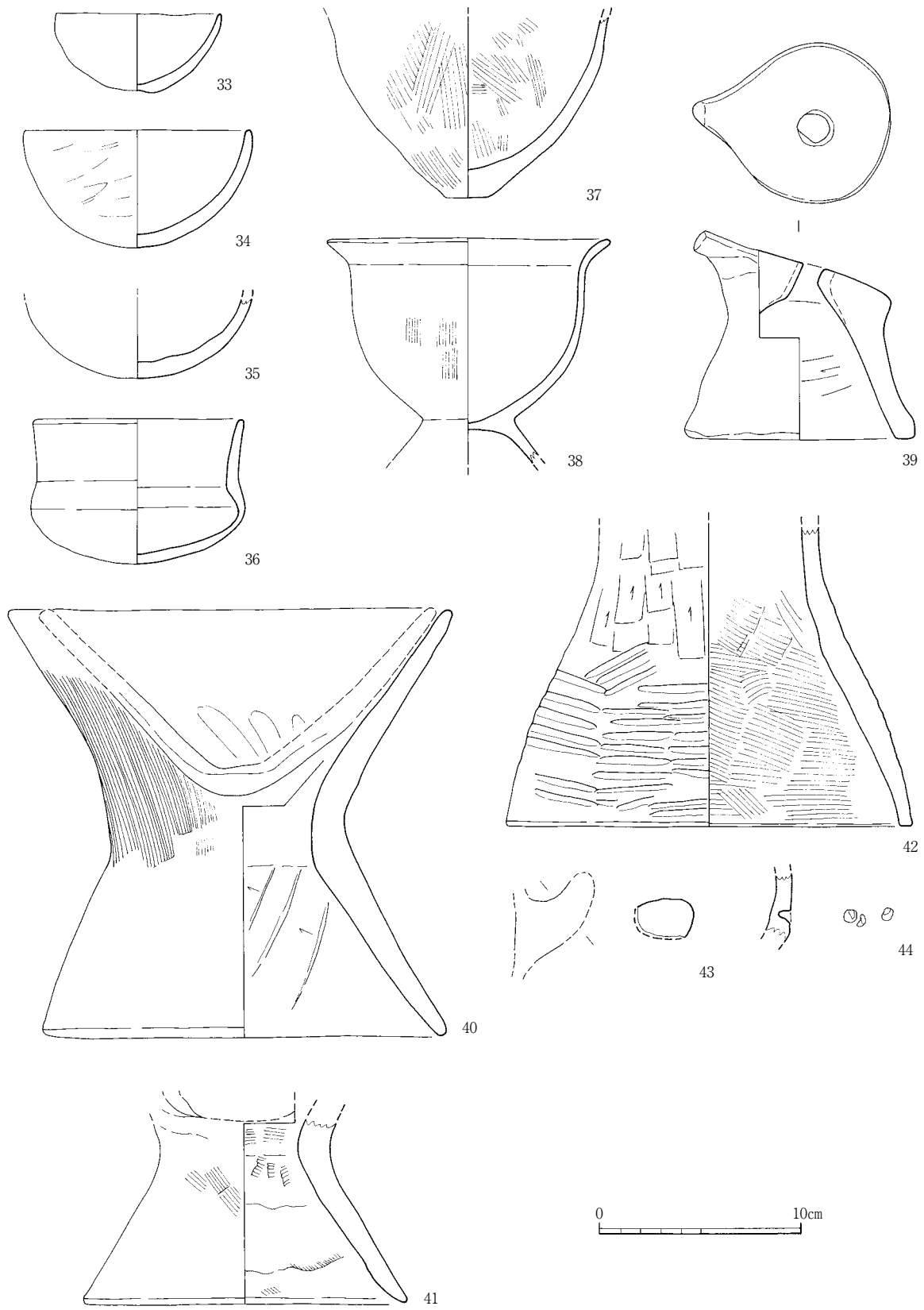
43は甑の把手で混入品とみられる。断面は長楕円形を呈し、上方に向かって折れ曲がる。

44はミニチュア土器とみられるが、全体の器形は不明で、現状では鉢形になると推定される。外面には工具による刺突がみられるが、いずれも貫通はしていない。

45は手焙り型土器の完形品である。覆い部は正面からみると少し山高で、正面は短く折り曲げて面とする。体部は下膨れに広がり、屈曲して底部に至る。体部の上端はく字形に折り曲げ、折り曲げた内面に覆い部を接合している。底部は若干丸味のある平底である。



第 18 図　Ⅳ－B 区 122 号竪穴住居跡出土遺物実測図⑤（1/3）



第 19 図　Ⅳ－B 区 122 号竪穴住居跡出土遺物実測図⑥（1/3）

覆い部と体部の境、そして体部の中ほどに突帯を廻らせ、キザミを施す。面と面に沿った位置に２条の竹管文が施され、体部との境にある突帯の際まで連続して施文されている。覆い部は内外ともナデ調整し、内面には部分的にハケ状工具の痕跡がみられる。体部は内外ともヨコハケで、外面のみミガキの痕跡が残る。体部内面に僅かに煤の付着が認められ、覆い部外面と底部外面に黒斑がある。

住居の切り合いや出土遺物から、時期は弥生時代終末期に位置づけられる（下原）。

130 号竪穴住居跡（図版２、第 21 図）

調査区の北西側に位置し、後世の削平によって住居の範囲は不明確ながら、121 号住居跡を切り、120 号住居跡に切られることは間違いない。位置関係から 95 号住居跡とも切り合い関係があるとみられるが、新古は不明である。

規模は西壁の一部が残るのみであるが、主柱の位置から東西、南北とも１辺５ｍを超える程度と推定される。主柱は４本柱で、北側の柱穴２基が段掘り状になっており、抜き取りがあった可能性もある。西壁に沿ってカマドが設けられていた。

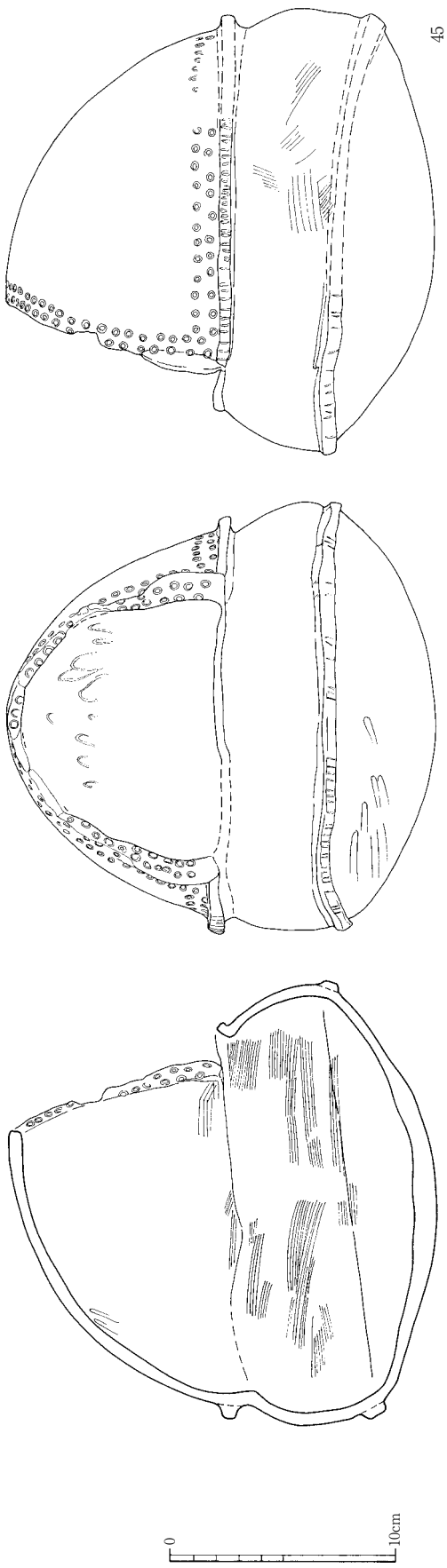
カマド

西壁の中央に位置し、ほとんど床面付近まで削平が及んでいる状況にあって焼土や黄灰色のカマド構築土の分布が認められた。カマド本体が僅かながら遺存しているのではないかと期待したが、両袖とも失われ、支脚も認められなかった。しかし、カマドの想定範囲のみ３㎝ほど浅い皿状に掘り窪めていたことから、構築に伴う床貼り部分と考えられる。

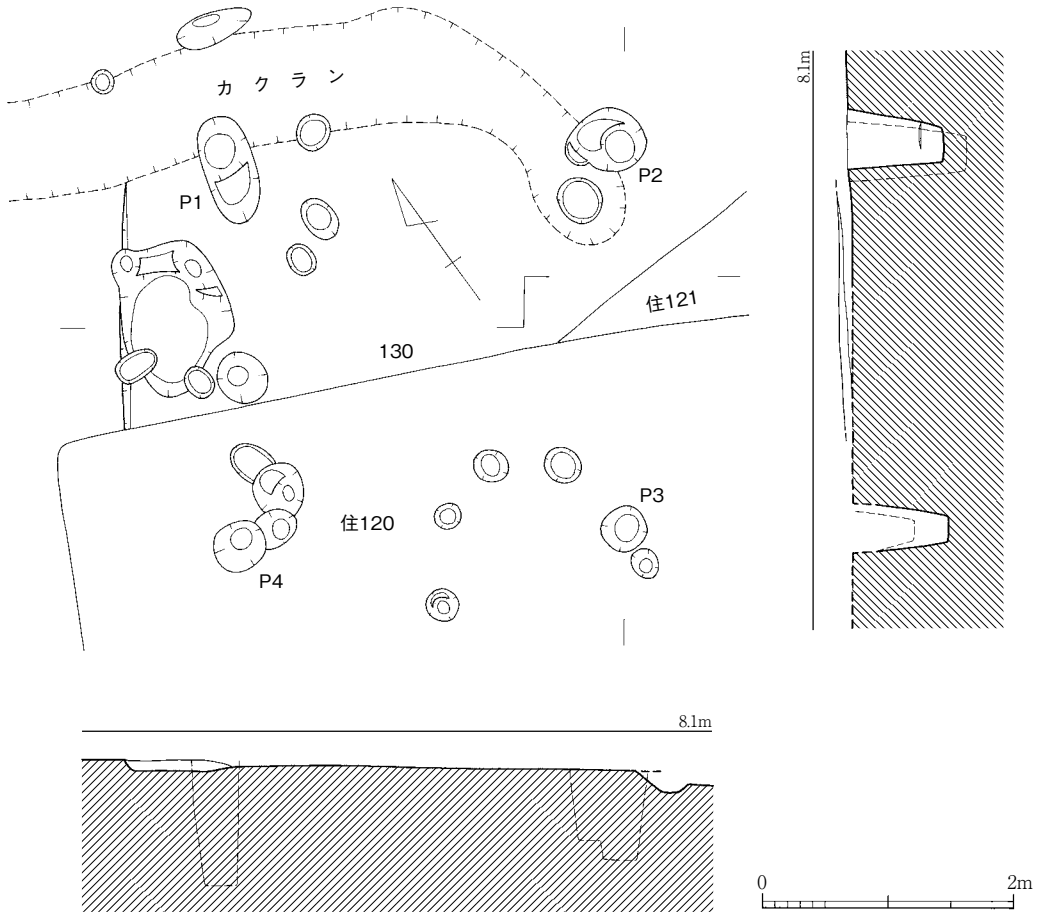
出土遺物はなかったが、住居の切り合いなどから古墳時代後期後半と推定される（下原）。

131 号竪穴住居跡（図版４、第 22 図）

調査区の中央西寄りに位置し、住居南西部は後世のカクランを受け失っている。規模は東西 4.22 ｍ×南北 4.77 ｍ、深さ５㎝程度の、やや南北に長くなる隅



第 20 図　Ⅳ－Ｂ区 122 号竪穴住居跡出土遺物実測図⑦（1/3）



第 21 図　Ⅳ－Ｂ区 130 号竪穴住居跡実測図（1/60）

丸方形住居跡で、残りは悪い。主軸方位はG.N.より６°西に傾く。

北壁ほぼ中央にカマドを付設し、深さ５㎝程度を測る壁周溝が東壁の一部のみ巡る。住居壁に接していないため不安が残るが、暗灰褐色粘質土の埋土から当住居に伴うと想定される屋内土坑を住居南西部で検出した。床面ではピットを多数検出したが、Ｐ１・２は深さと位置から確実な主柱穴で、南東部のＰ３・４のいずれかが主柱穴となる４本柱の住居跡である。住居ほぼ前面で床下掘り込みを確認した。住居埋土は暗灰褐色粘質土に炭が多く混じる土である。床面直上で土器が出土したが、図化できなかった。またＰ２とＰ７近くできれいな白色粘土を確認した。

住居周囲で住居跡外ピット列を検出し、当住居の補助柱であった可能性があるため、深さを示す。

埋土から緑色片岩製の勾玉１点（第 62 図２）が出土した。

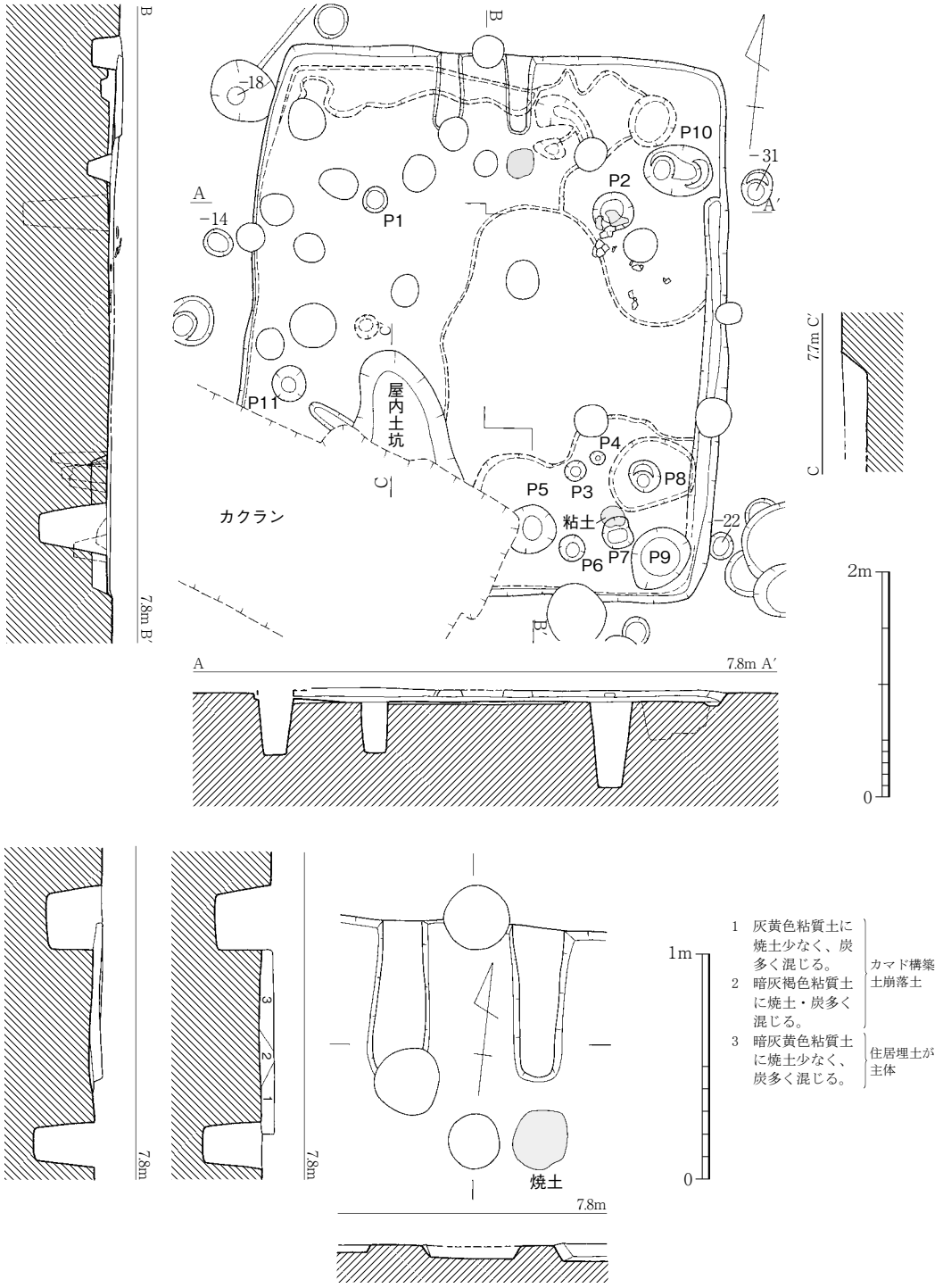
カマド（図版４、第 22 図）

住居跡のほぼ北壁中央で検出したが、カマド左袖先端及び燃焼部奥壁は後世のピットにより失う。いずれも袖は灰黄色粘土に暗灰褐色粘質土が 30％混じる土で構築し、壁から 0.7 ｍ直線的に突出する。袖間は壁から 55㎝を測る位置で幅 38㎝と狭い。

燃焼部床面では明確な焼面は検出できなかったが、カマド右袖先端から 13㎝手前で硬化面を確認した。カマド埋土は１・２はカマド天井部崩落土が主体となる土で、３は住居埋土と同質の土が主体であるため、住居廃絶時に流入した土と考えられる。カマド下層掘り込みは検出できなかった。

出土遺物（第 23 図１～６）

１・２は土師器甕である。１は強く外湾する小型甕口縁部である。２は胴部中位が屈折部する甕



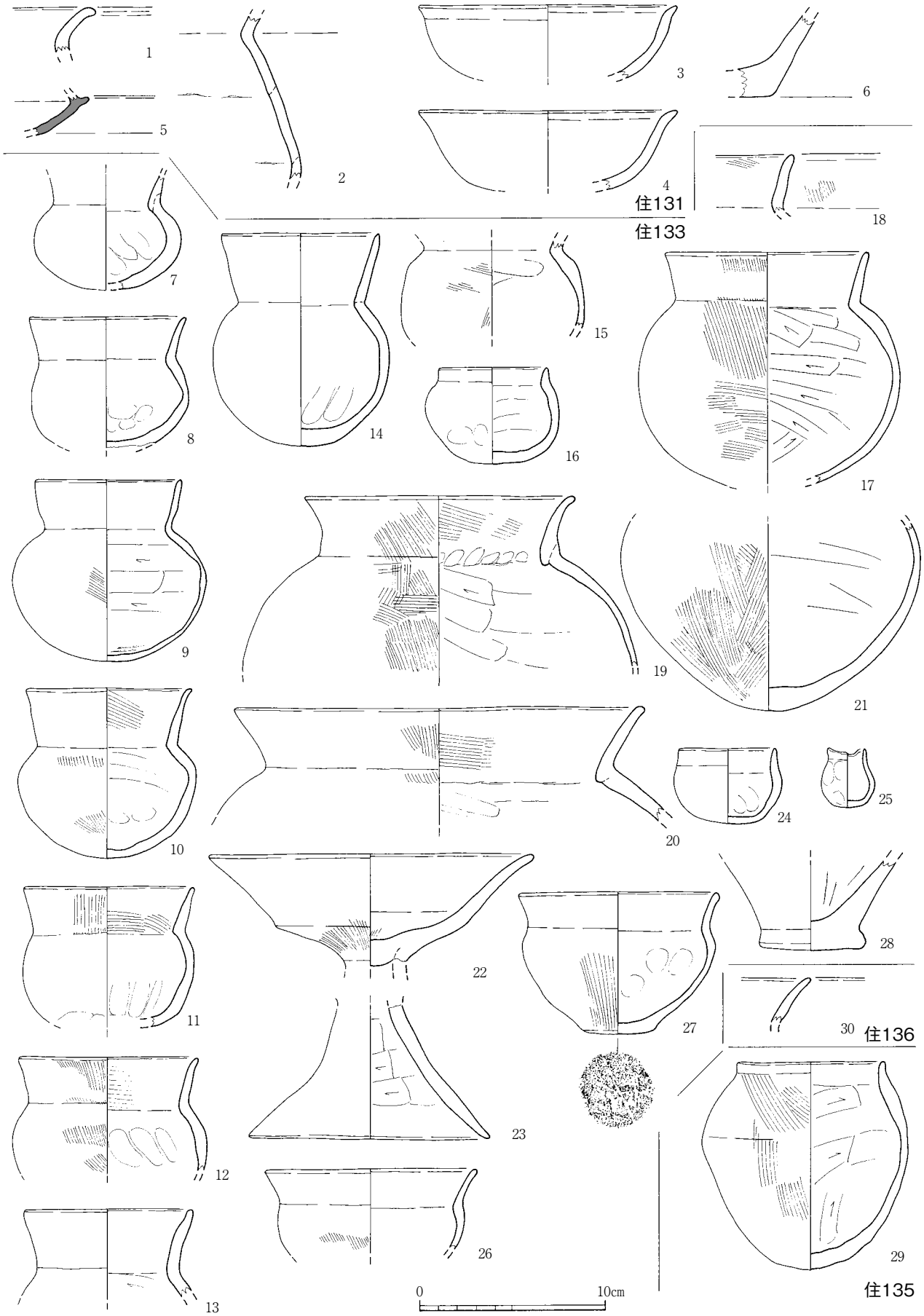
第 22 図　Ⅳ－B 区 131 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60、1/30）

胴部。３・４は口縁端部を短く外反させる土師器高坏坏部である。３の外面には二次被熱痕とススあり。５は須恵器坏身の受け部である。６は底部が弱い凸レンズ底の弥生後期後半の甕底部である。外面は二次被熱痕が顕著である。床下掘り込み出土で、混入品。

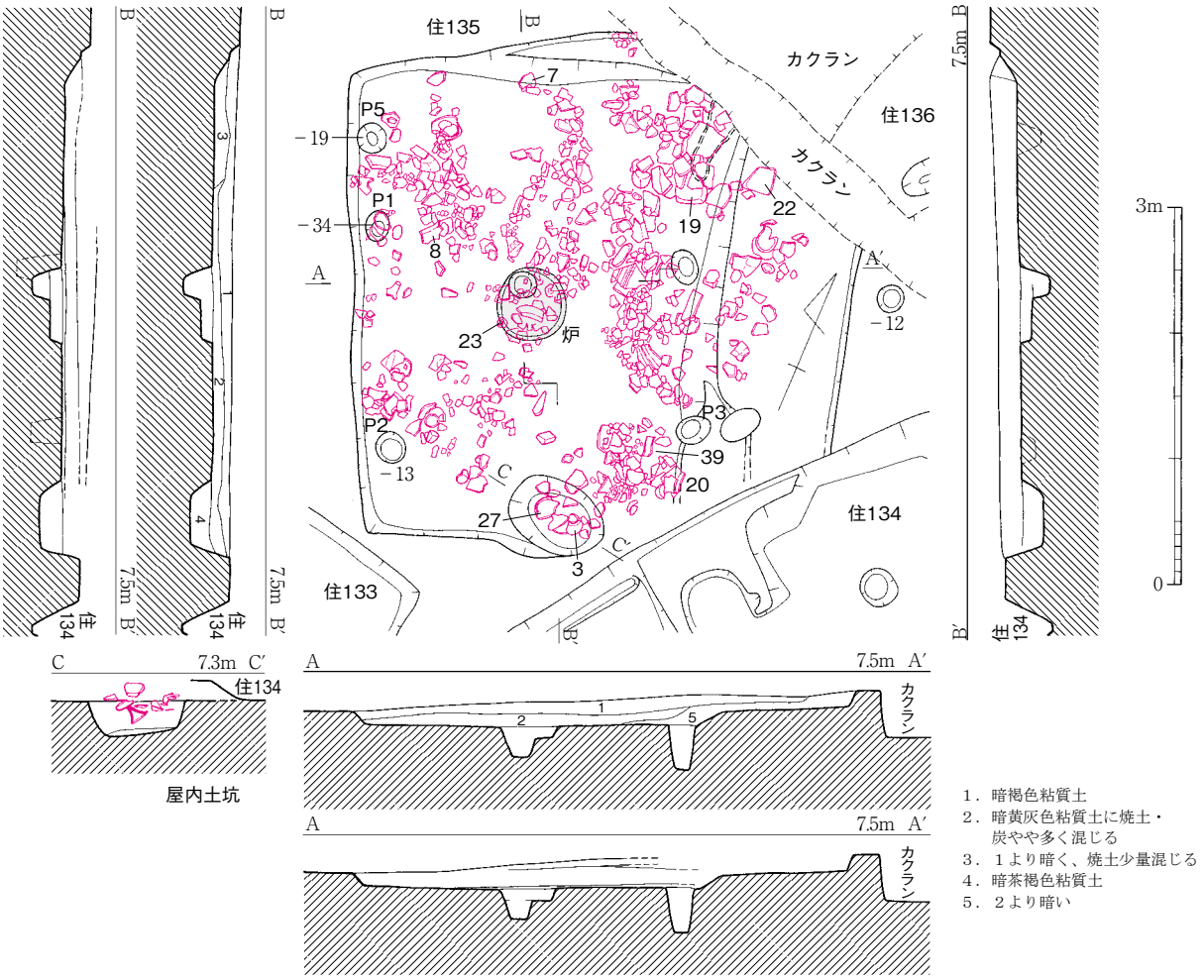
出土遺物から、７世紀前半に属すると考えられる（大庭）。

132 号竪穴住居跡（図版４・５、第 24 図）

調査区の南西隅に位置し、134・136 号住居跡に切られ、133・135 号住居跡とも切り合い関係を持つ可能性があり、出土遺物から 133・135 号住居跡に切られる。



第 23 図　Ⅳ－B 区 131・133・135・136 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第 24 図　Ⅳ－B 区 132 号竪穴住居跡・屋内土坑実測図（1/60）

規模は東西 3.95 m×南北 4 m、竪穴部で深さ最大 0.25 mの正方形住居跡である。北壁のテラスは掘り間違えで、下の段が本来の壁である。主軸方位はG.N.より 24°西に傾く。

住居東壁のみに幅 1.2 m、高さ 0.1m のベッド状遺構を付設する。竪穴部ほぼ中央には径 0.55 m の円形を呈する炉があり、埋土は暗灰黄褐色粘質土に焼土・炭が多く混じる。竪穴部南壁ほぼ中央では、0.4m × 0.27m、深さ 0.18m の楕円形を呈する屋内土坑を検出し、土坑内からほぼ完形の豊前系高坏（27）が出土した。住居埋土はレンズ状堆積を示し、土質や色調、埋土及び多数出土した土器片から当住居は比較的短時間に埋没したと予想される。なお埋土からは多数の破片状態の土器片が主に１層から出土し、床面直上の出土土器はない。

竪穴部四隅に配されたＰ１～３は深さ・位置から主柱穴と思われ、北東側の主柱穴は検出できていないが、４本柱の住居跡となるか。住居床下掘り込みは１ヶ所確認した。

埋土からすり石２点（第 62 図 16・17）、台石２点（第 63 図 19・20）が出土した（大庭）。

出土遺物（図版 20、第 25 ～ 27 図）

１～５は複合口縁壺である。１・２は口縁部が短く立ち上がる。１は口縁部が内傾し、やや内湾気味に立ち上がる在地系である。口縁部外面には、ハケ状の工具で文様を刻んでいる。２の口縁部は直線的に立ち上がる。頸部外面には下から上に向かって斜め方向のハケが施される。外面頸部付近に黒斑が認められる。３は口縁部が内傾内湾する在地系である。口縁上部は欠損するが、残存部からは端部が外に開く形であることがうかがえる。頸部はやや内傾しつつ立ち上がる。口縁部・頸

文中写真９　132号住居跡出土状況（南東から）

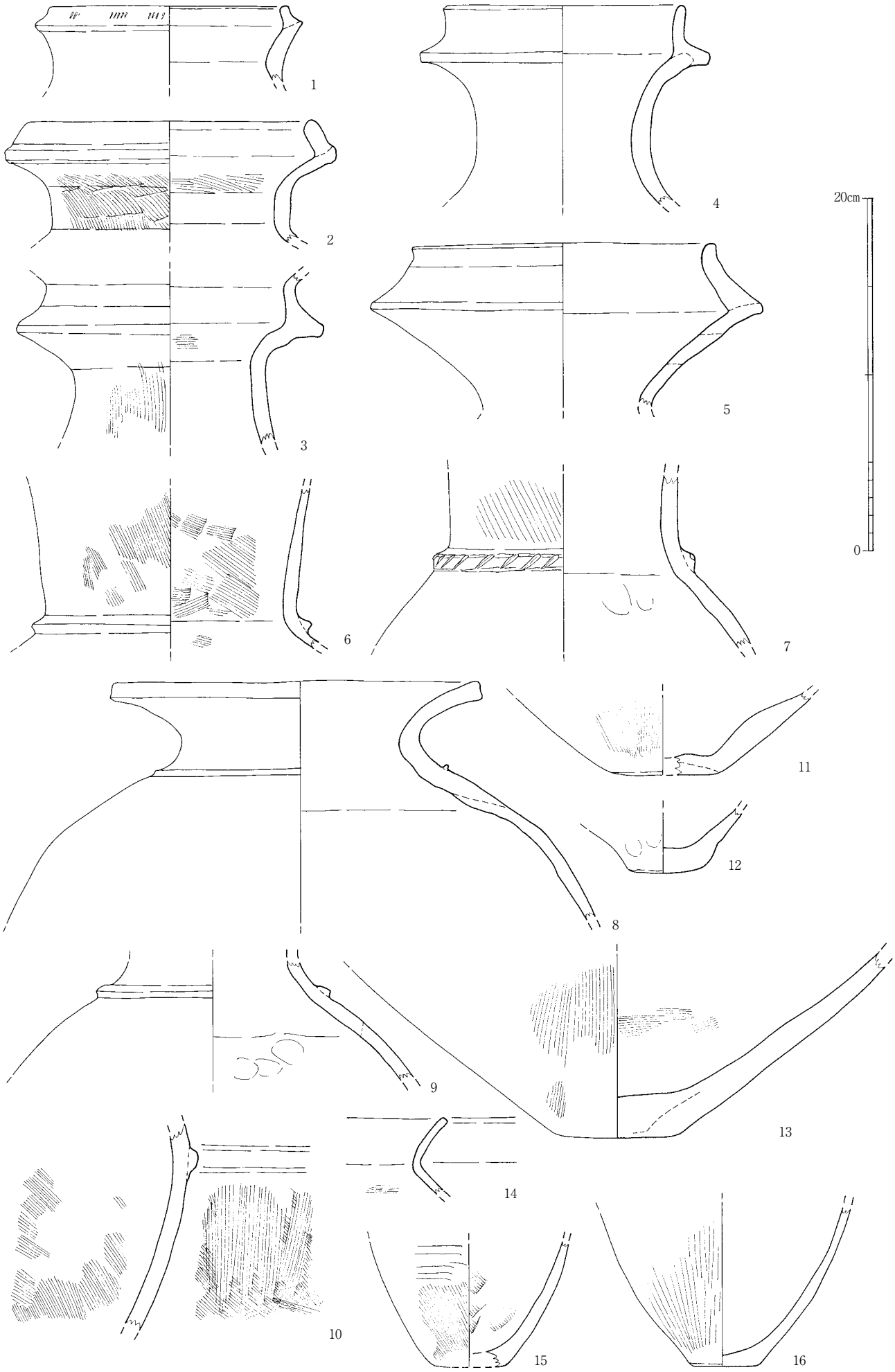
部の外面には、上下ほぼ同じ位置に黒変が認められる。焼成は良くなく、器表が剥落している。４・５はいずれも口縁部が内傾・内湾する在地系複合口縁壺である。４の口縁部は長く、ほぼ直立する。頸部内面には黒斑が認められる。焼成は悪く、器面が剥落している。５の頸部は付け根から外に開くもので、口縁部は内湾し長く伸びる。頸部の数ヶ所と口縁屈曲部で粘土接合痕がみられる。

６・７は直口壺である。いずれも口縁部は直線的に立ち上がり、頸部に断面三角形の突帯を貼り付ける。６は内外面ともに斜め方向のハケを施す。外面には黒斑が認められる。７は外面突帯上部にハケ、突帯下部には工具によるナデを施す。内面にはナデを施している。突帯にはヘラ状の工具による右上がりの長いキザミを施す。内面の一部には黒変が認められる。８は壺で、頸部に細い突帯を貼り付ける。突帯下部で粘土接合痕が確認される。二次被熱により一部赤変し、器面が剥落している。９は壺の頸部から胴部である。頸部には断面三角形の突帯を貼り付けており、その下部には粘土接合痕がみられる。焼成はあまり良くなく、器表が剥落している。10は壺の胴部である。断面四角形の突帯は胴部に斜め方向のハケを施した後に貼り付けられており、その後ナデで成形されている。外面の突帯以下には縦方向のハケを、内面にはハケの後ナデを施す。

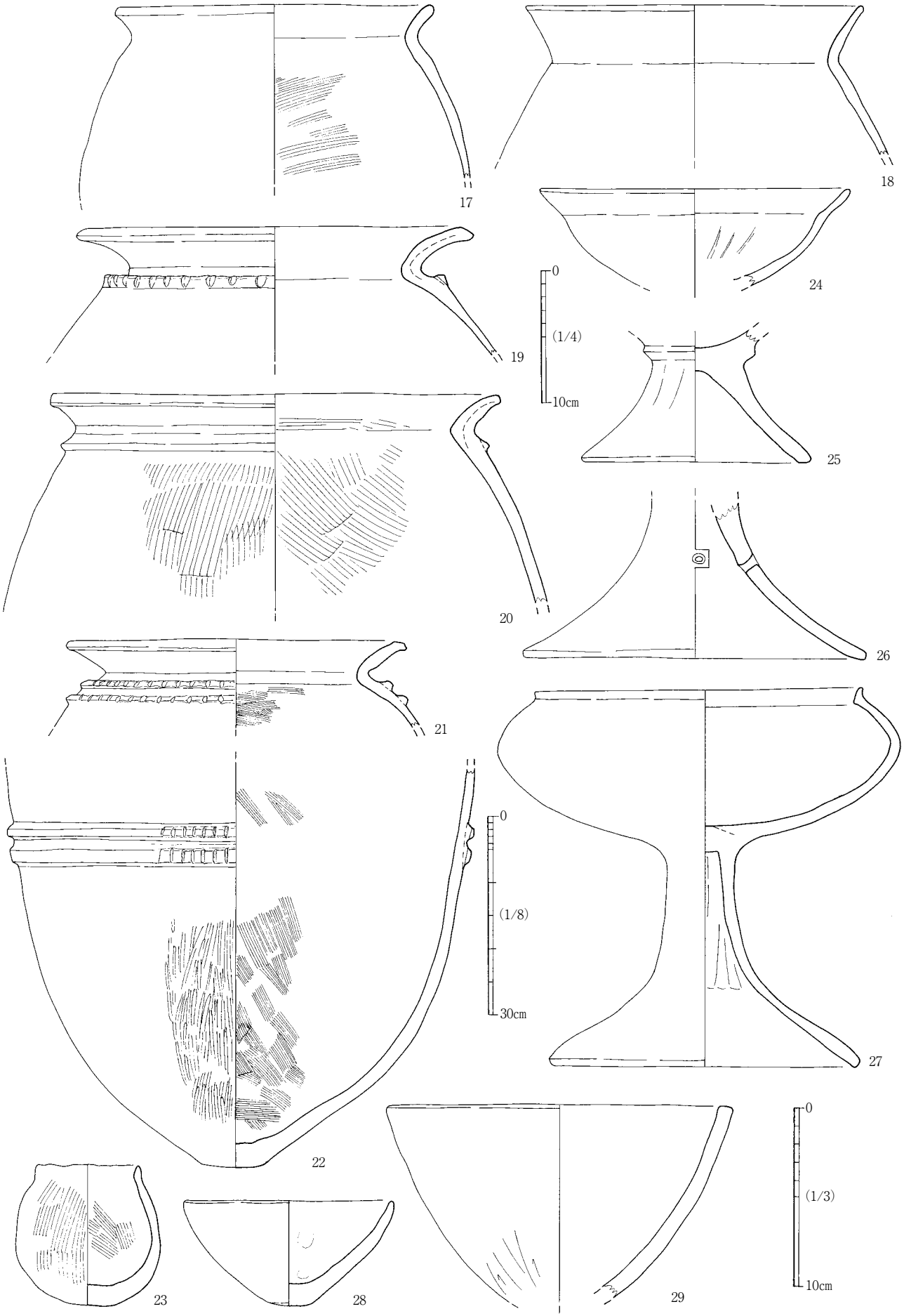
11～13は壺の底部で、いずれも凸レンズ状を呈する。11・12は底部付近の外面に黒斑が認められる。13は胴部に黒変が確認される。焼成はあまり良くない。14は甕の口縁部であり、く字形に屈曲する。口縁部付近内面には黒変が認められる。15・16は甕の底部であり、いずれも凸レンズ底を呈する。15は外面にタタキを施した後、底部付近を中心に斜め方向のハケを施している。胴部に黒斑が認められる。16は磨滅が著しいが、外面には縦方向のハケを施すようである。外面底部付近に黒斑が認められる。焼成はあまり良くなく、器表が剥落している。

17・18は甕の口縁部から胴部である。口縁部はくの字形に屈曲し、17はやや外反気味に、18は直線的に伸びる。胴部以下の形状は不明であるが、いずれも胴部最大径は口径を上回る。19～22は大型の甕であり、21･22は同一個体と考えられる。19～21の口縁はいずれもく字形に屈曲する。19は肩が張り、おそらくは長胴になるものと考えられる。肩部に一条の断面三角形の突帯を持ち、そこに棒状工具によるキザミを施す。焼成は良くなく、器表の剥落が認められる。20はあまり肩が張らない。19と同様、長胴になると考えられる。肩部には一条の断面三角形の突帯を持つ。内外面ともに下から上に向かってハケを施す。21・22は肩が張る長胴の甕で、底部は凸レンズ状を呈する。肩部に断面三角形の二条の突帯を、胴部には断面四角形の二条の突帯を持ち、いずれにもヘラ状工具によりキザミを施す。器面は磨滅が著しいが、胴部外面には縦方向のミガキを、内面にはハケを施す。胴部外面に黒斑が認められる。23は小型の甕である。内外面にハケを施しており、内面の底部付近ではナデが観察される。

24～27は高坏である。24の坏部は内湾しつつ端部付近で屈曲し、屈曲部から先はやや内湾して短く伸びる。内面にはミガキを施す。25は脚部がハの字形に開くもので、坏部と脚部の間に断面



第 25 図　Ⅳ－B 区 132 号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）



第26図　Ⅳ-B区132号竪穴住居跡出土土器実測図②（19・20は1/4、21・22は1/8、その他は1/3）

第 27 図　Ⅳ－Ｂ区 132 号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/3）

三角形の突帯を付す。26 の脚部は内湾しつつ裾が開くもので、穿孔を施す。穿孔は全周の３分の１ほどの残存部の中で同じ高さに２ヶ所認められ、本来は一周４ヶ所に施されていたものであろう。焼成は良くなく、器表が剥落している。27 は坏部が内湾する豊前地域特有の高坏である。口縁端部は鋤先状を呈する。脚部は下半からラッパ状に開く。坏部と脚部の接合は挿し込み技法である。器面は剥落しており、坏部外面端部付近に黒斑が認められ、内面にも黒変が観察されることから、焼成はあまり良くないといえる。

28・29 は鉢である。28 は口縁端部を丸くおさめ、底部は凸レンズ状を呈する。内面の一部に指押さえが確認される。外面底部付近には黒斑が認められる。29 は口縁端部が方形をなし、外面下半にケズリ後ナデを施す。外面の一部で黒斑が観察される。30・31 は大型の鉢である。いずれも頸部がくの字形に屈曲し、口縁部は内湾しながら外に開く。30 の外面のハケは、屈曲部以下に下から上方向に施した後、屈曲部から上に上から下の方向に施す。その後、口縁の一部にはヨコナデを施す。31 は特に外面の磨滅が著しいが、内外面共にハケを施す。外面底部付近には黒斑が観察される。同じく外面底部付近には被熱による赤変と器表の剥落が認められる。

32 ～ 39 は器台である。33・34・37 は胴部中央付近が最も括れるもの、32・35・36 は胴部上半で括れ、上方がラッパ状に開くものである。外面は縦方向のハケを、内面はナデを施すものが多い。32 の内面にはハケ先を用いた押圧整形の跡が一部認められる。焼成は良くなく、器表が剥落している。35 の内面は指押さえを施す。36 の内面には一部ハケが認められ、下半部はハケの後にナデを施している。37 は外面下半部にタタキを、内面下半部には浅いケズリの後にナデを施す。38 は下半部がハの字状に開く。下端部付近の外面には黒斑が認められる。これとほぼ同じ部位で、二次被熱による赤変が認められる。器表は全体に剥落している。39 は上方が大きく抉られた豊前地域特有の器台である。外面には縦方向のハケを、上部と下部の内面には横方向から斜め方向のハケを施す。

40 ～ 42 は支脚である。いずれも一方向のみ上方に突出する形態で、被熱による赤変が観察される。40 は粘土を付加して上方の突出部を作っており、その周辺を指押さえで成形している。それ以下は全体にナデで成形する。41 は上面に直径５mm ほどの孔を穿っている。外面には縦方向のハケ、内面には縦方向のナデを施す。外面には黒斑が認められる。42 も上面に穿孔する。外面は縦方向のハケ、内面は上部に縦方向のナデ、中程に横方向のハケを施し、下半部にはハケ工具による工具痕が残る。突出部にはナデが施されている。43 はミニチュア土器で、指押さえで成形する。

出土遺物は弥生時代後期に属すると考えられる。特に、複合口縁壺や高坏、器台に所謂豊前型の器種が含まれること、甕は長胴で凸レンズ底を呈するものが主体であること、鉢の一部にも凸レンズ状の底をもつものが認められることから、後期の中でも後半に位置づけられる（岩橋）。

133 号竪穴住居跡（図版６、第 28 図）

調査区の南西隅に位置し、９号建物跡に切られる。132・134 号住居跡と接するため、切り合い関係を持つと考えられるが、出土遺物から 132 号住居跡より新しく、134 号住居跡より古いと考えられる。規模は東西 3.82 m × 南北 3.6 m、深さ最大 0.32 m とほぼ正方形住居跡である。主軸方位はG.N.より５°西に傾く。

北壁ほぼ中央にカマドを付設する。住居中央２ヶ所で粘土塊、カマド東側で台石を検出した。床

面ではＰ１～３を検出したが、いずれも浅く主柱穴は不明である。

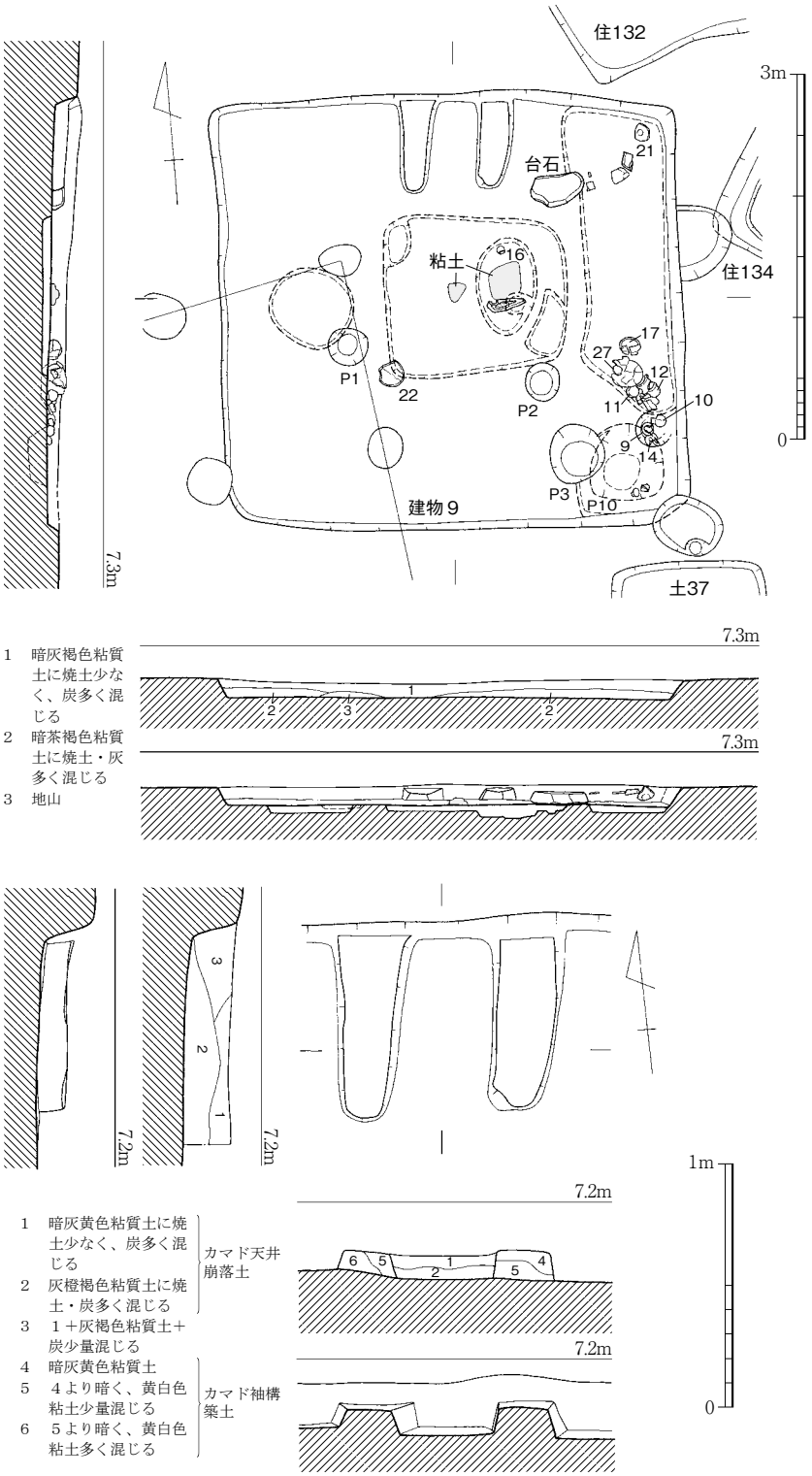
住居南東側の床面直上で、土師器小型丸底壺を中心とする多数の土器を確認した。壺が多くを占めることと出土状況から、住居廃絶時に意図的に置かれたものと推測される。

住居中央～東側で床下掘り込みを確認した。住居埋土はレンズ状堆積を呈する。

カマド（図版６、第28図）

住居跡のほぼ北壁中央で検出した。粘土が主体ではない土で構築された両袖は、壁から0.8ｍ直線的に突出する。袖は床面から高さ10cmのレベルでやっと検出できたため、住居廃絶時にこのレベルまでカマドを壊していた可能性が高い。袖間は、壁から60cmの箇所で40cmと狭い。燃焼部床面では明確な焼面は検出できなかった。

カマド埋土は、１・２がカマド天井部崩落土が主体となる土で、３は住居埋土と同質の土が主体であるため、住居廃絶時に流入した土と考えられる。カマド下層掘り込みは検出できなかった。



第28図　Ⅳ－Ｂ区133号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60、1/30）

出土遺物（図版20、第23図７～28）

７～16は住居南東部からまとまって出土した土師器小型丸底壺である。７は内外面ナデ調整で、胴部内面にはナデの稜が残る。８・11・12の外面には黒斑あり。８の外面は顕著な二次被熱のため、器表が荒れており、調整不明。内面底部には指おさえ痕あり。９の口縁部はわずかに内湾し、器壁が非常に薄いもの。胴部内面中位にはケズリ、内面底部には工具痕が認められる。復元口径８cm、復元器高9.9cmを測る。10の胴部外面はハケのちナデを施す。胴部内面にはナデの稜が残る。11の

文中写真 10　133 号住居跡出土状況
（北西から）

外面底部は手持ちヘラケズリ、胴部内面下位には縦ナデの稜が残る。12・15 の外面はハケのち横ナデを施す。胴部内面には縦ナデの稜が残る。13 は器壁が厚く、頸部内面までケズリを施す。14 は球状の胴部に長い口縁部を持つ。復元口径 8.5cm、器高 11.5cmを測る。16 はほぼ完形の手づくねに近い単口縁の丸底壺である。口径 6 cm、器高 5.2cmを測る。胴部内面にはナデの稜が認められる。

17・18 は中型の土師器直口壺である。17 の胴部下位には不定方向のハケを施し、内面頸部までケズリを施す。外面には二次被熱痕、ススあり。18 の内外面はハケのちナデを施す。

19 ～ 21 は土師器甕である。19 の外面胴部上位には、縦ハケのち不定方向の短いハケを施し、内面頸部には接合時の指おさえ痕が明瞭に残る。口縁部内外面はハケのち横ナデを施す。外面には黒斑あり。胎土は精良である。20 は口縁部が逆「く」の字状に屈折し、胴部内面にはナデの稜が残る。口縁部内面には黒斑あり。21 の底部は尖底で、内面には工具痕が残る。

22・23 は土師器高坏である。22 は屈折部の稜が明瞭でないもので、口縁端部は弱く肥厚する。坏部外面はハケのち横ナデを施し、坏内面底部には工具痕が残る。23 は「ハ」の字状にそのまま開く脚部である。24・25 は土師器手づくね土器である。24 は完形品で、口径 5.3cm、器高 4.1cmを測る。25 はほぼ完形の壺状の手づくね土器である。口径 2.1cm、器高 3.2cmを測る。

26 ～ 28 は混入品である。26 は口縁部が弱く肥厚する土師器外反口縁鉢である。27 は凸レンズ底の弥生後期外反口縁鉢で、外面はハケのち横ナデを施す。底部には木の葉痕がある。外面には黒斑があり、内面は黒化する。28 は弱い凸レンズ底を呈する弥生後期甕底部である。内面には工具痕があり、外面には黒斑が認められる。

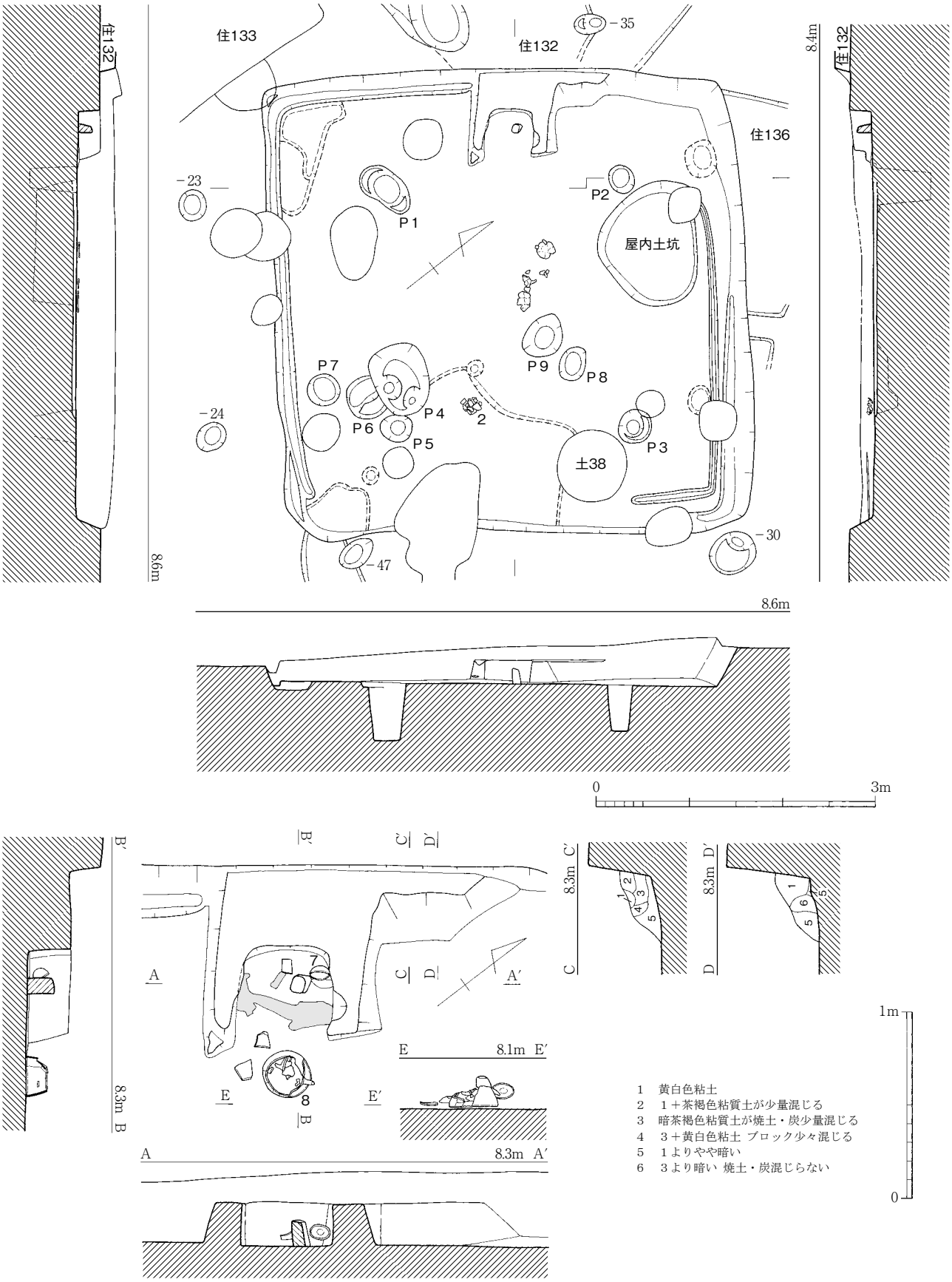
出土遺物及び住居形態から、古墳時代後期前半～中頃に属すると考えられる（大庭）。

134 号竪穴住居跡（巻頭図版２、図版７、第 29 図）

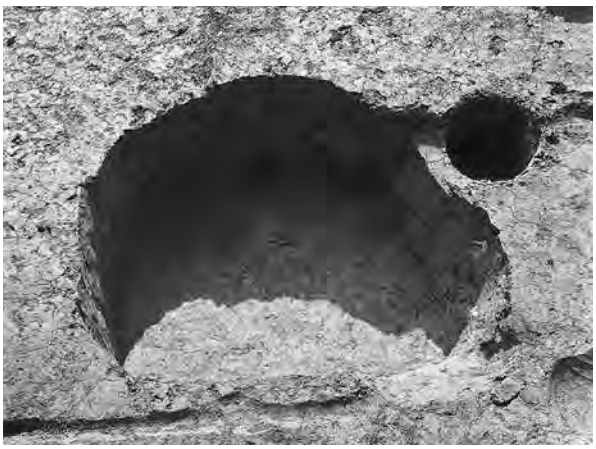
調査区の南西に位置し、38 号土坑に切られ、132・136 号住居跡を切る。133 号住居跡と接するため、切り合い関係を持つと考えられるが、出土遺物から 133 号住居跡より新しいと想定される。規模は東西 5.1 m × 南北 4.95 m、深さ最大 0.42 m とほぼ正方形住居跡で、当区では残りが良い住居跡である。主軸方位はＧ.Ｎ.より 51° 西に傾く。

西壁ほぼ中央にカマドを付設し、壁周溝は南壁と西・北・東壁の一部に巡る。住居北壁から少し離れた位置で、埋土から当住居に伴うと考えられる屋内土坑を検出した。この屋内土坑の規模は 1.35 m × 1.08m、深さ 0.41 m で楕円形を呈し、埋土は灰褐色粘質土に黄褐色粘質土が少量混じる。床面ではピットを多数検出し、位置と深さからＰ１～４が主柱穴となる４本柱の住居跡である。また床面直上で土師器甕（２）が出土した。

住居埋土は上層が暗灰褐色粘質土、下層が灰黄色粘質土で、レンズ状堆積である。住居全体的に床下掘り込みを確認した。



第 29 図　Ⅳ－B 区 134 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60、1/30）



文中写真 11　134 号住居跡屋内土坑（北から）

住居周囲で住居跡外ピット列を検出し、当住居の補助柱であった可能性があるため、深さを示している。

埋土下層から泥岩製の不明石製品（第 62 図６）が出土した。

カマド（巻頭図版２、図版７、第 29 図）

住居跡のほぼ西壁中央で検出したカマドで、黄白色粘土を逆「U」字状に構築して造り出し、特にカマド奥壁部分の粘土は厚さ 40cmという非常に厚く構築することが特徴である。

両袖とも壁から 105cmほど直線的に突出するが、右袖の方が幅は広い。また袖も床面から高さ 25cm残存し、残りは良いカマドである。燃焼部奥壁から 15cm手前という非常に近く、かつ燃焼部の中軸線よりやや北側にずれた位置に石製支脚を置き、その部分で袖間は 50cmを測る。支脚前面で横方向に長くまとまった焼土塊を検出し（トーンで示す）、その上面に黄白色粘土が厚さ５cm程度存在していたことから、天井部がそのまま崩落した状態を示していると考えられる。

支脚から 33cmほど手前の床面直上で天地逆の土師器多孔式甑（８）を確認した。底部以外は完形で、かつ床面直上であることから、カマド廃絶時に意図的に置かれたものと推測される。また燃焼部内支脚右奥でも完形の土師器鉢（７）が出土し、同じくカマド廃絶時に意図的に置かれたものと推測される。燃焼部床面では明確な焼面及び硬化面は検出できなかった。

またカマドから壁沿いに粘土がＬ字状に延びる状況を確認した。当初は煙道部が住居隅まで延びるオンドル状煙道を持つカマドになると考え調査したが、燃焼部からＬ字形部分まで確実に煙道が延びないこと、断面であるＤ－Ｄ′の６はトンネル状の煙道部にみえたが、Ｃ－Ｃ′ではトンネル状の煙道にはならないことから、Ｄ－Ｄ′で確認できた６は粘土を積んだ単位と考えられ、オンドル状煙道を持つカマドではないと判断した。

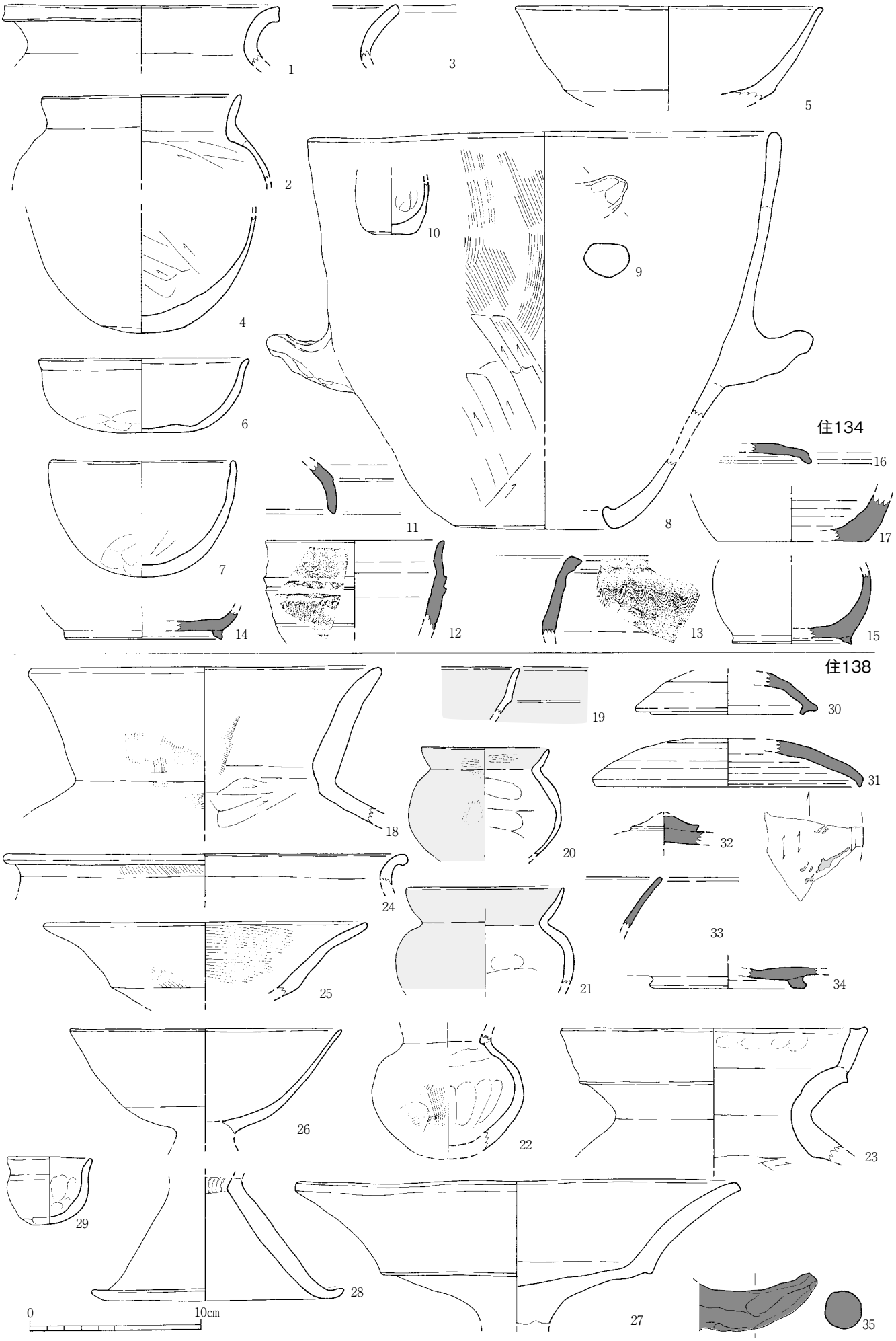
このような例は、本遺跡では当区 137 号住居跡やⅢ−Ａ・Ｂ区 23 号住居跡、Ⅱ区８・28 号住居跡などに類例があり、カマド廃絶時にカマドから住居右隅に向かって粘土で被覆するカマド封じの一種であると考えられる。この類別については、Ⅴ章３（p177－179）で検討しているので参照いただきたい。

文中写真 12　134 号住居跡カマド検出状況（東から）

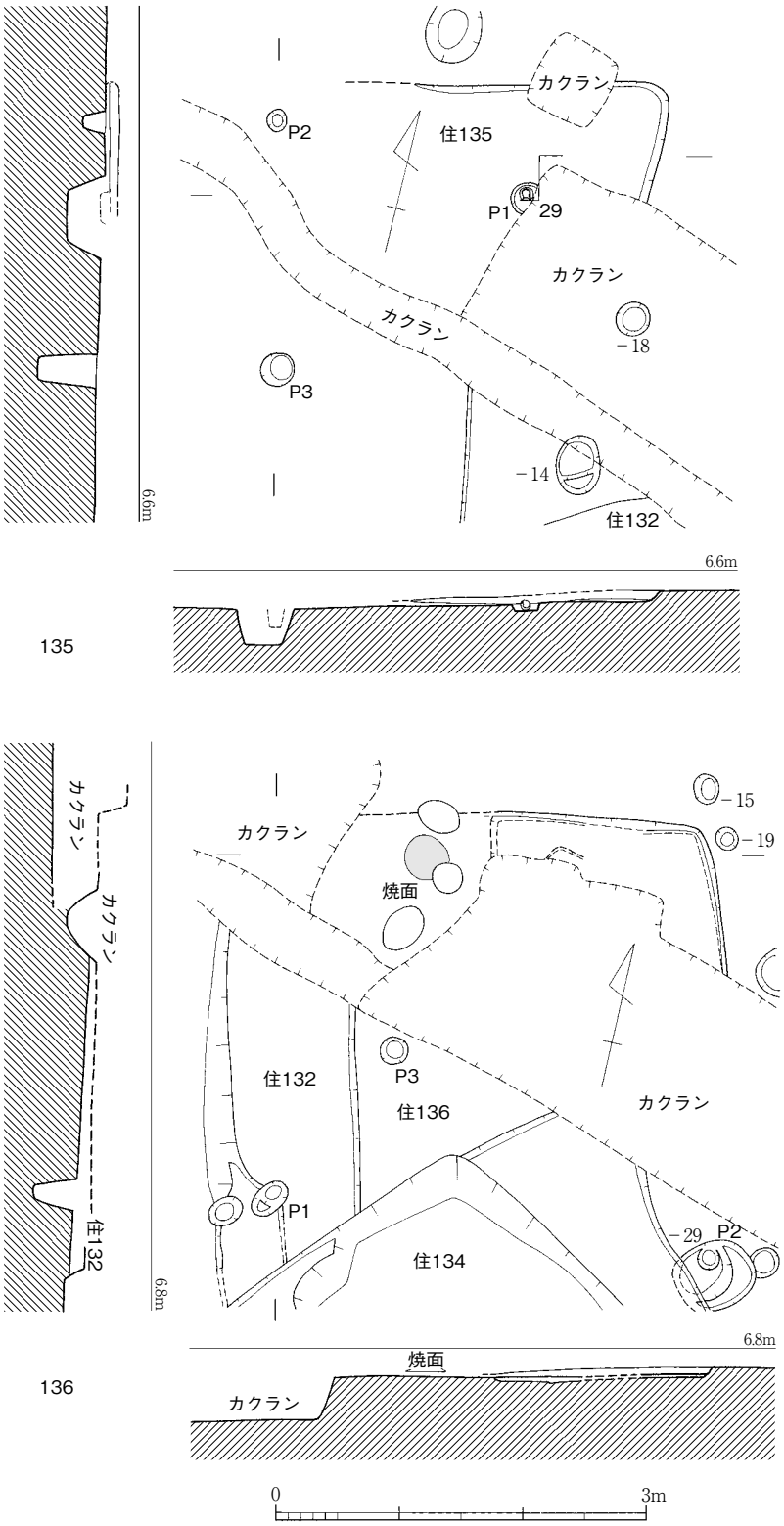
出土遺物（図版 20、第 30 図１～17）

１～４は土師器甕である。１～３は甕口縁部である。１の口縁端部はナデにより凹線状に窪む。器壁は厚い。２は直口気味のもので、内面頸部近くまでケズリを施す。外面には二次被熱痕が認められる。４の外面には黒斑あり。

５は屈折部に鈍い稜が認められる土師器高坏坏部である。６・７は土師器坏である。６は口縁端部が嘴状の椀状坏で、外面底部には手持ちヘラケズリを施す。外面には黒斑及び二次被熱



第 30 図　Ⅳ－B 区 134・138 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第 31 図　Ⅳ−Ｂ区 135・136 号竪穴住居跡実測図（1/60）

痕あり。7 は外面底部にはヘラケズリ痕、内面下位には工具痕が認められる。口縁部内面には丁寧なナデを行う。完形品で、口径 10.9 cm、器高 6.9cmを測る。

8 は土師器多孔式甑で、底部には径 1.8cmほどの孔を多数開けたと考えられるが、底部の残りが悪く、孔数は不明である。外面中位以下はハケのちケズリ状の工具ナデを施す。復元口径 28cmを測る。口縁部内外面には黒斑あり。9 はボタン状の把手である。どの器種に付けたものかは不明である。10 は平底の土師器手づくね土器で、黒斑あり。

11 は器壁が厚めの須恵器坏蓋で、天井部との境には鈍い稜が認められる。口縁内端部は工具によるナデを施した際の段がある。12 は須恵器坏で、ナデにより作り出した二条の突帯状の段の下には十条程度の櫛描波状文を密に施す。13 は須恵器壺口縁部で、四角形に肥厚させた口縁部下には四条の櫛描波状文を施す。口縁部内面にはナデによる凹凸あり。

14 ～ 17 は混入品。14 は高台付須恵器坏身。15 は高台付の須恵器小壺で、外面上位には薄く自然釉が付着する。16 は口縁端部が嘴状になる須恵器坏蓋。17 は小型の須恵器壺底部である。内面にはナデによる凹凸が顕著に残る。

出土土器及び住居形態から、古墳時代後期末に属すると考えられる（大庭）。

135 号竪穴住居跡（第 31 図）

調査区の南西に位置し、132 号住居跡と近く、切り合いを持つ可能性があるが、出土遺物から 132 号住居跡を切る。

住居として検出できたのは、高さ５㎝程度の北東部分の壁とピット３基のみである。規模は東西3.3ｍ以上、南北2.5ｍ以上の隅丸方形住居跡である。主軸方位は、G.N.より13°西に傾く。Ｐ１から土師器無頸壺（29）が出土し、Ｐ２・３は位置から主柱穴となると考えられ、Ｐ１を含めて４本柱の住居跡となるか。住居埋土は､灰褐色粘質土に橙褐色粘質土（地山）が30％混じる土である。

出土遺物（図版20、第23図29）

出土遺物で図示できたものは、Ｐ１から出土した29のみ。29はほぼ完形に近い土師器無頸壺で、口径８㎝、器高11.3㎝を測る。内面頸部までケズリを施す。外面は二次被熱痕が顕著で、黒斑もある。内面胴部上位にはコゲが明瞭に残る。

住居形態及び出土遺物から、古墳時代前期前半に属すると考えられる（大庭）。

136号竪穴住居跡（第31図）

調査区の南西に位置し、134号住居跡に切られ、132号住居跡を切る。住居として検出できたのは、高さ５㎝ほどの北東壁の一部、床面上でカマド焼面と思われる径35㎝程度の弱い焼面及びピット３基である。規模はカマド焼面が北壁中央に位置していたとすると、東西4.6ｍ程度、南北は3.3ｍ以上の隅丸方形住居跡となるか。主軸方位は、G.N.より12°西に傾く。

Ｐ１・２は深さと位置から主柱穴の可能性が高く、北側の主柱穴列は不明であるが、おそらく４本柱の住居跡になると考えられる。住居埋土は灰褐色粘質土である。

床下掘り込みは住居北側で確認した。

出土遺物（第23図30）

出土遺物で図示できたものは、30のみ。30は土師器小型甕口縁部である。

住居形態及び出土遺物から、古墳時代後期に属すると考えられる（大庭）。

137号竪穴住居跡（巻頭図版３、図版８、第32図）

調査区の中央に位置し、142号住居跡を切り、138Ｂ号住居跡とは接するため、切り合い関係を持つ可能性が高いが、出土遺物から当住居跡が新しい。住居北西壁は少し掘りすぎてしまったが、規模は東西4.35ｍ×南北4.25ｍ、深さ最大0.38ｍのほぼ正方形住居である。主軸方位は、G.N.より20°西に傾く。

北壁ほぼ中央にカマドを付設し、西壁には深さ５㎝程度の壁周溝を巡らす。住居床面では多数のピットを検出し、Ｐ１～４が位置と深さから主柱穴となる４本柱の住居跡である。

文中写真13　137号住居跡出土状況①（南から）

文中写真14　137号住居跡出土状況②（西から）

文中写真 15　137 号住居跡カマド断ち割り①
C－C′（南東から）

文中写真 16　137 号住居跡カマド断ち割り②
j－j′（南西から）

また住居南西床面直上で多数の土師器が出土したが、床面直上でかつ南西隅に集中していることから、居住時にこの空間がカマド右側と並び、土器などの物置であったことを示す可能性がある。住居中央やや南寄りの床直上で白色粘土塊を検出した。住居埋土はレンズ状堆積を示し、住居床下掘り込みは４ヶ所確認した。

住居周囲で住居跡外ピット列を検出し、当住居の補助柱であった可能性があるため、深さを示している。

埋土下層から石包丁１点（第 62 図４）、砥石１点（第 62 図 11）が出土した。

カマド（巻頭図版３、図版８、第 33 図）

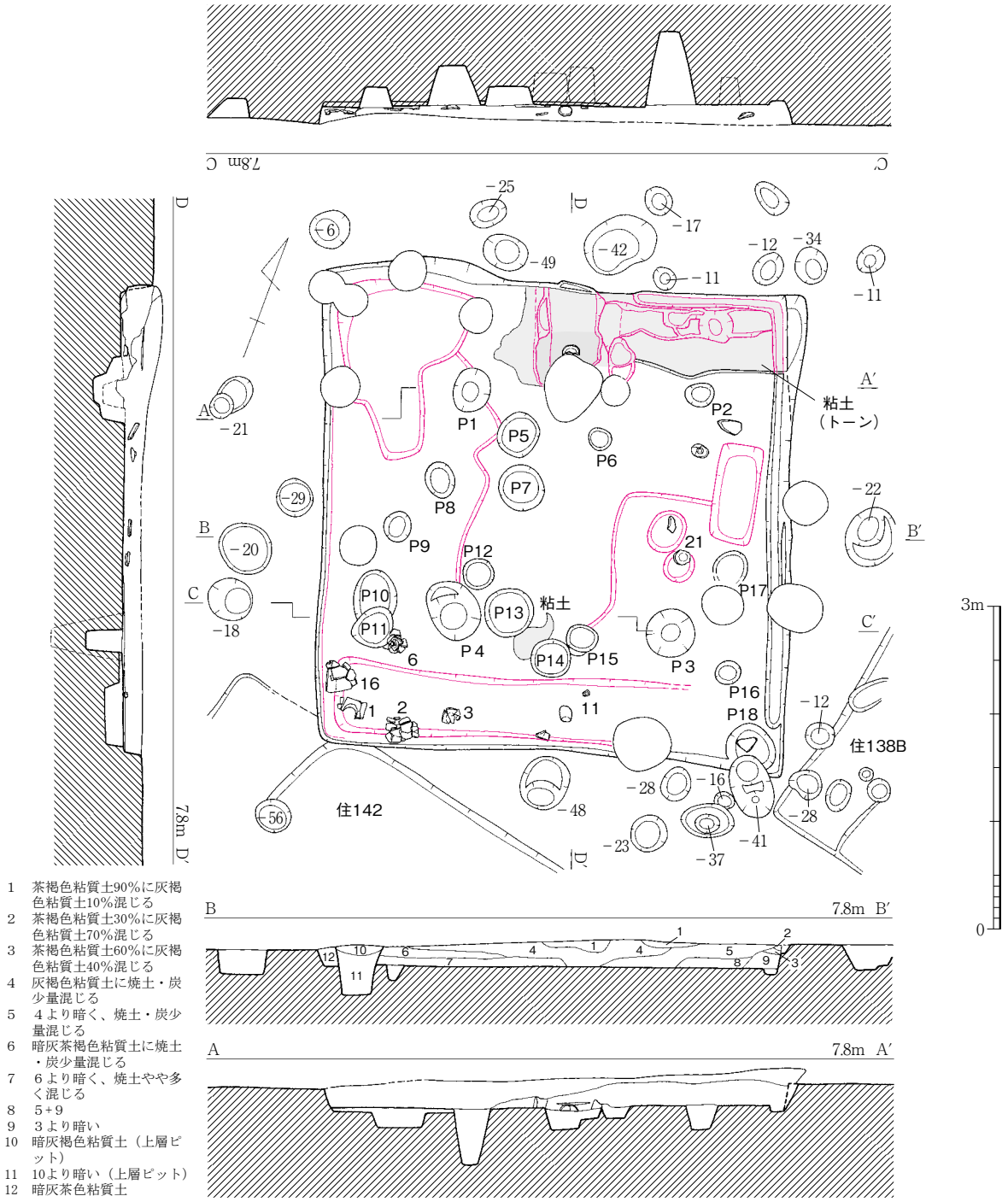
検出当初は灰黄色粘土が住居北東に広く広がっていたため、どの部分がカマドであるか確認するのに非常に手間取った。カマド自体は北壁のほぼ中央にあり、燃焼部及び袖の先端部は上層ピットとカマド廃棄行為により大きく壊されるが、かろうじて基底部が残っていた。黄白色粘土で構築された両袖は、壁から直線的に 95 cm程度突出する。

燃焼部奥壁から 50cm手前に天地逆にした、土師器高坏（10）を転用した支脚があり、この支脚部分で袖間は 42cmを測る。支脚周囲には弱い焼面が広がるが（トーンで示す）、硬化面はより手前の上層ピットで壊された部分に存在した可能性がある。

カマドの袖自体の高さは手前で 10cm以下、奥で５cm以下しか残存していない。ちょうどこのカマド袖上面レベルで土師器高坏坏部（７）及び土師器甕が灰黄色粘土に覆われた状態で出土したことから、カマドをこのレベルまで壊し、その後灰黄色粘土で覆う行為を行っていたと予想される。特にカマド袖奥側は袖痕跡がほとんど残らないほど徹底的に壊している。

カマドを覆う灰黄色粘土は住居北東隅まで壁沿いは 30cmほどと厚く、手前にかけて傾斜するように薄くなる。その粘土下で幅 30cm、深さ３cm程度の浅い溝状の掘り込みを確認した。この溝状掘り込みを粘土で被覆していること、また掘り込み内に焼土及び炭も混じっていないことから、L 字状カマドの煙道ではないと判断した。なお、この掘り込みはカマド廃絶段階で床面上に存在したのは確実であるが、その機能は不明である。

以上のことから、カマド廃絶時にはまずカマドの袖をほとんど壊し、その上を粘土で被覆し、カマド封じ的な行為を行っていると推測できるが、なぜ住居北東隅まで粘土で覆っているのか、また粘土下の掘り込みの役割は不明である。このカマド封じ的な行為についての検討は、Ⅴ－３（p177－179）で行っているのでご覧いただきたい。

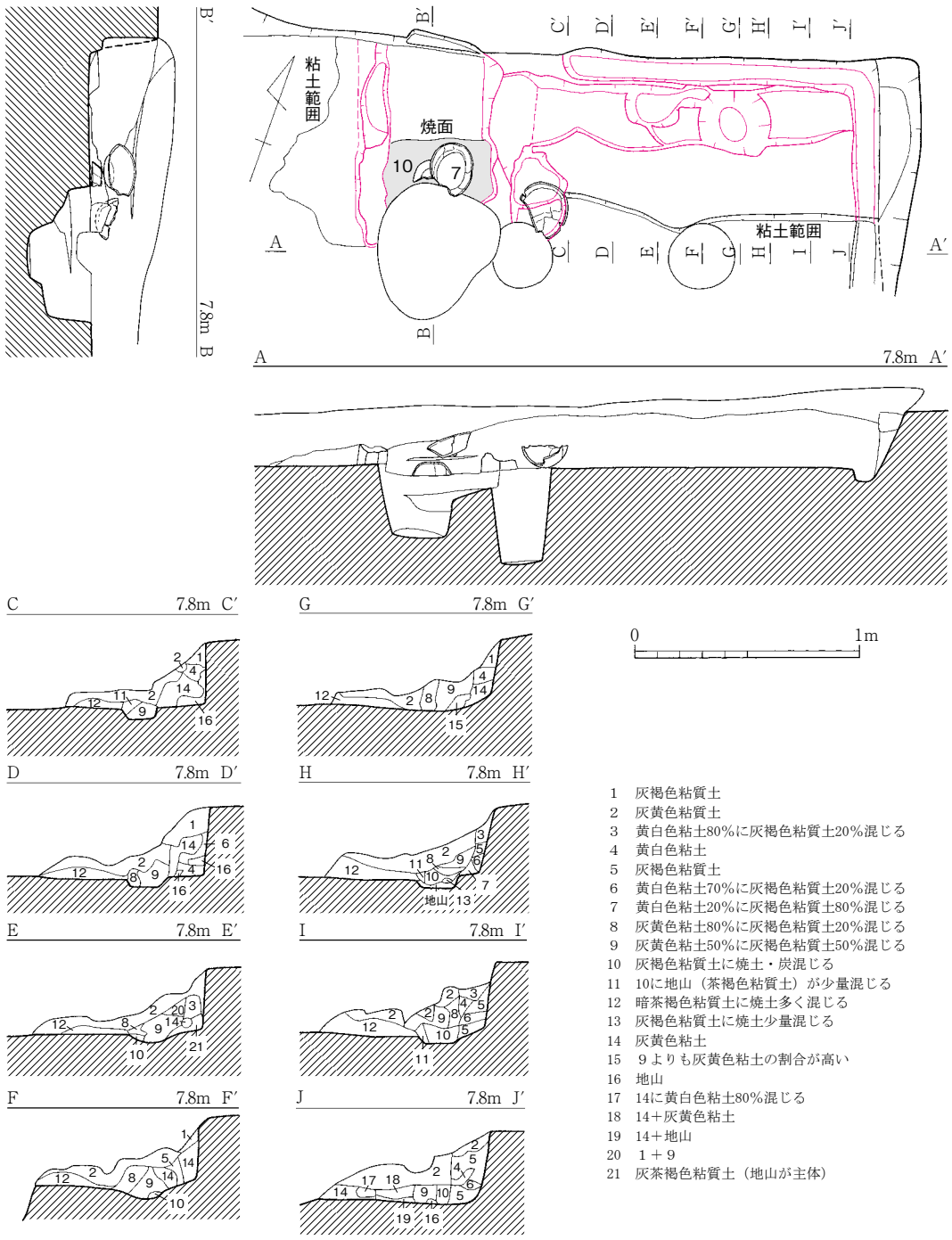


第 32 図　Ⅳ－B 区 137 号竪穴住居跡実測図（1/60）

出土遺物（図版 21、第 34 図）

１は肩が張る胴部で、口縁部は強く内湾しながら直立し、口縁端部は強く水平に折り曲げた、「S」字状を呈する珍しい形態の土師器壺である。復元口径は 14.7cmを測り、胎土は精良である。２～６は土師器甕で、３～５の外面には二次被熱痕、２・３にはススが付着する。２は長胴に逆「く」の字状に短く折れ曲がる口縁部が付く。胴部外面はハケを施しているが、摩滅のため残りが悪い。３は張りのない長胴の胴部に長めに外反する口縁部が付く。４は頸部の締まりがない、素口縁のもの。５の内面にはコゲが付着する。６の口縁端部はナデにより凹線状に窪み、胴部外面はハケのち丁寧なナデを施すが、頸部付近にはハケ工具痕が残る。内面は頸部までケズリを施す。

７～ 11 は土師器高坏である。７は口径 22.6cmを測る大型品で、ほぼ水平の坏底部から長い口縁

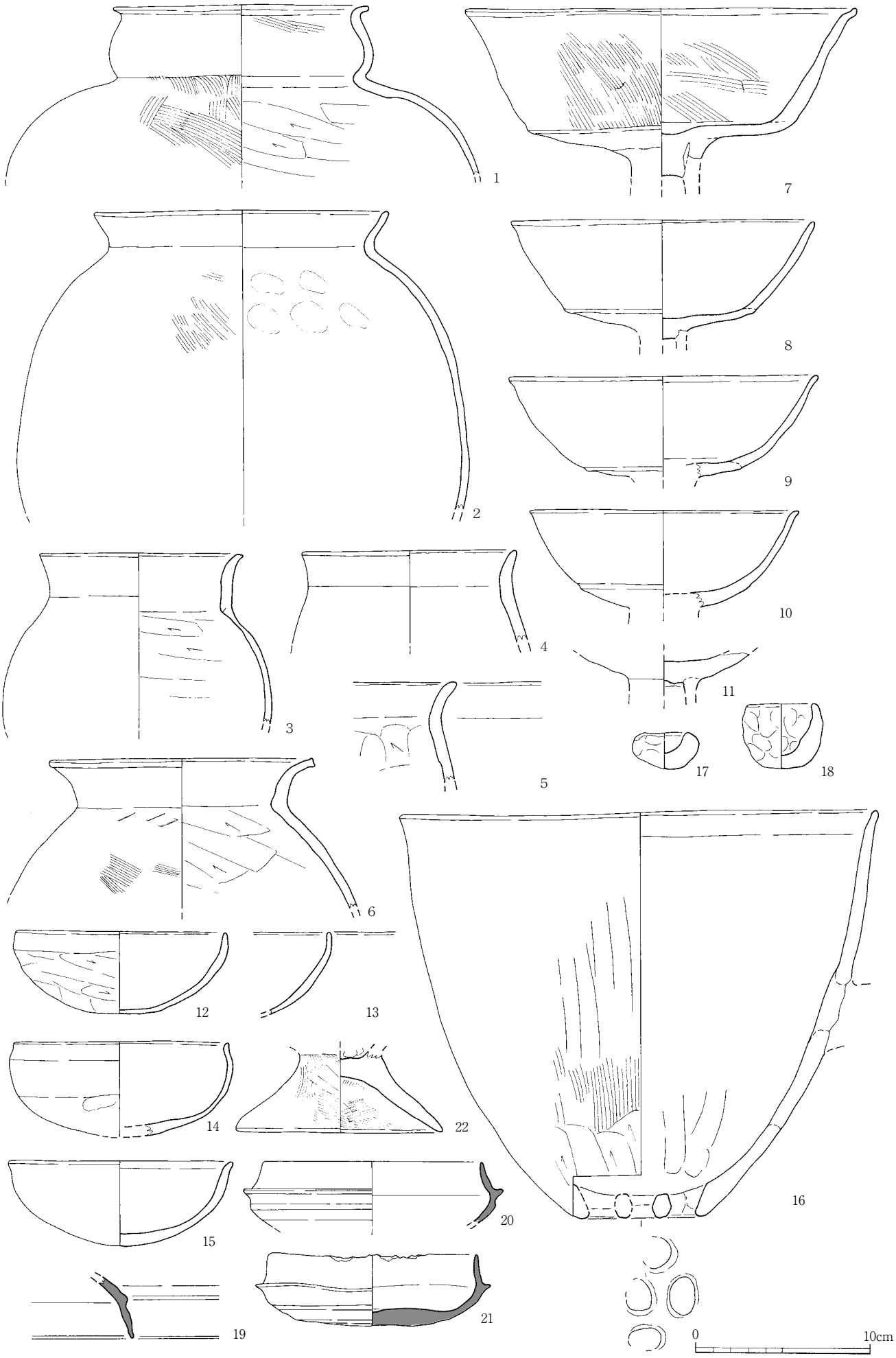


第 33 図　Ⅳ－Ｂ区 137 号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

部が緩やかに外反しながら立ち上がる、深さのある坏部。口縁端部は上方につまみ出し、内外面ともハケのち横ナデを基調とする。脚部との接合は充填法である。

８～10 は椀状の坏部で、いずれも口縁端部をわずかに外反させ、屈折部には突帯状の鈍い稜が認められる。またいずれも外面は二次被熱を受けており、器表が荒れ、調整は不明である。８は黒斑あり。11 の坏部割れ口は擬口縁で、坏部内面には工具絞り痕が残る。

12～15 は椀状の土師器坏である。12・14 の外面下位には手持ちヘラケズリを施す。12 は口縁部近くまで手持ちヘラケズリを施すもので、外面には黒斑あり。復元口径 12cmを測る。14 は口縁部が直立気味で、端部のみ短く外反させるもの。胎土は精良である。15 も口縁端部のみ短く外反させるもので、器表が荒れ、調整不明である。



第 34 図　Ⅳ－B 区 137 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

16は土師器多孔式甑で、底部の孔は６つで復元できる。復元口径27.3cm、器高は23.5cmである。把手は外れているが、把手を挿入することにより体部と接合する。外面は全面をハケのち下位はケズリ、上位は縦ナデ、口縁部は横ナデを施す。外面には黒斑あり。17・18は手づくね土器である。17は完形に近いもので、口径2.7cm、器高2.1cmを測る。

19は天井部との境に鈍い稜を持つ須恵器坏蓋である。天井部は稜近くまで回転ヘラケズリを施す。焼成は甘い。20・21は須恵器坏身である。20の底部は回転ヘラケズリを受け部近くまで施す。外面受け部以下は自然釉が厚くかかる。小片のため、径に自信がない。また二次被熱痕あり。21は口縁端部を打ち欠きされたもので、歪みが顕著である。底部には回転ヘラケズリを施すが、底部中央のみその後ナデを施す。復元口径は12cmである。

出土遺物から、古墳時代後期末に属すると考えられる（大庭）。

138 A号竪穴住居跡（図版９、第35図）

調査区中央の東寄りに位置し、139号住居跡、47号土坑に切られ、138 B号住居跡を切る。調査当初は当住居跡の存在に気付かず、138 A・B号住居跡を一つの住居跡として掘削したが、当住居南でカマドと考えられる焼面、138 B号住居跡に伴うベッド状遺構、主柱穴、主に２時期に分かれる出土土器から、新旧２つの住居が切り合うと判断した。

規模は東西2.86 m×南北4.06 m、深さは先述のとおり住居壁は掘り失い、ほとんど下端しか検出していないが、ちょうど上層ピットのベルト部分にかかっていた南東隅で壁残存高0.15 mを測る、南北に長い長方形住居跡である。方位はG.N.より157.5°西に傾く。

当区では唯一の、南壁ほぼ中央にカマドを付設する南カマドである。138 B号住居跡とは床面がほぼ同じレベルであるため、138 A・B号住居跡に伴うピットを同一面で検出した。位置と深さからＰ１～３が主柱穴となる可能性が高いが、北西隅主柱穴は検出できなかった。住居埋土は灰黄褐色粘質土に焼土・炭が少量混じる。

カマド付近から鉄片１点（第64図22）が出土し、当住居に伴うと考えられる。

カマド（図版９、第35図）

住居跡のほぼ南壁中央で検出したカマドで、径30cmの弱い焼面を検出したが、袖はカマド廃絶時に壊されたためか痕跡も全く検出できなかった。カマド北側は139号住居跡により壊される。

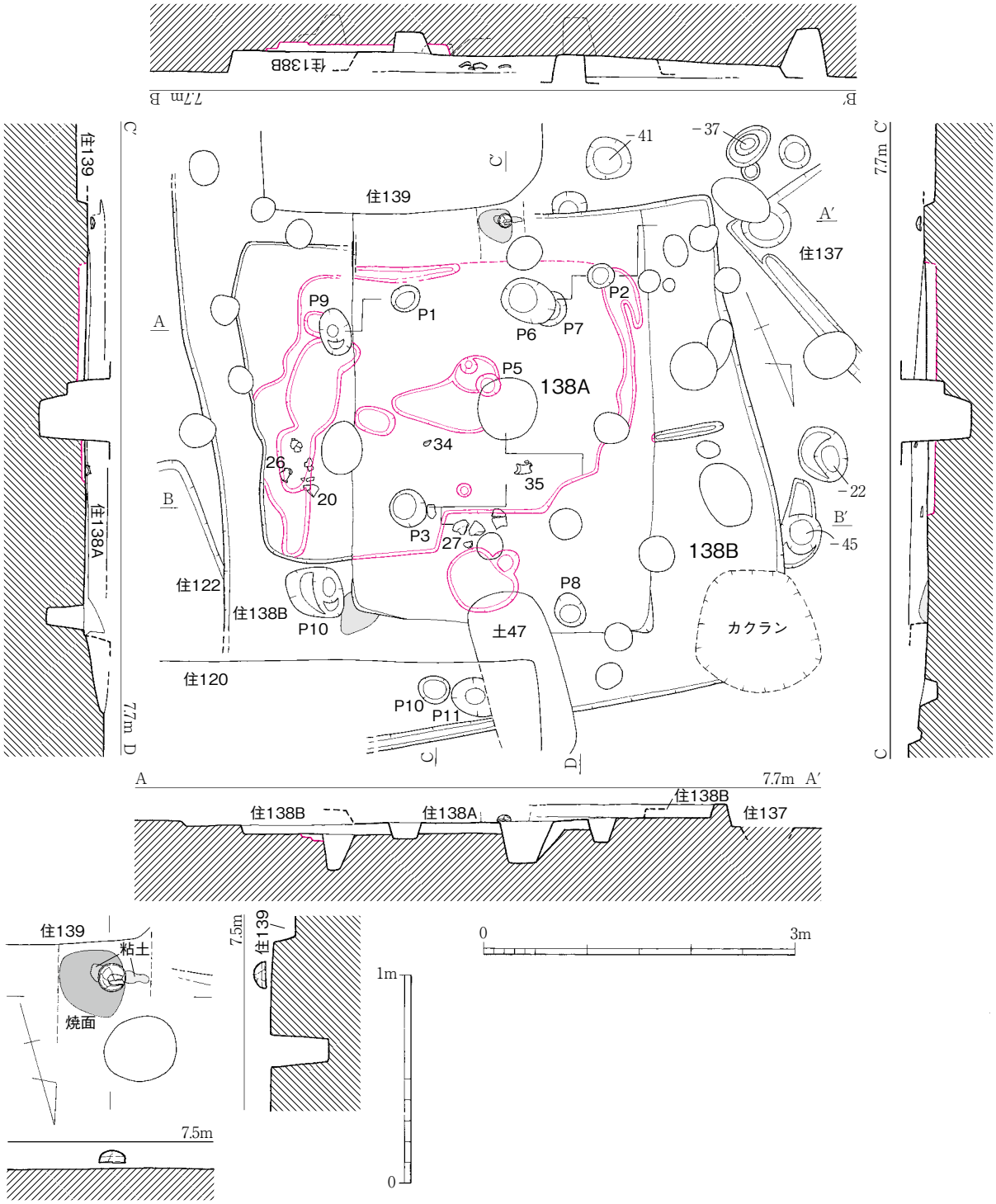
カマド内に落ち込んだカマド天井部粘土（薄いトーン）と硬化面及び焼面（濃いトーン）の位置から、袖間は44cm程度、袖も直線的に突出する可能性が高い。カマド支脚は土師器高坏を天地逆にして転用するが、この高坏は整理段階で行方不明となり、今回報告できていない。

文中写真17　138 A号住居跡カマド（東から）

138A・B号出土遺物（図版20、第30図18～35）

先述したように、調査最終段階で重複する２つの住居跡と認識できたため、出土遺物は混ざってしまった。そのため、138 A・B号住居跡出土遺物として合わせて報告する。

18は器壁が厚い土師器直口壺である。口縁部内外面にはハケのち横ナデを施す。内面は頸部



第 35 図　Ⅳ－Ｂ区 138 Ａ・Ｂ号竪穴住居跡・138 Ａ号カマド実測図（1/60、1/30）

までヘラケズリを施す。外面には黒斑あり。

19 ～ 22 は土師器小型丸底壺で、19 ～ 21 の外面及び口縁部内面にはスリップを施す。19 は二重口縁壺口縁部。20 は外面及び口縁部内面はハケのちミガキを施す。内面胴部中位以下にケズリを行う。20・21 は内湾する口縁部である。20 の外面はハケのちミガキ、内面胴部下位はケズリ、その上にはナデを施す。21・22 の胴部内面下位にはナデの稜が明瞭に残る。21 の外面はナデ調整。22 は頸部の締まるもので、外面胴部下位は不定方向のハケ、胴部上位はハケのちナデを施す。外面には黒斑あり。23 は器壁の厚い二重口縁壺で、口縁端部はナデによる面取りにより窪む。口縁

部外面は布による横ナデを施す。内面は頸部近くまでヘラケズリを行う。24 は口縁端部を丸く折り曲げた土師器甕口縁部で、小片のため復元径に不安が残る。胎土は精良。

25 ～ 28 は土師器高坏である。25 の屈折部は鈍い稜で、外面はハケのち横ナデ、内面には横ハケが明瞭に残る。26 は深さのある坏部で、付加法で脚部と接合させる。外面は二次被熱が顕著なため、剥離が進む。大型品である 27 は屈折部が突帯状に突出し、口縁部は強く開くもの。器壁は厚く、復元口径 26.3㎝を測る。内外面ナデ調整である。28 は「ハ」の字状に開く脚部で、脚裾部を上に屈曲させるもの。内面上位には脚部と接合しやすくするためにハケ工具で刻目を施す（図版 20）。29 はほぼ完形品の口縁部が少し外反する土師器手づくね土器。口径５㎝、器高４㎝を測る。

30 はかえりのある、小型の須恵器坏蓋である。回転ナデのみ施す外面には厚く自然釉が付着する。31 は口縁端部が若干嘴状になる須恵器坏蓋で、器壁は厚めである。天井部の一部のみ回転ヘラケズリを施す。内面には墨痕及び滑らかな磨面が確認できることから、後に転用硯として使用されたものと考えられる。32 は低平な宝珠つまみのある須恵器坏蓋。焼け歪みは顕著である。33 は須恵器坏か高坏の口縁部である。34 は高台付須恵器坏身で、高台端部には重ね焼き痕が認められる。35 は珍しい須恵質の把手で、焼成はやや甘い。なお、須恵器はいずれも混入品である。

出土遺物の時期は、古墳時代中期前半が 20 ～ 23・25・27・28、古墳時代後期後半が 18・24・26、古代が 30 ～ 34 の３時期に分かれる。現在は行方不明であるものの、カマドの支脚として転用した土師器高坏は古墳時代後期後半であることから、138 Ａ号住居跡は古墳時代後期後半、138 Ｂ号住居跡はベッド状遺構を付設するため、古墳時代中期前半に属すると考えられる（大庭）。

138 Ｂ号竪穴住居跡（図版９、第 35 図）

調査区中央の東寄りに位置し、120・138 Ａ・139 号住居跡、47 号土坑に切られ、122 号住居跡を切る。先述したように、調査当初は 138 Ａ・Ｂ号住居跡を一つの住居として掘削したが、調査最終段階で２つの住居が切り合っていることを確認した。

規模は東西5.4ｍ×南北4.8ｍ、深さ0.2ｍのやや平面形が歪む方形住居跡である。住居南東隅は削平のため、壁を検出できなかった。赤線は当住居跡竪穴部の可能性がある掘り込みで、竪穴部とすると４方向にベッド状遺構が付く構造となるが、東・南側のベッド状遺構の幅は狭くなり、また後述する主柱穴と考えられるＰ８・10がベッド状遺構内に存在することになり、竪穴部として位置づけるには不安が残る。竪穴部西と南壁の一部には深さ３㎝ほどの浅い壁周溝が巡る。

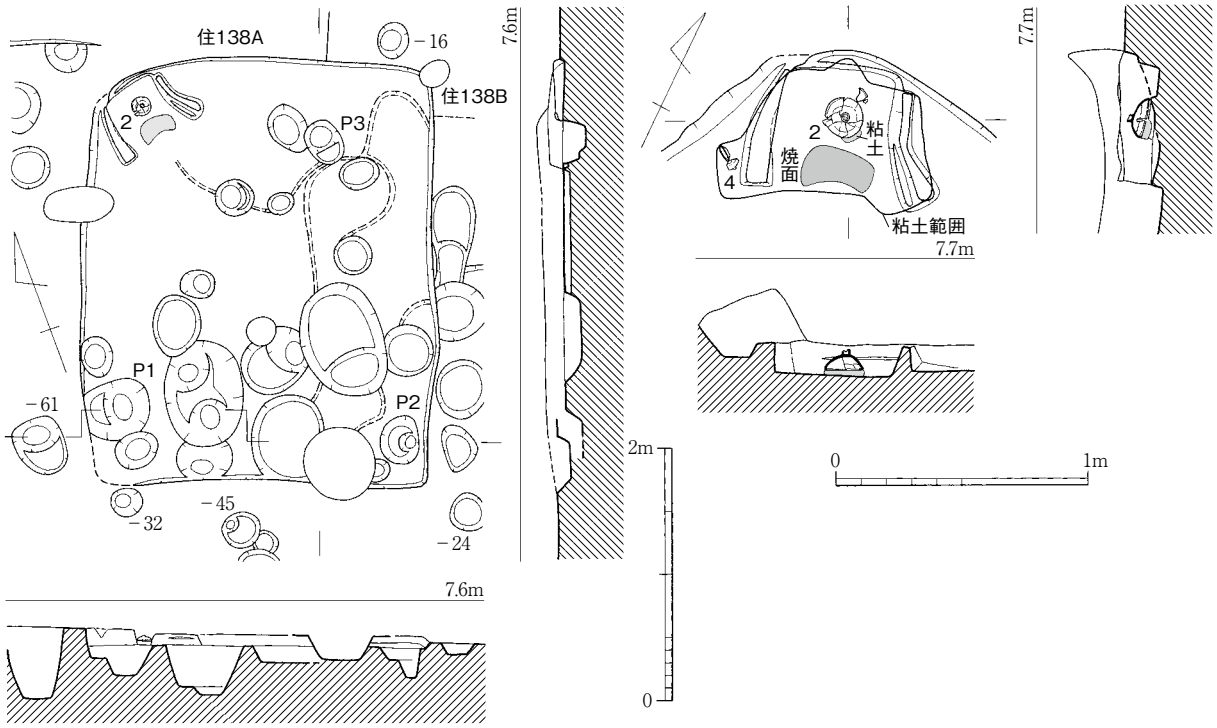
138 Ａ号住居跡とは床面レベルがほぼ同じであり、両住居跡に伴うピットを同一面で検出したが、位置と深さからＰ６・８～ 10 が主柱穴となる４本柱の住居跡になるか。中央のＰ５には炭が少量混じることから炉と考えられる。ベッド状遺構では、西側中央で住居内仕切り溝と考えらえる深さ５㎝ほどの細い溝と北東部で弱い焼面を検出した。住居埋土は暗茶褐色粘質土である。

住居周囲には住居外ピットが並び、当住居の補助柱の可能性があるため、深さを示す（大庭）。

139 号竪穴住居跡（図版９、第 36 図）

調査区中央の東寄りに位置し、138 Ａ・Ｂ号住居跡を切る。規模は東西 2.85 ｍ×南北 3.35 ｍ、深さ最大 0.15 ｍを測る、南北に長い小型長方形住居跡である。主軸方位はＧ.Ｎ.より 20° 東に傾く。

当区では唯一の住居北西隅にカマドを付設する。床面では多数のピット検出し、位置・深さから



第 36 図　Ⅳ−Ｂ区 139 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60、1/30）

Ｐ１・２が南側の主柱穴列になると思われるが、北側の主柱穴についてはＰ３が可能性はあるが、北西部の主柱穴は不明である。埋土は灰黄褐色粘質土である。

住居周囲には住居外ピットが並び、当住居の補助柱の可能性があるため、深さを示した。

カマド（図版 10、第 36 図）

住居跡の北西隅に位置する隅カマドで、カマド全体を灰黄色粘土で被覆した状態で検出した。カマド両袖と燃焼部をちょうど被覆する粘土は、カマド燃焼部で厚さ８㎝を測り、残存する両袖レベルと同じ高さで施す。なお、カマド燃焼部埋土は灰褐色粘質土に焼土・炭が混じる土である。

明灰黄色粘土で構築した両袖は、壁から 47㎝程度直線的に突出させる。北西隅壁から 17㎝手前で土師器高坏を天地逆にして転用した支脚（２）があり、厚さ２㎝の灰褐色粘質土（薄いトーン）で下を固定していた。その部分で袖間は 50㎝である。またその手前で 28 × 14㎝の楕円形の弱い焼面（濃いトーン）を確認した。

出土遺物（図版 21、第 38 図１～８）

１・２は土師器高坏である。１は直立気味の口縁部から端部が短く外反するもの。内面にはミガキが残るため、外面にもミガキを施したと考えられるが、外面は二次被熱のため、器表が荒れ、調整は残っていない。２はカマド支脚として転用されたため、二次被熱により器表が荒れ、調整は不明である。復元口径は 14.3㎝を測る。胎土は精良である。

３～５は須恵器坏蓋である。３・４は天井部との境に鈍い稜を持つ。４の口縁端部は嘴状で、天井部には回転ヘラケズリを施すが、中央部にはヘラ切り痕が残る。５は器壁が厚く、端部を丸く収めるもの。混入品。６・７は須恵器高台付坏身である。混入品。８は土師器高台付坏である。当住居上面出土で、混入品。

出土遺物から、古墳時代後期後半に属すると考えられる（大庭）。

140 号竪穴住居跡（巻頭図版４、図版 10・11、第 37 図）

調査区中央の南寄りに位置し、36 号土坑、SX01 に切られ、141 ～ 143 号住居跡を切る。規模は東西 5.65 m×南北 5.6 m、斜面に位置するため、深さは北壁で 47㎝、南壁で３㎝を測る正方形住居跡である。南東隅は削平され、下端のみ検出できた。主軸方位はG.N.より 12° 西に傾く。

北壁ほぼ中央にカマドを付設し、南東及び南西の一部以外は深さ５㎝程度の壁周溝を巡らす。床面では多数のピットを検出したが、位置・深さからＰ１・３・４・５が主柱穴となる４本柱の住居跡である。なお、主柱穴と想定したピット周辺のＰ２・６・７～ 11 は主柱穴となりうるピットであり、住居の建て替えを示す可能性がある。

住居内出土土器のうち、土師器椀状坏（17）と土師器甕（２）が床面直上出土で、土師器高坏坏部（５）は南側の壁周溝内にちょうど置いたような状態で出土した。埋土は灰黄褐色粘質土である。住居床下掘り込みは６ヶ所確認した。

埋土から碧玉製管玉１点（第 62 図３）、埋土下層から砥石１点（第 62 図８）が出土した。

カマド（巻頭図版４、図版 11、第 37 図）

住居跡のほぼ北壁中央で検出したカマドで、左袖は壁から 80㎝、右袖は壁から 85㎝、直線的に突出する。カマド燃焼部奥壁部分で熱を受けて明茶褐色に変色したカマド壁体の一部を検出し（濃いトーン）、カマド奥壁部分ではカマド本体の高さが 20㎝程度であったことがわかる。また両袖とも高さ 20㎝程度残ることから、ドーム形天井部であったとしても袖の残りも良いものである。両袖とも灰白色粘土で構築する。

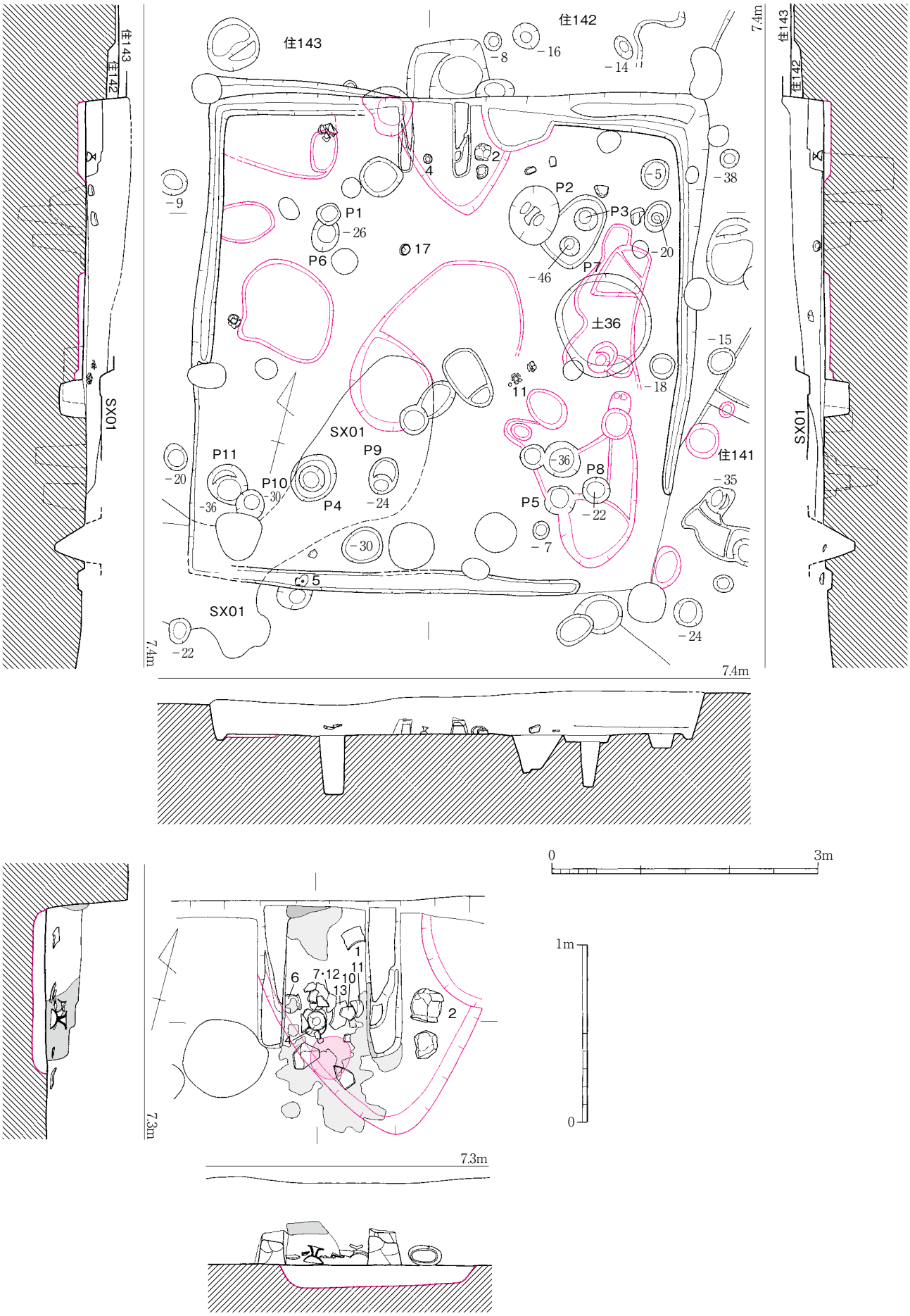
燃焼部内にはカマド天井部を構成していた壁体が落ち込む（薄いトーン）。その壁体下では土師器高坏６個体分がまとまって出土した。カマド中心軸からやや西にずれた位置に土師器高坏を天地逆にして転用した支脚（４）を確認した。この支脚は壁から 55㎝の位置にあり、その部分での袖間は 46㎝を測る。支脚前面で 25㎝程度の円形を呈する硬化面（赤トーン）を確認した。また支脚部分の両袖壁は非常に良く焼けており､赤変する。カマド右袖外の床面直上で完形の土師器甕（２）が出土した。またカマド下層掘り込みを確認した。

出土遺物（図版 21、第 39 図）

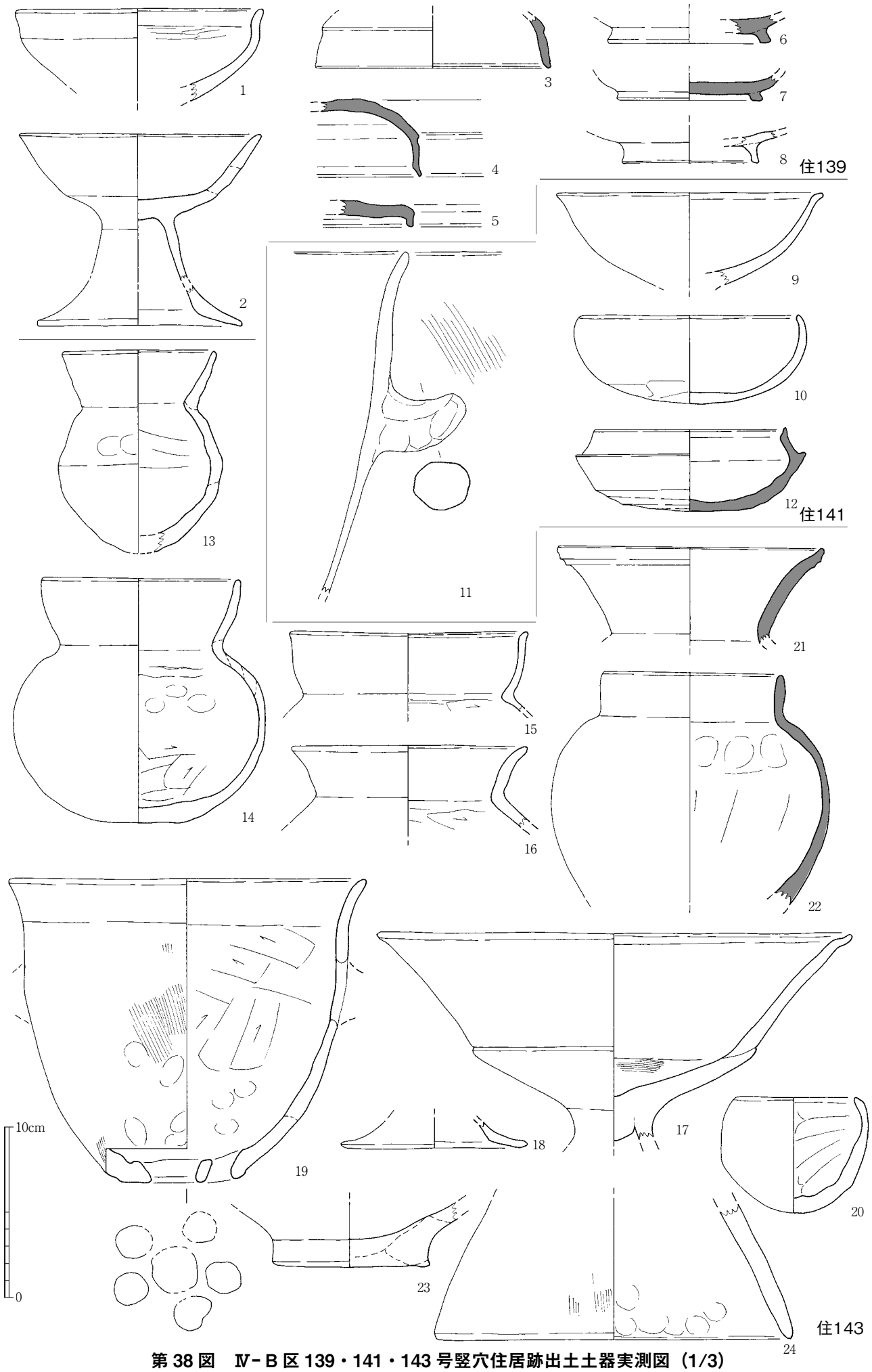
１は逆「ハ」の字状に広がる土師器直口壺である。外面には黒斑あり。２は底部以外は完形に近い土師器甕で、口径 13.6㎝を測る。外面は強い二次被熱を受け、器表がボロボロである。内面には粘土継ぎ目痕が残り、底部にはコゲが付着する。３は土師器甕である。口縁部内外面にはハケのち横ナデを施す。内面は頸部までケズリを施す。外面にはススが付着する。

４～ 14 は土師器高坏である。４～６は屈折部が鈍い稜になるもの。４はカマド支脚として転用された完形品で、口径 15.7㎝、底径 10.8㎝、器高 11.5㎝を測る。坏部は内外面とも横ナデかナデで、脚柱部外面は縦ナデ、内面はケズリを施す。外面は強い二次被熱を受け、口縁部には黒斑あり。５は内外面剥離が顕著で、調整は不明である。脚部内面には絞り痕が残る。６の内面は器表の荒れが顕著である。内外面ともスリップを塗布する。外面には黒斑あり。７の屈折部は鈍い突帯状の稜である。器表は荒れており、調整は不明。８・９は脚裾部がほぼ水平の脚部である。10・11 は脚裾部が内湾気味のもの。いずれも器表の荒れにより調整は不明。11 の外面には黒斑あり。

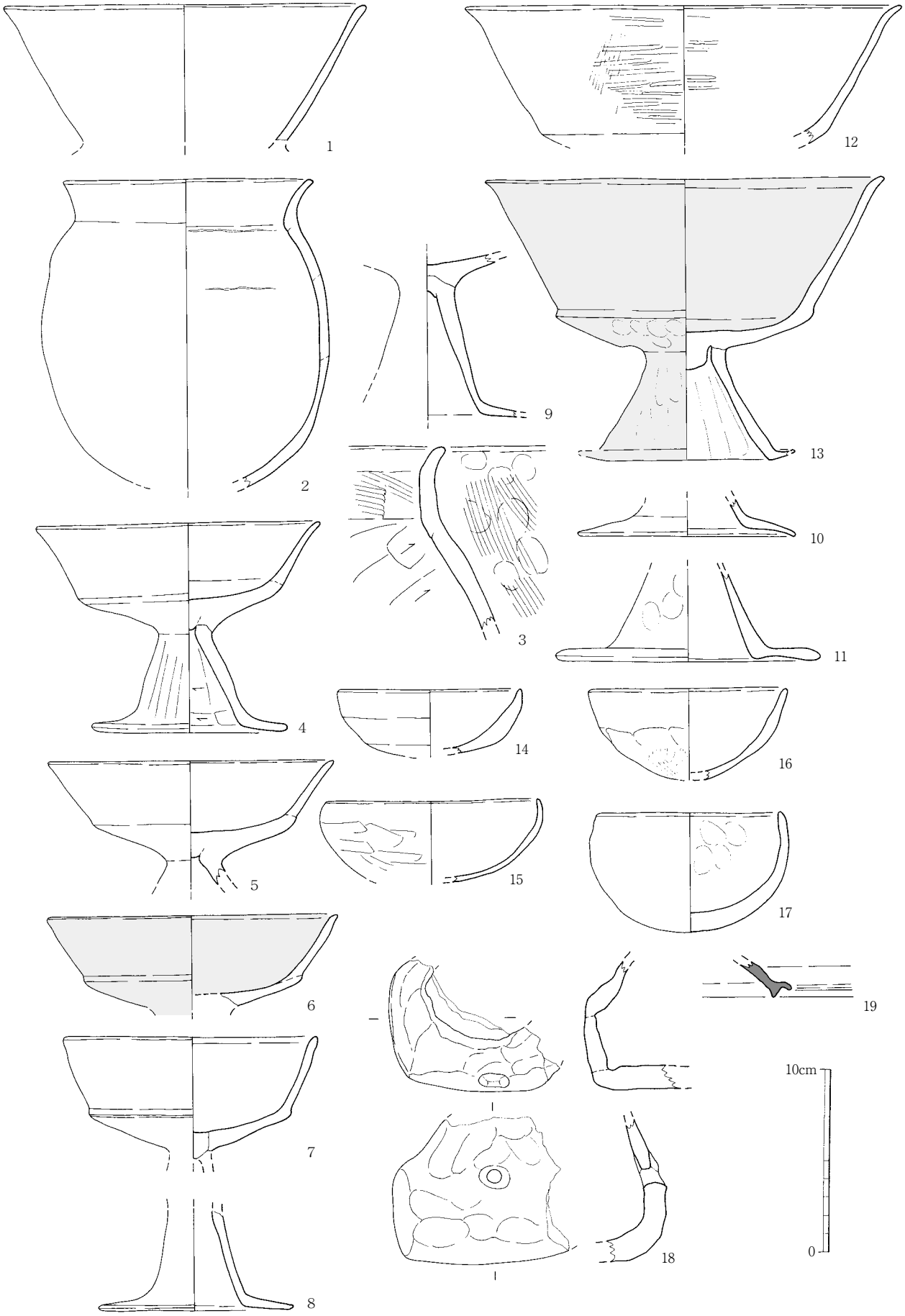
12・13 は大型品で、いずれも水平の坏底部に長い口縁部が付き、口縁端部は短く外反する。12 の外面はハケのち横ミガキ、内面には横ミガキを施す。外面には黒斑あり。13 は口径 22㎝、器高



第 37 図　Ⅳ－B 区 140 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60、1/30）



第 38 図　Ⅳ－B 区 139・141・143 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第 39 図　Ⅳ－Ｂ区 140 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

15.2cmに復元されるもので、坏部に比べ、脚部が低く小さいもの。脚裾部は上に跳ね上がり、脚柱部外面には縦ナデの稜が、内面にはケズリが残る。外面全面及び坏部内面にはスリップを塗布し、坏部内面にはスス、坏部外面には二次被熱痕が認められる。14 は浅い土師器高坏坏部か。外面には二次被熱痕あり。

15 ～ 17 は土師器椀状坏。15・16 はいずれも外面中位まで手持ちヘラケズリを施す。16 はケズリ後一部にハケを施す。外面には黒班あり。17 は丸い鉢状のもので、外面には黒班あり。歪みのある完形品で、口径 9.8 ～ 10.5cm、器高 6.5cmを測る。

18 は円筒状の胴部に１ヶ所焼成前穿孔し、口縁部がそのまま開く特異な器形の土師器。須恵器樽形甕に近い形状になるか。円筒状の胴部は両端を円盤状の粘土で塞ぐ（図版 21）。内外面ともナデ調整で、指押さえ痕が残る。19 はかえりのある須恵器坏蓋である。混入品。

出土遺物及び切り合い関係から、古墳時代後期後半に属すると考えられる（大庭）。

141 号竪穴住居跡（図版 11・12、第 40 図）

調査区の南東に位置し、140 号住居跡、48 号土坑に切られる。斜面に位置するため南壁は削平を受け残っていないが、床下掘り込みの存在から、規模は東西 5.75 ｍ×南北５ｍ程度のやや南北に長い方形住居跡になると思われる。主軸方位はＧ.Ｎ.より 77° 西に傾く。

西壁ほぼ中央にカマドを付設し、東壁の一部で深さ４cmの壁周溝を検出した。床面には多数の中世ピットが切り込むが、位置・深さからＰ１～３が主柱穴の４本柱の住居跡である。なお、Ｐ１内で土師器甑片を確認したが、柱を抜いた後に体部片を置き、その後把手が付いた口縁部片を把手の位置をずらして重ねているという特徴的な埋納方法を確認した。このＰ１の埋土は暗茶褐色粘質土である。カマド手前で出土した土師器椀状坏（10）は床面直上にあったものと考えられる。住居埋土は灰黄褐色粘質土で、住居西半分と南東側で床下掘り込みを確認した。

埋土からすり石１点（第 62 図 15）が出土した。

カマド（図版 12、第 40 図）

住居跡のほぼ西壁中央で検出したカマドであるが、左袖は削平のため全く痕跡も確認できなかった。白灰褐色粘質土で構築した右袖は、壁から 85cm直線的に突出し、高さは最大５cm程度である。壁から 55cm手前で天地逆にした土師器高坏（９）を転用した支脚があり、その手前で赤褐色で広がる焼面（薄いトーン）と硬く焼けた硬化面（濃いトーン）を検出した。支脚部分で反転すると、袖間は 55cm程度となるか。カマド埋土は茶褐色粘質土に焼土と炭が多く混じる土である。

出土遺物（図版 21、第 38 図９～ 12）

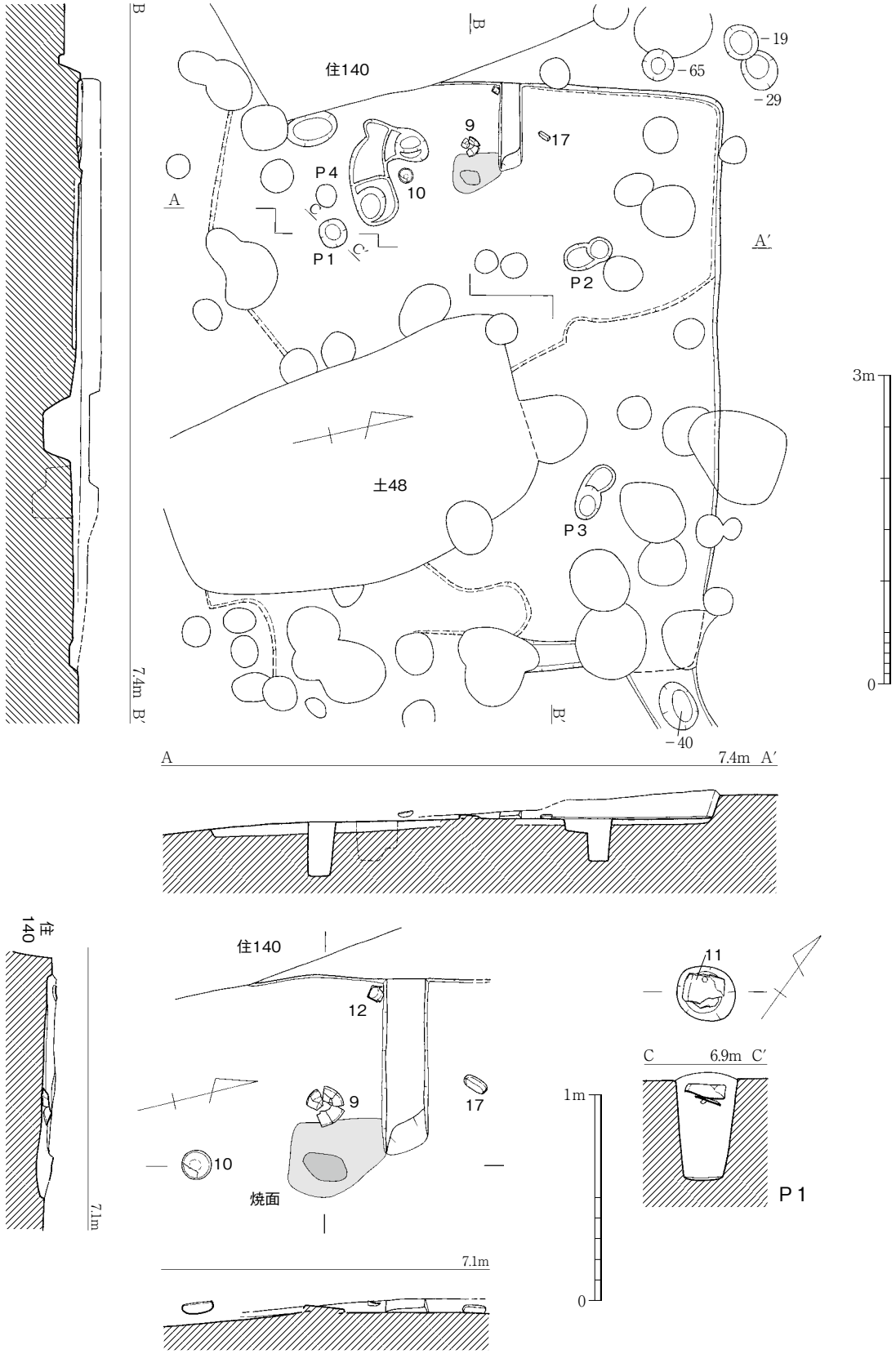
９は口縁端部を短く外反させた土師器高坏である。器表が荒れており、調整は不明である。10 は完形の土師器椀状坏で、口径 12.7cmを測る。底部には手持ちヘラケズリを施す。11 は土師器甑で、Ｐ１内に意図的に置かれたもの。内面は器表が荒れており、調整は不明。

12 は口縁端部を上方につまみ出した須恵器坏身で、底部には反時計回りのヘラケズリを施す。

出土遺物から、古墳時代後期後半に属すると考えられる（大庭）。

142 号竪穴住居跡（第 41 図）

調査区の中央に位置し、137・140・143 号住居跡に切られる。規模は東西 5.2 ｍ、南北は屋内土



第 40 図　Ⅳ－B 区 141 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60、1/30）

坑が南壁に付設していたとすると 4.5 m程度となり、深さは竪穴部で 0.45 mの長方形住居跡になるか。主軸方位はG.N.より 11°東に傾く。

住居東・西壁には、高さ６～８㎝のベッド状遺構を付設するが、東のベッド状遺構は上層の 143 号住居跡の影響により折れ曲がっているが、本来は壁に並行していたと考えられる。

竪穴部床面ではピット４基及び屋内土坑を検出したが、ピットはいずれも浅く主柱穴は不明で、炉も不明である。屋内土坑は 50㎝× 33㎝、深さ最大 23㎝の方形を呈する。

住居内では多くの土器が出土したが、そのほとんどが埋土上層の灰褐色粘質土に伴うもので、住居内に遺棄したものである。住居埋土下層の灰茶褐色粘質土に伴う土器は器台（20）のみである。床下掘り込みを１ヶ所確認した。

埋土から砥石１点（第 62 図 10）が出土した。

出土遺物（図版 21、第 42・43 図１～ 24）

１は逆「ハ」の字状に強く開く、瀬戸内系広口壺口縁部である。口縁端部には径 0.9㎝前後の円形浮文を約２㎝間隔で貼り付ける。口縁内端部は若干上につまみ上げる。２は在地系複合口縁壺で、屈折部は稜になる。外面には二次被熱痕があり、かつ一部は黒変する。３は頸部が締まる在地系壺であるが、器形は瀬戸内系の影響を受けた可能性があるもの。胴部内面にはナデの稜が残る。

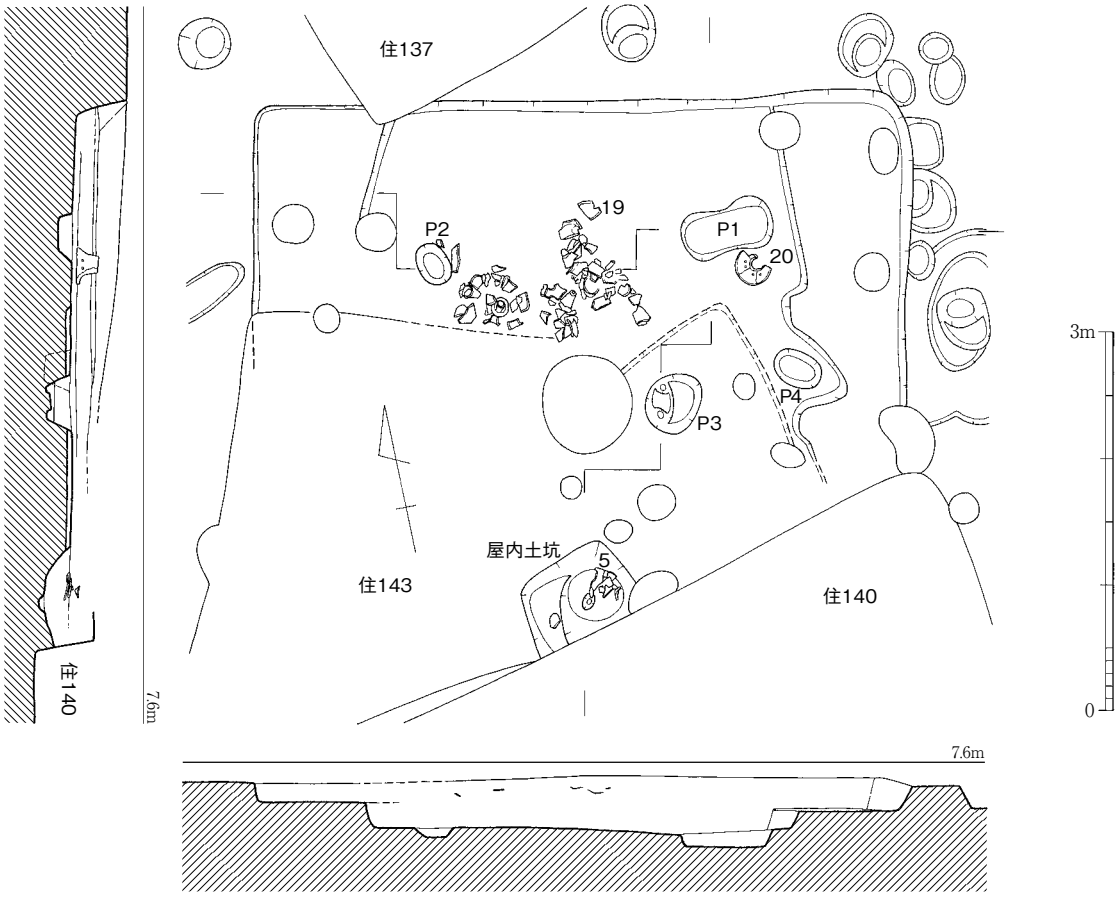
４～ 11 は在地系甕で、４～７・10・11 の外面には黒斑あり。５・10 の外面にはスス、５・11 の内面にはコゲが付着する。８・10・11 の外面には二次被熱痕あり。５は屋内土坑出土で、口縁端部は若干肥厚させる。復元口径 18.6㎝、復元器高 25㎝を測る。７は口縁端部が細くなるもので、胴部外面には工具痕が残る。８は胴部の張りがなく、器壁が薄いもので、焼成も甘い。９は口縁外端部を若干つまみ出すもの。10・11 はほぼ丸底に近い凸レンズ底の底部である。

12 は瀬戸内系甕で、器形と胎土から搬入品の可能性が高いもの。口縁外端部には、線が一定しないこと及び切れ目が確認できることから、ヘラ工具で回転により施されたものではなく、一筆書きで施されたと考えられる三条の細い凹線を巡らす。頸部外面にはヘラ工具による刻みを浅い列点文状に施す。内面頸部までケズリを行う。色調は黄橙褐色を呈する。13 は弱い凸レンズの弥生後期甕底部。外面にはススが付着する。若干時期が古いもの。

14 ～ 16 は在地系高坏である。14 は口縁端部を内側に丸く折り曲げた、豊前系高坏である。内外面は顕著な二次被熱のため、調整は不明である。15 はほぼ乾燥時に外→内に穿孔を２つ程度施したもので、外面は工具ナデ、内面はナデで調整する。16 はほぼ乾燥時に外→内に３・６・９時の３ヶ所に穿孔を施したもの。外面は磨滅のため、調整は不明。

17 は在地系脚付鉢である。胎土は精良である。18・19 は在地系器台である。18 は上部端部にハケ工具による浅い刻みを施し、外面はタタキのちハケ調整を基調とする。胎土は精良で、焼成もきわめて良いもの。19 は下部片で、外面はタタキのちごく一部にハケを施す。外面には顕著な二次被熱痕あり。

20 は搬入品の可能性が高い西部瀬戸内系の器台である。下部の孔はほとんど乾燥時に外→内に径 0.6㎝、孔間 2.3㎝の２個セットを４ヶ所施す。上部の孔は１ヶ所のみ残っているため、何個セットで何ヶ所施されたかは不明である。上部孔下には等間隔であることから、櫛状工具により施されたと考えられる浅く巡る七条の凹線を施す。下部端部にも一部三条になるものの、基本二条の櫛状工具による浅く巡らせた凹線を施している。外面は横ナデ、内面も柱部は縦ナデ、下部内面は横ナ



第 41 図　Ⅳ－Ｂ区 142 号竪穴住居跡実測図（1/60）

デを施す。外面全体にはスリップを塗布する。下部端部には黒斑あり。生地は橙褐色である。

21 ～ 23 は在地系支脚である。21 はほぼ完形で、上部径 4.5cm、下部径 10.4cm、器高 9.9cmを測る。上部中央に穿孔を施すもので、外面はタタキのちナデ、内面にはハケを施す。外面にはスス及び二次被熱痕あり。22 もほぼ完形品で、上部径 6.4cm、下部径 11cm、器高 10.9cmを測る。外面はタタキ痕、内面はナデのちハケを施す。外面には顕著な二次被熱痕あり。筒形の 23 は内外面指押さえ痕が顕著に残る粗製のもの。外面には顕著な二次被熱痕が残る。24 はやや上げ底の弥生中期甕底部である。混入品である。

出土遺物から、弥生時代後期終末に属すると考えられる（大庭）。

143 号竪穴住居跡（第 44 図）

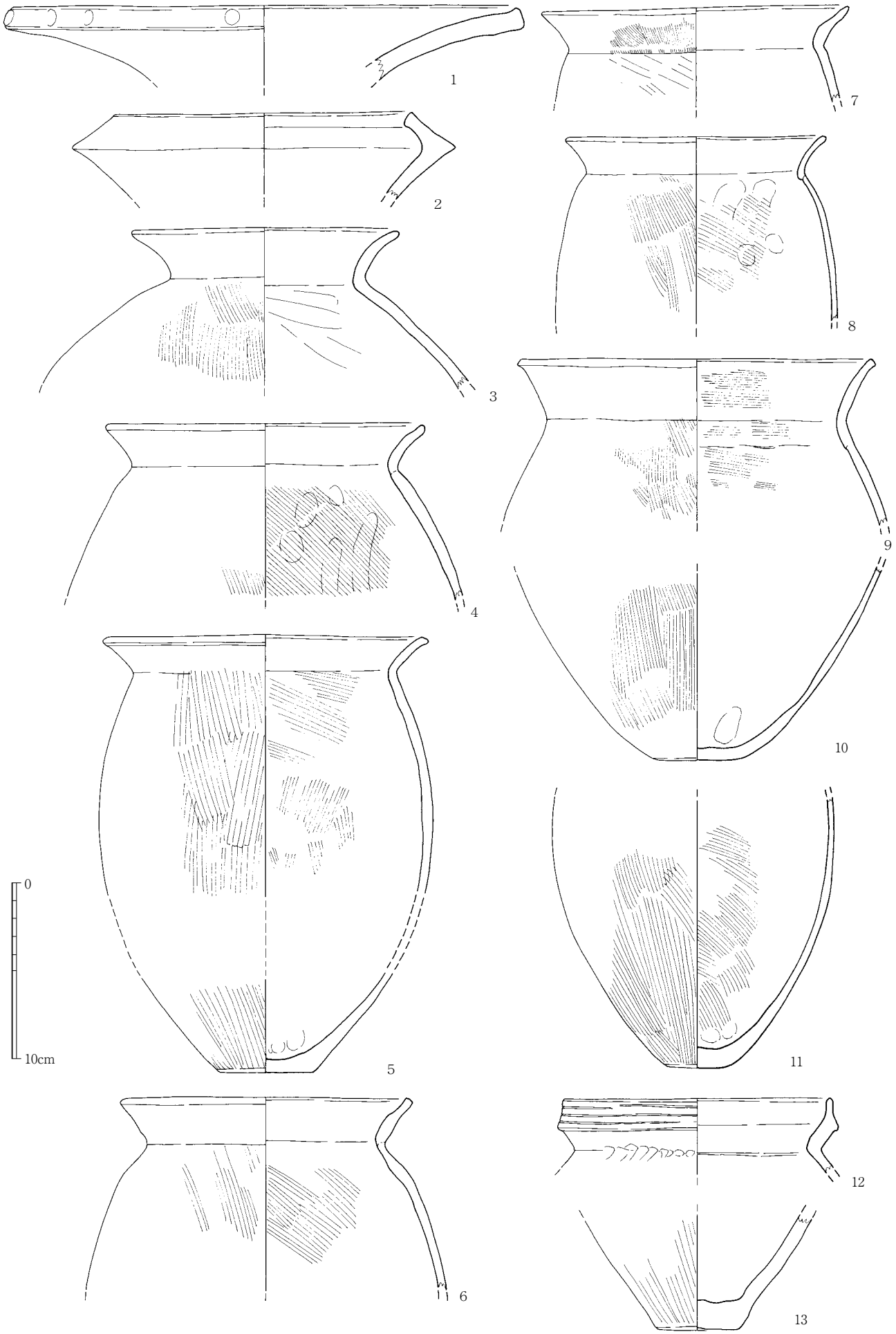
調査区の中央に位置し、142 号住居跡を切り、140 号住居跡に切られる。142 号住居跡との前後関係を誤り、北壁と東壁の一部は掘り失い、南壁は削平され残っていない。規模は現状で南北 4.7 m以上、カマド中心軸で反転すると南北幅 5.5 m程度となる方形住居跡で、深さは最も残りの良い北西部分で 0.3 mを測る。主軸方位はG.N.より 69°西に傾く。

住居西壁ほぼ中央にカマドを付設する。住居床面ではピット７基検出し、深さと位置からＰ１～３が主柱穴になると思われ、Ｐ７は規模から屋内土坑となる可能性がある。

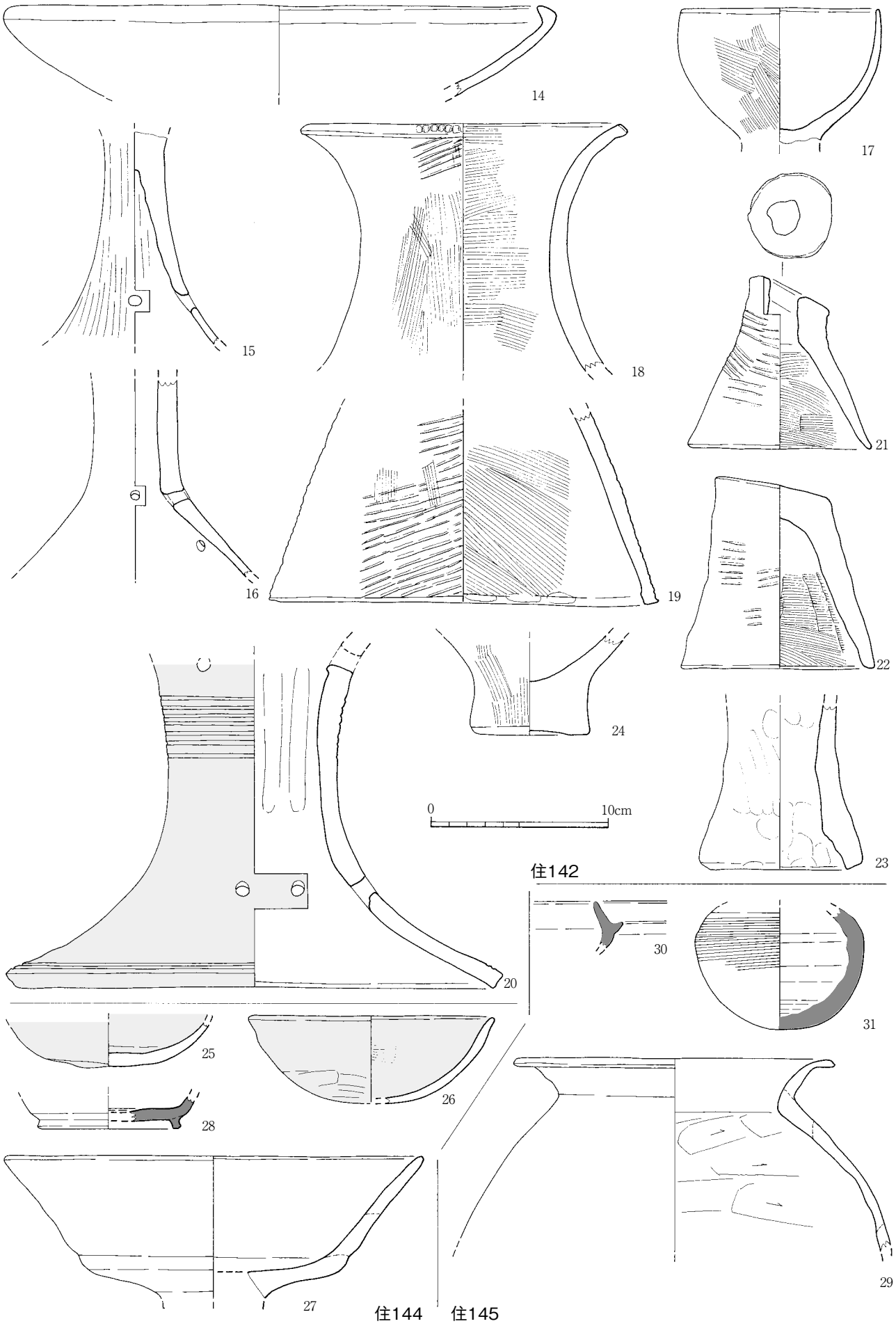
住居埋土は灰褐色粘質土である。住居大部分で床下掘り込みを確認した。

カマド（図版 12・13、第 44 図）

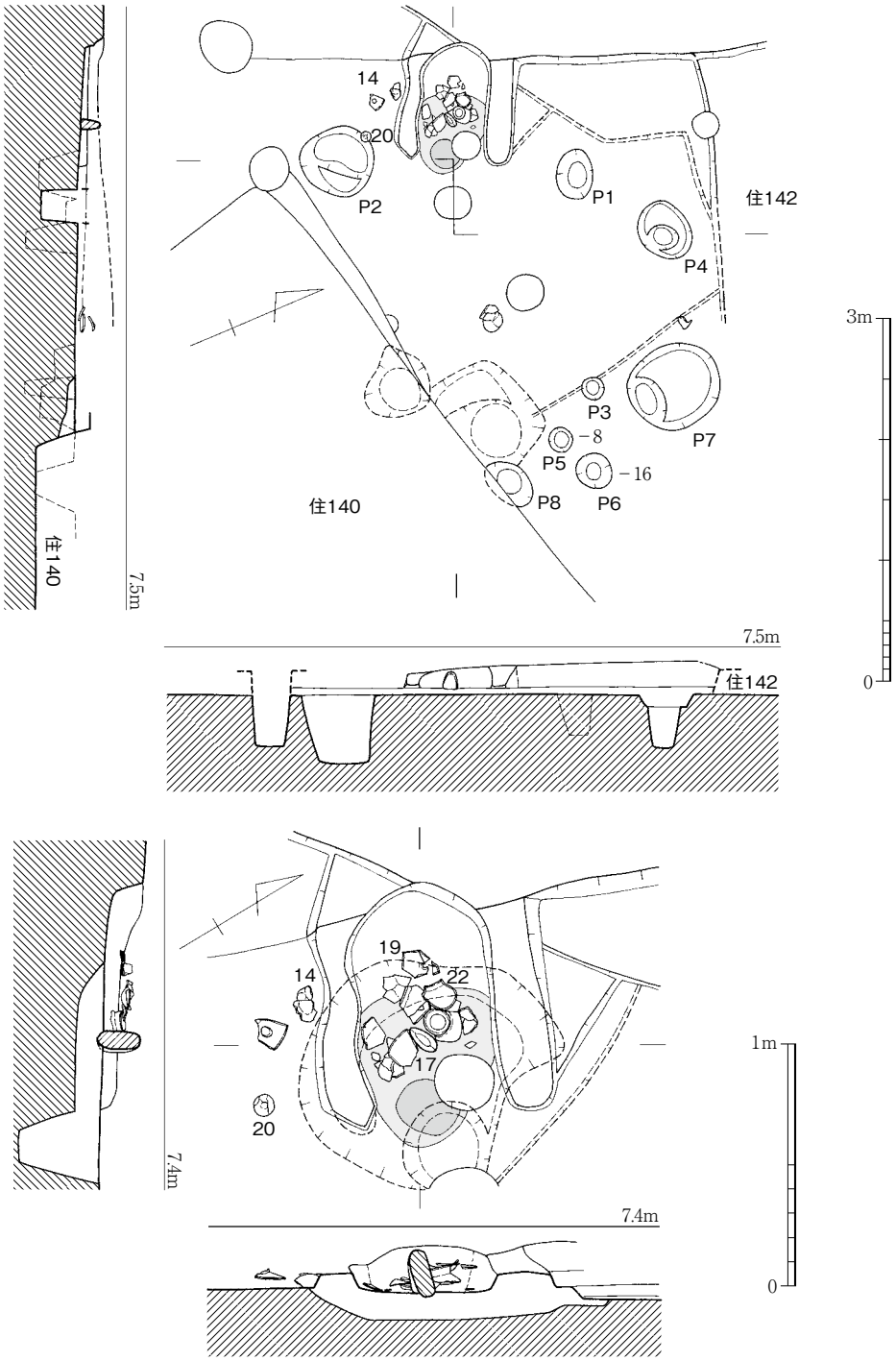
住居西壁ほぼ中央に付設されたと考えられるカマドである。暗灰茶褐色粘質土で構築した両袖と



第 42 図　Ⅳ－B 区 142 号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）



第 43 図　Ⅳ－B 区 142 ②・144・145 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第44図　Ⅳ−B区143号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60、1/30）

も壁から85cm突出するが、左袖先端は掘りすぎている。

燃焼部は逆「U」字状に10cm壁を掘り込み、その奥壁から60cm手前に石製支脚を置く。石製支脚は少し掘り窪めて設置し、粘土で固定していた。支脚前面では硬化面を確認した。

支脚周辺で土器がまとまって出土し、須恵器壺もあることから、カマド廃絶時に意図的に廃棄されたものと想定される。カマド埋土は灰褐色粘質土に焼土・炭を多量に含む。またカマド下層掘り込みを確認した。

出土遺物（第38図13～24）

13～15は土師器壺である。13は内外面粗めのナデ調整を施し、胴部が窄まった小型丸底壺。外面には黒斑あり。14は外面全面及び口縁部内面まで二次被熱を受けた中型壺で、口縁部は弱く内湾する。胴部は偏球状で、外面はナデ、内面下位にはケズリを施す。内面上位には粘土継ぎ目痕が残る。外面底部にはスス、内面下位にはコゲが付着する。15は内湾する口縁部の直口壺である。内面は頸部までケズリを施す。16は土師器甕で、外面は丁寧なナデを行い、内面頸部までケズリを施す。

17・18は土師器高坏である。17は口縁端部を内湾気味に強く折り曲げる。屈折部は鈍い稜で、粘土接合痕も確認できる。基本的に内外面は横ナデであるが、坏部内面のみナデ前のハケが残る。内面に黒斑があり、内外面には二次被熱痕が認められる。

19は小型の土師器多孔式甑で、口径20.9cm、底径7.6cm、器高18cmに復元できる。口縁部は弱く

外反させ、把手は外れているが、体部に挿入する形態で、２ヶ所に付いていたと考えられる。底部には２㎝程度の孔を６ヶ所外→内に焼成前穿孔を行っている。外面はハケ、口縁部内外面は横ナデ、内面体部中位はケズリ、内面体部下位はナデを施す。外面には黒斑、二次被熱痕があり、内面下位にはコゲが付着する。20 は手づくね土器で、内面にはナデの稜が残る。

文中写真 18　144 号住居跡付近（南から）

21 は須恵器壺口縁部である。口縁外端部にはナデ凹線を施す。22 は須恵器直口壺である。全体的にシャープなつくりではない。胴部内面には工具痕及び指押さえ痕が認められる。焼成も不良。23・24 は混入品である。23 は弱い凸レンズ底の弥生後期甕底部。外面には黒斑あり。24 は弥生後期器台下部片である。外面には黒班あり。

出土遺物及び切り合い関係から、古墳時代後期後半に属すると考えられる（大庭）。

144 号竪穴住居跡（図版 13、第 45 図）

調査区の中央南端に位置し、45 号土坑に切られる。住居南側の大半は削平を受けるが、規模は東西 5.6 m以上、南北は西壁中央にカマド硬化面があったとすると 4.4 m程度の、長方形住居跡になるか。深さは北西隅で 0.25 mを測る。主軸方位はG.N.より 54°西に傾く。

西壁から 90㎝手前で、径 50㎝ほどの硬化面を検出し、カマドが存在していたと考えられる。床面ではピット５基検出し、位置と深さからＰ１・２が主柱穴の４本柱の住居跡になるか。北東隅で天地逆で出土した土師器坏（26）は、本来床面直上にあったと考えられる。住居埋土は灰黄褐色粘質土で、住居床下掘り込みを１ヶ所確認した。

出土遺物（第 43 図 25 ～ 28）

25・26 は土師器椀状坏で、いずれも外面底部には手持ちヘラケズリを施し、内外面にはスリップを塗布する。26 の内面には横ミガキを施す。27 は土師器高坏坏部で、屈折部の稜は鈍い。外面には黒斑あり。脚部とは付加法により接合するものである。28 は高台付須恵器坏身で、混入品。

出土遺物から、古墳時代後期後半に属すると考えられる（大庭）。

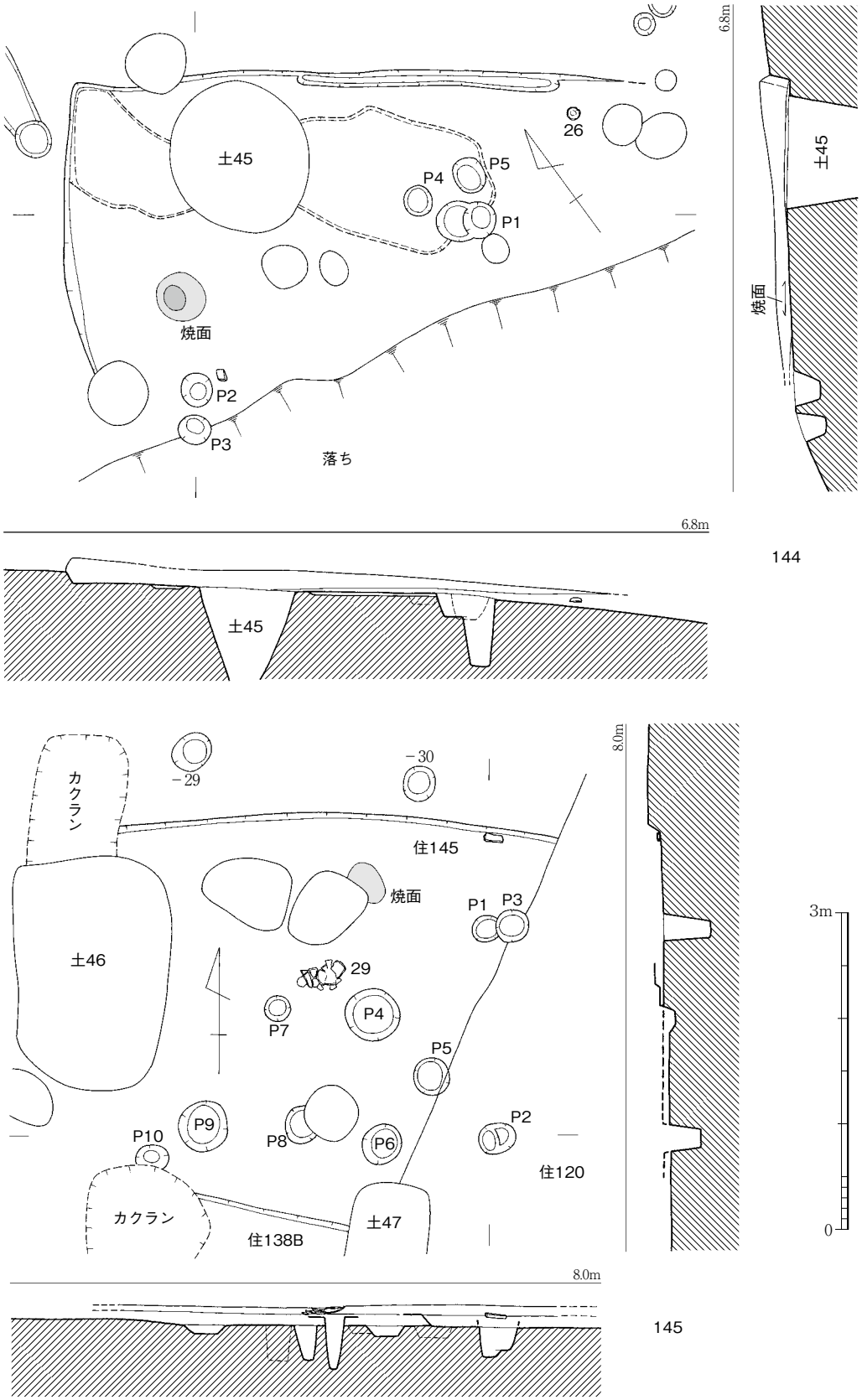
145 号竪穴住居跡（第 45 図）

調査区中央の北東寄りに位置し、120 号住居跡、46・47 号土坑に切られ、138 Ｂ号住居跡を切る。138 Ｂ号住居跡とは切り合い関係を誤り、先に 138 Ｂ号住居跡を掘削してしまった。壁として検出できたのは北壁のみで、深さは 0.1 mを測る。規模は東西 4.2 m以上×南北 3.9 m以上である。

床面ではピット 10 基を検出し、位置と深さからＰ１・２が東側の主柱穴列となると思われるが、西側の主柱穴は不明である。住居北側で焼面を検出し、カマドが存在した可能性がある。住居埋土は灰褐色粘質土である。

出土遺物（第 43 図 29 ～ 31）

29 は土師器甕である。頸部は締まり、口縁端部はさらに水平方向に屈折させ、口縁端部はナデ



第 45 図　Ⅳ−B 区 144・145 号竪穴住居跡実測図（1/60）

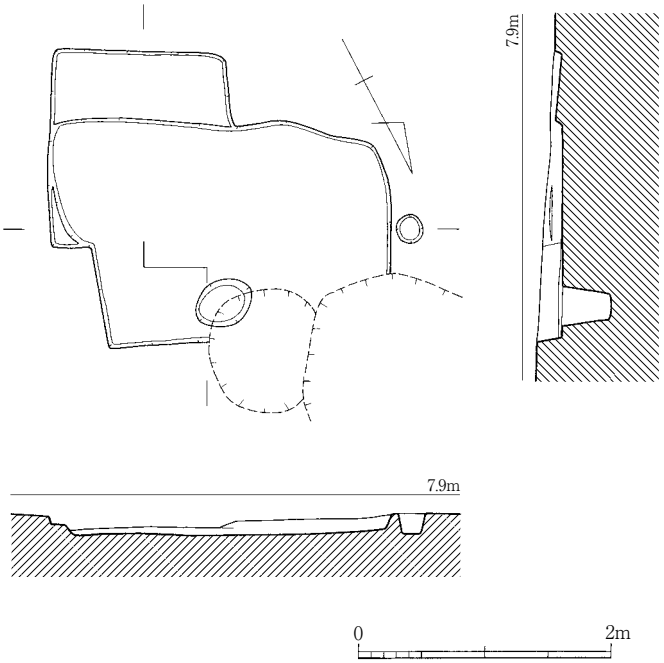
により窪む。内面は頸部までケズリを施す。外面には黒斑があり、ススも付着する。

30 は須恵器坏身口縁部で、外面には厚く自然釉が付着する。31 は須恵器甕で、体部上位には粗いカキ目を巡らす。

出土遺物から、古墳時代後期末に属すると考えられる（大庭）。

146 号竪穴住居跡（第 46 図）

調査区の北西側に単独で位置する。規模が小さく不整形であるが、他の土坑とも形態が異なることから、ここでは住居として報告する。平面形はＬ字状を呈し、東西 2.71 m、南北 2.3 m、深さ 0.2 mを測り、南東側が僅かながら一段高くなる。床面ではピットを確認したが、主柱穴になるかどうかは不明である。ごく少量の遺物が出土した。

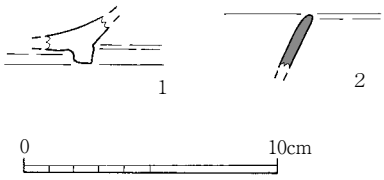


第 46 図　Ⅳ－Ｂ区 146 号竪穴住居跡実測図（1/60）

出土遺物（第 47 図）

１は土師器高台付坏の高台片で、高台は断面方形を呈する。胎土は精良で、焼成はやや良好である。色調は黄白色を呈する。２は須恵器坏の口縁部の小片である。胎土は精良で、焼成も良好である。色調は灰白色を呈する。

出土遺物から、時期は８世紀前半と推定される（下原）。



第 47 図　Ⅳ－Ｂ区 146 号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

（４）掘立柱建物跡

９号掘立柱建物跡（第 48 図）

調査区の南西隅に位置する。規模は２×２間の総柱建物で、柱間の心々距離で桁行 3.09 m×梁行３mである。当初は建物跡となることに気付かず、ピットとして掘削したため、柱痕跡は平面ではとらえていないが、北西のピット３基で柱痕跡の一段深い掘り込みが認められる。柱穴は径 0.25 m～ 0.4 m、深さ 0.1 ～ 0.3 m前後の円形のピットで構成される。方位はG.N.より 10° 西に傾く。柱穴埋土は灰褐色粘質土である。

出土遺物で図示できるものはないが、埋土及び主軸から、近世以降に属すると考えられる（大庭）。

（５）土坑

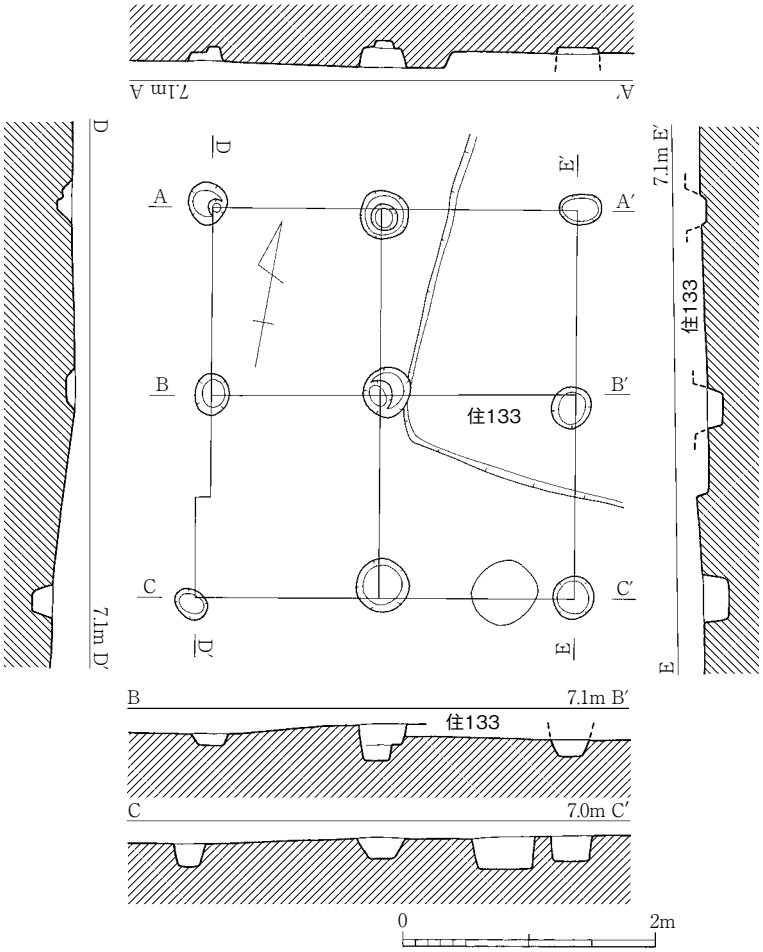
29 号土坑（第 49 図）

調査区の北東側に位置し、120・122 号住居跡を切る。長さ 1.99 m×幅 0.86 m、深さ 0.35 mを測る。埋土は暗灰褐色土である。特に目立った出土遺物もなかったが、規模や形態などから土壙墓の可能性もある。

出土遺物（第 50 図１・２）

１は土師器短脚高坏の脚部片である。筒状部は裾広がりで、裾部との境付近で割れている。内外とも磨滅し、調整は不明瞭である。本来は 120 号住居跡に伴っていた土器が、土坑の掘削に伴い混入したものと考えられる。２は瓦質の擂鉢で、口縁部内面を肥厚させる。外面はナデ調整、内面はタテハケ調整の後に７本を単位とする擂り目を刻んでいる。

時期は、僅かな遺物から 12 世紀から 13 世紀頃と推定される（下原）。



第 48 図　Ⅳ－Ｂ区９号掘立柱建物跡実測図（1/60）

31 号土坑（図版 13、第 49 図）

調査区の東側に位置し、18 号溝に切られる。規模は東西 2.4 m×南北 2.52 m、深さ 1.49 mを測り、最初に擂鉢状に掘削し、さらに中央を径 1.5 mほどの範囲で深掘りする段構造を呈する。井戸枠などの痕跡はなく、湧水も認められなかったが、溜め井状になっていた可能性もあり、18 号溝とも無関係ではないか。深掘りされた部分が底面を含め方形を志向していることも何らかの構造物を伴っていた可能性を示すのかもしれない。

出土遺物（第 50 図３～５）

３は土師質の鉢とみられ、焼成は堅緻である。内外ともヨコナデ後、横方向のミガキを施す。４は防長系の足鍋の脚部片で、焼成は瓦質である。縦方向のナデ調整で仕上げている。５は龍泉窯系青磁碗の小片で、外面は櫛描文、内面は劃花文を施し、釉は緑灰色を呈する。

出土遺物は僅かであるが、時期は 12 世紀後半から 13 世紀前半頃と推定される（下原）。

32 号土坑（図版２、第 49 図）

調査区の北東部に位置し、120・121 号住居跡を切り、18 号溝に切られる。規模は長さ 1.94 m以上×幅 1.58 m、深さ 0.12 mを測る。底面では 20㎝大の礫が落ち込んだピットを検出したが、直接関係ある遺構かどうかは不明である。

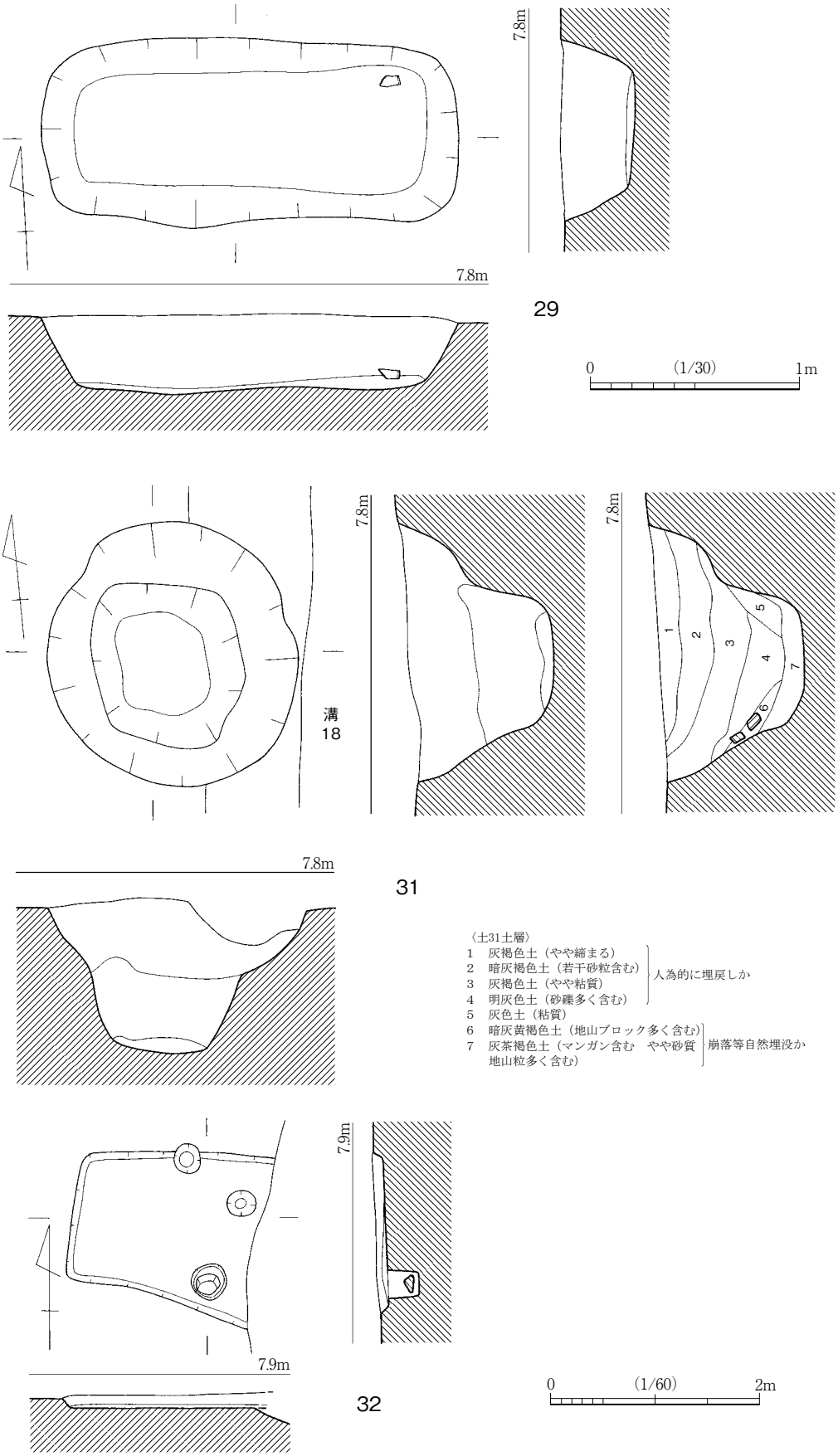
出土遺物（第 50 図６～８）

６は土師器高坏の坏底部片で、脚部は接合面で剥離している。坏部は水平で、口縁部は斜め上方へ真っ直ぐ伸びる。外面にタテハケ調整がみられ、内面はナデ調整である。混入品である。７は瓦質の擂鉢で、底部の小片のみが遺存する。焼成が不良で、やや土師質気味である。外面は摩滅しているが、内面はナデ調整後、５本を単位とする擂り目を施している。８は施釉陶器の底部片で、胎土は明灰色を呈し、内外とも薄い透明釉が掛かり、色調はやや暗い灰緑色を呈する。内外に胎土目の痕跡が４つずつ残る。

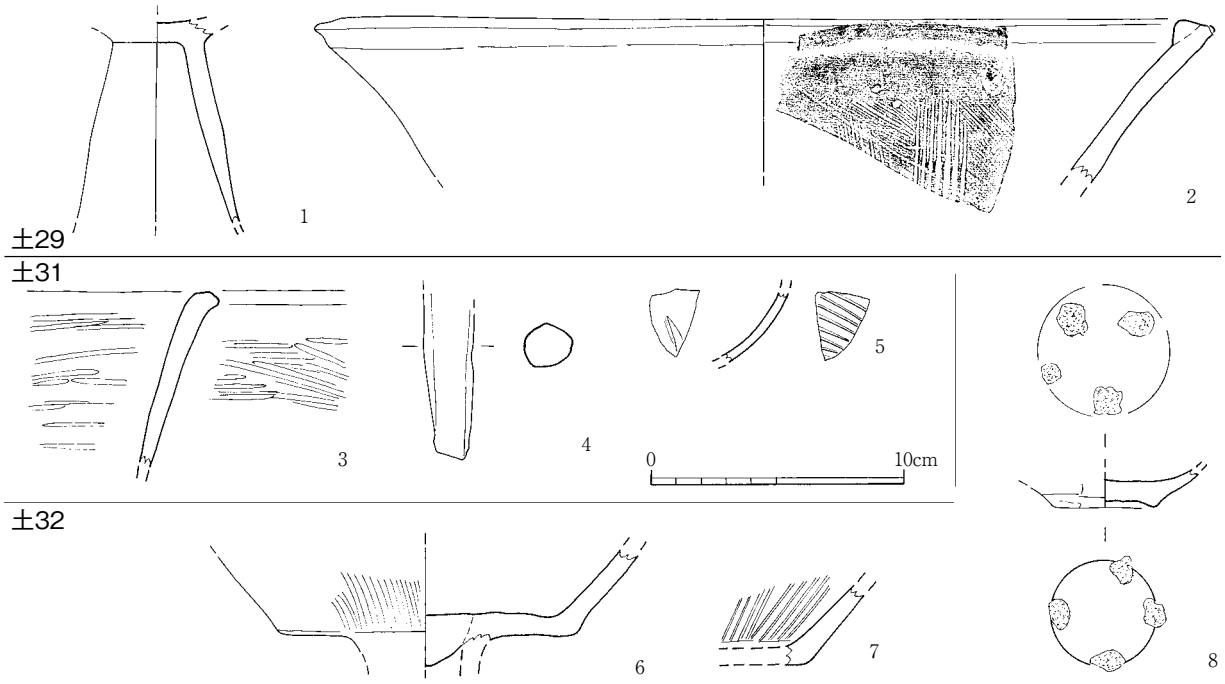
時期は遺物が少なく判断に苦しむが、12 世紀から 13 世紀頃であろうか（下原）。

33 号土坑（図版 14、第 51 図）

調査区の中央やや東寄りに位置する。規模は 1.2 m × 0.8 m、深さ 0.16 mを測る楕円形土坑である。



第 49 図　Ⅳ－B 区 29・31・32 号土坑実測図（1/30、1/60）



第 50 図　Ⅳ－Ｂ区 29・31・32 号土坑出土遺物実測図（1/3）

埋土は灰褐色粘質土に赤褐色粘質土が混じる土である。

出土土器で図示できるものはないが、土器片から古墳時代前期前半に属すると考えられる（大庭）。

34 号土坑（図版 14、第 51 図）

調査区の中央西端に位置する。規模は 1.37 m × 1.27 m、深さは 0.25 mの楕円形土坑である。壁はいずれも緩やかに立ち上がる。埋土は灰褐色粘質土である。

出土土器で図示できるものはないが、土器片から中世に属すると考えられる（大庭）。

35 号土坑（図版 14、第 51 図）

調査区の中央の東端に位置する。規模は 1.41 m × 0.79 m、深さ 0.98 mの楕円形土坑である。短軸側断面はフラスコ状で、壁は内傾しながら立ち上がる。南側に三日月状のテラスを持つ。埋土は地表から 0.4 mまでは暗橙褐色粘質土が主体の土坑を埋め戻し土で、その下は灰褐色粘質土である。

出土遺物（第 52 図１）

１は口縁端部を内側に折り曲げ、丸く収めた瓦質擂鉢口縁部で、外面にはハケのち炭素を吸着させる。内面には横ハケのち七条の櫛目を一定間隔で施す。

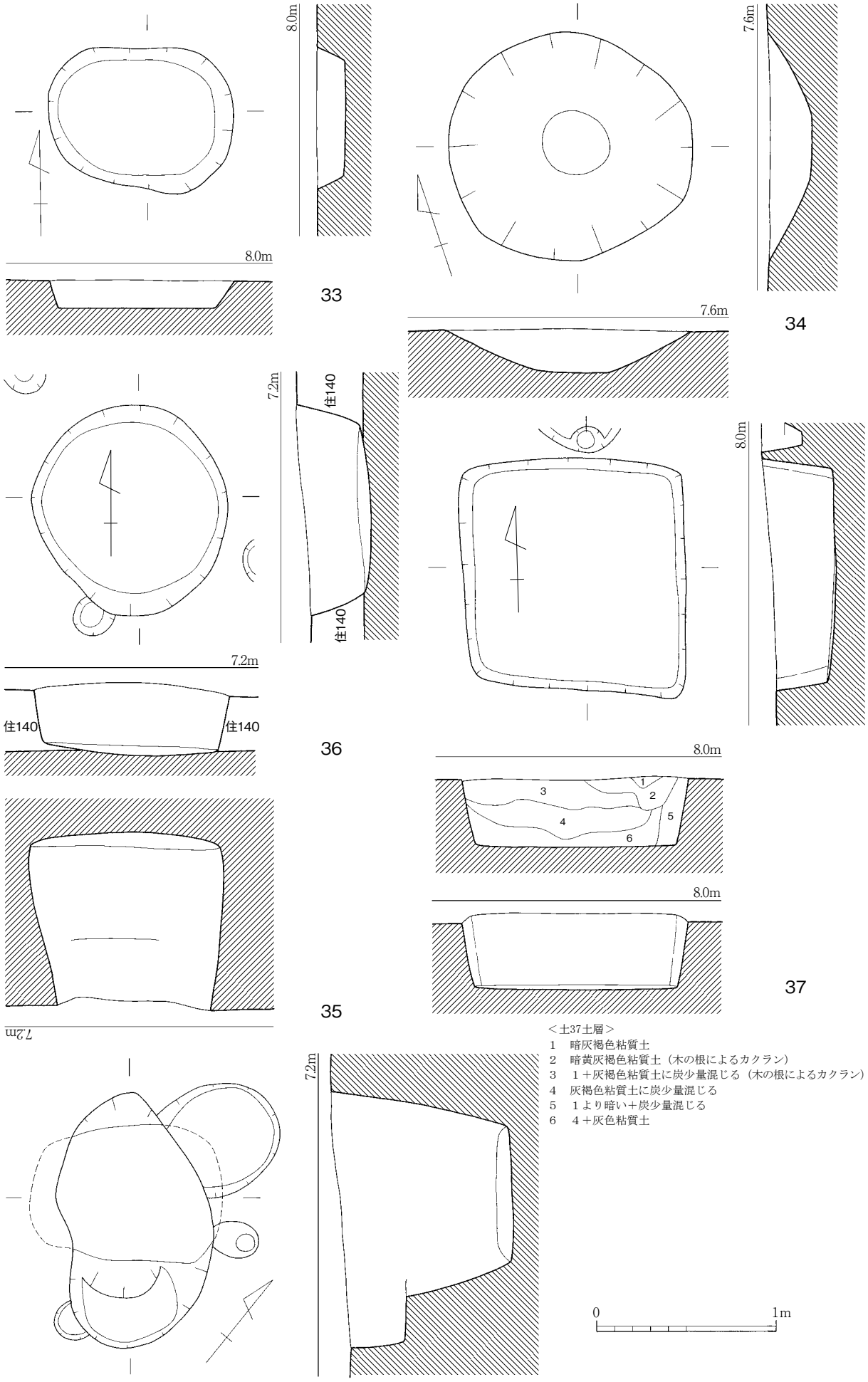
出土遺物から、15 世紀前後に属すると考えられる（大庭）。

36 号土坑（図版 15、第 51 図）

調査区の中央南端に位置し、140 号住居跡を切る。規模は 1.17 m × 1.09 m、深さ 0.4 mの円形土坑である。埋土は暗灰褐色粘質土である。

出土遺物（第 52 図２）

２は大型の土師器鉢で、内面下位には工具痕が残る。外面下位は黒変する。



第 51 図　Ⅳ－Ｂ区 33 ～ 37 号土坑実測図（1/30）

出土遺物から、古墳時代後期～古代に属すると考えられる（大庭）。

37 号土坑（図版 15、第 52 図）

調査区の南西に位置する。規模は 1.3 m × 1.25 m、深さ 0.38 mの方形土坑である。壁の立ち上がりは急である。埋土は１～３が木の根によるカクランを受け、４～６はいずれも土質が近いことから、短期間に埋めたものと考えられる。

出土遺物（図版 21、第 52 図３～５）

３・４は高台付土師器皿である。３は内外面とも剥離が顕著である。復元口径は 13.5cmを測る。５は高台付土師器椀である。

出土遺物から、10 世紀前後に属すると考えられる（大庭）。

38 号土坑（第 53 図）

調査区の南西に位置し、134 号住居跡を切る。規模は 0.76 m × 0.73 m、深さ 1.06 mであるが、134 号住居跡掘削時に土坑の存在に気付いたため、本来はさらに深さがある小型円形土坑になる。テラスは４ヶ所持つ。埋土は灰褐色粘質土である。

出土遺物（第 52 図６・７）

６は小型の土師器高坏坏部か。７は須恵器甕で、体部中位には生乾き時に外→内に穿孔を１ヶ所施す。体部中位以上には厚い自然釉、内面底部にも自然釉が付着する。

出土遺物から、古墳時代後期末に属すると考えられる（大庭）。

43 号土坑（図版 15、第 53 図）

調査区の南東端に位置する。４基ピットが切り込むが、いずれも当土坑より新しいものである。規模は１m × 0.82 m、深さ 0.13 mの不整形土坑である。床面から３cmほど浮いた状態で高台付土師器椀（10・11）と土師器坏（８）が出土した。埋土は灰黒色粘質土である。

出土遺物（第 52 図８～ 12）

８は土師器坏で、底部はヘラ切りのままである。外面は二次被熱を受け、器表はボロボロである。９～ 12 は高台付土師器坏である。10 は丸みを帯びた体部にやや高めの高台が付く。体部外面はナデによる凹凸が顕著である。復元口径 14.2cm、復元器高 5.8cmを測る。11 は器壁が厚めである。12 は高台及びその底径が小さいもの。

出土遺物から、10 世紀前後に属すると考えられる（大庭）。

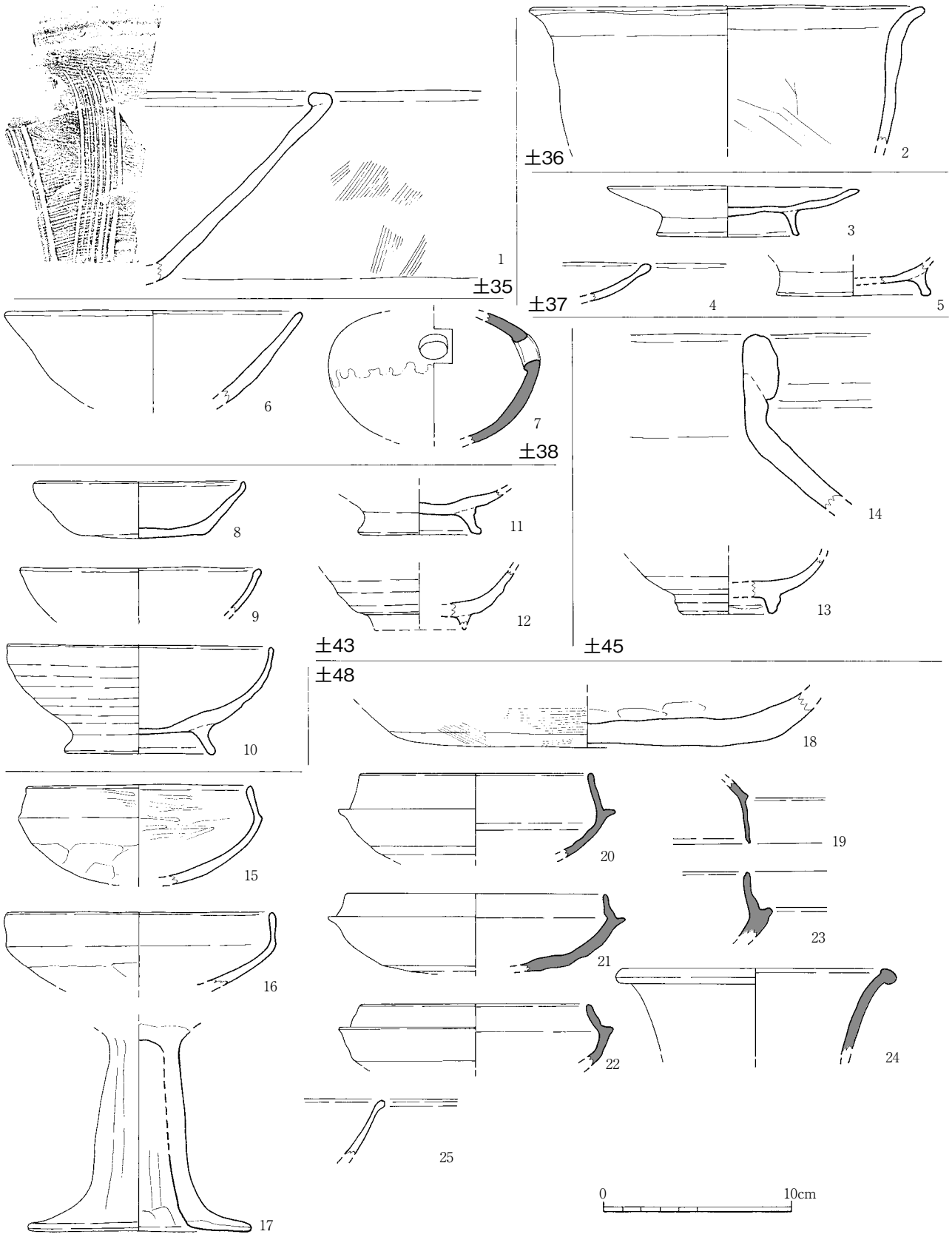
45 号土坑（図版 16、第 53 図）

調査区の中央南端に位置する。144 号住居跡を切るが、切り合い関係を誤り、先に 144 号住居跡を掘削してしまったため、本来は少なくとも深さ 0.9 m以上は残っていたと考えられる。規模は 1.1 m × 0.97 m、深さは現状で 0.73 mである。埋土は灰黄色粘質土に炭少量混じる。

埋土下層から刀形木製品１点（第 64 図 35）が出土した。

出土遺物（図版 21、第 52 図 13・14）

13 は陶器椀で、釉は未発色で白黄色を呈するが、高台内見込みは露胎である。14 は備前系大壺



第 52 図　Ⅳ－B 区 35 ～ 38・43・45・48 号土坑出土土器実測図（1/3）

口縁部である。外面は自然釉が付着する。

出土遺物から、15 世紀前後に属すると考えられる（大庭）。

46 号土坑（図版 16、第 54 図）

調査区の北側に位置する。当初は単純な土坑状の掘り込みになると考えていたが、底面に２ヶ所の円形の掘り込みを確認した。別個の遺構が重複している状況も想定したが、ほぼ同規模の掘り込みで埋土も共通すること、それぞれ鉄器が出土したことから、一連の遺構と考えた。規模は長さ 2.19 m、幅 1.35 mで、深さ 1.0 mほど掘り下げた面で南北２カ所に円形の掘り込みを行う。円形掘り込みは、北側が東西 1.28 m・南北 1.14 m・深さ 0.66 m、南側が東西 1.18 m・南北 1.1m・深さ 0.58 mを測り、遺構検出面からの深さは最大 1.62m に達する。北側からは不明鉄製品１点（第 64 図 34）、南側からは鉄製斧（第 64 図 31）及び不明鉄製品（第 64 図 32）が１点ずつ出土した。埋土中に焼土塊や炭化物を含むことから、生産関連遺構や火葬遺構の可能性も考えたが、とくに被熱痕跡や骨片は認められなかった。遺構の性格は不明である。

埋土から、上述の鉄製品３点以外に、鉄釘と思われるもの１点（第 64 図 29）、鉄製鋤先１点（第 64 図 33）が出土した。

出土遺物（第 55 図）

１は土師器椀の口縁部片で、焼成はやや瓦質気味ではあるが土師器と判断した。非常に堅緻で、全体に作りが薄く、内外とも横方向のミガキで仕上げる。２は須恵器蓋の小片で、扁平な宝珠形のつまみを貼り付けている。内面は回転ナデ、外面は頂部側を回転ヘラケズリしている。混入品である。

３は須恵製擂鉢の口縁部片で、口縁端部の内側を肥厚させる。内外とも回転ナデ調整で、内面に六条の擂り目がみられる。４は同安窯系青磁碗の底部片。高台と高台内を除き緑灰色の釉が掛かる。高台は削り高台である。５は丸瓦片で、凸面はヨコナデ調整で、凹面には細かな布目痕が残る。

出土遺物から、時期は 12 世紀後半頃と考えられる（下原）。

47 号土坑（図版 16、第 54 図）

調査区の北側に位置し、120・138 B 号住居跡を切る。規模は長さ 1.73m、幅 1.53 m、深さ 0.86 mを測る。埋土には全体的に地山由来の明褐色土が粒状に混じり、２層中に炭化物が混じる以外は特筆すべき所見はない。規模などから土壙墓の可能性もある。図化できる遺物はなかった（下原）。

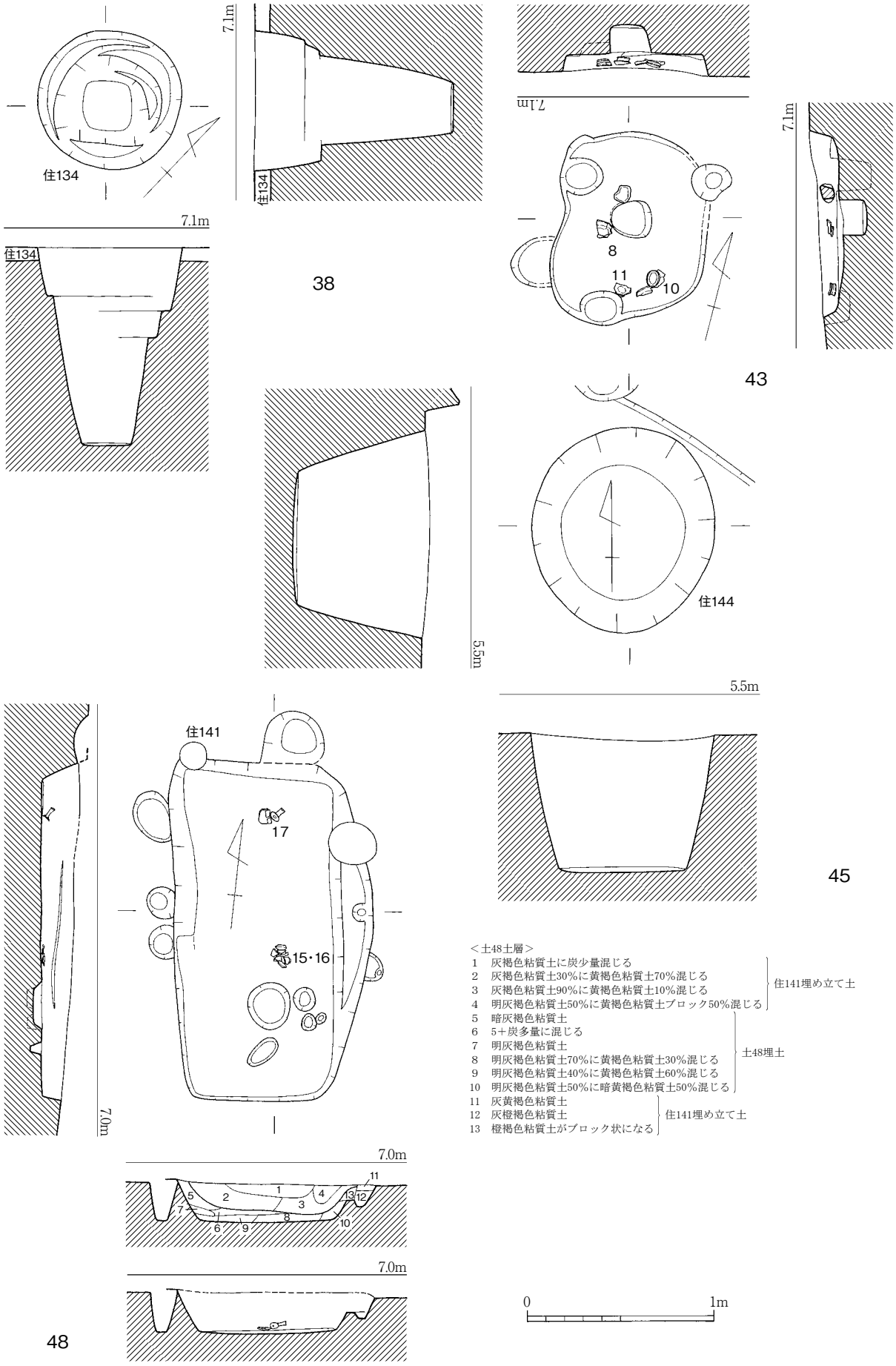
48 号土坑（図版 17、第 53 図）

調査区の中央南端に位置し、141 号住居跡を切る。規模は 1.8 m以上× 1.04 m、深さ 2.2 mの長方形土坑である。床面はほぼ水平で、浅いピットが５基認められる。土坑北と中央の床面直上で土師器高坏（17）と坏（15・16）が出土した。

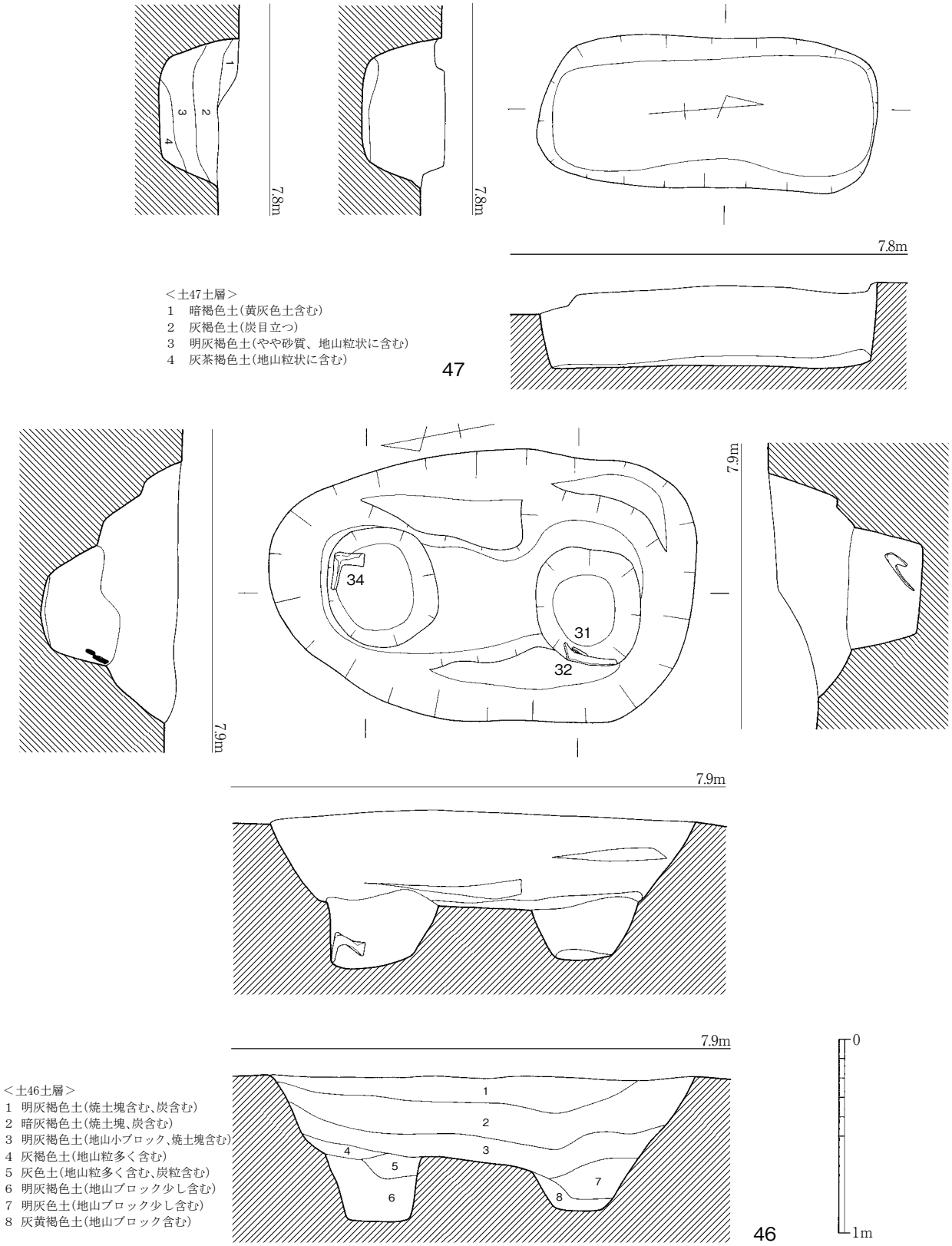
埋土は１～４、11 ～ 13 が上層の 141 号住居跡を造る際に埋めた土で、５～ 10 が本来の土坑堆積土である。

出土遺物（第 52 図 15 ～ 25）

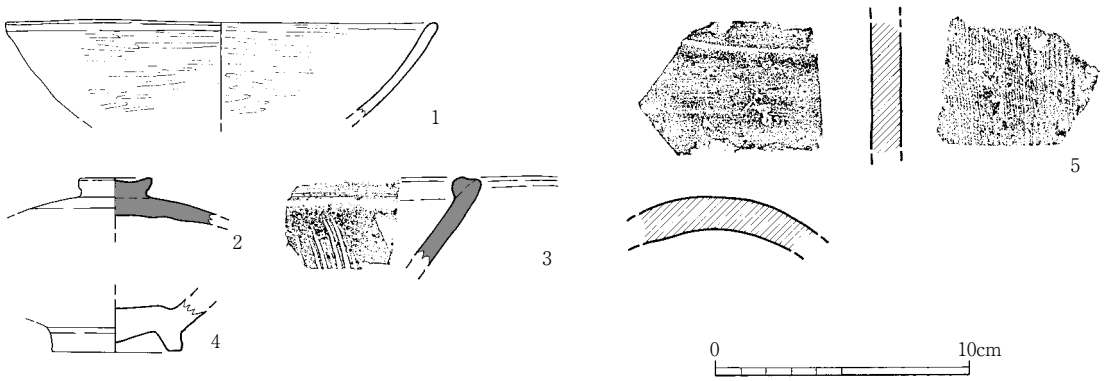
15・16 は土師器模倣坏身で、いずれも外面下位には手持ちヘラケズリを施し、黒斑が認められる。15 の外面受け部上位及び内面全体にミガキを施す。16 は口縁部が直立する。17 は長脚の土師



第 53 図　Ⅳ－B 区 38・43・45・48 号土坑実測図（1/30）



第 54 図　Ⅳ－B 区 46・47 号土坑実測図（1/30）



第 55 図　Ⅳ－Ｂ区 46 号土坑出土遺物実測図（1/3）

器高坏脚部である。外面には縦ナデ、内面にはケズリを施す。18 は平底の土師器大甕底部である。外面はハケ、内面は工具ナデを施す。

19 は器壁が薄い須恵器坏蓋である。天井部との境には鈍い稜、口縁内端部はナデにより窪む。外面には自然釉が付着する。20 ～ 23 は須恵器坏身である。20 ～ 22 の底部には回転ヘラケズリが認められる。21 の焼成は不良である。復元口径は 14cmを測る。23 は口縁内端部はナデにより窪む。外面は薄く自然釉が付着する。24 は玉縁状口縁部の須恵器壺である。

25 は玉縁状口縁の龍泉窯系椀口縁部で、釉は薄い深緑色、胎土は灰色である。混入品。

出土遺物から、古墳時代後期末に属すると考えられる（大庭）。

（6）井戸

４号井戸（図版 17、第 56 図）

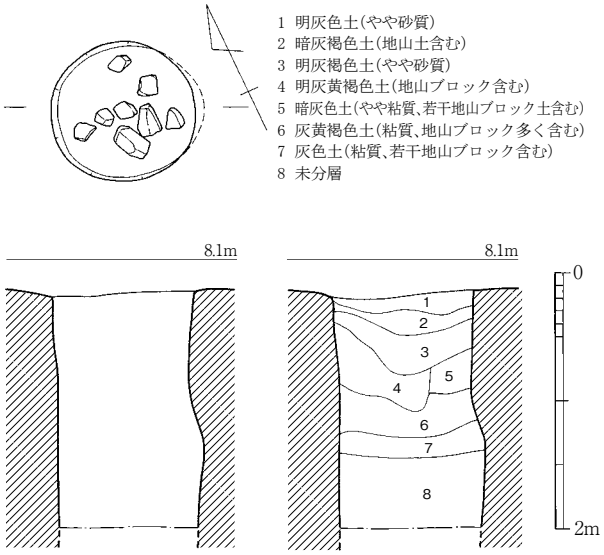
調査区の北側に位置し、径1.10～1.13m、深さ1.82m以上を測る。最下部に近いところまで掘削した段階で湧水があったことから、井戸と判断した。底面より少し浮いた位置に数点の礫がまとまって出土したが、井戸枠等に関わるものではない。遺物はほとんど出土しなかった（下原）。

（7）不明遺構（SX）

SX01（図版 18、第 57 図）

調査区の中央南端に位置し、140 号住居跡を切る。規模は東西 7.6 m × 南北 5.2 m以上、中央部で深さ 0.22 m、最大 0.3 m を測る。地形が傾斜しているため、南壁は一部を除き削平されてしまっており、検出できていない。

遺構の形状は現状でＳ字状を呈する。北東部は浅い窪みに土師器高台付椀が多く廃棄されていたが、南西側は溝が湾曲する形状となり、土器も少ない。特に東側で土師器高台付椀がまとまって出土した。土器の出土状況から、北東部の土器が集中する箇所は、意図的に土器が割られて廃棄されており、祭祀に関わる遺構であっ



第 56 図　Ⅳ－Ｂ区４号井戸実測図（1/60）

た可能性が考えられる。埋土は灰褐色粘質土である。

埋土から鉄釘？２点（第 64 図 27・28）、銅製品パイプ１点（第 64 図 30）が出土した。

出土遺物（図版 21・22、第 58・59 図）

１～24 は土師器椀状坏である。１・２・４・６～11・13～17・19・20 は内外面中位以下は指押さえ痕が残る。１～11 は直口、13～20 は口縁部を外反させるもの、21～24 は底部が平底に近いもので分類し、口径の小→大の順で割り付けている。１で口径 11.2cm、11 で口径 13.4cmを測る。１は深さがあるもの。４は器表の凹凸が顕著なもので、胎土は精良である。５・６はほぼ完形品で、５の口径は 12.8cm。５の底部はヘラ切り後ナデを施す。６の口径は 12.9cm。７の外面には黒斑あり。８の底部はヘラ切り後ナデを施す。９もほぼ完形品で、口径 13cm。口縁端部が玉縁状になる 10 の底部は、ヘラ切りのままである。12 は底部が小さく、口縁部が逆「ハ」の字状に開くもの。

13～20 は口縁部を外反させるもので、13 で口径 12.2cm、20 で口径 13cmを測る。13 は完形に近いもの。15 の器壁は薄い。18 は口縁端部を強く外反させ、内外面には二次被熱痕あり。19 の底部はヘラ切りのままである。20 は直立気味の口縁部から端部を弱く外反させ、外面には黒斑あり。

21～24 は底部が平底に近いもので、21 は口径 13cm、24 は口径 14cm、底径 7.4cm、器高 4.5cmを測る。また 22～24 の底部はヘラ切りのままである。23・24 は口縁部が逆「ハ」の字状に強く開き、深さもあるもの。23 の内面はナデによる凹凸が顕著である。24 はほぼ完形品で、凸レンズ状の底部となる。32～43 に高台がない器形である。

25～27 は土師器皿である。底部は、25 はヘラ切りのちナデ、27 はヘラ切りのままである。25 の口径は 13.4cm、27 の口径は 15cmを測る。28～30 は高台付土師器皿である。30 は口径 14.8cm、底径 7.8cm、器高 2.8cmを測る。31 は小型の土師器高台付坏である。

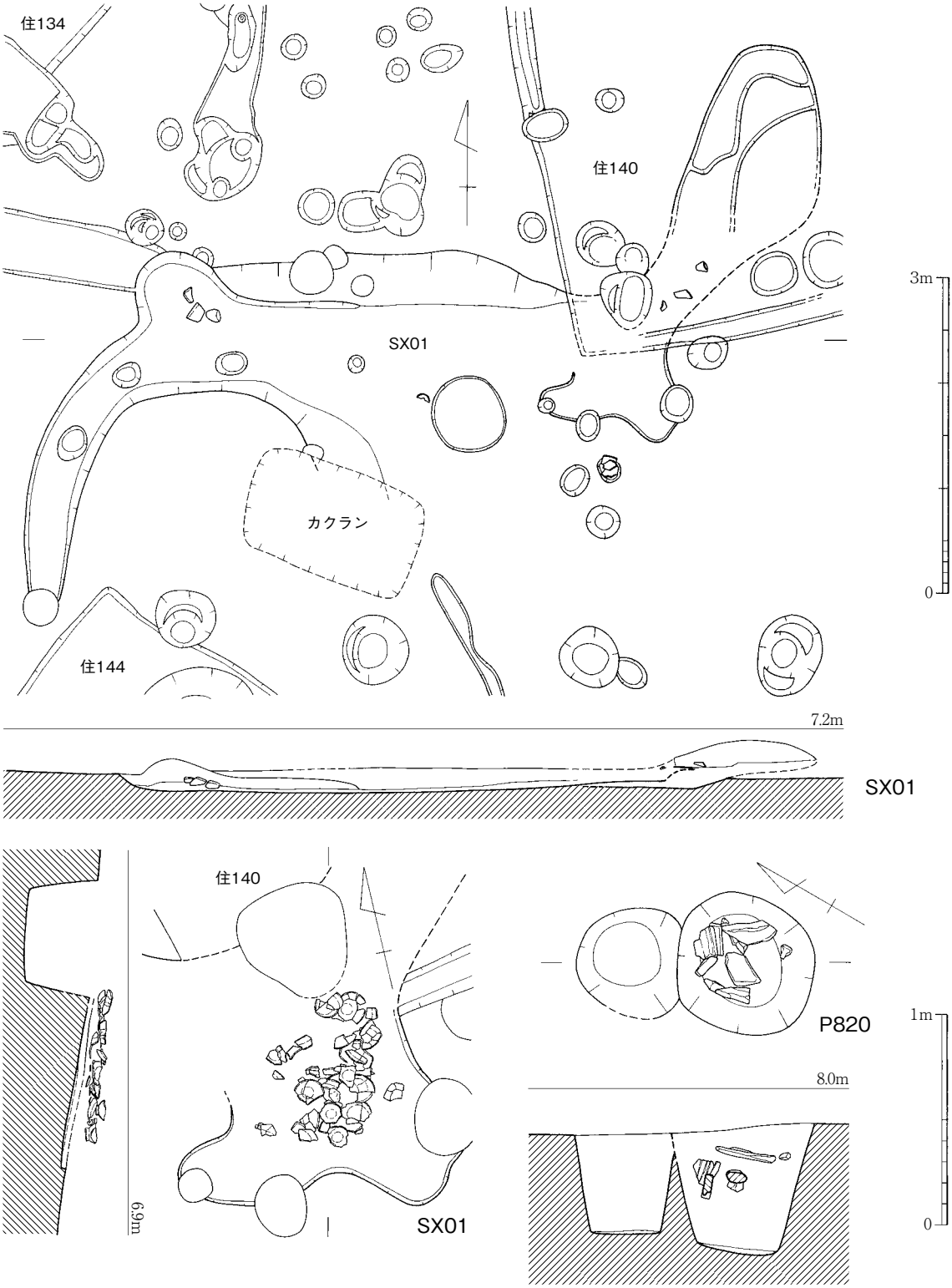
32～43 は土師器高台付坏である。32～37 は高台が直立気味のもの、38～43 は外傾するもので分類した。32 の底径は 8.2cm、36 の底径は 8.4cmで、底径が小→大の順で割り付けを行った。32 の復元口径は 13.4cmである。33 の坏部外面下位には回転ヘラケズリ痕が残る。34 は器壁が厚いもの。35・36 の内面見込みはヘラ切り後ナデを施す。37 は坏部が椀状に丸味を帯びるもので、高台端部も丸く収める。

38～43 は高台が外傾するもの。39～43 は坏部が特に丸味を帯び、39 の底径は８cm、42 の底径は 8.6cmで、底径が小→大の順で割り付けを行った。38 は坏部外面下位に回転ヘラケズリ痕が残る。復元口径 13cmで、口縁端部は肥厚させる。39 の内面はナデによる凹凸が顕著である。43 は復元口径 14.5cm、底径 8.2cm、器高 6.5cmを測る。坏部外面はナデによる凹凸が顕著である。44・45 はボタン状つまみ付の土師器坏蓋である。いずれも天井部一部のみ回転ヘラケズリを行う。

46～49 は土師器甕である。46 は復元口径 24cmを測り、張りのない長胴の胴部外面には縦タタキ痕が残る。外面にはススが付着する。47～49 は小型品で、48・49 は二次被熱痕あり。49 の胴部外面には密な縦タタキ痕が残る。

50 は須恵器坏身で、天井部との境には鋭く突出する稜があり、口縁内端部にはナデにより窪む。51 は須恵器高台付坏身である。52 は生焼けの須恵器高坏脚部である。53 は高台付の須恵器壺底部である。54 は畿内系と思われる緑釉陶器椀である。口縁端部は外反させ、釉は緑黄灰色、胎土は須恵質である。

55・56 は手づくね土器である。56 はほぼ完形で、口径 3.1cmを測る。



第 57 図　Ⅳ－B 区 SX01、820 号ピット実測図（1/60、1/30）

57・58 は内面に布目のある製塩土器である。57 は丸底の底部片である。57 は外面に指押さえ痕が認められるもので、顕著な二次被熱痕あり。

出土遺物から、10 世紀前後に属すると考えられる（大庭）。

（8）ピット

820 号ピット（図版 18、第 57 図）

調査区の中央北端に位置する。規模は径 0.65 m、深さ 0.6 mの円形ピットである。ピット埋土中位から片岩系の石材がまとまって出土したことから、柱を固定する石材であった可能性もある。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物はないが、埋土から中世に属すると考えられる（大庭）。

ピット出土遺物（図版 22、第 60 図）

１は弥生後期の高坏脚部である。坏部との接合部はきれいに整形されており、後に何かに転用されたと考えられる。Ｐ 851 出土。２は器壁が薄く、直立する体部に、六条以上の小さな突帯を巡らす。壺になるか。外面には丹塗りを施す。胎土は弥生土器にしてはきわめて精良であり、弥生土器にするには躊躇するが、器種が不明であるため、ここでは弥生土器として報告する。Ｐ 742 出土。

３は復元口径が 36cmを測るきわめて大型の土師器甕である。肩が張らない胴部から口縁部が強く屈曲し、口縁端部はナデで面取りを施す。外面にはハケを行い、口縁部外面にはハケ工具端が明瞭に残る。口縁部内面はハケのちナデ、胴部内面は頸部までケズリを行う。Ｐ 1050 出土。

４・５は土師器高坏で、いずれも外面には黒斑があり、Ｐ 851 出土。４は器壁の厚いもので、口縁端部は丸く収める。坏部外面下位はハケのちナデ、口縁部外面及び坏部内面はナデを施す。５は器表が荒れており、調整は不明である。

６は三角形を呈する高台付土師器坏で、内面見込みにはヘラ切りの痕跡が残る。Ｐ 774 出土。７は高台付須恵器坏である。外面には自然釉が付着する。８は内面に炭素を吸着させた黒色土器Ｂである。Ｐ 664 出土。９は瓦質土器足鍋の足である。内面は黒化する。Ｐ 904 出土（大庭）。

（9）遺構面等

遺構面等出土土器（図版 22、第 61 図）

１は高台付土師器皿である。２は須恵器坏身である。外面には自然釉が付着する。３～７は高台付須恵器坏身である。５の高台との境には回転ヘラケズリ痕が残る。６の内面見込みはヘラ切り痕が残る。７は高台がかなり潰れたもので、深さがないもの。８は平底の須恵器壺底部である。底部外面はヘラ切り後ナデを施す。９は短口縁の須恵器甕で、口縁端部はナデで面取りする。胴部外面は左回りの縦タタキ、内面は同心円文タタキを施す。

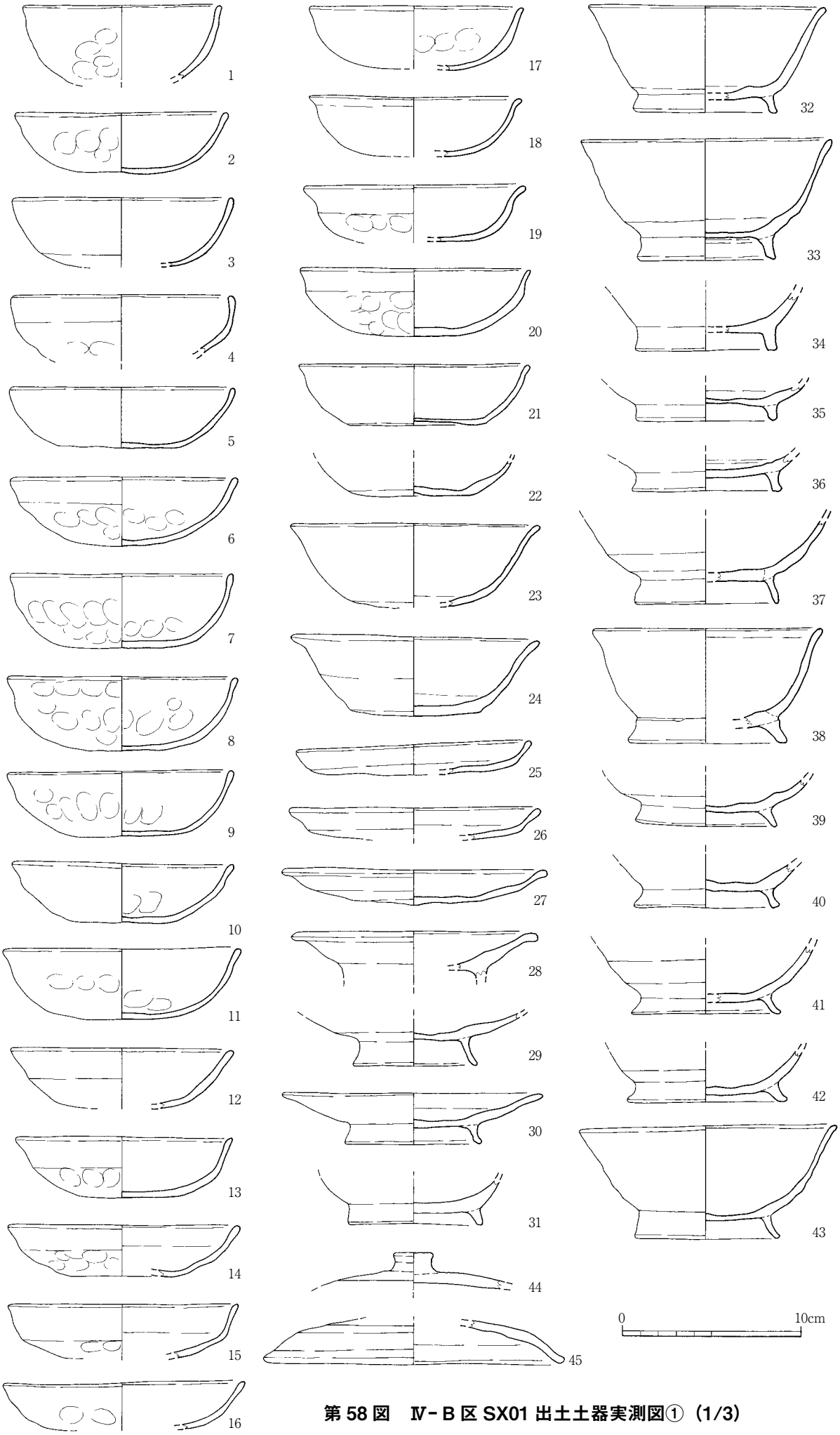
10 の胎土は軟質の土師質であることから、防長産と思われる緑釉陶器椀である。外面には丁寧なケズリ痕が残る。11・12 は手づくね土器である。11 はほぼ完形のもので、口径 3.1cmを測る。12 の外面には黒斑あり。13・14 は土錘である。13 は長さ 2.7cm、幅 1.3cm、孔径 0.5cm、重さ 2.93 g を測る。外面には黒斑あり。14 は長さ 2.85cm、幅 1.15cm、孔径 0.5cm、重さ 2.94 g を測る。

15 ～ 19 は製塩土器で、いずれも内面に布目痕あり。15 は三角状の口縁部である。16 は器壁の薄い体部片で、外面には二次被熱痕あり。17 は丸みを帯びた底部片。18・19 は体部片であるが、小片であるため、天地に自信がない。20 は縄目タタキのある平瓦片。内面には布目痕あり（大庭）。

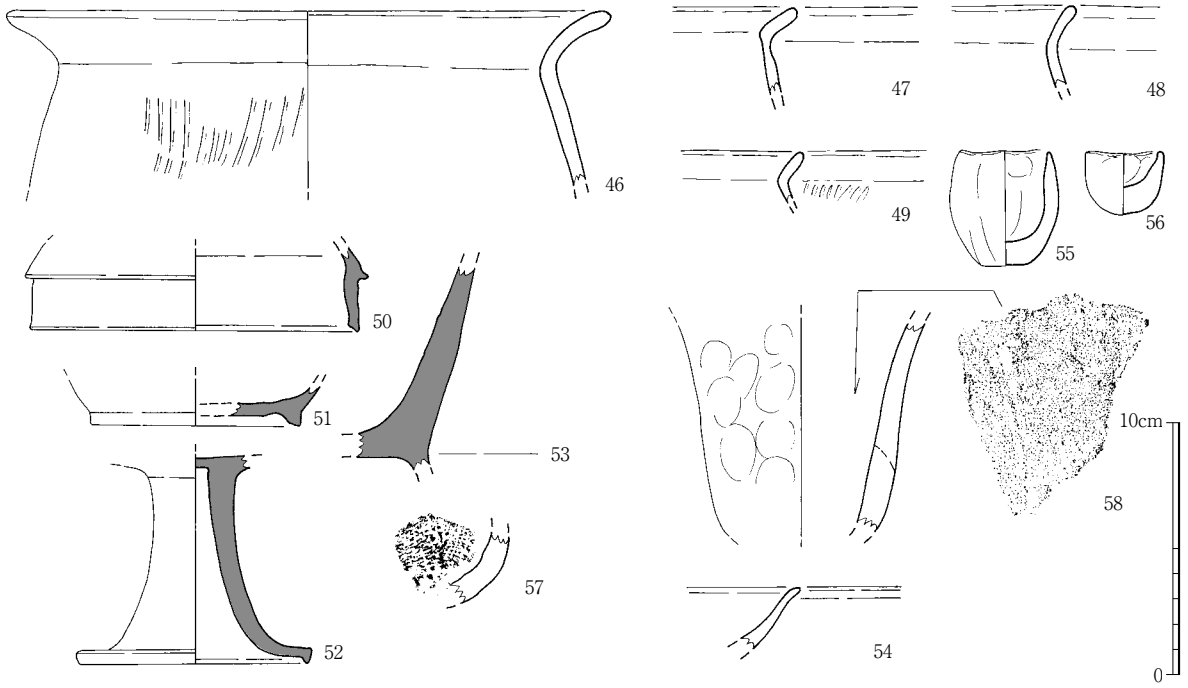
（10）特殊遺物（図版 22、第 62 ～ 64 図）

石製品

１は打製石鏃である。凹基式で抉り 0.6cmを測る。安山岩製。遺構面出土。２は勾玉である。径 0.1



第 58 図　Ⅳ－B 区 SX01 出土土器実測図①（1/3）

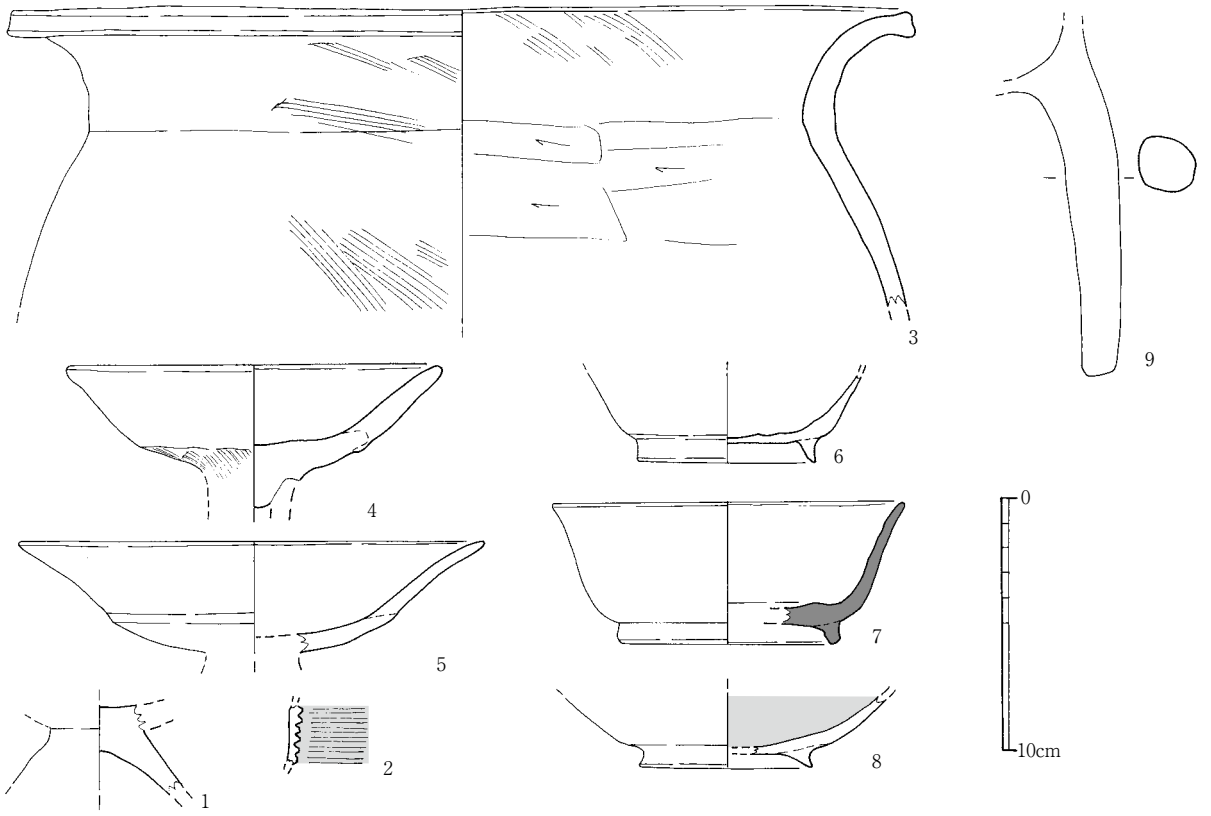


第 59 図　Ⅳ－Ｂ区 SX01 出土土器実測図②（1/3）

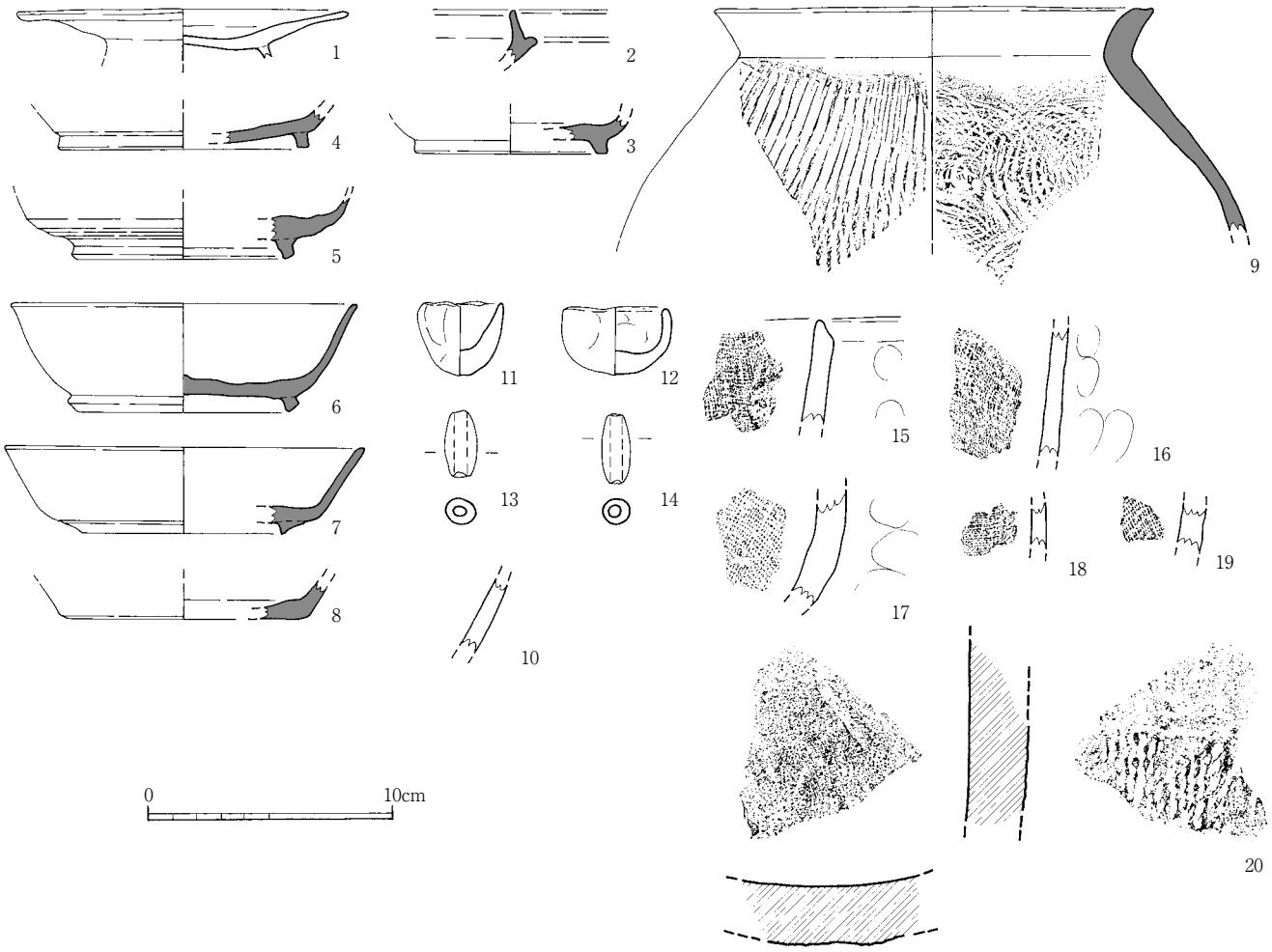
cmの孔を穿ち、両面に研磨によって平坦面が形成される。緑色片岩製。131 号竪穴住居跡覆土出土。３は管玉である。孔径0.3cmを測る。質の悪い碧玉製。140 号竪穴住居跡覆土出土。４は石庖丁である。背部と孔の一部のみが遺存する。復元孔径 0.5cm、背孔１cmを測る。凝灰岩製。137 号竪穴住居跡覆土出土。５～７は不明石製品である。５は径 0.2cmの孔を穿ち、ややずれた位置に穿孔途中の凹みが見られる。上面中央に紐擦れと考えられる擦痕が認められ、垂飾品と考えられる。緑色片岩製。Ｐ 733 出土。６は一部にのみ幅４mm ほどの研磨痕が認められ、砥石として使用したと考えられるが、対象物など詳細は明確でない。泥岩製。134 号竪穴住居跡南東覆土下層出土。７は孔が５つほど穿たれる。孔が接している部分も認められ、詳細は不明である。滑石製。120 号竪穴住居跡カマド構築土内出土。

８～ 14 は砥石である。石質と大きさから 14 は置き砥の仕上げ砥、他は持ち砥の仕上げ砥と考えられる。８は上面のみ砥面とする。硬質砂岩製。140 号竪穴住居跡覆土下層出土。９は小片で２面を砥面とする。金属製刃器の研磨痕が認められる。硬質砂岩製。遺構面出土。10 は断面偏五角形を呈し、５面を砥面とする。粘板岩製。142 号竪穴住居跡覆土出土。11 は４面を砥面とし、中央が使用のため凹む。白色頁岩製。137 号竪穴住居跡覆土出土。12 は欠損するが４面が砥面として残る。砂岩製。120 号竪穴住居跡覆土出土。13 は大きく欠損するが、２面が砥面として残る。粘板岩製。122 号竪穴住居跡覆土出土。14 は３面が砥面として残る。使用痕は明確には認められない。粘板岩製。122 号竪穴住居跡覆土出土。15 ～ 17 はすり石である。15 は両端部を磨り面とし側面にも一部磨りの痕跡が見られる。花崗岩製。141 号竪穴住居跡カマド内出土。16 は上面のみ磨りの痕跡が見られる。凝灰岩製。132 号竪穴住居跡覆土出土。17 は上面および側面に磨りの痕跡が見られる。凝灰岩製。132 号竪穴住居跡覆土出土。

18 ～ 21 は台石である。18 は擦痕等は不明瞭だが、長大な台石となるか。安山岩質凝灰岩製。SX01 出土。19 は中央がやや凹んでおり、磨り台と考えられる。凝灰岩製。132 号竪穴住居跡覆土出土。20 は上面に磨り一部叩きの痕跡が見られる。花崗岩製。132 号竪穴住居跡覆土出土。21 は大型の

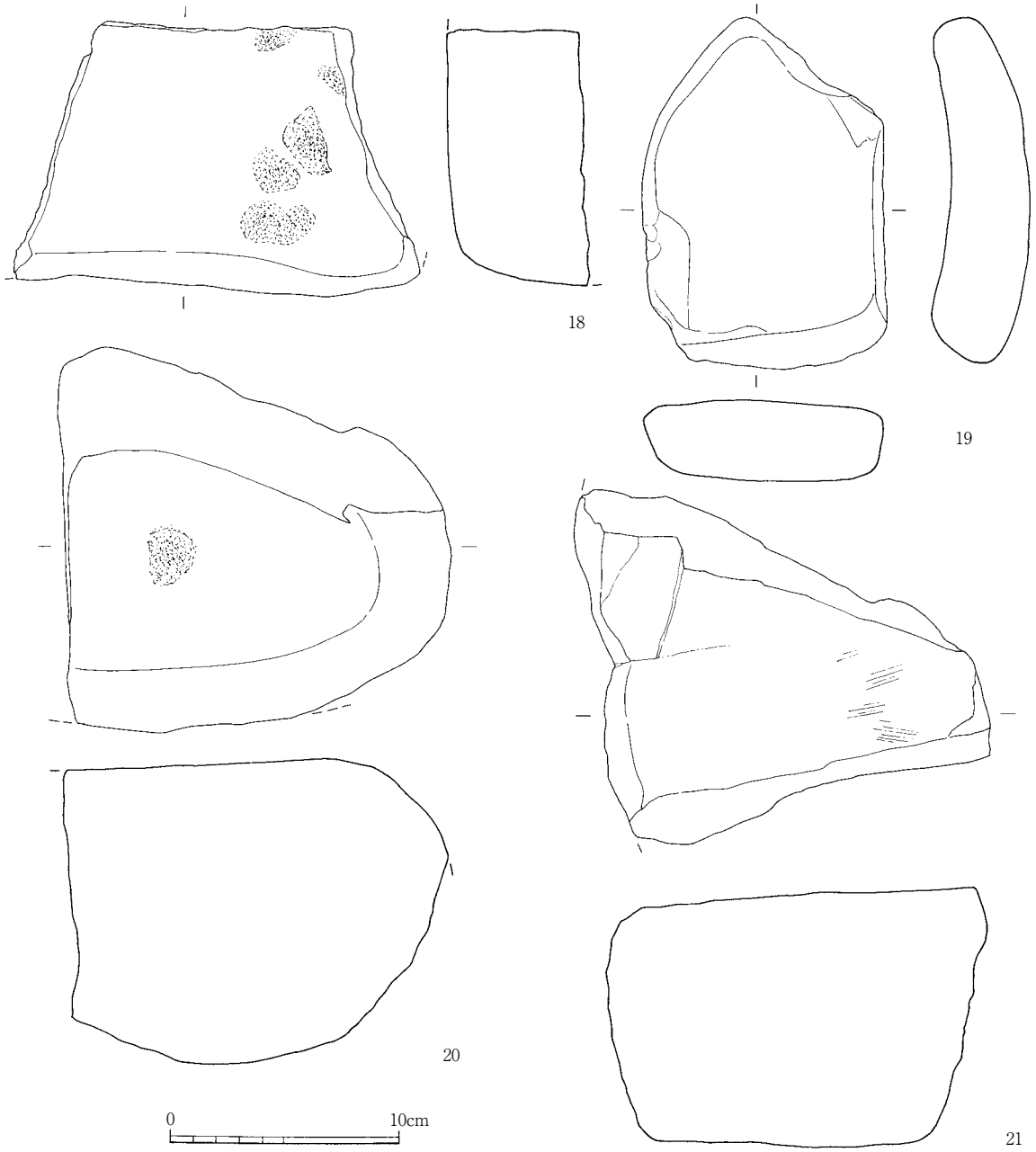


第 60 図　Ⅳ－Ｂ区ピット出土土器実測図（1/3）



第 61 図　Ⅳ－Ｂ区遺構面等出土土器実測図（1/3）

第 62 図　Ⅳ－B 区出土特殊遺物実測図①（1 ～ 3 は 2/3、4 ～ 9 は 1/2、10 ～ 17 は 1/3）



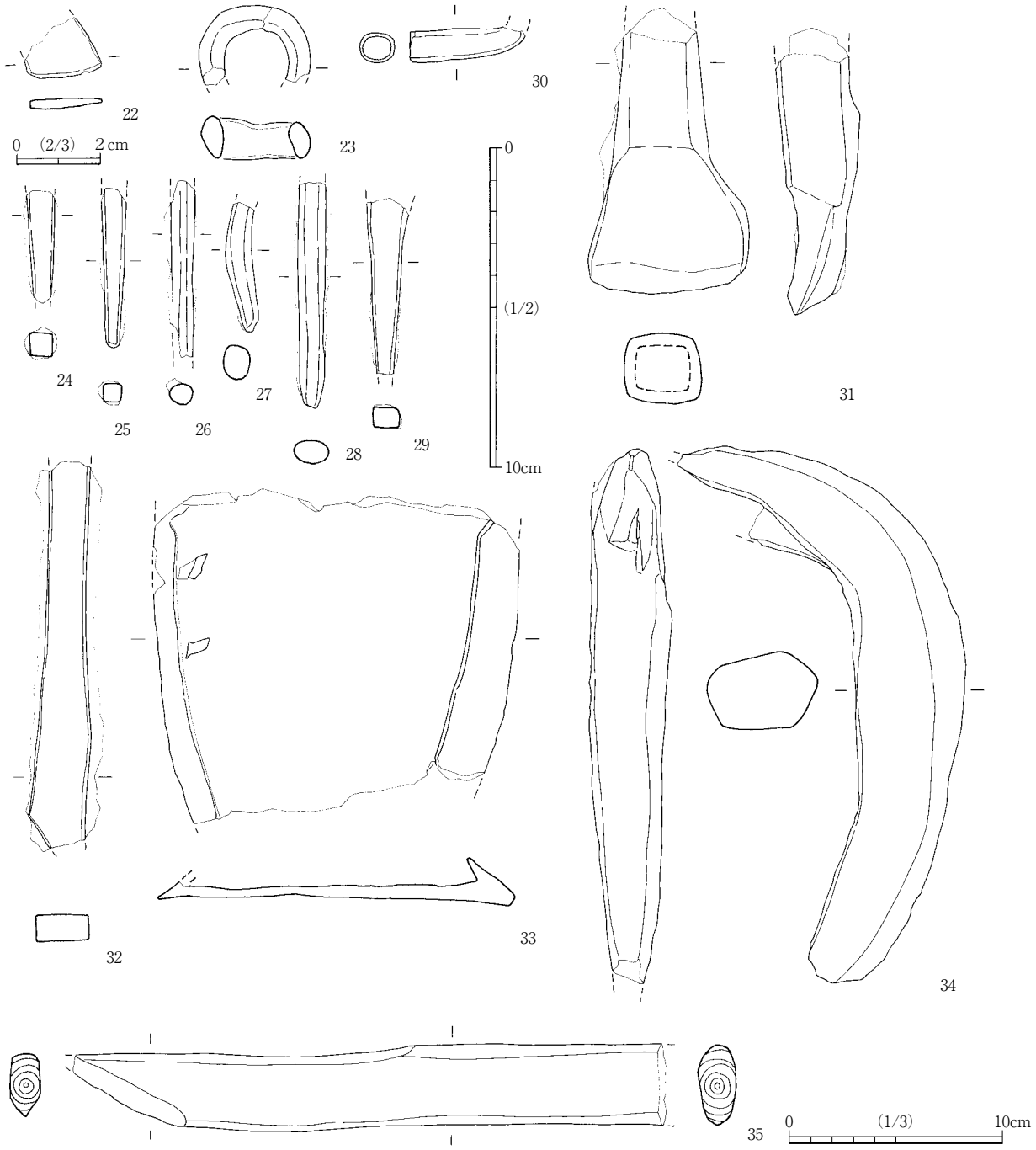
第 63 図　Ⅳ－Ｂ区出土特殊遺物実測図②（1/3）

台石で上面にわずかに擦痕が認められる。斑岩系石材製。120 号竪穴住居跡覆土出土。

金属製品

22 は不明鉄片である。厚さからは鉄鏃と考えられるが、刃部の形成は認められない。138 A号竪穴住居跡カマド付近出土。23 は不明鉄製品である。耳環状に屈曲する。46 号土坑出土。24・25 は鏃ないしは釘か。断面方形で下に向かって幅を減ずる。24 はＰ 792 出土。25 はＰ 838 出土。26 ～ 29 は釘か。断面円形に近い。26 は遺構面出土。27・28 は SX01 出土。29 は 46 号土坑出土。30 はパイプである。内径 0.9cmを測る。SX01 出土。31 は斧か。錆が著しいがＸ線撮影によりソケット部があることがわかった。32 は不明鉄製品である。断面四角形の棒状を呈し、一部が屈曲する。33 は鋤先である。木製の鋤に差込み刃部とするもので、1cm程が上方に突出する。錆が著しく、木質等は確認できなかった。34 は不明鉄製品である。鞍状に緩やかに屈曲し、先端が尖る。他の部材と接合できるような構造は認められず、用途は不明。31 ～ 34 は 46 号土坑出土。

木製品



第 64 図　Ⅳ－Ｂ区出土特殊遺物実測図③（22 は 2/3、23 ～ 29・35 は 1/2、31 ～ 34 は 1/3）

35 は刀形木製品である。先端付近が遺存しており、両面から削ることで先端部分のみ刃付がなされる。芯材を用いる。45 号土坑出土（城門）。

(11) 小結　Ⅳ−Ｂ２区のまとめ

以下では、当区の調査成果のまとめを行うが、内容的にはⅤ−１で行うⅣ−Ｂ２区、Ⅳ−Ｃ区の遺構変遷の検討と重複する部分が多いことから、ここでは概要のみ述べるにとどめたい。

まずこれまでの調査及び刊行された報告書から本遺跡のおおまかな変遷をみてみると、調査区内から弥生時代中期前半の土器が少量出土するものの、この時期の遺構自体は発見されていない。おそらく調査区外の丘陵に弥生時代中期の小規模な集落が存在した可能性が考えられる。

集落は弥生時代後期後半に成立し、それ以降古墳時代前期までに一度目の盛期を迎え、古墳時代

挿図	図版番号	区	出土遺構	種類	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	残存	備考
62-1	図版22	Ⅳ-B	遺構面	石製品	打製石鏃	2.75	(1.85)	0.50	(1.34)	0.8	安山岩
62-2	図版22	Ⅳ-B	住131覆土	石製品	勾玉	2.65	1.70	0.60	3.94	1	緑色片岩
62-3	図版22	Ⅳ-B	住140覆土	石製品	管玉	2.10	0.80	0.80	2.40	1	碧玉
62-4		Ⅳ-B	住137覆土下層	石製品	石庖丁	(2.50)	(2.60)	0.60	(4.38)	0.1	凝灰岩
62-5	図版22	Ⅳ-B	P733	石製品	不明	4.20	3.25	1.20	34.46	1	緑色片岩
62-6		Ⅳ-B	住134覆土下層	石製品	不明	4.10	2.85	(2.10)	(31.78)	0.8	泥岩
62-7		Ⅳ-B	住120カマド構築土内	石製品	不明	(3.20)	(3.45)	(1.90)	(16.00)	0.1	滑石
62-8		Ⅳ-B	住140覆土下層	石製品	砥石	5.30	(3.10)	1.90	(42.72)	0.5	硬質砂岩
62-9		Ⅳ-B	東遺構面	石製品	砥石	(3.70)	(2.70)	(2.20)	(38.57)	0.1	硬質砂岩
62-10		Ⅳ-B	住142覆土	石製品	砥石	(10.00)	(4.70)	(4.70)	(260.00)	0.4	粘板岩
62-11		Ⅳ-B	住137覆土	石製品	砥石	(8.80)	5.85	4.40	(213.70)	0.5	白色頁岩
62-12		Ⅳ-B	住120覆土	石製品	砥石	(6.00)	(4.20)	1.60	(51.12)	0.5	砂岩
62-13		Ⅳ-B	住122覆土	石製品	砥石	(6.70)	(6.05)	(3.60)	(178.88)	0.1	粘板岩
62-14		Ⅳ-B	住122覆土	石製品	砥石	(17.45)	(7.10)	(4.70)	(768.00)	0.7	粘板岩
62-15		Ⅳ-B	住141覆土	石製品	すり石	12.40	6.00	4.80	543.00	1	花崗岩
62-16		Ⅳ-B	住132覆土	石製品	すり石	20.30	7.75	6.30	1285.00	1	凝灰岩
62-17	図版22	Ⅳ-B	住132覆土	石製品	すり石	11.85	8.20	5.10	700.00	1	凝灰岩
63-18		Ⅳ-B	SX01	石製品	台石	(17.80)	(12.00)	(6.30)	(2100.00)	0.3	安山質凝灰岩
63-19	図版22	Ⅳ-B	住132覆土	石製品	台石	15.40	10.70	3.50	976.00	1	凝灰岩
63-20		Ⅳ-B	住132覆土	石製品	台石	(16.85)	(17.30)	(13.90)	(4900.00)	0.4	花崗岩
63-21		Ⅳ-B	住120覆土	石製品	台石	(15.60)	(18.30)	(11.40)	(3700.00)	0.3	斑岩系
64-22		Ⅳ-B	住138Aカマド付近	鉄製品	鉄片	(1.35)	(1.80)	0.25	(0.90)	0.1	
64-23		Ⅳ-B	土46	鉄製品	不明	(2.50)	3.50	1.30	(8.01)	0.5	
64-24		Ⅳ-B	P792	鉄製品	鏃or釘？	(3.50)	(0.90)	0.75	(4.22)	0.2	
64-25		Ⅳ-B	P838	鉄製品	鏃or釘？	(4.95)	(0.80)	(0.80)	(5.06)	0.2	
64-26		Ⅳ-B	遺構面	鉄製品	釘？	(5.60)	0.75	0.75	(5.48)	0.3	
64-27		Ⅳ-B	SX01	鉄製品	釘？	(4.00)	1.05	1.05	(6.44)	0.3	
64-28		Ⅳ-B	SX01	鉄製品	釘？	(7.00)	0.90	0.90	(12.45)	0.4	
64-29		Ⅳ-B	土46	鉄製品	釘？	(5.55)	(1.35)	0.65	(8.25)	0.7	
64-30		Ⅳ-B	SX01	銅製品	パイプ	3.60	1.10	1.10	(3.31)	0.8	
64-31	図版22	Ⅳ-B	土46	鉄製品	斧	(13.40)	7.70	4.00	(418.00)	0.8	
64-32	図版22	Ⅳ-B	土46	鉄製品	不明	(18.15)	3.00	1.30	(294.00)	0.7	
64-33	図版22	Ⅳ-B	土46	鉄製品	鋤先	(15.70)	17.20	2.20	(250.00)	0.7	
64-34		Ⅳ-B	土46	鉄製品	不明	(13.50)	(25.20)	3.90	(641.00)	不明	
64-35	図版22	Ⅳ-B	土45	木製品	刀形木製品	(18.70)	2.60	1.25	－	0.3	

(　)は残存値

第４表　Ⅳ－Ｂ区出土特殊遺物一覧表

中期には一旦衰えるものの、古墳時代後期に一度目以上の盛期を迎えるという、二度の盛期が確認されている。一度目の盛期のピークは弥生時代後期終末～古墳時代前期前半で、南北丘陵に多くの竪穴住居が認められ、丘陵北側には地域首長の居館機能を持ったと想定される方形周溝が少なくとも３ヶ所存在する。このピーク時期より若干時期が遅れる可能性があるが、中央谷部には木製導水施設が設置されている。また本遺跡と同一丘陵に位置するビワノクマ古墳が古墳時代前期後半の築造と推測される。このことから、本遺跡は弥生時代後期終末～古墳時代前期には地域首長の拠点集落であったと考えられる。

二度目の盛期である古墳時代後期後半～末には、南北丘陵に密集して竪穴住居が造られるが、７世紀前半になると集落は急速に衰える。７世紀後半にはⅤ－１、Ⅱ－２区で官衙的配置が認められる大型掘立柱建物群が確認され、特に丘陵北側は官衙的な建物が配置された空間になる。ほぼ同時期に丘陵と谷部を繋ぐように丘陵を巡る道路状遺構が検出されており、中でも南側谷部へのアクセス道路となるⅣ－Ｂ１区で検出された道路状遺構は注目される成果である。中世になると、丘陵のあちこちで区画溝が掘削され、屋敷地として機能していたと考えられる。

以上がこれまで判明した本遺跡の様相であるが、当区においても弥生時代後期後半～古墳時代前期及び古墳時代後期後半～末の二時期に竪穴住居が集中しており、特に古墳時代後期後半の竪穴住居は住居新旧セット関係、粘土で被覆するカマド廃絶方法及び住居内空間の在り方が類推できるものなどの調査成果が確認された。また調査区南端で10世紀の土坑群がまとまって確認されたことは、10世紀段階においても当地が集落として機能していたことを示すものである。

中世段階で検出できた当区の遺構は土坑のみで、丘陵上に比べ集落としての利用度は低くなっていると考えられる。以上先述したように、当区の詳細は、Ⅴ－１で検討していきたい（大庭）。

4　Ⅳ−C区の遺構と遺物

Ⅳ−C区は、二股に分かれた丘陵の南裾部に位置し、国道201号に伴う調査区では最も南端にあたる。調査範囲はⅣ−B区から緩やかに続く丘陵裾部から、現在の山崎川に挟まれた区間で、大部分は谷である。この谷の北側の丘陵上には主に弥生時代後期～中世にかけての大規模な集落が展開しており、そこから落ち込んだ、多量の遺物を含む層が厚く堆積していた。

以下では、Ⅳ−C区の報告を行うが、多量に出土した木製品を含む特殊遺物の執筆は城門義廣、木簡釈文については酒井芳司、その他は進村真之が執筆した。城門及び酒井の執筆分には文末に執筆者名を付している。

（1）調査の経過

平成21年（2009）８月24日より重機による表土掘削を開始した。８月25日、古墳時代から古代を中心とする土器が出土。元北九州市自然史・歴史博物館の藤丸詔八郎先生、視察。９月７日、調査区西端部にトレンチを設定。古代を中心とする土器・木器が大量に出土。転用硯が出土する。９月９日、木簡出土。文字は判読できない。９月10日、文化庁記念物課清野孝之文化財調査官、視察。９月16日、「天平六年十月十八日」銘木簡が出土。９月18日、長崎外国語大学の木本雅康先生が視察。10月５・６日、延永小学校３年生体験発掘。10月13日、太宰府市教育委員会の井上信正氏、視察。10月14日、九州歴史資料館長の西谷正先生、視察。10月22日、新たな調査区、重機による掘削を開始する。11月９日、１号井戸の木枠を検出。11月12日、「符」木簡が出土。12月16日、福岡市教育委員会の山口譲治氏による木器の調査指導。12月24日、１号井戸、重機による断ち割り。12月25日、重機による現場埋戻し後、調査を終了する。

区	遺構種	報告時遺構名	調査時遺構名	備考（名前は報告者名）
Ⅳ−C	土坑	土1001	土1001	進村
Ⅳ−C	土坑	土1002	土1002	進村
Ⅳ−C	土坑	土1003	土1003	進村
Ⅳ−C	土坑	土1004	土1004	進村
Ⅳ−C	土坑	土1005	土1005	進村
Ⅳ−C	土坑	土1006	土1006	進村
Ⅳ−C	土坑	土1007	土1007	進村
Ⅳ−C	土坑	土1008	土1008	進村
Ⅳ−C	土坑	土1009	土1009	進村
Ⅳ−C	土坑	土1010	土1010	進村
Ⅳ−C	土坑	土1011	土1011	進村
Ⅳ−C	土坑	土1012	土1012	進村
Ⅳ−C	土坑	土1013	土1013	進村
Ⅳ−C	土坑	土1014	土1014	進村
Ⅳ−C	土坑	土1015	土1015	進村
Ⅳ−C	土坑	土1016	土1016	進村
Ⅳ−C	井戸	井戸1	井戸1	進村
Ⅳ−C	井戸	井戸2	井戸2	進村
Ⅳ−C	溝	溝11	溝11	進村

第５表　Ⅳ−C区遺構一覧・対照表

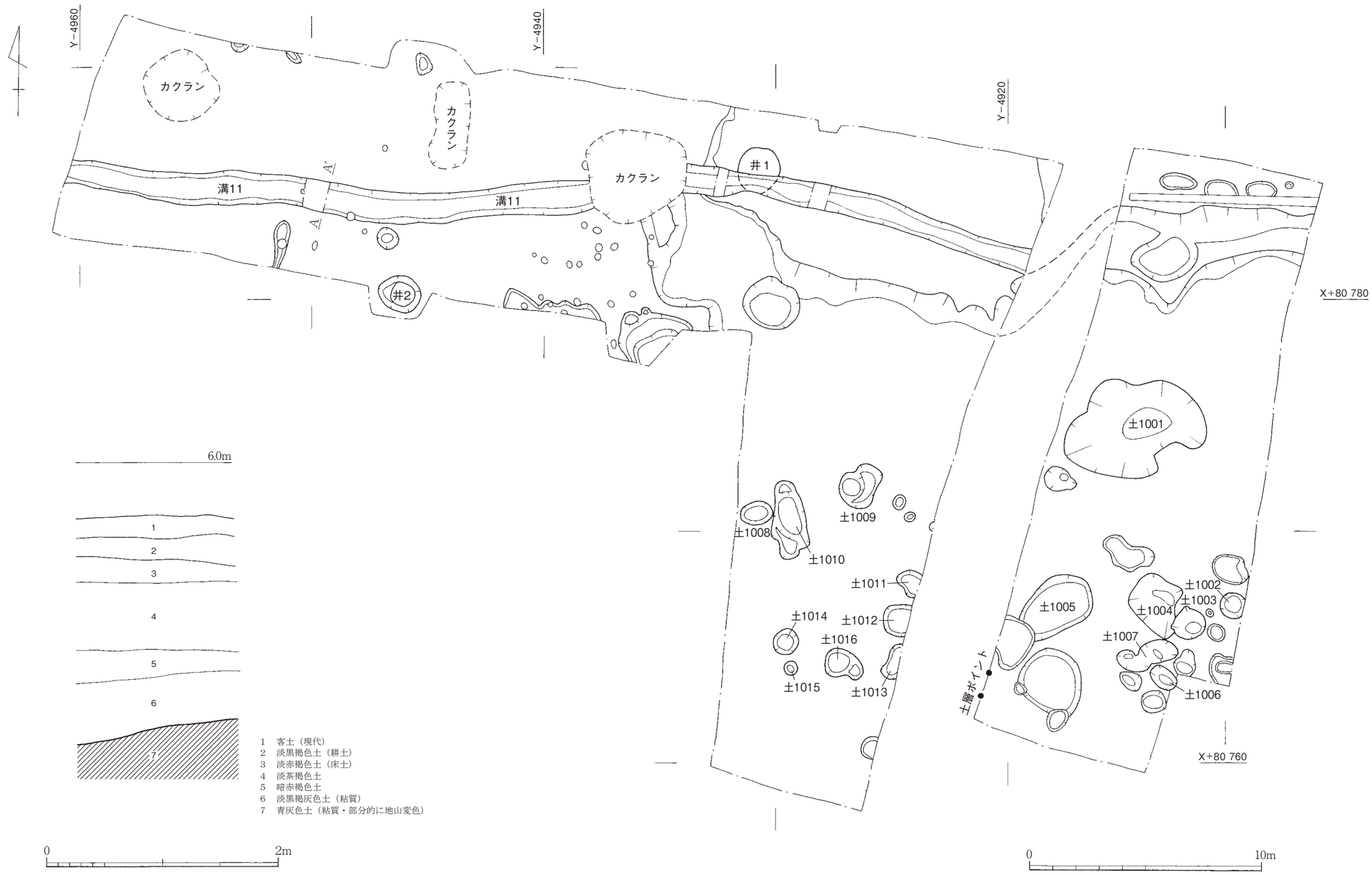
（2）調査区の概要

Ⅳ−C区は山崎川に向かって南に傾斜する地形の最下部に位置する。標高約５ｍの落ち際で井戸２基と溝１条を検出した。さらに下部には弥生時代から古代にかけての遺物包含層が厚く堆積していた。また、遺物包含層の途中から掘り込まれたと考えられる土坑16基を検出した。土坑の多くは木製品の未製品を水漬けするためのものであったと考えられる。遺構・遺物の時期は弥生時代後期～中世にかけてのものである。

（3）土坑

1001号土坑（第66図）

調査区の東側中央付近で検出した。規模は4.5m×6.1mの不整形な楕円形である。深さは0.25mで中心にかけて緩やかに深くなっている。遺物は木製の鋤（第86図１）、下駄（第86図２）、ねずみ返し（第



第 65 図　延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ−C 区全体図（1/40、1/200）

86 図３）が出土している。遺構の時期は金属の刃部を装着する形状の鋤が出土していることから古墳時代後期以降と考えられる。

1002 号土坑（図版 24、第 66 図）

調査区の東側南寄りで検出した。規模は 1.1m × 1.1m のほぼ円形である。深さ約 0.3m で、底面は平らである。遺物は、木製のねずみ返し（第 87 図１、第 88 図１）と結界杭の可能性のある棒状製品（第 88 図２）が出土している。時期は不明である。

1003 号土坑（図版 25、第 66 図）

調査区の東側南寄りで検出した。1004 号土坑を切る。規模は 1.4m × 1.3m のほぼ円形である。深さ 0.3m で、床面は平らである。遺物は須恵器、土師器の他、木製の棒状器具材（第 88 図３）が出土している。時期は、須恵器甕の胴部片から古墳時代後期以降である。

1004 号土坑（第 66 図）

調査区の東側南寄りで検出した。1003 号土坑に切られる。規模は 2.0m × 2.5m の不整形な方形である。深さは約 0.2m である。遺物は土師器甕と木製の棒状器具材が出土している。遺構の時期は古墳時代後期である。

出土遺物（図版 33、第 67 図１）

１は土師器の甕で口径 16.8㎝、胴部最大径 25.5㎝、器高 30.5㎝である。器形は比較的球形に近い。外面の調整は粗いハケメ、内面の調整はケズリである。口縁付近はナデ調整を施す。

1005 号土坑（第 66 図）

調査区の東側南寄りで検出した。規模は 2.2m × 3.3m の楕円形である。深さは約 0.3m で床面は平らである。遺物は木製の壺鐙（第 88 図４）の破片が出土している他、板状や棒状の木製品が出土している。時期は不明である。

1006 号土坑（第 66 図）

調査区の東側南寄りで検出した。規模は 0.8m × 1.2m の楕円形である。深さは約 0.4m である。遺物は板状器具材（第 89 図１）や木製の棒状製品が出土している。時期は不明である。

1007 号土坑（第 66 図）

調査区の東側南寄りで検出した。規模は 1.0m × 2.6m の不整形な長楕円形である。深さは約 0.4m である。遺物は土師器の碗が出土している。遺構の時期は古墳時代後期である。

出土遺物（第 67 図２）

２は土師器の碗である。口径 13.7㎝、器高 5.2㎝である。丸底で口縁付近が一度すぼまった後に

文中写真 19　1005 号土坑木製品出土状況（南東から）

小さく外反する。外面の調整は底部付近がケズリ、その他の部分はミガキである。内面の調整はミガキである。

1008 号土坑（図版 25、第 68 図）

調査区の中央付近で検出した。規模は 1.0m × 1.2m の楕円形である。深さは約 0.4m である。遺物は土師器甕の他、連結したまま製作中の農具未製品（第 90 図１・２）、井戸枠？（第 89 図２）が出土している。遺構の時期は古墳時代中期である。

出土遺物（第 67 図３）

３は土師器の甕である。口縁はわずかに内湾し、胴部は球形に近い。外面は丁寧なハケメ調整、内面はケズリである。外面に多量のススが付着する。口径 16.0㎝、胴部最大径 26.6㎝、器高 29.9㎝である。

1009 号土坑（図版 25、第 68 図）

調査区の中央付近で検出した。規模は 1.7m × 3.3m の長楕円形である。深さは約 0.5m で中央部分が一段深くなっている。遺物は土師器の他、木製の杵（第 91 図２）、札状の木製品（第 118 図８・９）、鋤の未製品（第 91 図１）、竹箕状の製品が出土した。遺構の時期は古墳時代前期である。

出土遺物（図版 33、第 69 図）

１～５は小形壺である。１はつくりが精緻であるが、外面にはハケメが明瞭に残る。口径 9.0㎝、胴部最大径 8.0㎝、器高 7.4㎝である。２の内面は横方向のケズリである。外面底部に黒斑が付着する。口径 10.0㎝、胴部最大径 10.7㎝、器高 10.5㎝である。３の口縁内面にはハケメ工具の痕跡が強く残る。外面には黒斑が広く付着する。口径 11.2㎝、胴部最大径 10.9㎝、器高 8.7㎝である。４の外面はハケメ、内面はケズリである。口径 10.5㎝、胴部最大径 12.5㎝、器高 12.0㎝である。５は外面に強い圧痕が残る。内面には粘土帯の接合痕が明瞭に残る。胴部最大径 12.6㎝である。６は山陰系の二重口縁壺である。口縁部と頸部との境に接合痕が残る。口径 15.6㎝である。７は在地形の甕である。外面はハケメ、内面はケズリと部分的にハケメを行っている。器壁は比較的薄い。外面下半のほぼ全体にススが付着する。口径 18.0㎝、胴部最大径 24.2㎝、器高 26.3㎝である。

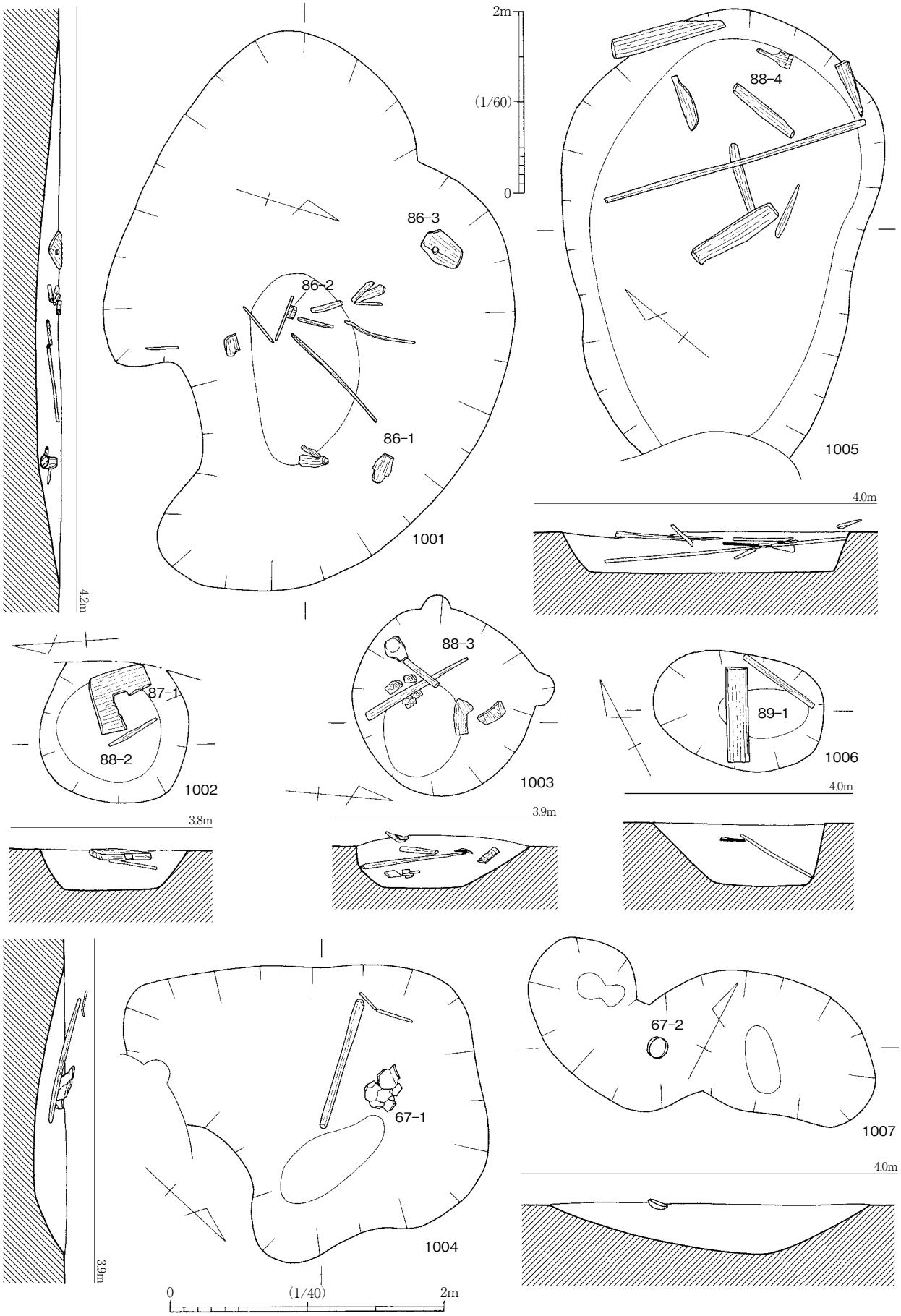
1010 号土坑（図版 26、第 68 図）

調査区の中央付近で検出した。規模は 1.7m × 3.3m の長楕円形である。深さは約 0.5m で中央部分が一段深くなっている。遺物は土師器の他、木製の梯子？（第 92 図３）、鍬（第 92 図１・２）、板状器具材が出土している。遺構の時期は古墳時代前期である。

出土遺物（図版 33、第 70 図）

１・２は壺である。１は口縁が大きく外反するもので、内外面の調整はともにハケメである。頸部に焼成後の小さな穿孔を施す。胴部最大径 18.0㎝である。２は球形の胴部で底部がわずかに残る壺である。外面過半部はケズリ、上半部はハケメ、内面の調整はハケメである。底径 6.2㎝、胴部最大径は 31.3㎝である。

３～５は布留系の甕である。３の外面は細かいハケメ、内面はケズリである。口径 17.0㎝、胴部最大径 24.0㎝である。４の内面はケズリ、外面および口縁内外面はハケメである。外面にはススが



第 66 図　Ⅳ-C 区 1001 ～ 1007 号土坑実測図（土 1001 は 1/60、他は 1/40）

付着する。口径 17.0㎝である。５の口径は 15.0㎝である。６は甕である。口径 12.8㎝で、７は鉢である。厚い底部から球形状に立ち上がる。口縁はいびつである。外面の調整はハケメ、内面はケズリと一部ハケメを行っている。外面にはススが付着する。口径 16.1㎝、器高 11.3㎝である。８は鉢であるが、焼成前底部に穿孔を行っているため、甑としての機能をもったものであろうか。内面の調整はケズリである。口径 14.8㎝、器高 12.1㎝である。外面上部にススが付着する。

1011 号土坑（図版 26、第 68 図）

調査区の南寄りで検出した。規模は 1.1m × 0.9m 以上の不整形で東側が調査区外へ延びる。深さは中央部分が一段深く、約 0.5m である。遺物は鞍橋（第 93 図１）が出土している。遺構の時期は古代以降であろうか。

1012 号土坑（図版 26、第 68 図）

調査区の南寄りで検出した。規模は 1.3m × 1.3m 以上の円形であると考えられ、東側が調査区外へ延びる。深さは約 0.4m である。遺物は須恵器・土師器の他、木製の砧（第 93 図２）が出土している。遺構の時期は古墳時代後期である。

出土遺物（図版 33、第 71 図１～３）

１は土師器の甕である。口縁部と頸部の境は不明瞭である。口径 29.0㎝である。２・３は須恵器の杯身である。２は口径 11.6㎝、器高 5.0㎝である。３は外面底部にヘラ記号を施す。口径 11.6㎝、器高 5.0㎝である。

1013 号土坑（図版 27、第 68 図）

調査区の南寄りで検出した。規模は 0.6m 以上× 1.5m で東側が調査区外へ延びる。深さは約 0.4m である。遺物は土師器の甕が出土している。遺構の時期は古墳時代後期である。

出土遺物（図版 33、第 71 図４）

４は土師器の甕である。胴部と口縁の境は不明瞭である。外面はタタキの後、ハケメである。内面はケズリである。器壁は厚い。口径 15.1㎝、胴部最大径 20.0㎝、器高 20.7㎝である。

1014 号土坑（図版 27、第 68 図）

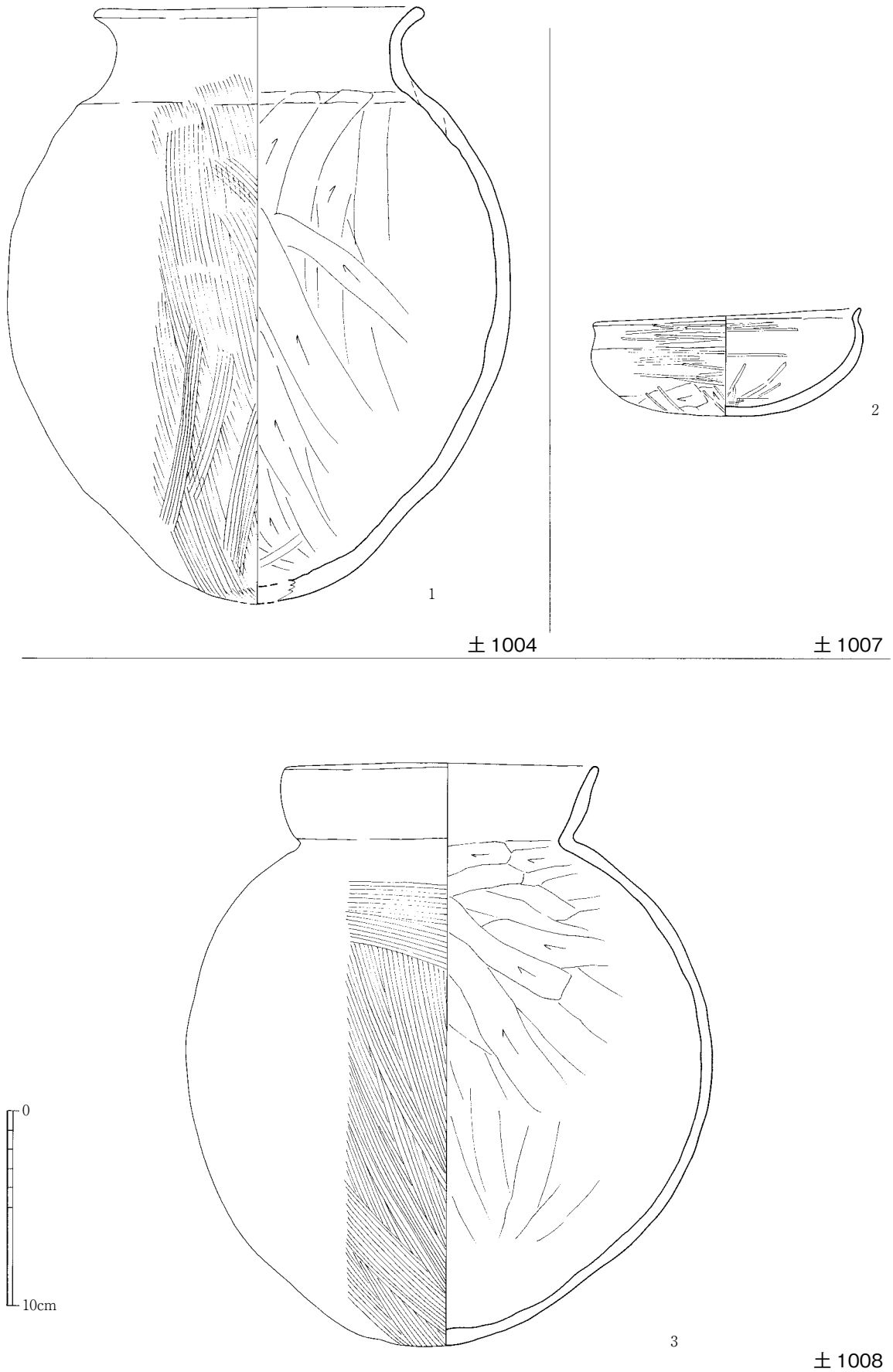
調査区の南寄りで検出した。規模は 0.9m × 1.0m の円形である。深さは 0.3m である。遺物は木製の刀形（第 93 図４）、ヘラ状製品？（第 93 図８）、鍬か鋤（第 93 図３）、板状器具材（第 93 図９・10）、棒状器具材（第 93 図５～７・11 ～ 13）が出土している。遺構の時期は不明である。

1015 号土坑（図版 27、第 68 図）

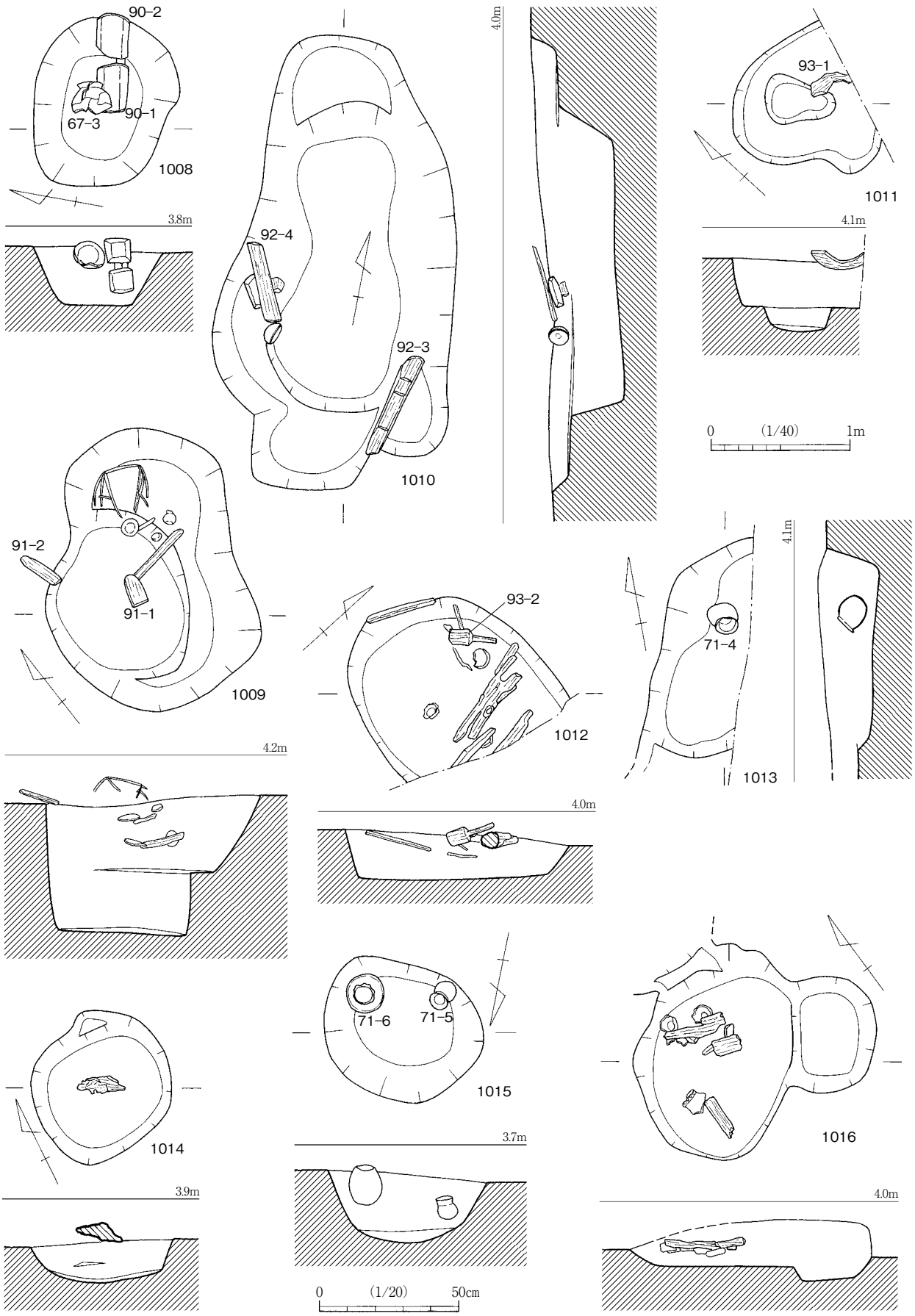
調査区の南寄りで検出した。規模は 0.5 × 0.6m の円形である。深さは約 0.3m である。遺物は土師器が出土している。遺構の時期は古墳時代前期である。

出土遺物（図版 33、第 71 図５・６）

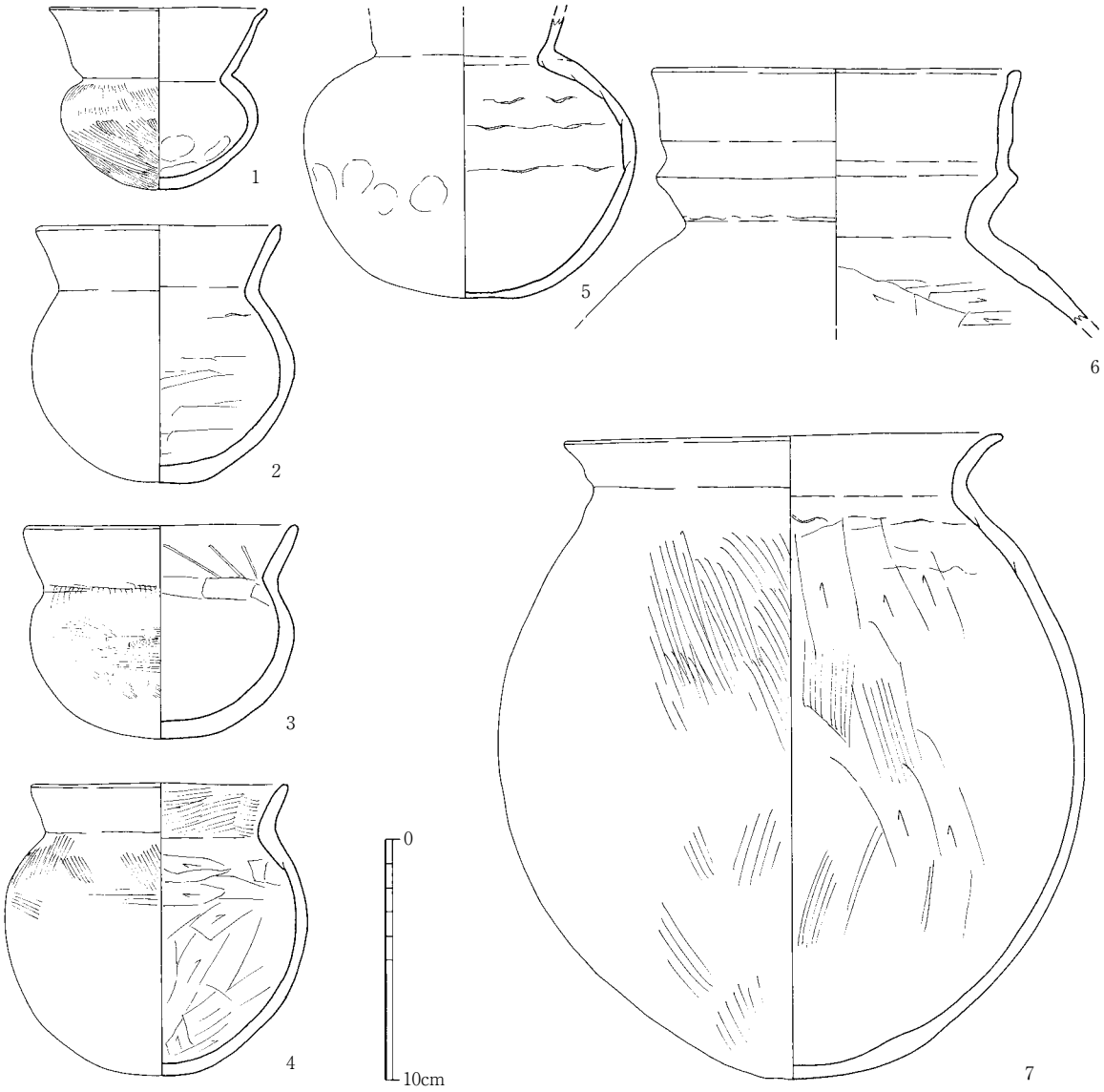
５・６は小形の壺である。１は薄く精緻な作りである。口径 5.0㎝、胴部最大径 7.4㎝、器高 8.0



第67図　Ⅳ-C区1004・1007・1008号土坑出土土器実測図（1/3）



第 68 図　Ⅳ-C 区 1008 ～ 1016 号土坑実測図（1015 は 1/20、他は 1/40）



第 69 図　Ⅳ-C 区 1009 号土坑出土土器実測図（1/3）

cmである。２は口径 9.0cm、胴部最大径 13.1cm、器高 14.0cmである。

1016 号土坑（図版 28、第 68 図）

調査区の南寄りで検出した。規模は 1.3m × 1.8m の不整形で、深さは約 0.2m である。遺物は土師器の他、木製品が出土している。遺構の時期は古墳時代であろう。

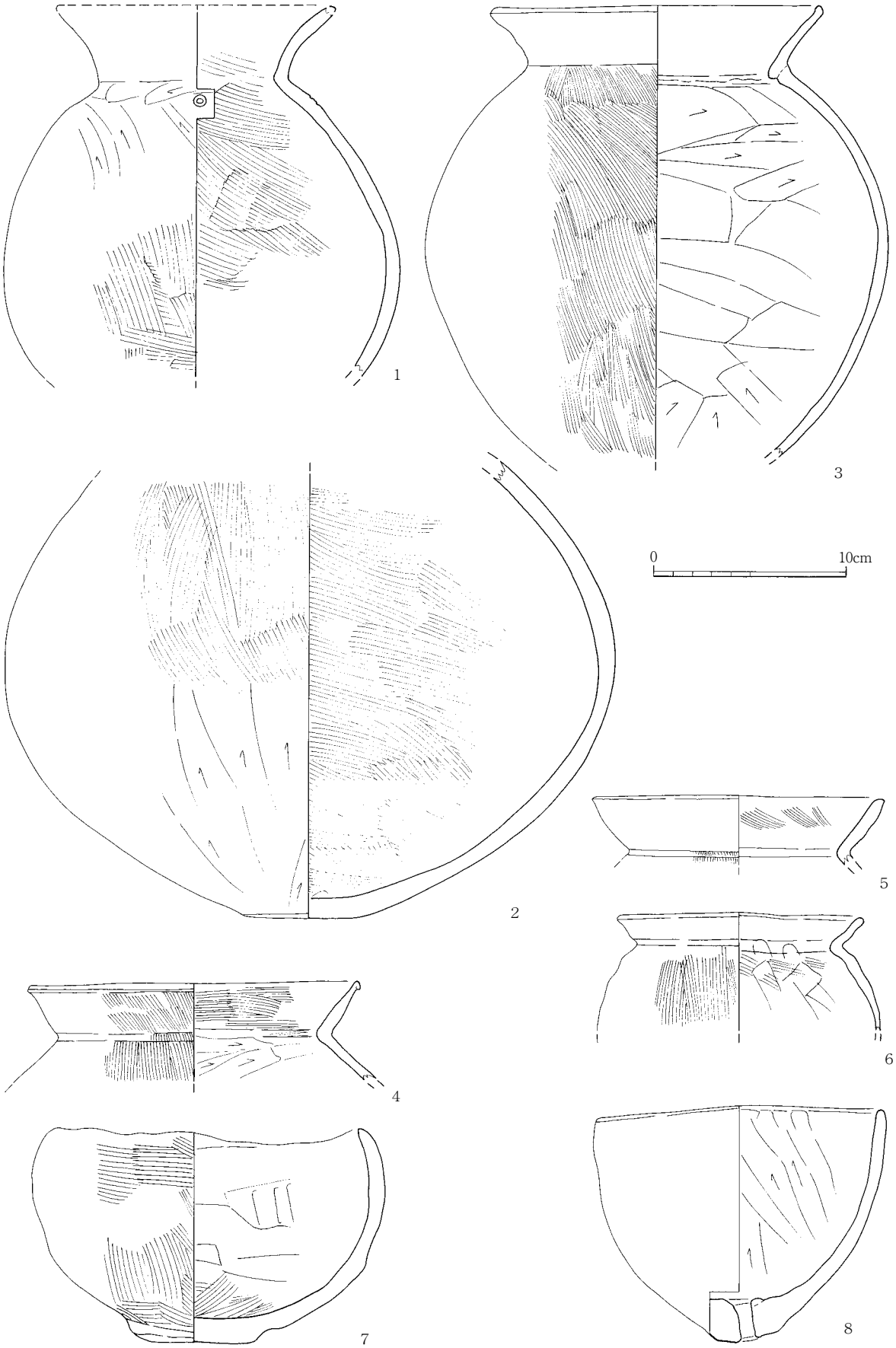
出土遺物（第 71 図７・８）

７は壺である。内面に粘土帯の接合痕が明瞭に残る。内外面の調整はハケメである。口径 11.0cm である。８は甕の底部であろうか。外面の調整はタタキの後､ハケメ。内面の調整はハケメである。

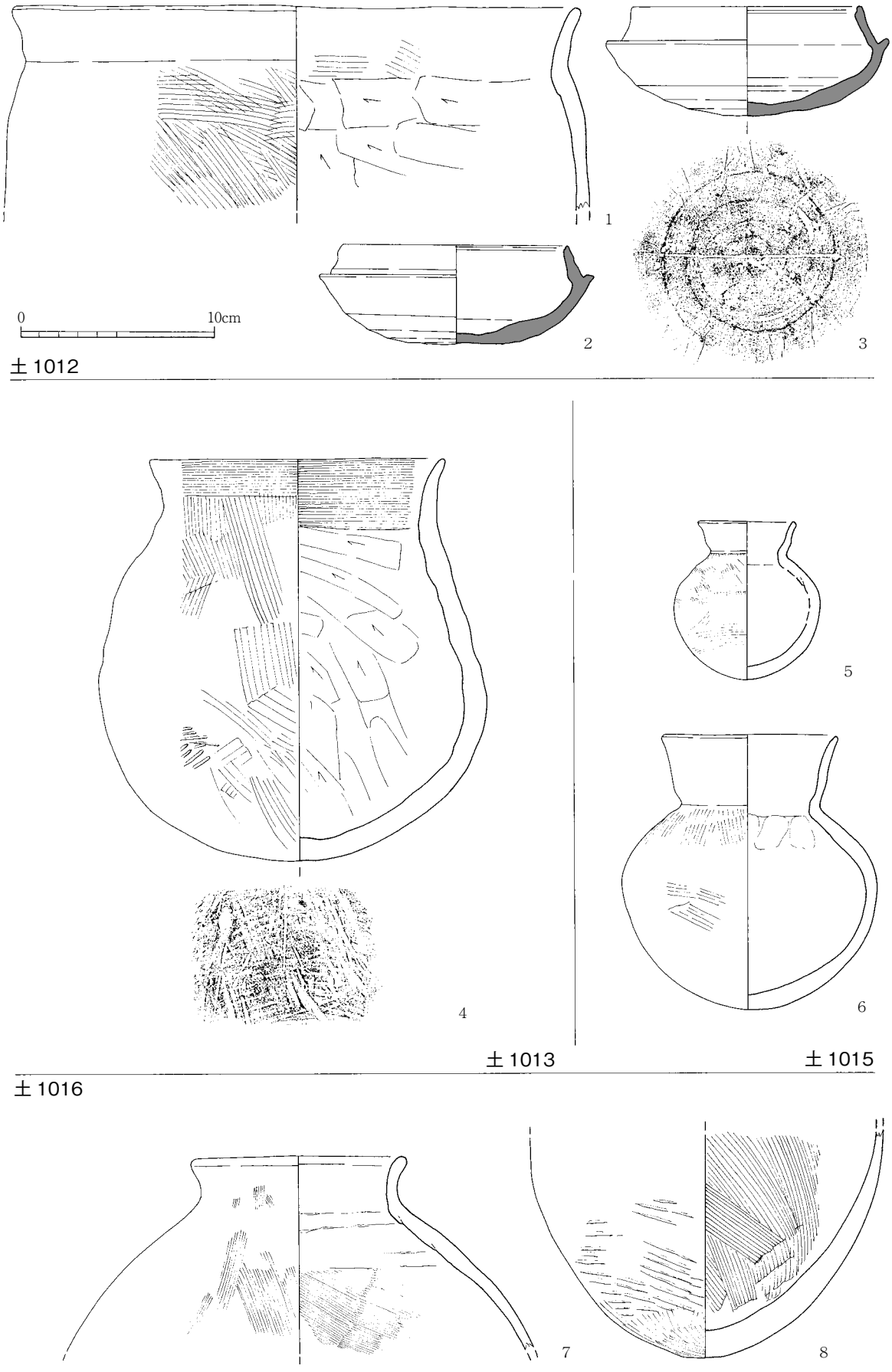
（４）井戸

１号井戸（図版 28、第 72 図）

調査区の北側やや東寄りで検出した。板材を正方形に組んで枠とした井戸である。11 号溝に切られる。規模は 2.1m × 1.8m の楕円形である。深さは約 4.0m で、底になるほど細くなっている。掘削して最初に曲物側板（第 105 図８～ 11）を検出し、その下部から大きく傾いた状態の組み合



第 70 図　Ⅳ-C 区 1010 号土坑出土土器実測図（1/3）



第71図　Ⅳ-C区1012・1013・1015・1016号土坑出土土器実測図（1/3）

わせた井戸枠４段分を検出した。さらに崩れた状態で数段続くことがわかったが、これ以上掘り下げることは危険を伴うと判断し、調査の最終段階で重機による立ち割りを行い、側面から安全を確保しつつ、すべての井戸枠を取り上げた。

遺物は土師器、緑釉陶器、須恵器が出土している他、井戸枠の部材として用いられた曲物側板（第105図８～11）、組み合わせるため切り込みのある板材（第102図６）や編錘（第105図13）、板状器具材、杭（第105図12）が出土している。

最下層から出土した遺物は９世紀後半のものを中心とするが、下層付近より糸切り底の土師皿が出土していることから11世紀後半以降に埋没した可能性も考えられる。

出土遺物（図版33、第73図）

１～25は土師器である。１～３は底部の平らな杯である。１の口径12.0cm、底径7.1cm、器高3.7cmである。内外面はナデ調整で、底部は糸切り底である。２は口縁付近が大きく内湾する。底径5.8cmである。３は口径12.5cm、底径6.2cm、器高3.7cmである。４は丸底に近い器形である。口径13.4cm、器高3.5cmである。５は皿である。口径15.0cm、底径12.2cm、器高2.1cmである。６～16は底部の丸い杯である。最下層からまとまって出土しており、いずれも器表面の残りがよい。外面の調整はナデで、強い圧痕が残り、内面の調整はミガキである。６の口径は11.6cmである。７は口径12.0cm、器高3.5cmである。17～23はやや高い高台を持つ碗である。碗部はわずかに丸みを帯びている。17は高台の内側に焼成前の板状の痕跡が残る。口径12.4cmである。24は甕の口縁部である。内外面の調整はナデで、外面にタタキの痕跡が残る。25はイイダコ壺である。周防灘周辺に多い球形に近い形状をしており、側面に１ヶ所焼成前穿孔が外面から施される。内外面の調整はナデである。口径7.3cm、器高7.7cmである。

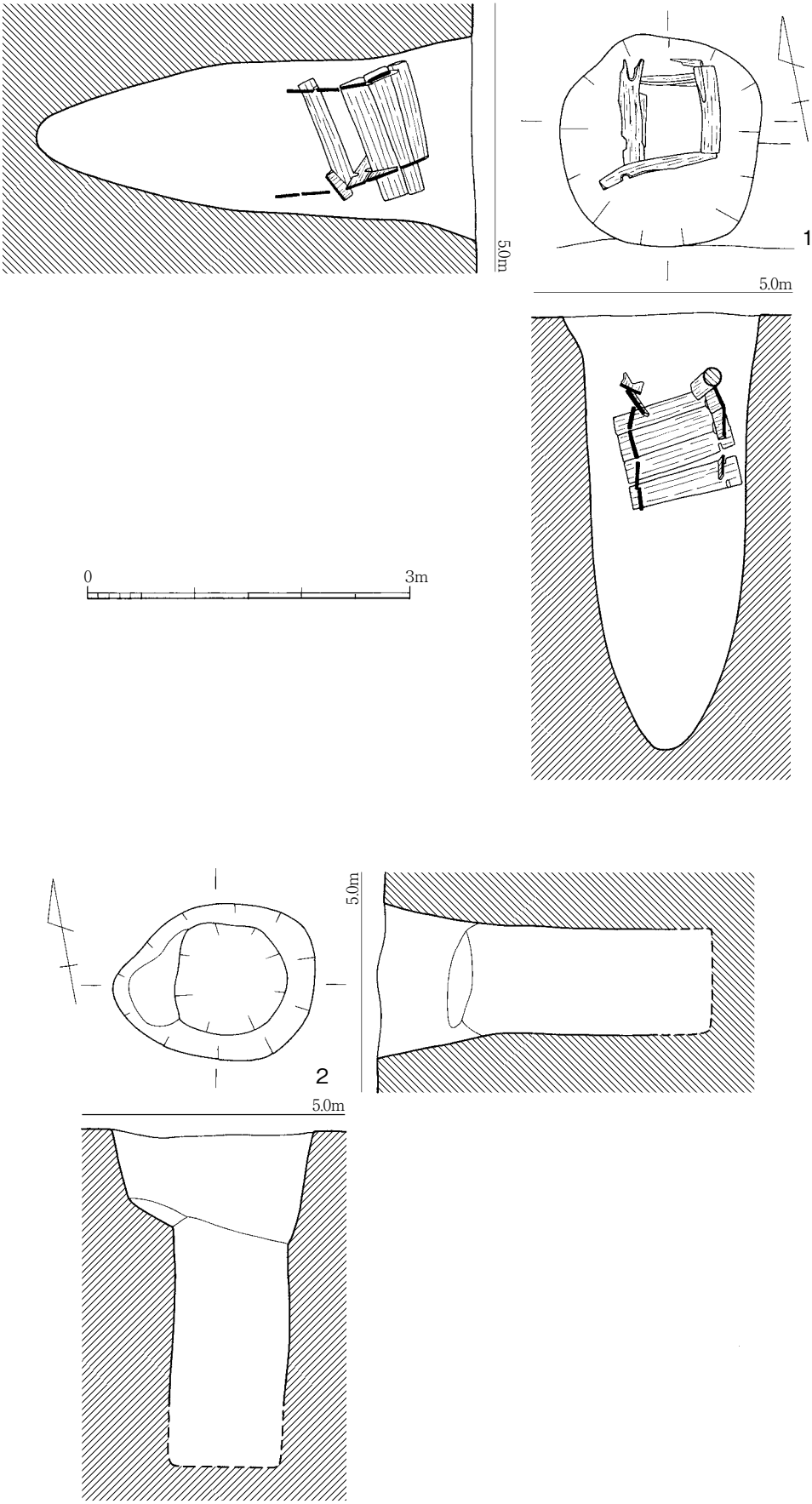
26は須恵器甕の口縁部である。内外面の調整はナデで、外側面に細かい波状文が施される。27は緑釉陶器の碗である。底径は10.4cmである。28は須恵質に近い焼成の鉢の口縁部である。片口となっており、内外面の調整はナデである。29は土師器の椀である。口縁部ヨコナデ、他はナデを施す。外面に文字不明ながら墨書が見られる。

２号井戸（図版28、第72図）

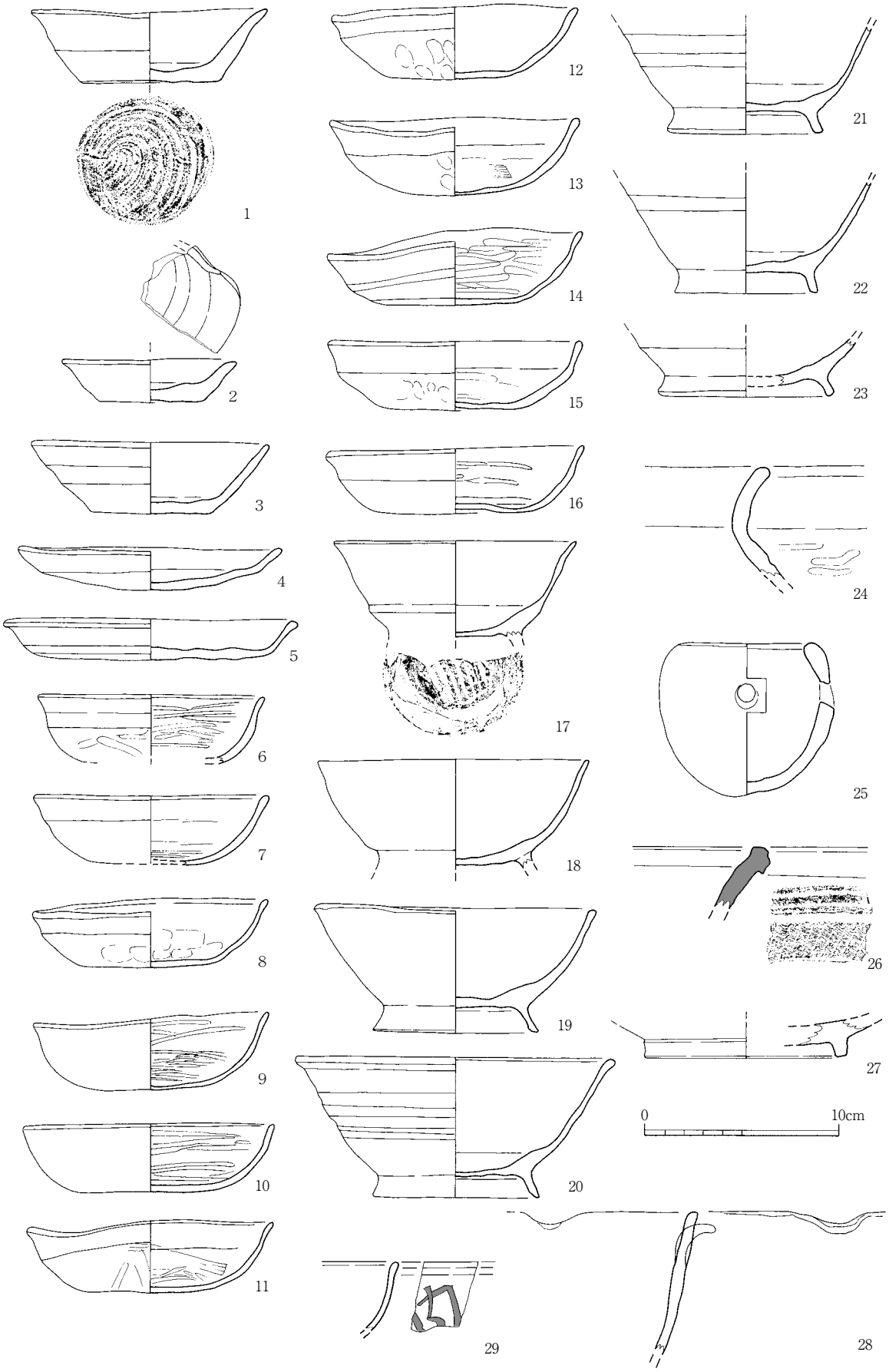
調査区の北側、西寄りで検出した。素掘りの井戸である。切り合い関係はない。規模は1.9m×1.4mで平面は楕円形である。深さは3.1mで約0.8mのところで西側に段をつくる。その後、ほぼ垂直に掘り込まれる。遺物は土師器、須恵器が中層を中心に出土している。また、接合しない製塩土器の破片が出土している。出土遺物は８世紀代を主体とするが、９世紀に下るものもある。

出土遺物（図版33、第74・75図）

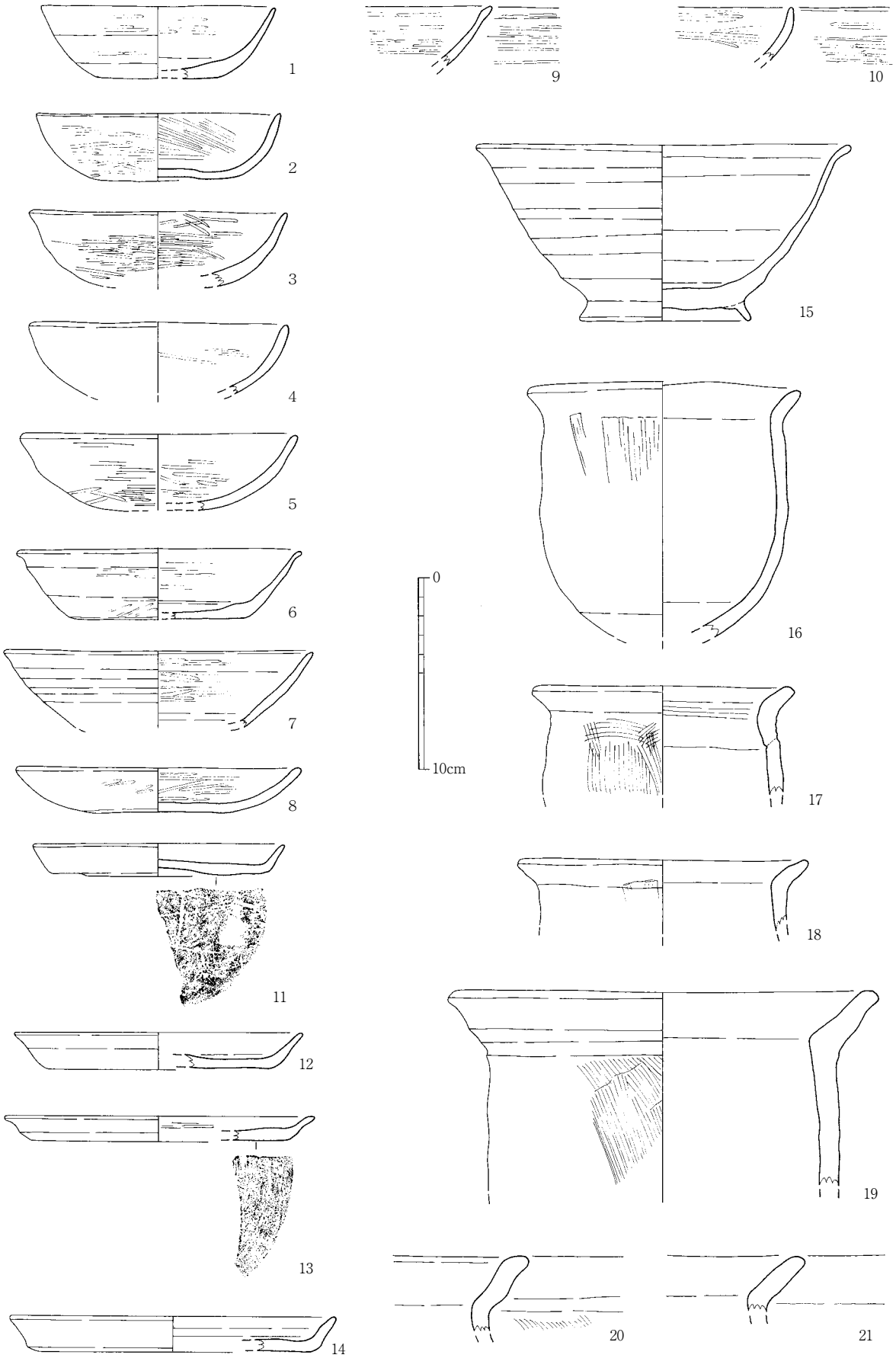
１～21は土師器である。１～10は杯である。内外面の調整はともにミガキである。１は口径12.0cm、器高3.6cmである。11～14は皿である。内外面の調整はナデである。11の口径は11.3cmである。底面にヘラ記号状のものが見られる。15は碗である。わずかに丸みを帯びた碗部であり、高台は小さく短い。内外面の調整はナデである。口径19.2cm、底径8.8cm、器高9.1cmである。16～21は甕である。16の外面はハケメである。口径14.0cmである。17は外面のハケメを弧状に施している。口径13.5cmである。18は口径15.0cmである。19・20はいわゆる豊前企救型甕である。19は口径22.2cmである。22～32は須恵器の杯蓋である。いずれも口縁端部をわ



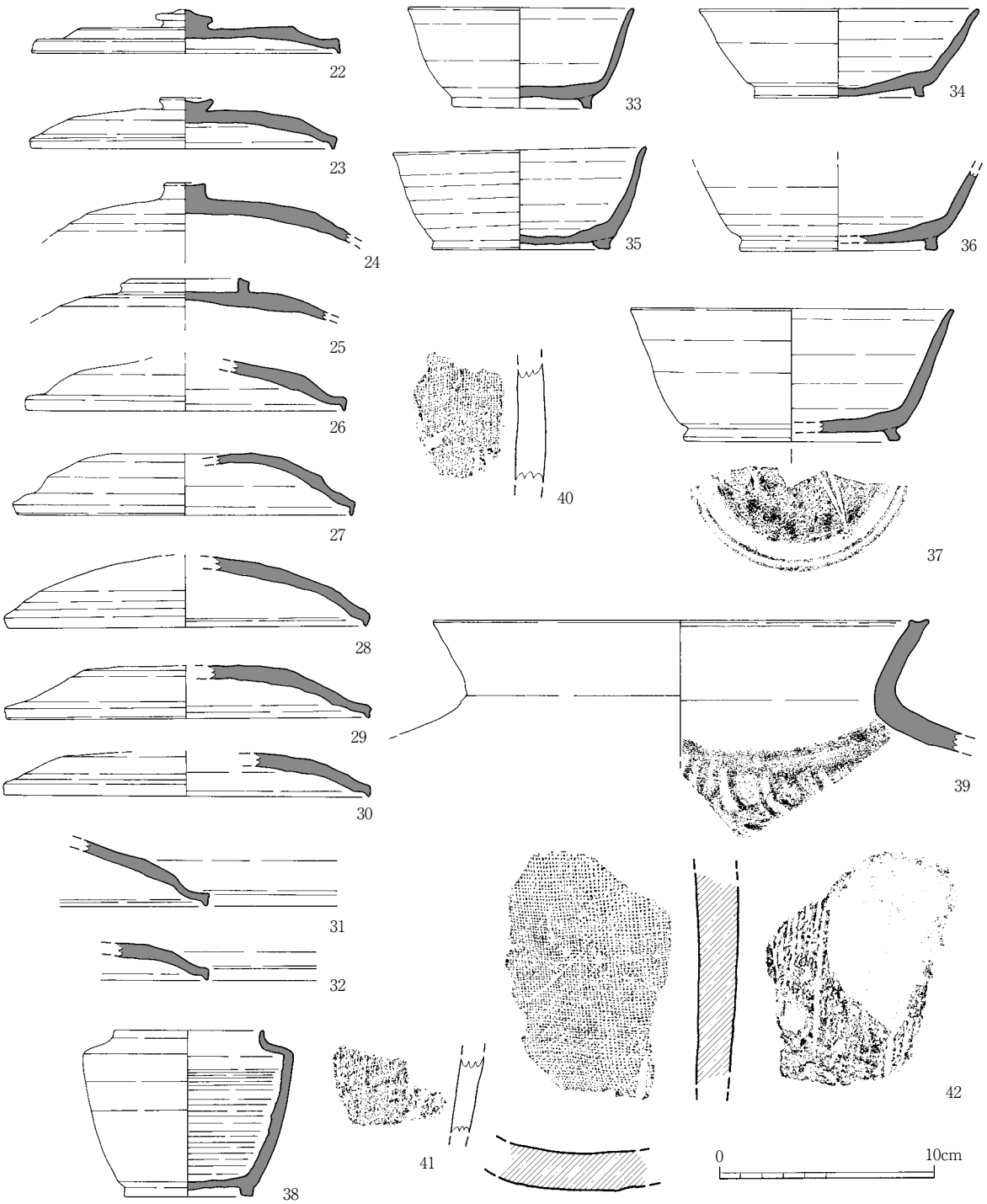
第 72 図　Ⅳ-C 区 1・2 号井戸実測図（1/60）



第 73 図　Ⅳ-C 区 1 号井戸出土土器実測図（1/3）

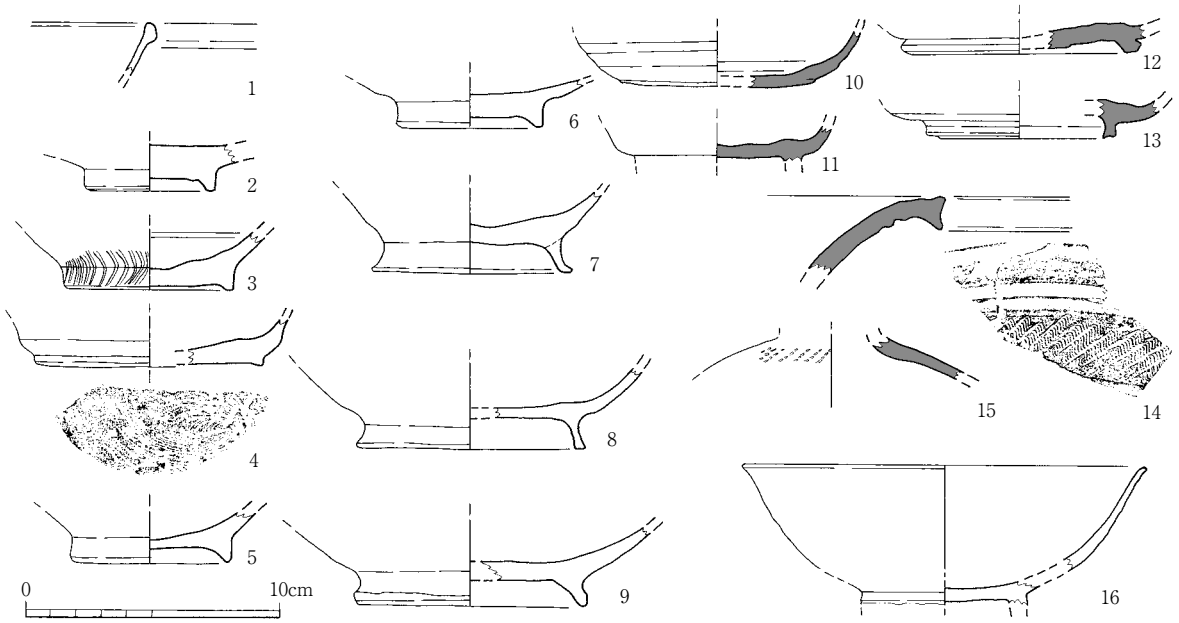


第 74 図　Ⅳ-C 区２号井戸出土土器実測図①（1/3）



第 75 図　Ⅳ-C 区２号井戸出土土器実測図②（1/3）

ずかに折り曲げるものである。25 は輪状のつまみを持つものである。33 ～ 37 は須恵器の杯身である。高台部分は小さく短い。37 は底部外面にヘラ記号がある。38 は須恵器で小形の短頸壺である。薄手で精緻な作りで、内外面の調整は回転ナデである。口径 7.0cm、底径 6.1cm、器高 7.0cmである。39 は須恵器の甕である。口径 23.0cmである。40・41 は製塩土器である。外面の調整はナデ、内面には粗い布目跡が明瞭に残る。42 は平瓦である。内面に粗い布目跡が残り、外面にはタタキの跡が残る。

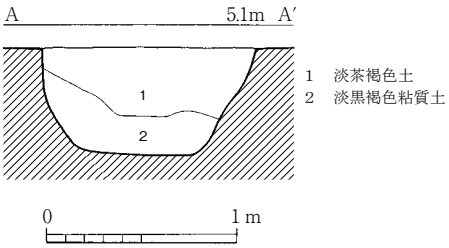


第 76 図　Ⅳ-C 区 11 号溝土層・出土土器実測図（1/40、1/3）

（5）溝

11 号溝（第 65・76 図）

調査区の北側で検出した東西に掘削された溝である。東側部分は包含層の堆積部分に掘られたのか、掘削時に検出できなかった。幅 1.1m、深さ 0.6m である。遺物は陶磁器、須恵器、土師器、緑釉陶器が出土している。遺構の時期は 11 ～ 12 世紀である。



11号溝土層実測図（1/40）

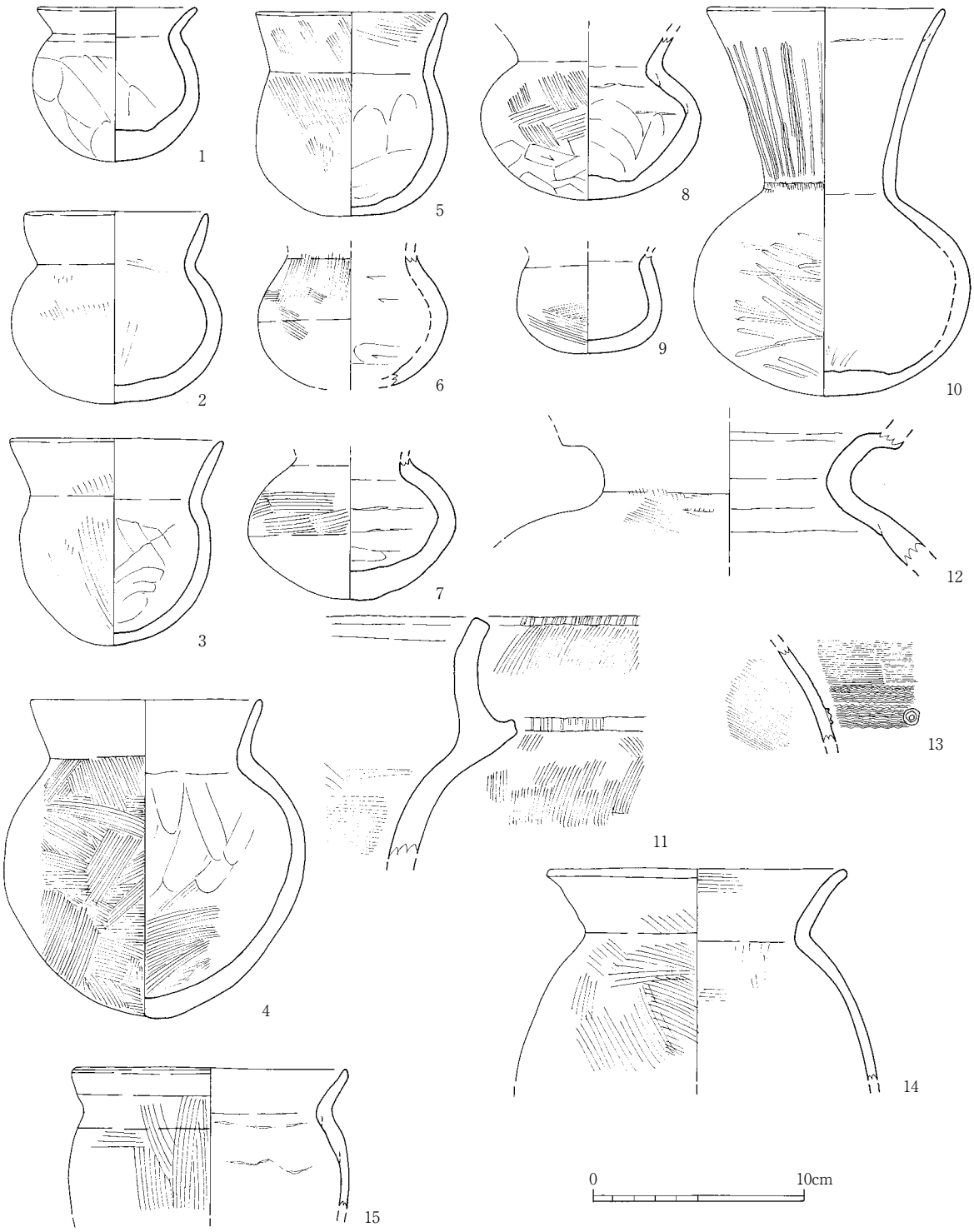
出土遺物（第 76 図 1 ～ 16）

1 は玉縁口縁の白磁碗である。2 は青磁碗の底部である。底径 5.2cmである。3 は白磁碗の底部である。高台を削り出しているが、その際の工具痕が連続して残る。底径 6.8cmである。4 ～ 9 は土師器である。4 は糸切り底である。底径 9.0cmである。5 ～ 9 は碗の高台部分である。5 は底径 6.4cmである。6 は底径 5.8cmである。7 は底径 7.8cmである。8 は底径 9.0cmである。9 は底径 9.2cmである。10 ～ 15 は須恵器である。10 ～ 13 は杯身である。11 は小さな短い高台が付くものである。底径 6.4cmである。12 の底径は 9.4cmである。13 は底径 7.4cmである。14 は甕の口縁部である。細かい波状文が施される。15 は頸部に列点文が施される。16 は緑釉陶器である。碗部と底部は接合しないが同一個体である。口径 16.0cmである。

（6）包含層

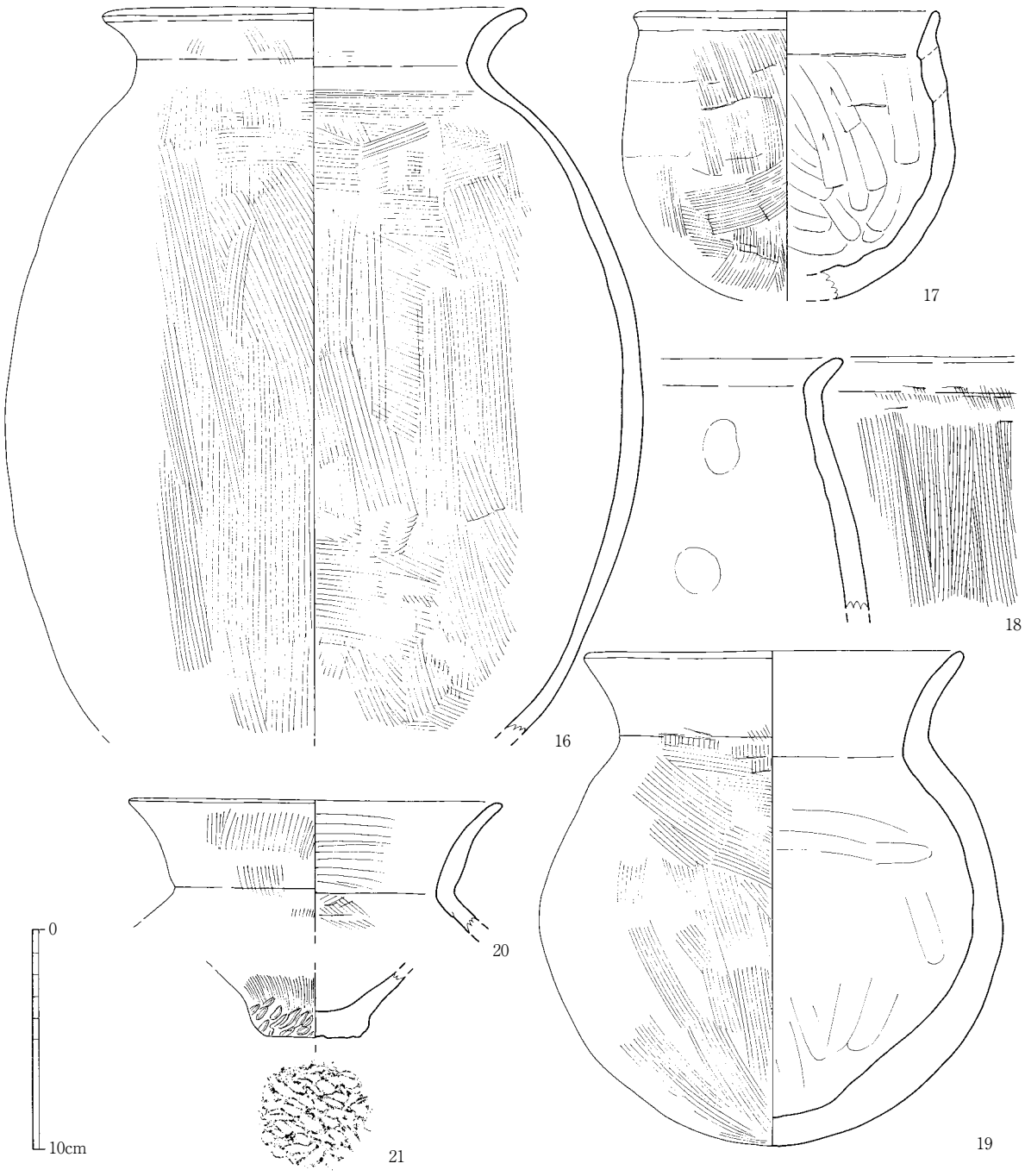
包含層出土土器（図版 33・34、第 77 ～ 83 図）

1 ～ 9 は土師器の小形の壺である。1 は底部部分が非常に厚いのが特徴である。口径 7.6cm、胴部最大径 8.0cm、器高 7.3cmである。2 の外面はハケメ、内面はケズリである。口径 8.8cm、胴部最大径 10.0cm、器高 9.1cmである。3 は頸部と胴部の境がやや不明瞭で、外面はハケメ調整、内面はケズリである。口径 10.2cm、胴部最大径 9.0cm、器高 9.0cmである。4 は外面がハケメ調整、内面下位はハケメ、上位は強い圧痕が残る。口径 11.0cm、胴部最大径 13.6cm、器高 15.3cmである。5 は大きな単位によって内面ケズリが行われる。口径 9.0cm、胴部最大径 9.0cm、器高 9.5cmである。6 は



第 77 図　Ⅳ-C 区包含層出土土器実測図①（1/3）

胴部最大径 9.0cmである。７の外面は横方向にハケメを施す。底部が厚い。胴部最大径 9.8cmである。８は外面底部付近を不定方向のケズリ、それより上位はハケメを施す。胴部最大径は 10.2cmである。９の胴部最大径は 6.8cmである。10 は土師器の精製壺である。全体に薄手で、外面はハケメの後、ミガキを施す。口径 11.3cm、胴部最大径 13.5cm、器高 18.4cmである。11 は大型の二重口縁壺の口縁部である。口縁端部と屈曲した突出部に刻み目を施す。12 は二重口縁壺の頸部である。外面にハケメが残る。全体に器壁が厚い。13 は壺の胴部である。内外面はハケメ調整で、部分的に細かい波状文が施され、貼付浮文が見られる。14 はわずかに口縁が外反する壺である。内外面の調整



第 78 図　Ⅳ-C 区包含層出土土器実測図②（1/3）

はハケメである。口径 14.1cmである。15 は小形の甕である。内面に粘土帯の接合痕が残る。口径 13.2cmである。16 ～ 20 は土師器の甕である。16 は内外面ともにハケメ調整を施す。口径 19.4cm、胴部最大径 28.2cmである。17 は口縁部がわずかに外反する。器壁は厚い。口径 14.0cm、胴部最大径 15.2cmである。18 は外面はハケメ調整、内面には圧痕が残る。19 は器壁が厚く重い。口径 17.4cm、胴部最大径 21.0cm、器高 22.8cmである。20 は口径 17.0cmである。21 は土師器の甕の底部であろうか。底部付近に多数の刺突痕が残る。

22・23 は土師器の高杯である。22 の内面はケズリである。底径 10.6cmである。24 は碗である。内外面の調整はミガキである。口径 11.6cm、器高 5.6cmである。25 は小形の甑等の把手の部分である。26 はコップ状の鉢で、底部付近の外面には圧痕が残る。外面はハケメ調整、内面はナデである。

底径 6.2cmである。27 ～ 37 は手捏ね土器である。27・28 は壺であろう。27 の胴部最大径 8.8cmである。28 は胴部最大径 7.6cmである。29 は鉢で、口径 7.0cm、底径 2.8cm、器高 5.5cmである。30 は高杯である。口径 6.2cm、底径 5.0cm、器高 5.5cmである。31 は口径 6.1cm、器高 3.8cmである。32 は口径 4.0cm、器高 3.5cmである。33 は口縁がわずかに外反する器形である。口径 3.0cm、器高 2.7cmである。

38 は土製の玉である。直径 3.0cmである。39 は甑形土器の把手の部分であろうか。外面はナデ調整である。40 ～ 44 は支脚である。40 は口縁の一部を刳り抜くものである。外面の調整はあまり丁寧ではなく、ハケメの後にナデ、内面はハケメ調整である。41 ～ 43 は中空で 1 ヶ所が突出し、その部分で支えるタイプのものである。41 は底径 13.2cm、器高 11.1cmである。42 は底径 10.7cm、器高 10.5cmである。43 は底径 10.8cm、器高 9.0cmである。44 は中実のものである。方形で外面の調整はナデである。

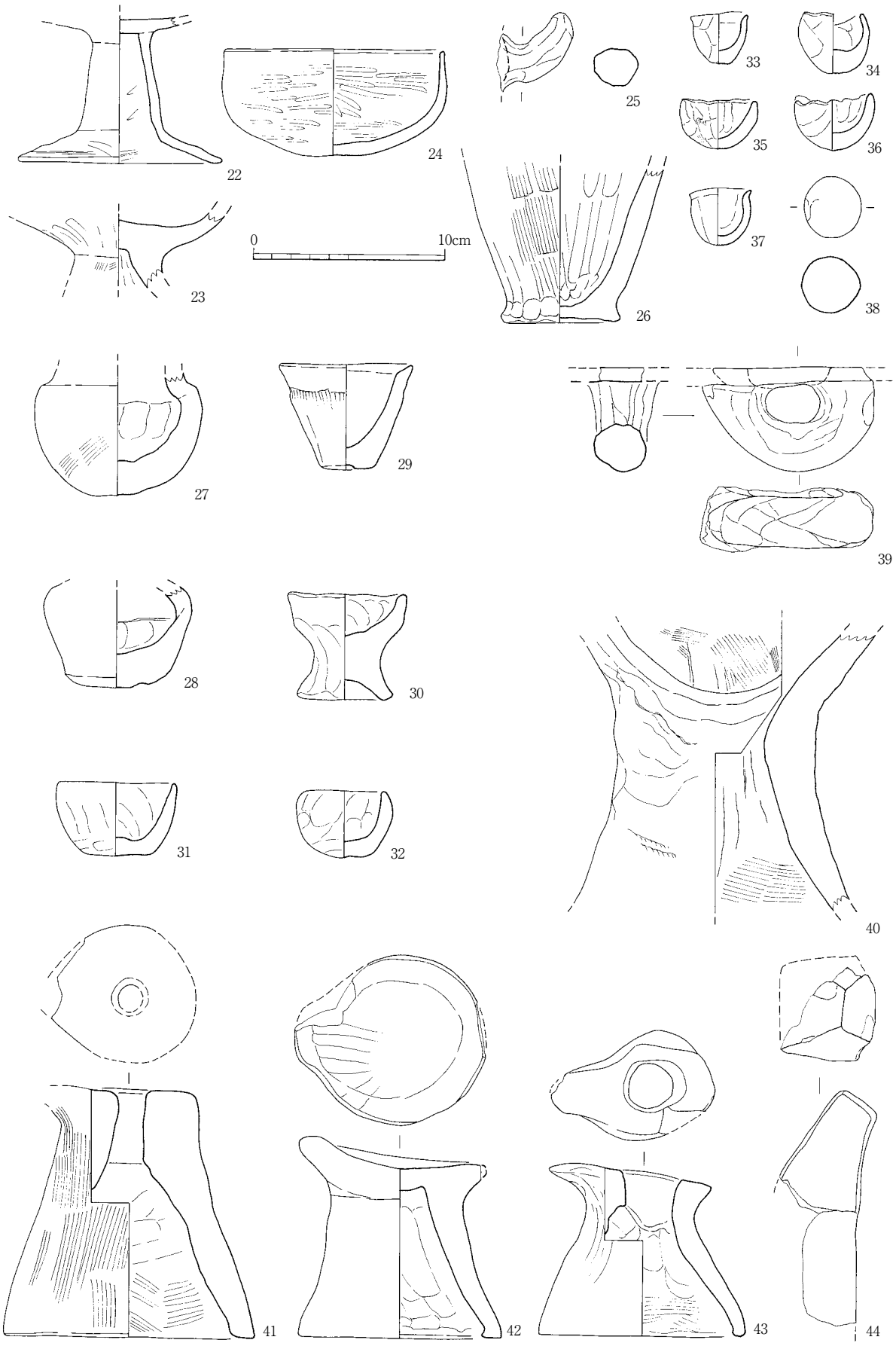
45 ～ 49 は須恵器の杯蓋である。45・46 は天井部と肩部の境及び口縁部に段がある。45 は口径 14.0cm、器高 5.1cmである。46 は口径 13.6cm、器高 4.5cmである。47 は天井部と肩部の境に段が無く、口縁が外側に広がるものである。口径 13.6cm、器高 3.0cmである。48 は小型化が進んだものである。口径 9.0cm、器高 3.1cmである。49 は口径 10.2cm、器高 3.2cmである。

50 ～ 63 は杯身である。50 はほぼ垂直に立ちあがり、口縁内部に段を持つ。口径 12.0cm、受部径 14.0cm、器高 5.0cmである。51 はやや内傾する立ち上がりで、口縁端部は段の痕跡を残す。口径 12.8cm、受部径 15.6cm、器高 5.7cmである。52 は口縁内部に段が残る。口径 12.8cm、受部径 14.6cm、器高 5.5cmである。53 は口縁端部が丸くなり、器高も浅くなる。口径 12.4cm、受部径 15.0cm、器高 4.7cmである。54 は立ち上がりが内傾し、細くなる。口径 12.2cm、受部径 15.0cm、器高 4.2cmである。55 はさらに立ち上がりが細くなる。口径 11.4cm、受部径 13.6cm、器高 4.2cmである。56 は立ち上がりが短くなっている。口径 13.2cm、受部径 15.0cm、器高 4.3cmである。57 は口径 13.0cm、受部径 14.6cm、器高 4.3cmである。58 は杯部がやや深めであるが、立ち上がりは短い。口径 13.7cm、受部径 15.8cm、器高 5.0cmである。59 は口径 12.5cm、受部径 15.0cm、器高 4.5cmである。60 は立ち上がりが短く、受部との境も不明瞭である。口径 11.7cm、受部径 13.8cm、器高 4.6cmである。61 は口径 13.0cm、受部径 15.4cm、器高 4.3cmである。62 は口径 10.9cm、受部径 13.3cm、器高 4.4cmである。63 は蓋の可能性もある。口径 10.2cm、受部径 12.0cm、器高 3.2cmである。

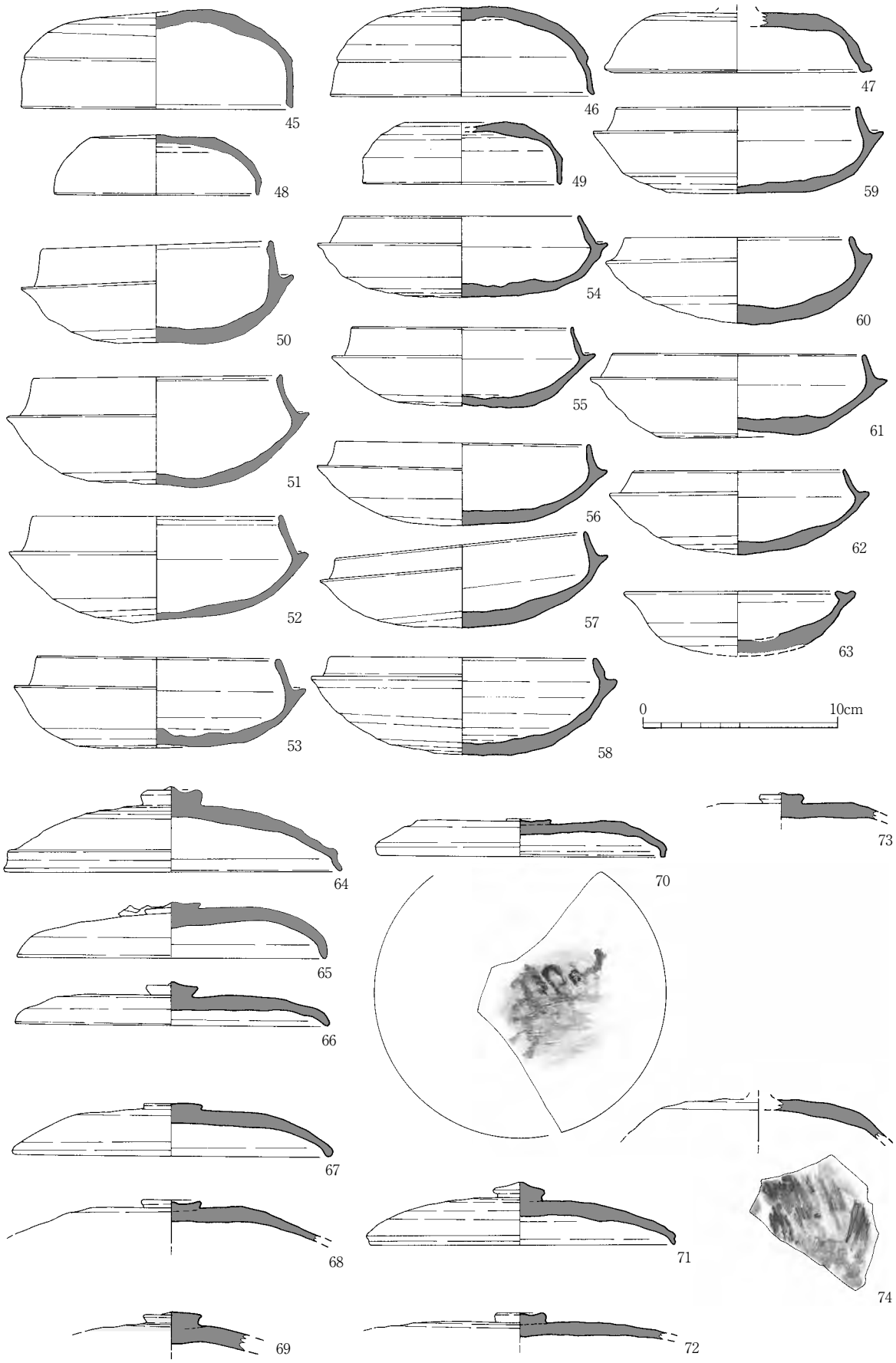
64 ～ 74 はつまみの付く杯蓋である。64 はややしっかりと口縁端部を折り曲げる。口径 12.4cm、器高 4.3cmである。65 は口縁端部をわずかに折り曲げる。天井部に重ね焼きによる他個体の破片が溶着している。口径 16.0cm、器高 2.8cmである。66 はほとんど折り曲げる痕跡が見られない。口径 16.2cm、器高 2.7cmである。67 は口径 16.5cm、器高 3.0cmである。

68 は転用硯の可能性がある。内面は滑らかで、黒色の墨と思われる物質が付着する。69 は内面に赤色顔料が付着している。70 ～ 74 は転用硯である。いずれも内面は滑らかで墨と思われる物質が付着する。70 は口径 15.0cm、器高 2.0cmである。71 は口径 15.7cm、器高 3.2cmである。

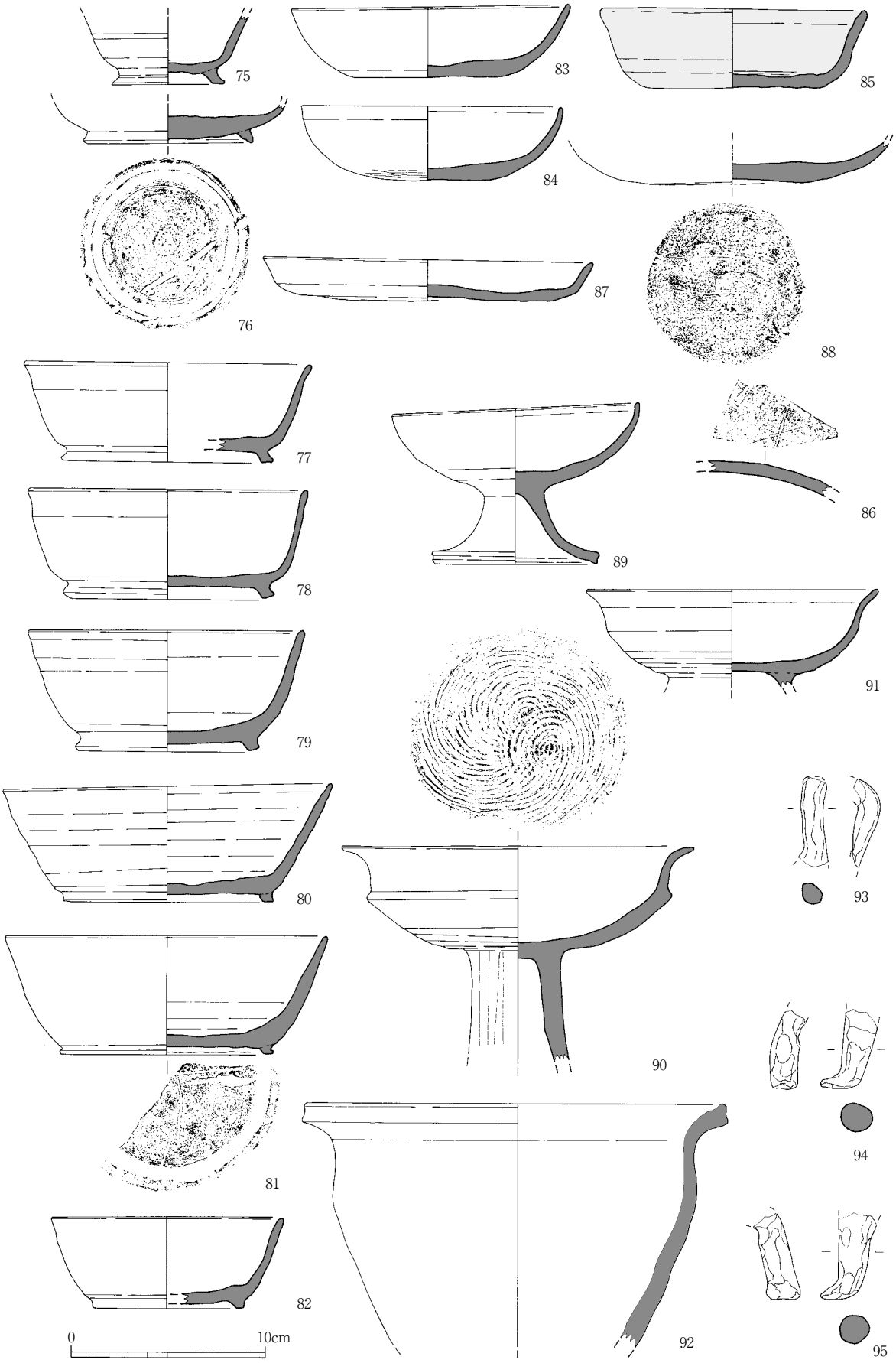
75 ～ 82 は高台の付く杯身である。75 は高台が踏ん張るものである。底径 5.8cmである。76 は底面にヘラ記号を太く施す。底径 8.7cmである。77 は口径 14.8cm、底径 10.8cm、器高 5.1cmである。78 は高台の内側のみが接地するものである。口径 14.4cm、底径 10.8cm、器高 5.6cmである。79 は口径 14.3cm、底径 9.4cm、器高 6.2cmである。80 は短い高台が付くものである。口径 17.0cm、底径 10.8cm、器高 6.2cmである。81 は底部に細くヘラ記号が施される。口径 16.6cm、底径 11.0cm、器高 6.1cmであ



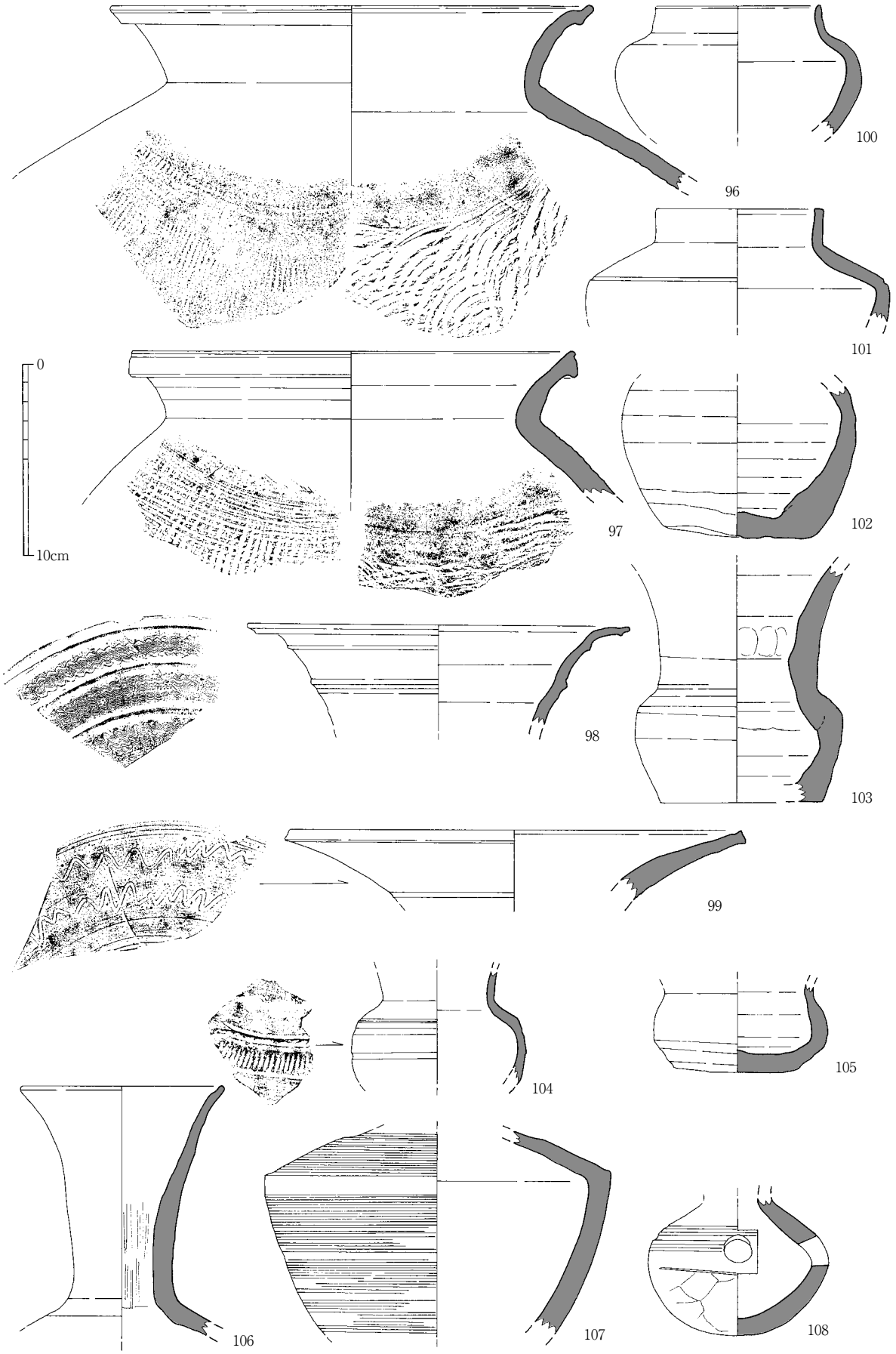
第 79 図　Ⅳ-C 区包含層出土土器実測図③（1/3）



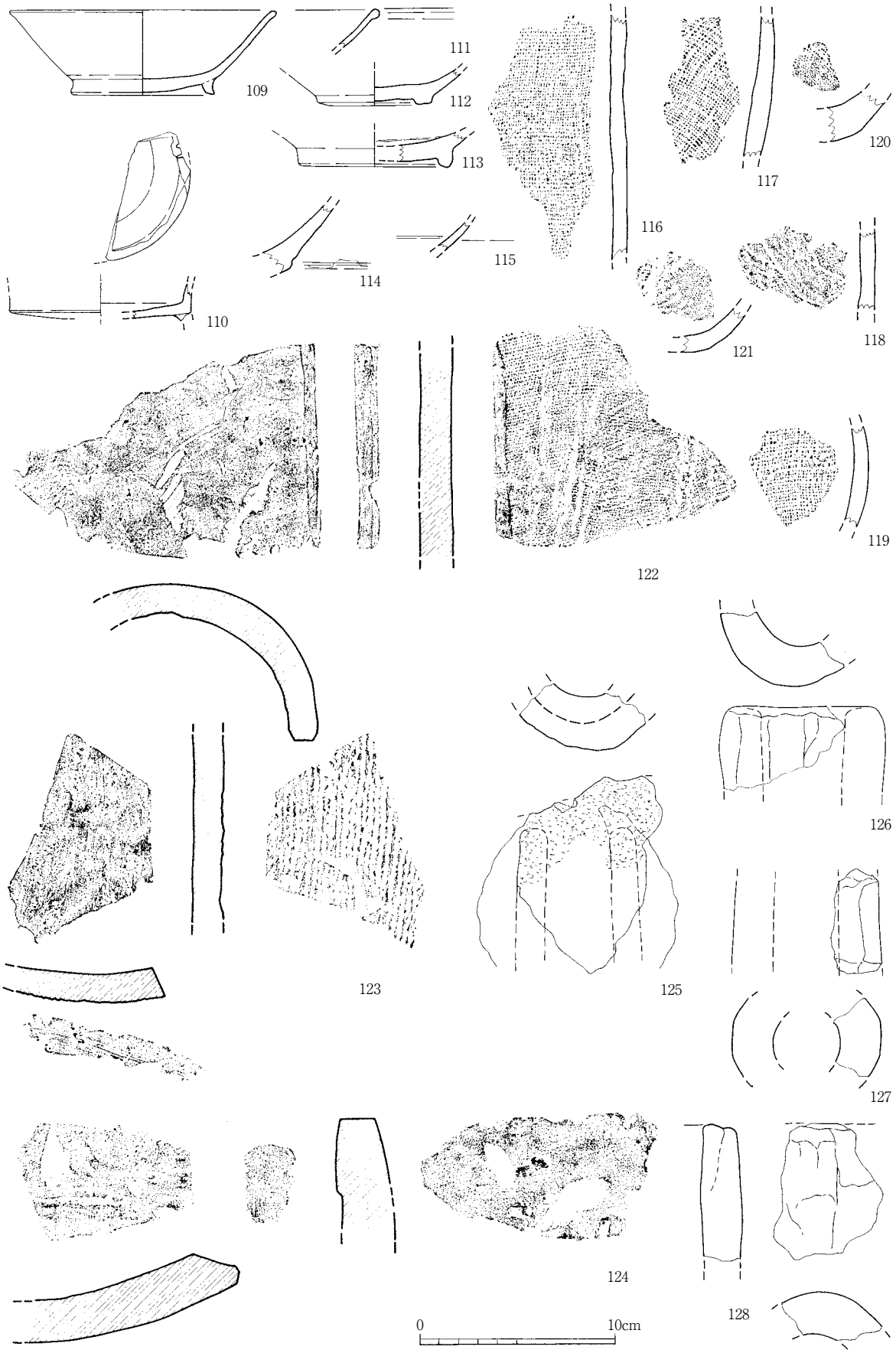
第 80 図　Ⅳ-C 区包含層出土土器実測図④（1/3）



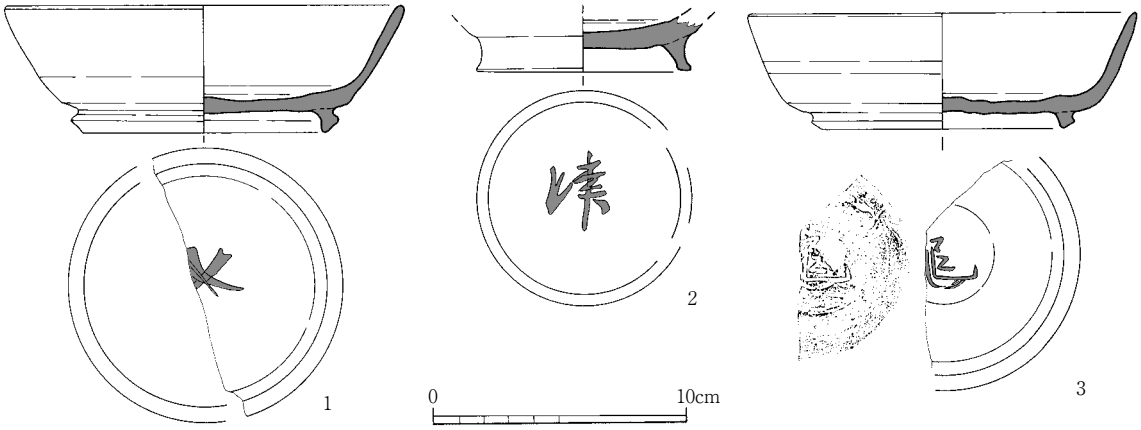
第 81 図　Ⅳ-C 区包含層出土土器実測図⑤（1/3）



第 82 図　Ⅳ-C 区包含層出土土器実測図⑥（1/3）



第 83 図　Ⅳ-C 区包含層出土土器実測図⑦（1/3）



第 84 図　Ⅳ-C 区包含層出土土器実測図⑧（1/3）

る。82 は口径 12.0cm、底径 7.8cm、器高 4.7cmである。

83・84 は杯である。いずれもやや丸みを帯びた器形である。83 は口径 14.4cm、器高 3.5cmである。84 は口径 13.5cm、器高 4.0cmである。85 は底部から直線的に立ち上がる器形で、口径 13.8cm、器高 4.0cmである。内外面に赤色顔料を塗っている。86 は杯蓋である。天井部外面に「×」形のヘラ記号を焼成前に刻む。87 は皿である。口径 17.1cm、器高 2.5cmである。88 は大型の碗であろうか。底部に擦過痕が残る。89 は短脚の高杯である。口径 12.8cm、器高 8.3cmである。90 は長脚の高杯で、杯部の口縁が大きく開く。杯部内面は丁寧な当て具跡が残る。口径 18.2cmである。91 は高杯の杯部である。丸い器形で口縁部のみが外反する。口径 15.1cmである。92 は鉢である。口径 22.0cmである。93 ～ 95 は動物形の脚部であろうか。いずれも手捏ねで成形する。

96・97 は甕である。96 の口径は 25.2cmである。97 の口径は 23.2cmである。98 は壺の口縁部である。細い突線間に細かい波状文を施す。口径 19.8cmである。99 は甕の口縁部であろうか。口径や傾きは歪みのため、正確でない可能性もあるが、口径 24.0cmを測る。100・101 は短頸壺である。100 は口径 8.6cmである。101 は口径 8.7cmである。102 は壺の胴部である。器壁が厚い。胴部最大径 12.2cmである。103 も器壁の厚い壺である。胴部最大径 11.0cmである。104 は壺であろう。胴部に連続した刺突文、頸部に波状文を施す。105 は壺である。106 は長頸壺の頸部である。口径 10.6cmである。107 は長頸壺の胴部であろう。胴部最大径 18.0cmである。108 は甑である。底部は手持ちケズリである。胴部最大径 9.4cmである。

109 ～ 110 は緑釉陶器である。109 は碗である。口径 13.8m、底径 7.4cm、器高 5.3cm である。前面に磨きが施されたのち、施釉される。高台は貼り付けで、畳付の部分は露胎である。110 は脚付容器の底部である。底径 9.6cm である。脚部分には穿孔が２ヶ所施される。111 ～ 113 は白磁である。111 は小さな玉縁をもつ碗の口縁部であり、精良な作りである。112 は碗の底部で、底径 6.0cm である。見込みには目跡が１ヶ所残る。113 は碗で底径 7.8cm である。見込みに重ね焼きの痕跡が残る。114 は越州窯系の青磁碗である。115 は白磁碗の胴部である。116 ～ 121 は製塩土器である。いずれも円筒形の形状を呈し、内面に粗い布目が残る。122 は丸瓦である。端部はヘラ切りが行われている。外面はナデ痕、内面は粗い布目痕が残る。123・124 は平瓦である。123 の外面はナデ調整、内面は縄目跡が残る。124 の調整は内外ともにナデ調整である。端部はヘラ切りである。125 ～ 128 は鞴の羽口である。125 は先端に多量の鉄滓が付着する。口径 6.0cmである。126 は口径 8.0cmである。127 は直径 7.2cmである。外面はナデ調整である。128 は外面に圧痕が残る。

第 85 図　Ⅳ-Ｃ区出土土・石・鉄製品実測図（1 は 1/3、2・3 は 2/3、その他は 1/2）

挿図	図版番号	区	出土遺構	種類	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重（g）	残存	備考
85-1		Ⅳ-C	包含層	土製品	羽口				−	0.1	
85-2		Ⅳ-C	包含層	土製品	丸玉	1.20	1.20	1.00	1.50	1	
85-3		Ⅳ-C	包含層	石製品	管玉	2.50	0.40	0.40	0.70	1	碧玉
85-4		Ⅳ-C	包含層	石製品	石庖丁	(3.20)	(1.50)	0.60	(2.90)	0.1	片岩
85-5		Ⅳ-C	包含層	石製品	石庖丁	(5.60)	(3.30)	0.60	(12.90)	0.2	緑色片岩
85-6		Ⅳ-C	包含層	石製品	石庖丁	(4.00)	(3.75)	0.70	(13.10)	0.2	片岩
85-7	図版35	Ⅳ-C	包含層	石製品	石庖丁	(7.60)	(3.90)	0.65	(22.00)	0.5	凝灰岩
85-8	図版35	Ⅳ-C	包含層	石製品	紡錘車	3.90	3.90	1.35	(24.60)	0.8	滑石
85-9		Ⅳ-C	包含層	石製品	石斧	(5.70)	(5.75)	(1.35)	(49.80)	0.1	緑色片岩
85-10	図版35	Ⅳ-C	包含層	石製品	不明	(4.70)	(5.14)	(3.10)	(76.90)	0.1	斑岩系
85-11		Ⅳ-C	包含層	石製品	砥石	(4.80)	(4.20)	(1.25)	(30.30)	0.1	凝灰岩
85-12		Ⅳ-C	包含層	石製品	砥石	(9.45)	(5.50)	(2.50)	(149.50)	0.2	片岩
85-13		Ⅳ-C	包含層	石製品	砥石	(4.40)	5.30	(2.70)	(96.70)	0.3	細粒砂岩
85-14	図版35	Ⅳ-C	包含層	石製品	砥石	(10.85)	7.25	2.30	(220.90)	0.7	泥岩
85-15		Ⅳ-C	包含層	鉄製品	鉄鏃	(4.60)	0.55	0.30	(5.20)	0.2	
85-16		Ⅳ-C	包含層	鉄製品	刀子	(5.60)	1.15	0.30	(5.10)	0.3	

（　）は残存値

第６表　Ⅳ-Ｃ区出土特殊遺物一覧表

（７）墨書土器

包含層（巻頭図版６、第 84 図）

１・２は墨書土器である。１は須恵器で、底部外面は回転ヘラ削り、内面は不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。底部外面に墨書ならびにヘラ記号状の線刻が認められるが、文字は不明である。

２は土師器で、ヨコナデおよびナデが丁寧に施される。底部および高台部分のみが遺存し、外面に「津」の墨書が施される。３は線刻土器である。底部外面は回転ヘラ切り、内面は不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。内面に灰被りが見られる。底部外面に線刻が施されるが、文字は不明である（城門）。

その他、１号井戸からも墨書土器１点が出土する（第 73 図 29）。

（８）特殊遺物（木製品以外）

いずれも包含層からの出土である。

土製品（第 85 図１・２）

１は羽口である。先端付近が遺存し、被熱のため変色する。２は土製丸玉である。径 0.15㎝の孔を斜め方向に穿つ。

石製品（図版 35、第 85 図３～ 14）

３は管玉である。孔径 0.2㎝を測る。碧玉製。４～７は石庖丁である。４は背部片で背孔 0.8㎝、孔間 2.2㎝を測り、外湾刃半月形を呈する。片岩製。５・６は刃部片である。６は刃部横に孔と考えられる研磨痕が認められ、再利用品と考えられる。５は緑色片岩、６は片岩製。７は外孔 0.55㎝、内孔 0.2㎝、背孔 1.4㎝、孔間 2.6㎝を測り、外湾刃半月形を呈する。凝灰岩製。８は紡錘車である。断面台形を呈し、孔径 0.65㎝を測る。滑石製。９は石斧である。扁平な小型の石斧で刃部に使用痕が見られる。緑色片岩製。10 は不明石製品である。径 0.5 ～ 1.7㎝、深さ 0.2 ～ 0.7㎝の凹みが多数見られる。斑岩系石材製。

11 ～ 14 は砥石である。11 は表面のみが砥面として遺存し、側面は研磨により面取りする。凝灰岩製。12 は表裏面を砥面とする。片岩製。13 は表裏面を砥面とし、側面は研磨により面取りする。下面には粗い研磨を施し、表面に鉄製刃器の研磨痕が見られる。細粒砂岩製。14 は表裏面を砥面とし、側面および下面は研磨により面取りする。泥岩製。いずれも石質と大きさから、持ち砥の仕上げ砥と考えられる。

鉄製品（第 85 図 15・16）

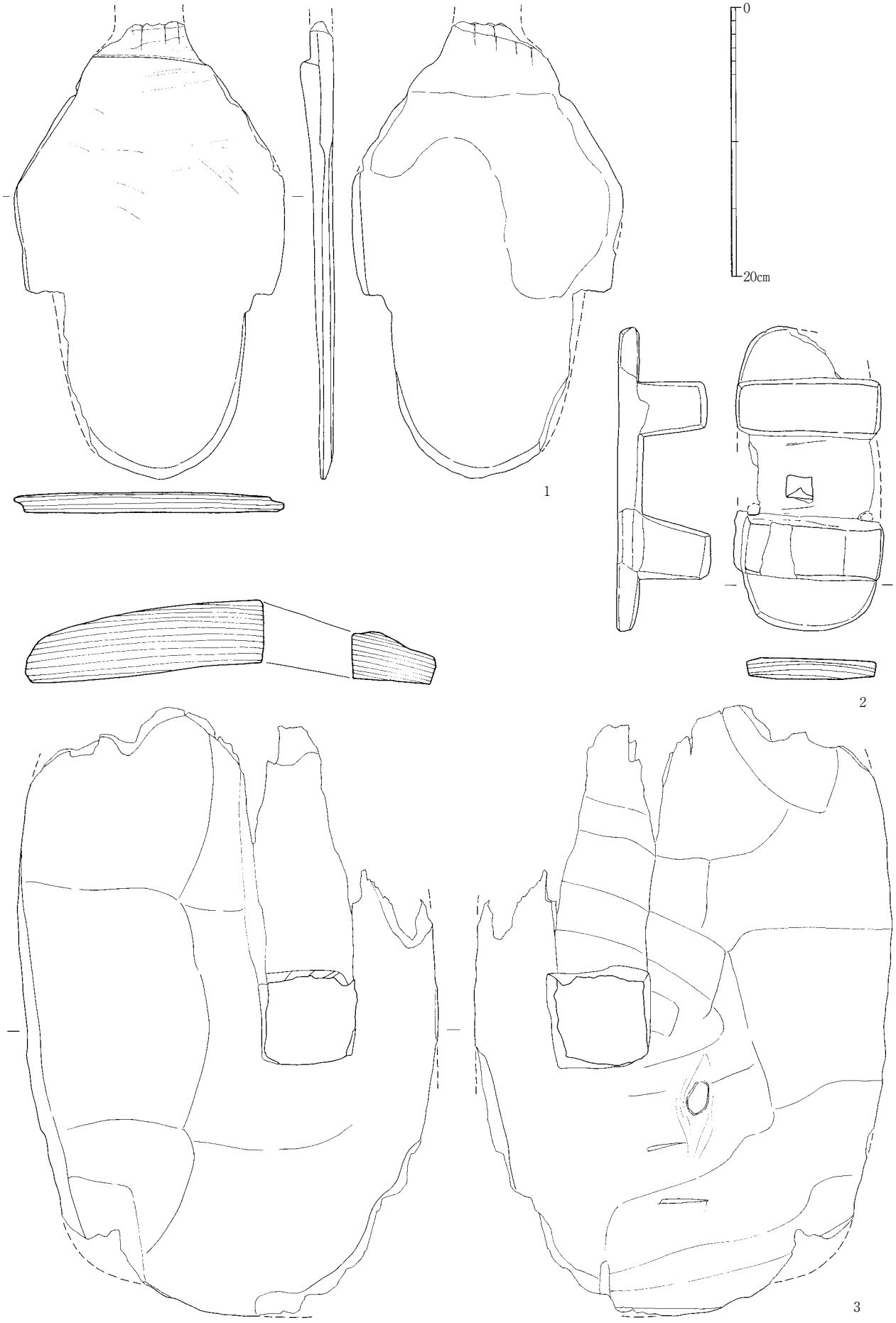
15 は鉄鏃である。断面四角形を呈する長頸鏃である。16 は刀子である。茎が短く、上下共にわずかに関を持つ（城門）。

（９）木製品

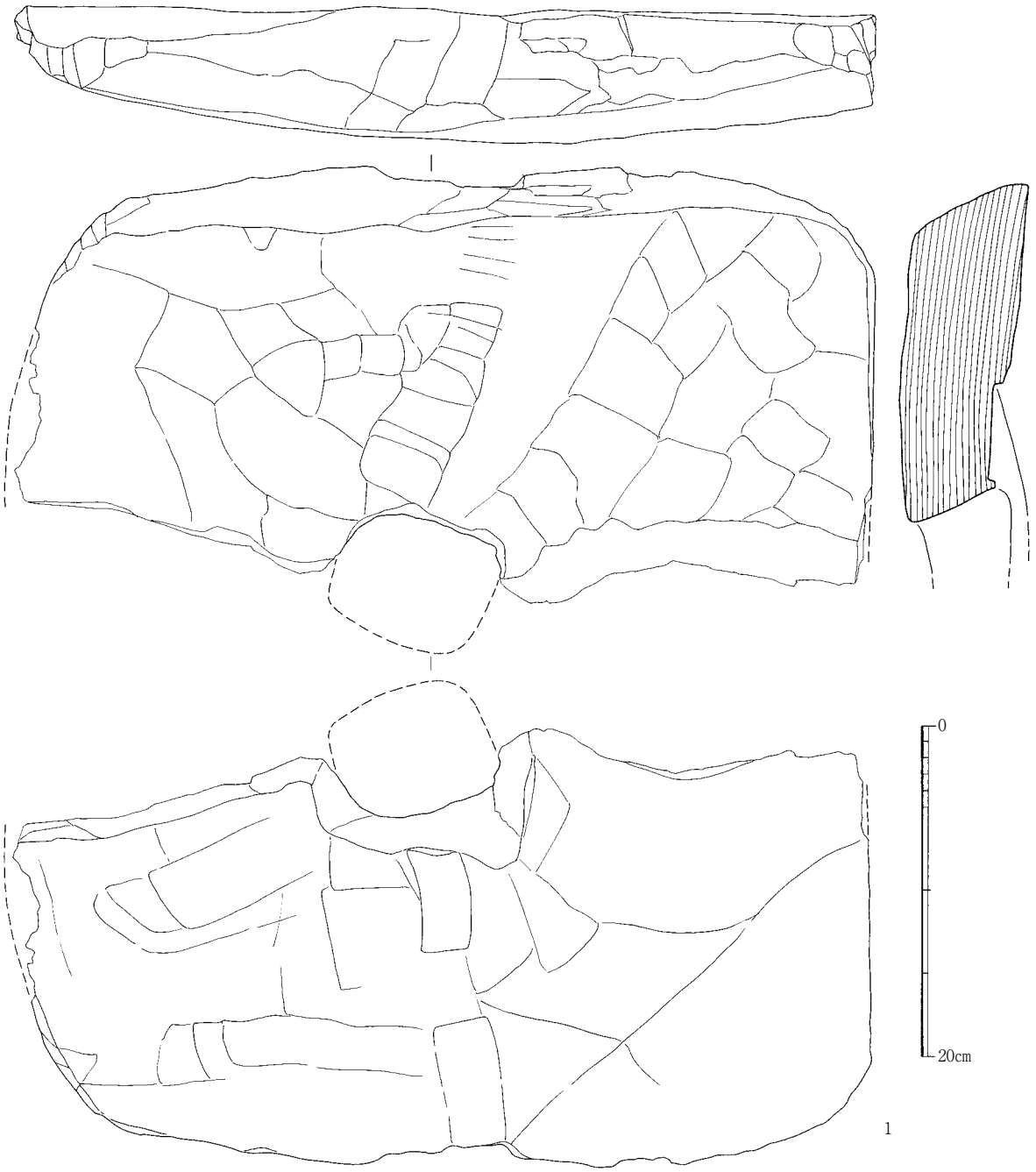
Ⅳ−Ｃ区の出土木製品については、多量であることから、特殊遺物とは別項目を立てて報告する。以下の報告は、遺構出土のものと包含層出土のものの２つに分け、木簡類は最後に報告する。

遺構出土木製品（巻頭図版５、図版 35 ～ 38、第 86 ～ 105 図）

第 86 図１～３は 1001 号土坑出土木製品である。１は鋤である。刃部の段差部分に鉄製の鋤先が差し込まれていたものと考えられる。基部は細く削りだしており、組み合わせ式の柄が付く可能性



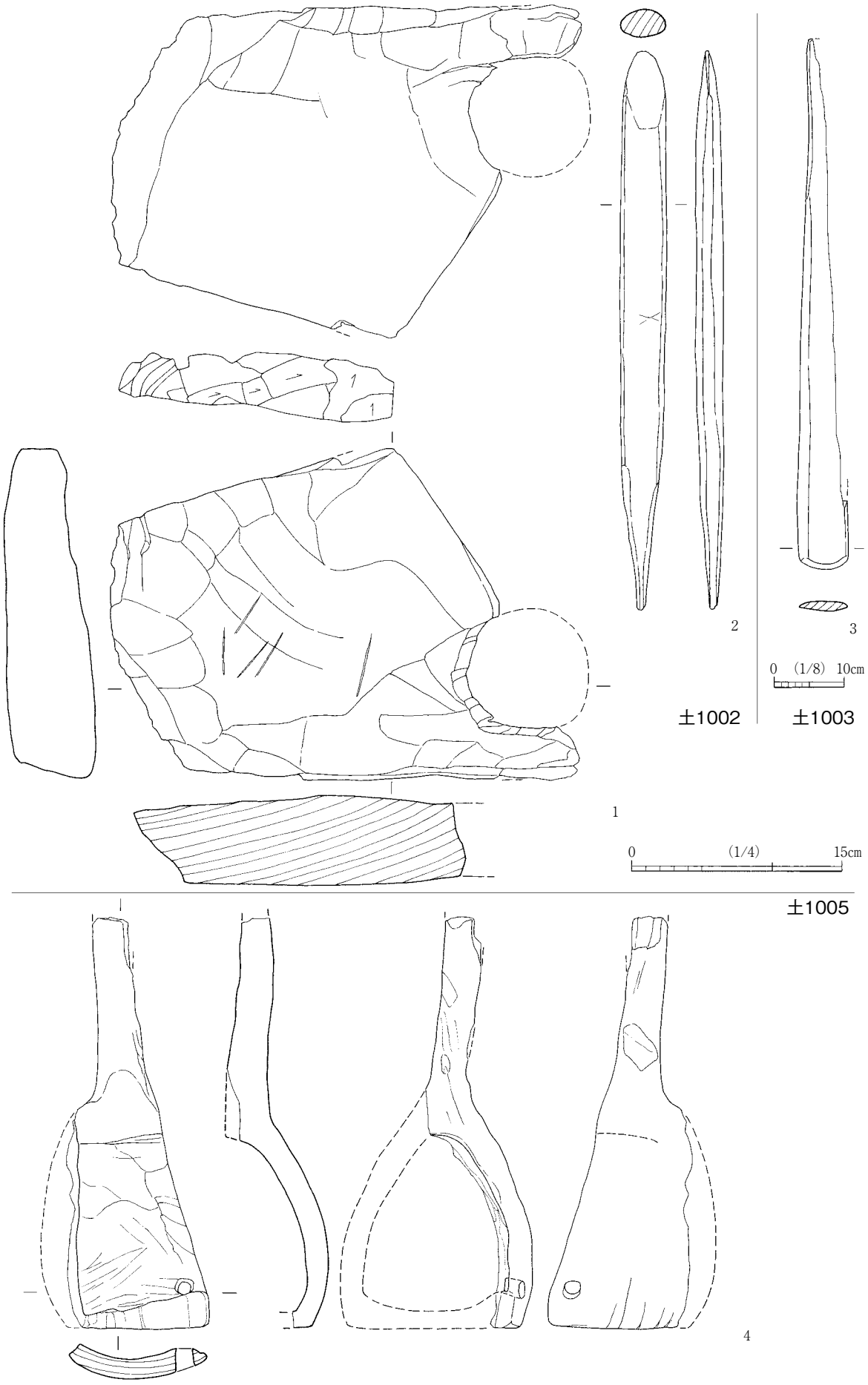
第 86 図　Ⅳ－C 区 1001 号土坑出土木製品実測図（1/4）



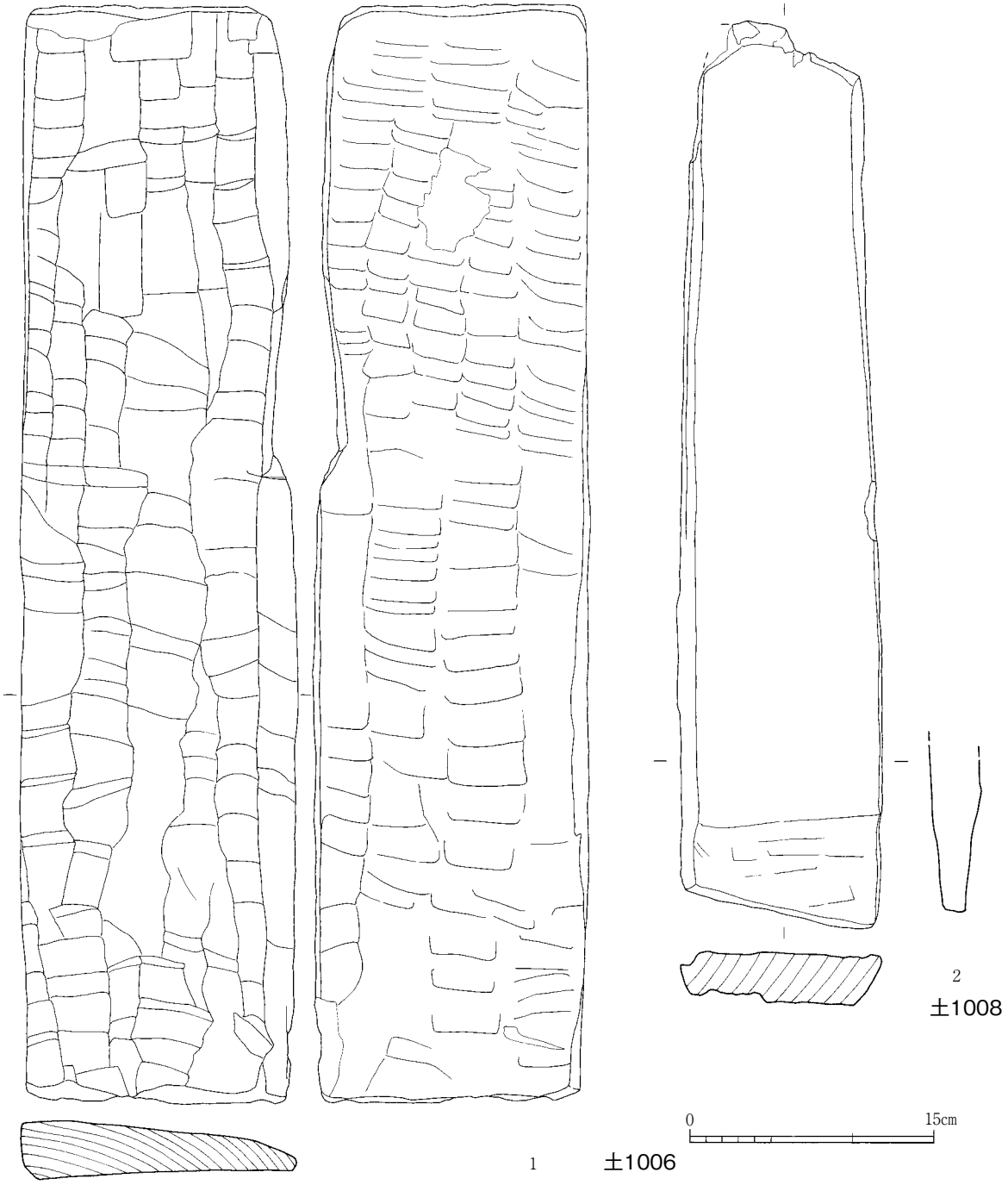
第 87 図　Ⅳ－Ｃ区 1002 号土坑出土木製品実測図①（1/4）

がある。２は下駄である。右用で、孔部分で破損する。比較的歯が高いままで遺存しており、あまり使用していないものと考えられる。３はねずみ返しである。中央の孔は 5.3 × 6 ㎝で、大きな削り痕が全体的に見られる。

第 87 図１および第 88 図１～２は 1002 号土坑出土木製品である。第 87 図１、第 88 図１はねずみ返しである。同一個体だが接合できなかった。第 87 図１は孔部分で破損し、全面に削りが見られる。短軸方向に紐状の圧痕が連続して見られ、紐で巻いていた可能性がある。割れた断面にも同様の圧痕が認められることから、何らかの再利用をしようとしたものか。ただし、木材の性質である可能性もある。第 88 図１は２側面が残存する。剥落が著しく明確ではないものの、全面に削りを施していたものと考えられる。２は結界杭か。上端は丸く、細く仕上げられ、下端は杭状に尖る。中位に×字状の細い線刻が見られる。



第 88 図　Ⅳ－C 区 1002 ②・1003・1005 号土坑出土木製品実測図（3 は 1/8、その他は 1/4）



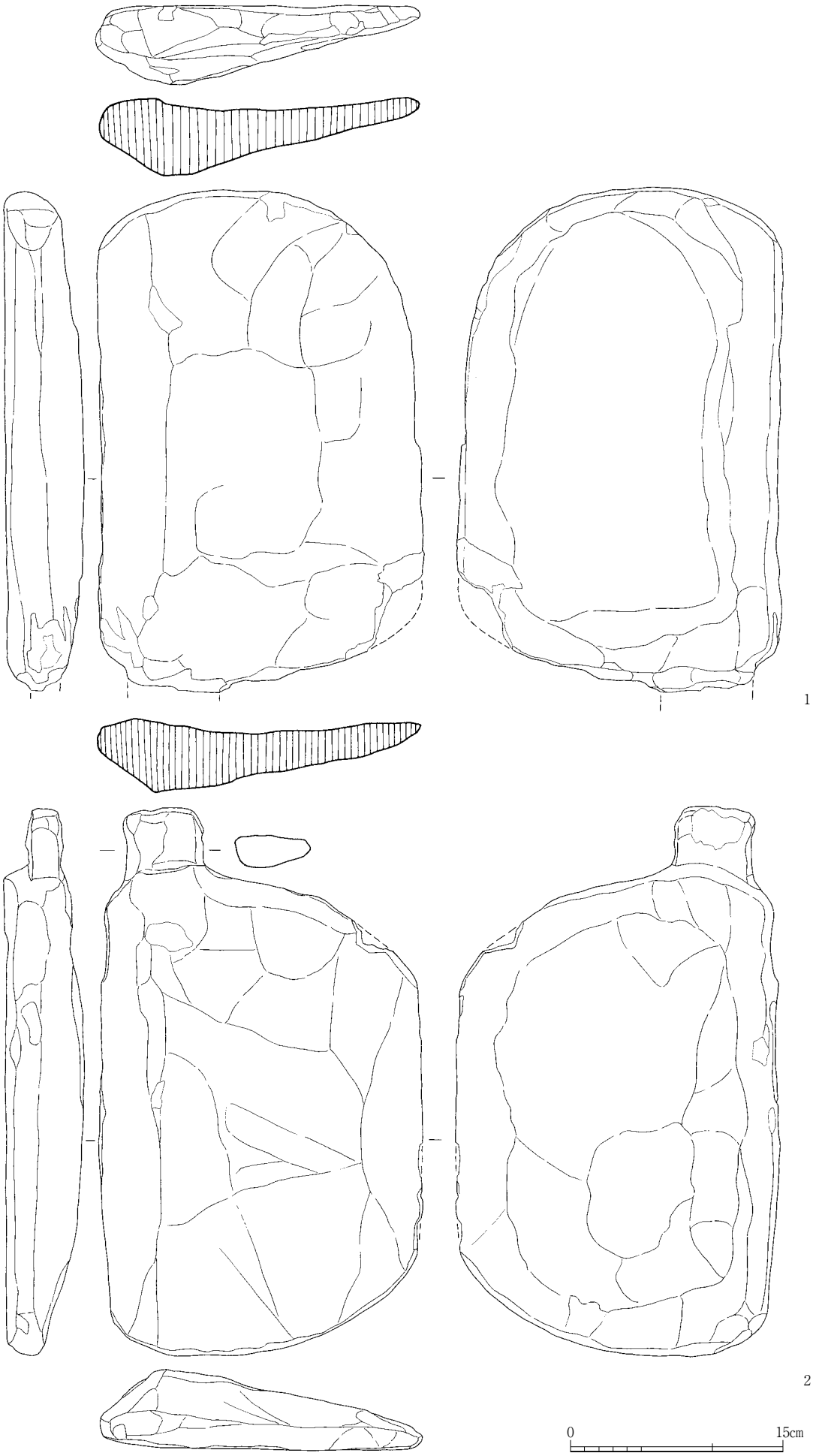
第 89 図　Ⅳ－C 区 1006・1008 号土坑出土木製品実測図①（1/4）

第 88 図３は 1003 号土坑出土の板状施設器具材である。全体が薄く、表面を平滑に仕上げるが、墨痕等は見られず、上端の一部が炭化する。

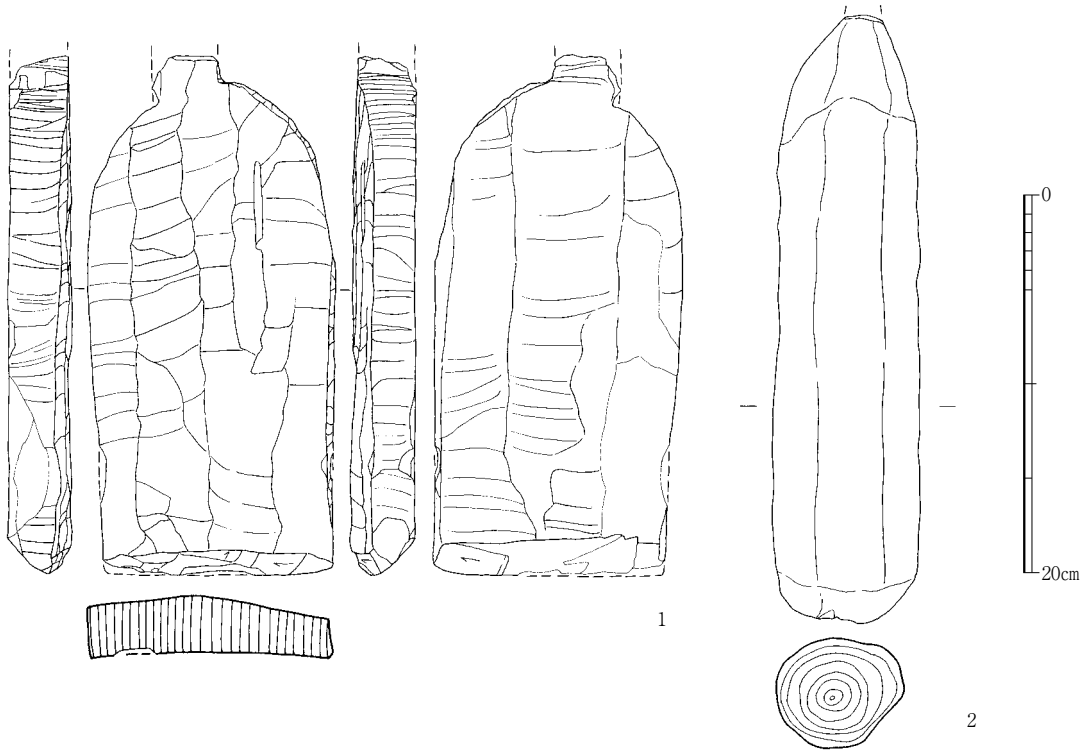
第 88 図４は 1005 号土坑出土の壺鐙である。破損しているものの、開口部は高さ 12.5cm、幅５cm 以上、奥行き９cm以上である。縁辺部に径１cmの孔が穿たれる。鞍へ接続するための棒状部が右方向に傾いており、左足用と考えられる。

第 89 図１は 1006 号土坑出土の板状施設器具材である。両面に細かなケズリを施す。側面の一部に浅い刳り込みが見られるが、用途等は不明である。

第 89 図２、第 90 図は 1008 号土坑出土木製品である。第 89 図２は板状施設器具材で、下端部が細く削られる。差し込み式の部材と考えられる。第 90 図１・２は農具未製品である。出土時は２



第 90 図　Ⅳ－C 区 1008 号土坑出土木製品実測図②（1/4）



第 91 図　Ⅳ－Ｃ区 1009 号土坑出土木製品実測図（1/4）

の突出部と１の割れ口で繋がっており、同一個体である。両面に粗い削りを施し、全面を整形している。泥除けなどの未製品と考えられる。

第 91 図は 1009 号土坑出土木製品である。１は農具未製品である。全面に細かい削りを施し、整形している。上端の突出部が欠損しているものの鋤の未製品と考えられる。２は杵である。状態が悪く明確ではないものの、下端は使用により潰れているものと考えられる。

第 92 図は 1010 号土坑出土木製品である。１・２は鍬である。１はナスビ形の鍬になるものと考えられる。下端が尖っておらず、未製品である可能性がある。２は上端部が厚く、下端ほど細くなる。横方向に緊縛痕状の痕跡が見られるが、先端付近にも認められる。３は梯子か。一部分が台状に厚くなるが、段差としては薄い。梯子であれば欠損していると考えられる。４・５は板状施設器具材である。４は上部の中央からややずれた位置に長方形の孔が穿たれる。左側面は幅２㎝ほどの範囲が薄く削られており、他の部材にはめ込むための加工の可能性がある。５は厚く、井戸枠の可能性がある。

第 93 図１は 1011 号土坑出土の鞍である。全面に丁寧な削りを施す。下から前側に抜ける鞍通し孔が右３ヶ所、左１ヶ所残る。バランスから考えると左右ともに３ヶ所ずつあったものと考えられる。いくつか他に木片が出土しているが、明確な接合面は判別できなかった。

第 93 図２は 1012 号土坑出土の砧である。一木造りで、柄を含めた全面が丁寧に削られる。両面共に中央部が大きく凹む。左側面にもわずかに使用痕が認められる。表面先端近くには斜め方向の切断痕、凹み部には加工痕が見られ、再加工しながら利用していたものと考えられる。

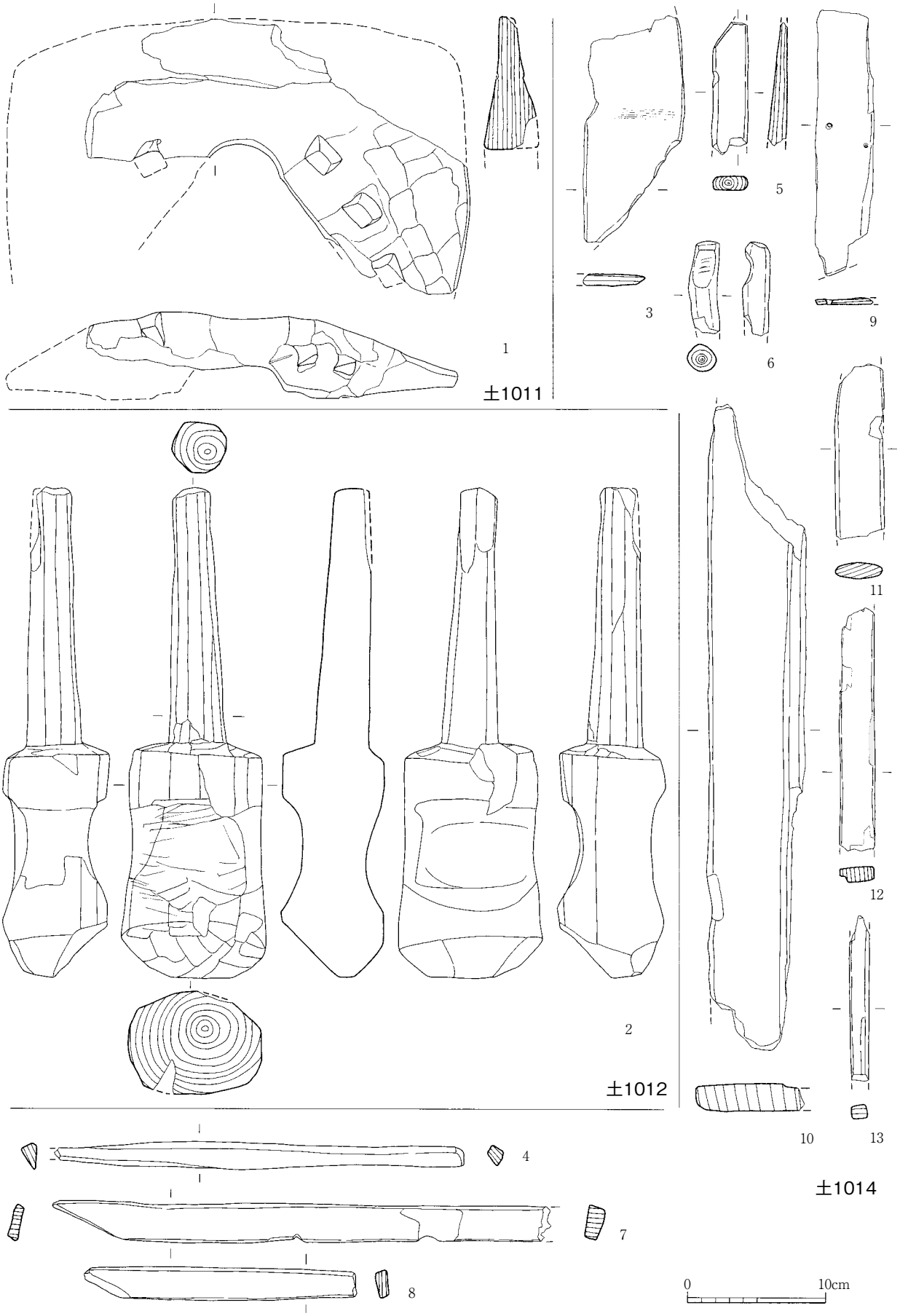
第 93 図３～ 13 は 1014 号土坑出土木製品である。３は鋤ないしは鍬か。側面に浅い抉り部が作り出され、表面には緊縛痕が見られる。４は刀形である。刃部・柄共に断面菱形で簡単に削りこむことによって作られる。５～８、11 ～ 13 は棒状施設器具材である。５は両側を削って平坦面を作り出す。６は先端に抉りが作り出される。弓の端部の可能性がある。７・８は先端が細くなってお

第 92 図　Ⅳ－Ｃ区 1010 号土坑出土木製品実測図（1/4）

り、端部がやや薄くなる。ヘラ状製品になる可能性もある。12 は側面の一部が炭化する。13 は細く、箸か簪になる可能性がある。９・10 は板状施設器具材である。９は２ヶ所に小さい孔が穿たれ、曲げ物板の可能性がある。10 は右側縁にわずかに段が作られ、何らかの部材になる可能性がある。

第 94 ～ 105 図は１号井戸出土木製品である。第 94 ～ 101 図の３までは実際に発掘調査時に井戸枠を解体しながら取り上げていったものである。以下に組み上げられた井戸枠の上から順番に報告する。

第 94 図１は両側に刳り込みが施され、片方のみが遺存する。２は両端部に、両側面から刳り込



第 93 図　Ⅳ－C 区 1011・1012・1014 号土坑出土木製品実測図（1/4）

第 94 図　Ⅳ－Ｃ区１号井戸出土木製品実測図①（3・4 は 1/4、その他は 1/8）

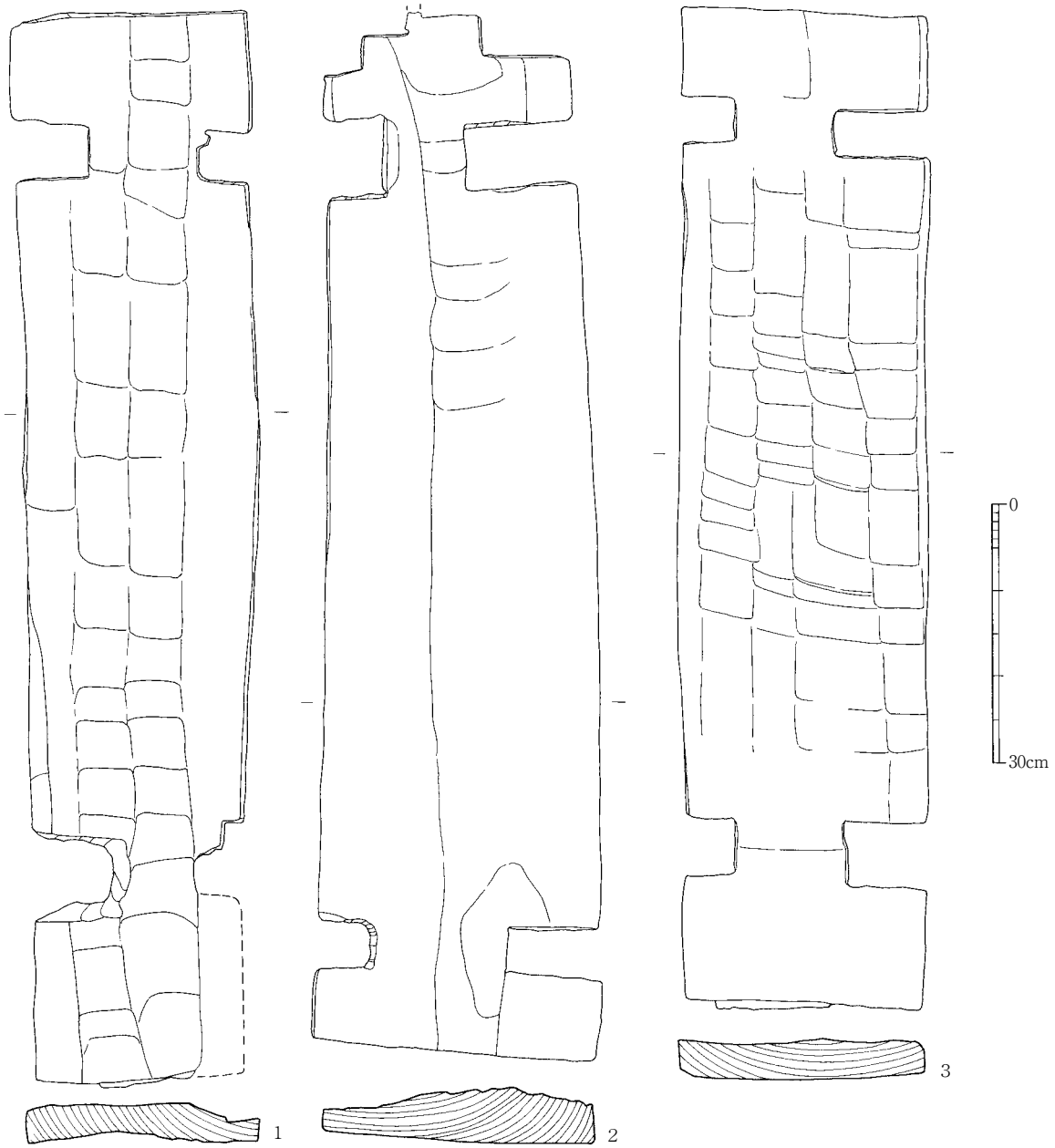
みが施される。３・４は板状施設器具材で、刳り込みは見られない。５は片方の端部に、１ヶ所の刳り込みのみが遺存している。第 95 図１は割れているものの刳り込み部分が遺存する。２は上端に細い刳り込みが上側にのみ彫られる。３は片側が欠損しているが、両側面から刳り込みが施される。４は縦方向に半分欠損しており、両端部に刳り込みが残る。５は両端部に両側面から刳り込みが施される。第 96 図１・３は両端部に両側面から刳り込みが施され、１の下端、右側は２段の刳り込みとなる。表面も削りが明瞭に認められる。２は両端部に両側面から刳り込みが施され、上部は板端部にも突出部を造り出す。

第 97 図１～４は両端部に両側面から刳り込みが施される。２は下側の刳り込みが幅広で、右側は２段の刳り込みとなる。また、端部に僅かな段が造り出される。３は側縁部に樹皮が残存してお

第 95 図　Ⅳ－Ｃ区１号井戸出土木製品実測図②（1/8）

り、木材の周縁部を用い、中央部のみ加工したことがわかる。第 98 図１は腐食が著しいが、両端部に両側面から刳り込みが施される。裏面に幅広い傷が見られるものの、腐食のため詳細は不明である。２は両端部が欠損し､刳り込みは残らない。上位および中位に圧痕状の痕跡が認められるが、腐食が著しく、新旧は決定できない。３は板状を呈し、上端部がやや細く削られる。差し込み式となるか。４は板状を呈し、先端が細く削られており、表面には細長い圧痕状の痕跡が見られる。第 99 図１は両端部ともに両側面から２対の刳り込みが施される。上端の右側はＬ字状に加工される。縁辺部にわずかに樹皮が認められる。２・３は両端部に両側面から刳り込みが施される。共に加工痕が明瞭に認められる。第 100 図１～３は両端部に両側面から刳り込みが施される。１は刳り込みが斜めになる箇所で鋸による切断の際に付いたと考えられる段差が認められる。４は端部のみが遺存しており、両側面から刳り込みが施される。出土位置的に３と同一個体の可能性があるが、刳り込み部の幅が異なる。５・６は板状を呈し、５は端部が遺存する。刳り込み等は確認できない。

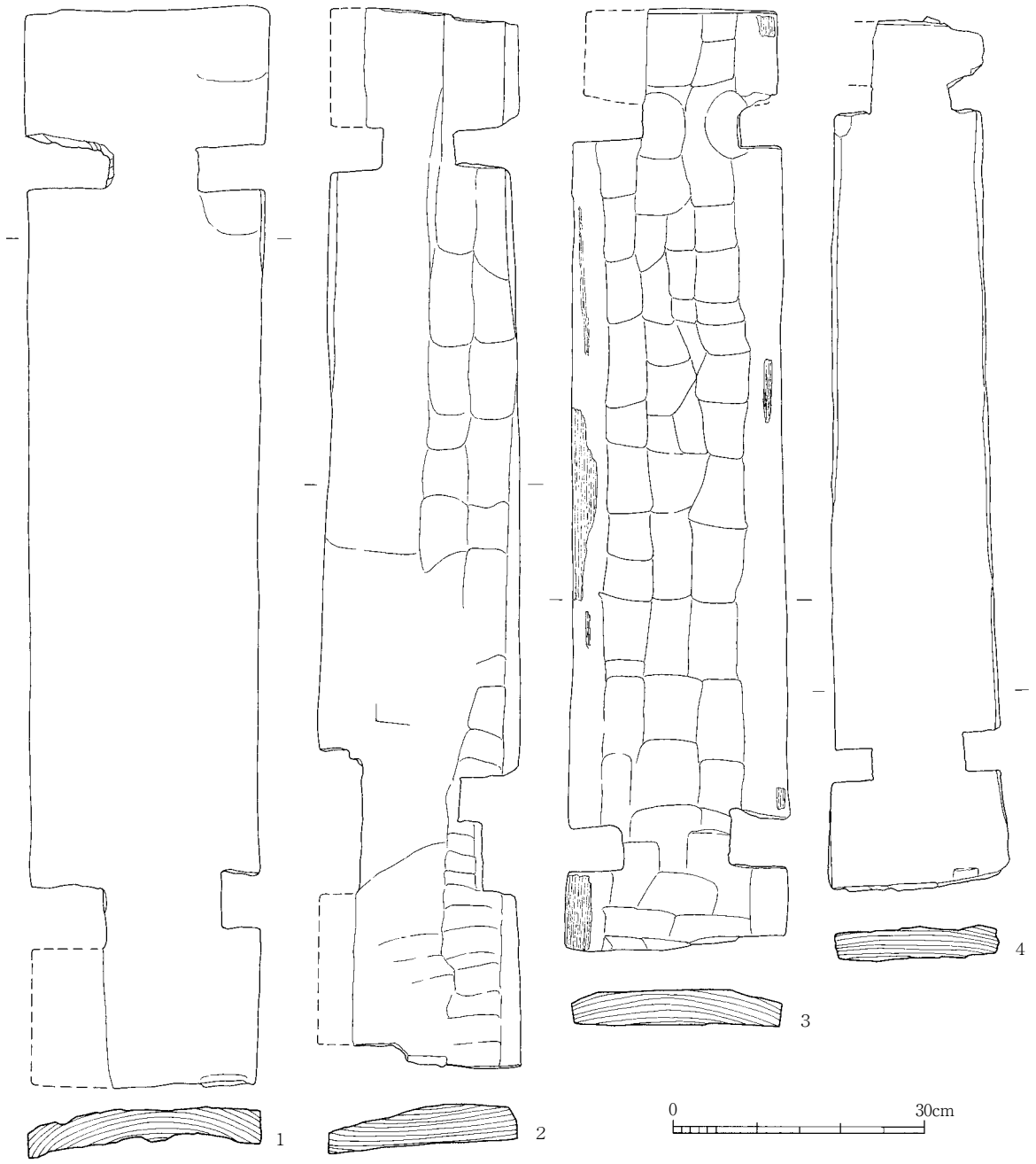
第 101 図１は両端部に両側面から刳り込みを施す。２は両端部を突出部とし、下方には１ヶ所の



第 96 図　Ⅳ－Ｃ区１号井戸出土木製品実測図③（1/8）

み刳り込みが施される。３は下方にのみ１ヶ所刳り込みが残る。腐食が著しく加工痕等は確認できない。４・５は出土位置不明の井戸枠の一部である。共に端部が遺存しており、４は両側面から刳り込み、５は突出部を造り出す。６～８および第 102・103 図は井戸枠ないしは井戸枠製作時の残材と考えられる板材である。６・７は端部に段差が見られ刳り込み部分ないしは切断後の残材と考えられる。第 102 図２は上面の一部に切断痕が見られる。５は下端がＬ字状に加工されており、井戸枠の組み合わせ部と考えられる。６は上面に切断痕と考えられる段差が認められ、表面の半分ほどで樹皮が残る。８は両端部ともに切断痕と考えられる段差が認められる。

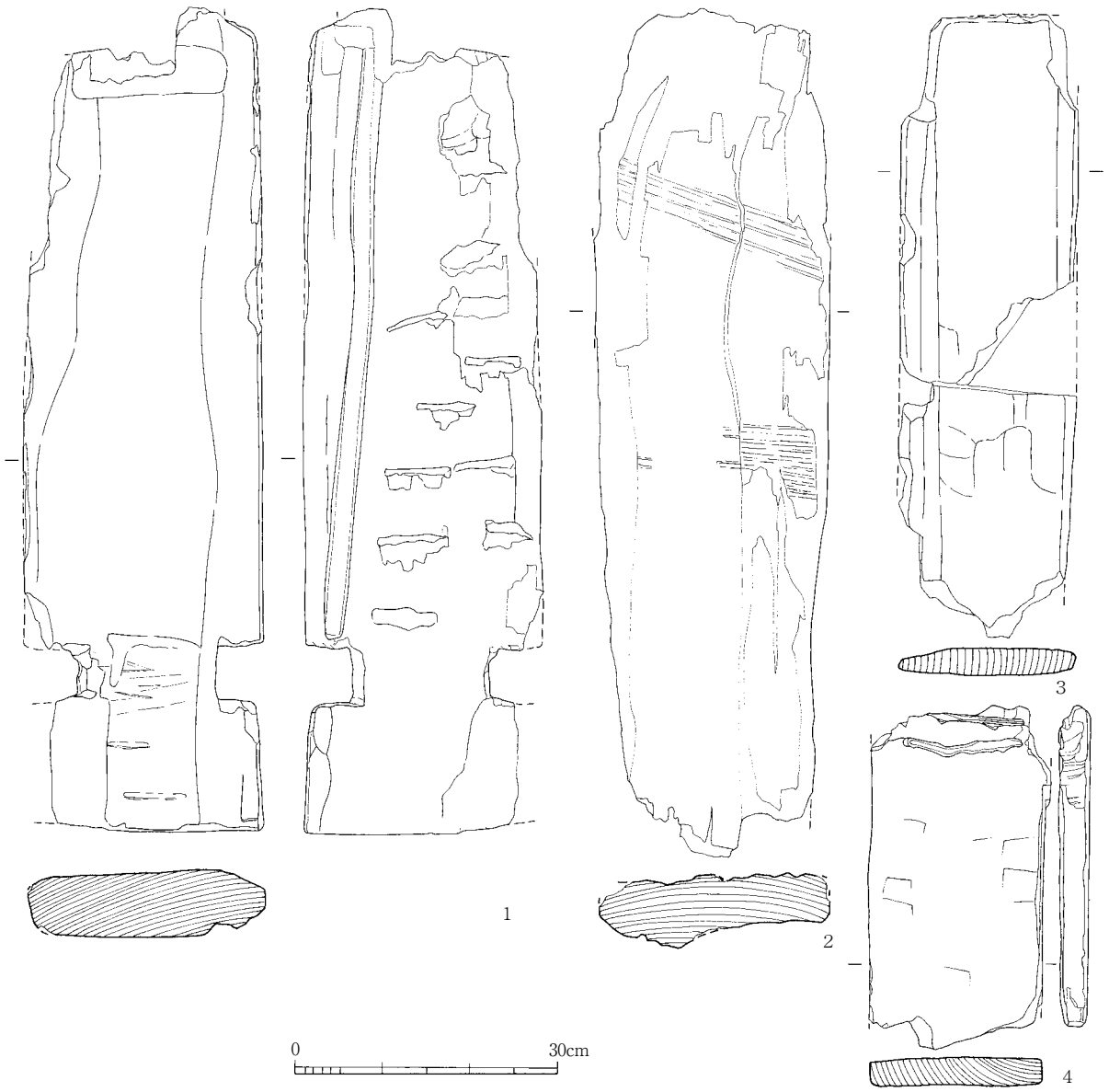
第 103 図１は上端部にＬ字状の加工が認められ、井戸枠の刳り込み部と考えられる。２は表面の削りが明瞭に認められ、左側面はわずかに段差が付く。６は右端部がわずかに細くなっており、表面にわずかに擦過痕が認められる。第 104 図および第 105 図１～７は板状施設器具材である。第 104 図１は表面が平坦となるものの裏面には段差が見られる。２・３は共に上端部にＬ字状の加工が１ヶ所のみ施される。井戸枠の可能性がある。４は腐食のため明確ではないものの、下端部左に



第 97 図　Ⅳ－Ｃ区１号井戸出土木製品実測図④（1/8）

突出部が造られ左側面部に抉りが施されるものと考えられる。８は細長い棒状を呈しており、井戸枠の支柱等の可能性が考えられる。第 105 図２は左側に直線的な圧痕が認められ、何らかの部材と組み合うものである可能性がある。３は中央左寄りに孔が穿たれる。何らかの部材の可能性もある。４・５は細長く、薄い板状を呈する。加工痕等は明確には見られなかった。６・７は孔が穿たれ、６は下端と側縁の２ヶ所、７は下端部に１ヶ所認められる。６は箱の可能性がある。８～ 11 は曲げ物の側板である。曲がりをよくするための線状刻みが多数見られる。同一個体と考えられる。12 は杭である。腐食のため加工痕は明確には認められない。13 は編錘である。欠損するがリボン形になるものと考えられる。この他に、口部分に孔が横向きに穿たれた瓢箪の果皮が出土している。細片になっており図化できなかった。

検出された井戸枠の刳り込み部は概ね角の一方が臍状に凹み、もう一方に僅かな突出部が認められることから、鋸で短軸に沿って臍を切った後、糸鋸状の工具を用いて長軸に沿って切断

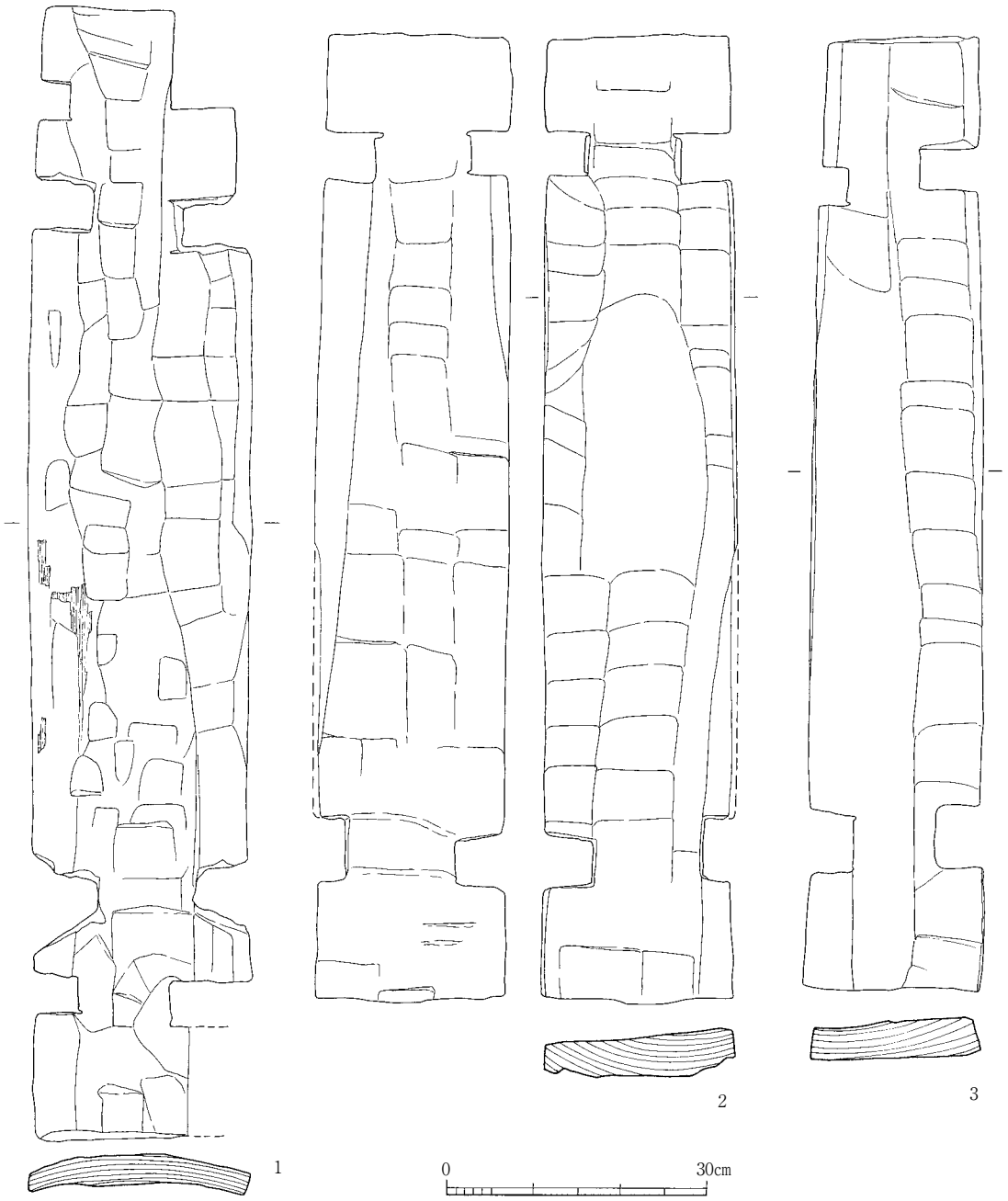


第 98 図　Ⅳ－Ｃ区１号井戸出土木製品実測図⑤（1/8）

し、最後の角部分は折り取ったという工程が想定される（城門）。

包含層出土木製品（図版 38 ～ 43、第 106 ～ 117 図）

第 106 図１～３は楔か。１は細長く、鍬等を固定するものと考えられる。２・３は下端を削りによって尖らせる。刃こぼれ状の痕跡が見られるが、敲いた痕跡などは確認できない。４は木槌か。削りによって平坦面を作り出し、断面方形を呈する。５～７は砧である。５は一木造りで、柄を含めた全面が丁寧に削られる。両面中央が使用により凹み、擦過痕が見られる。６は柄が別作りの差込式である。加工痕や使用痕がほとんど認められない。未使用に近いものと考えられる。７は一木造りで、柄を含めた全面が丁寧に削られる。わずかに凹みと擦過痕が認められるが使用の頻度は少ないと考えられる。柄端が削りによってわずかに膨らみグリップ状を呈する。５・６も柄端部が欠損しているが、本来は同じくグリップ状をしていたものと考えられる。８は栓ないしは鍬等の楔か。中央に削りによって段差を作り出す。９は大足の一部である。方形孔と臍が彫られ、断面方形に仕上げる。10・11 は大足の一部か。幅３～４㎝前後の突出部が５ヶ所造り出される。接合しないものの同一個体と考えられる。12 は大足の踏み板ないしは腰当か。端部が上がって舟形を呈す

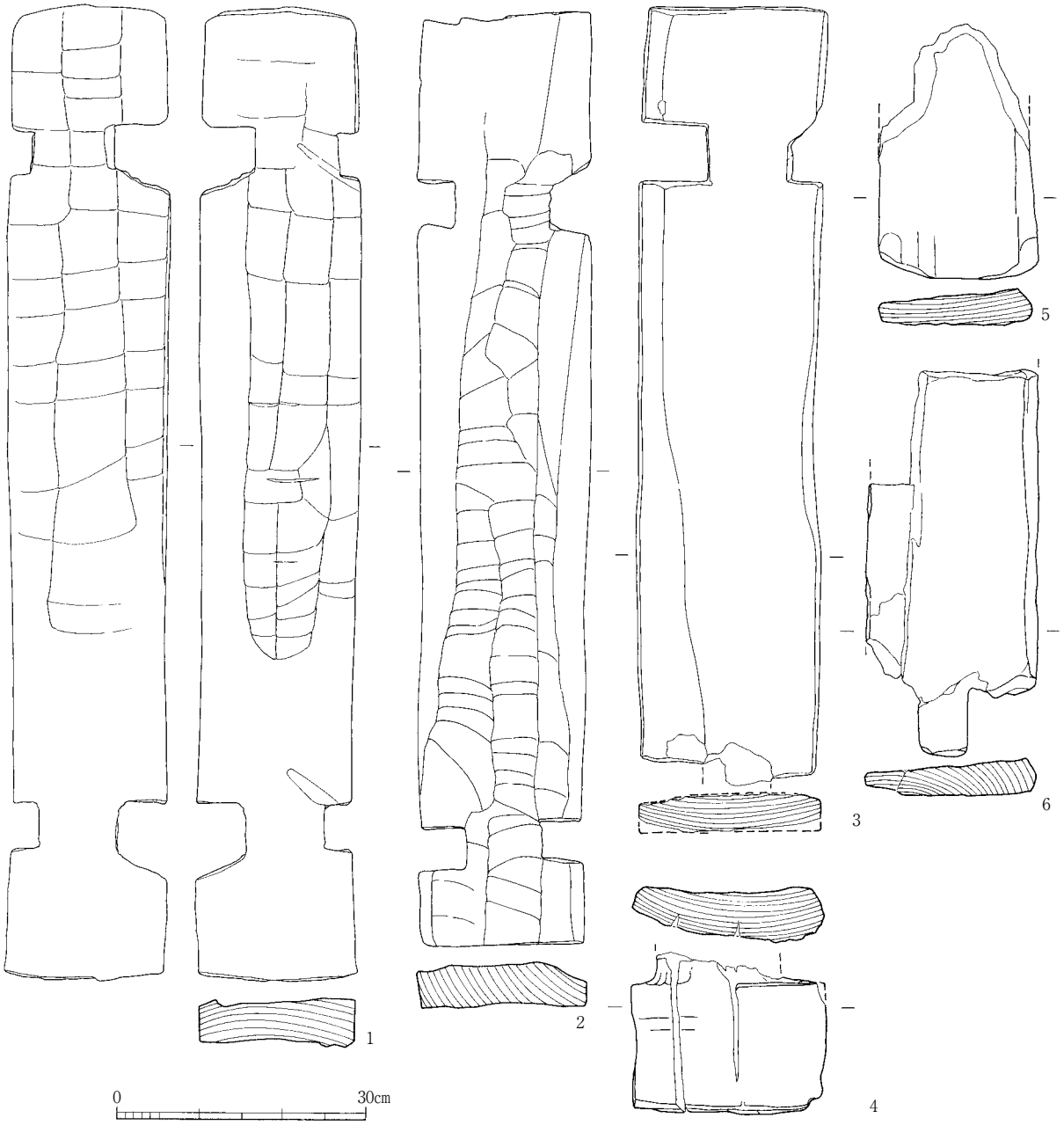


第 99 図　Ⅳ－Ｃ区１号井戸出土木製品実測図⑥（1/8）

るものと考えられる。

第 107 図１は羽子板状木製品である。長方形の板に径２cm程の柄が付く。板部分の一部は炭化する。２・３は平鍬である。２は先端から 9.5cmの位置で刃部にわずかな段が形成されており、幅２cm程の鉄製鍬先を装着して使用していたものと考えられる。３は中央部に方形の孔が穿たれる。欠損が著しいが２と同じく鉄製鍬先を装着していたものと考えられる。４は股鍬か。表面に緊縛痕が見られる。５・６は柄か。５は鋤の柄と考えられる。６は柄の端部で、先端が平面三角形状を呈する。７は杵である。腐食が著しく、加工痕・使用痕ともに確認できない。８は臼ないしは容器か。内面が内湾し、左側側面端部には平坦面が造り出される。

第 108 図１は軛か。両端に削りにより紐掛け用の抉りを造り出す。２は腰当である。中央部がわずかに凹んでおり、両側に紐掛け用の抉りを造り出す。緊縛痕は確認できなかった。３は糸巻きである。中央部が台形状に凹んでおり、両端部は細くなる。４～ 26 は編錘である。平面形は４～ 16

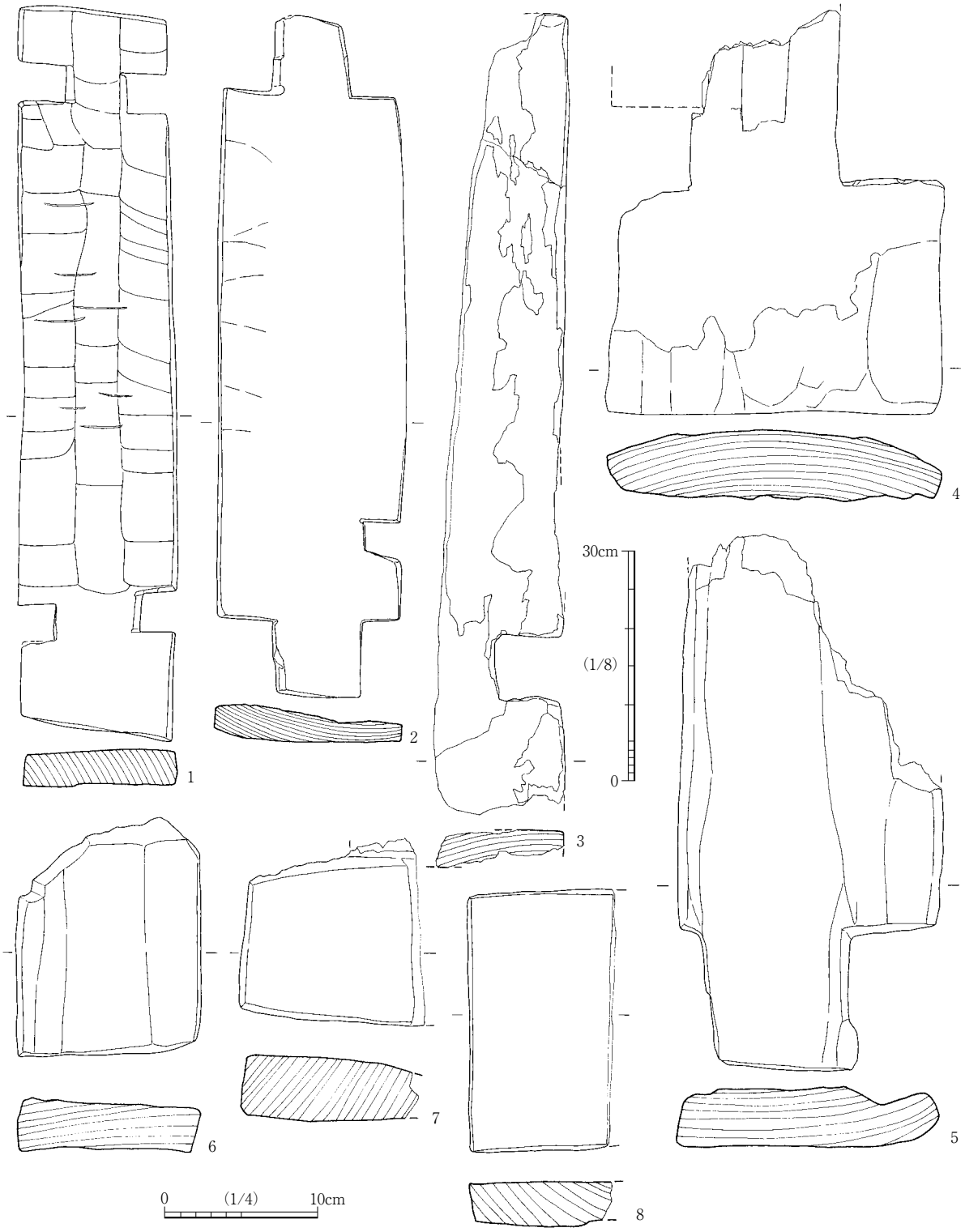


第100図　Ⅳ-C区1号井戸出土木製品実測図⑦（1/8）

はリボン形、17～24は細長いリボン形、25・26はダンベル形を呈する。いずれも抉り部を中心として削りが施され、25・26のくびれ部には細かい削り痕跡が残る。この他にも、図化していないものの編錘の小破片が多数出土している。

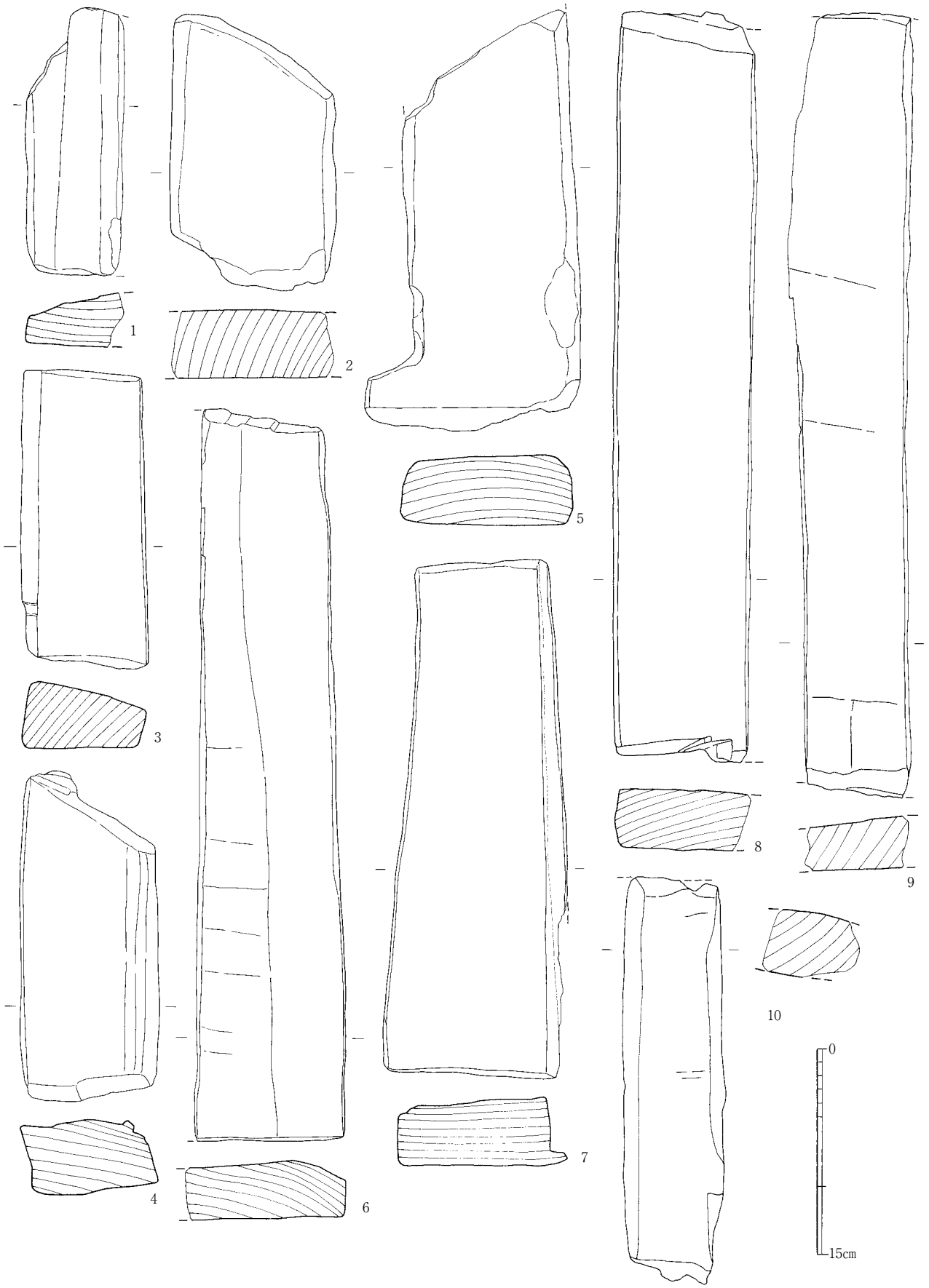
第109図1は鞍か。組み合わせ式の上面部になるものと考えられる。表面には黒漆が残存しており、全面に塗布されていたものと考えられる。2・3は鞍である。2は下から前側に抜ける鞍通し孔が2ヶ所残り、その外側には臍が左側に2ヶ所彫りこまれる。他に小破片があるものの明確な接合面は確認できなかった。3は下から前側に抜ける鞍通し孔が左右共に3ヶ所残る。洲浜方は抉りが小さい。表面に黒漆が塗布されており、一部には刷毛の一部と見られる繊維が付着している（第122図、Ⅳ-3で後述）。

第110図1は盤か。明確ではないものの全体に削りの痕跡が見られ、内面が緩やかに内湾する。2は槽である。全面に細かい削りを施し、平面六角形の脚部が2ヶ所残存する。内側は丁寧な削り



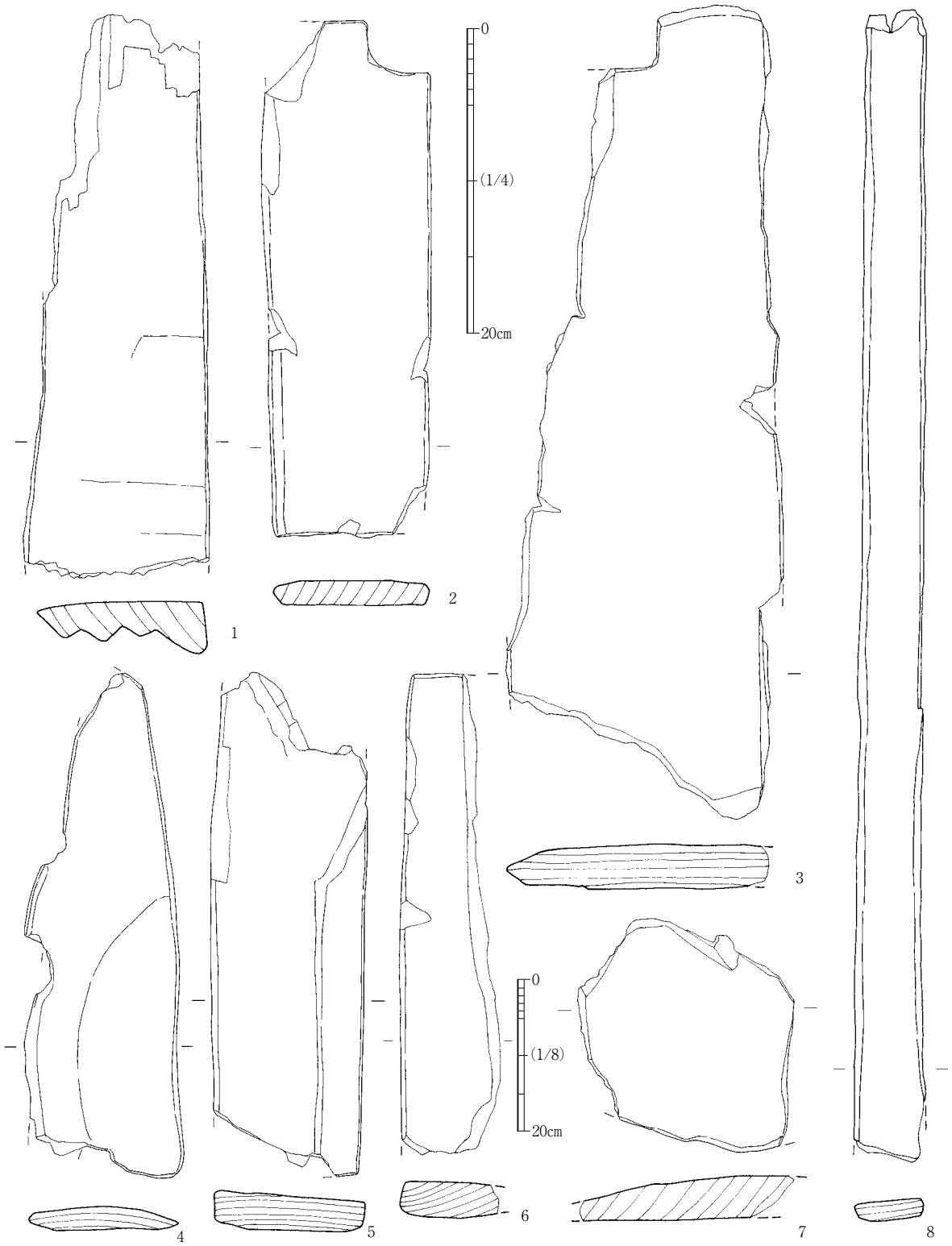
第 101 図　Ⅳ－Ｃ区１号井戸出土木製品実測図⑧（1 ～ 3 は 1/8、その他は 1/4）

により２㎝程凹む。３～ 13 および第 111 図１～３は曲げ物板である。３～９は底板である。３は立板を固定するための孔が２対残存し、立板の痕跡が残る。裏面は擦過痕が見られる。４は上側に木釘が１ヶ所残存し､わずかに擦過痕が見られる。６は４ヶ所に立板を固定するための孔が見られ、１ヶ所には樹皮の紐が残存している。周縁部は幅５mm、高さ２mm ほど薄くなっており、立板を設置するためのものと考えられる。裏面には擦過痕が多数見られる。７は立板を固定するための孔が２対残存し、１ヶ所に樹皮の紐が残存している。組み合わせ式の底板と考えられ、綴じ合わせのための孔が側縁に１つ残存する。立板の痕跡が見られ、裏面には擦過痕が見られる。８・９は同一



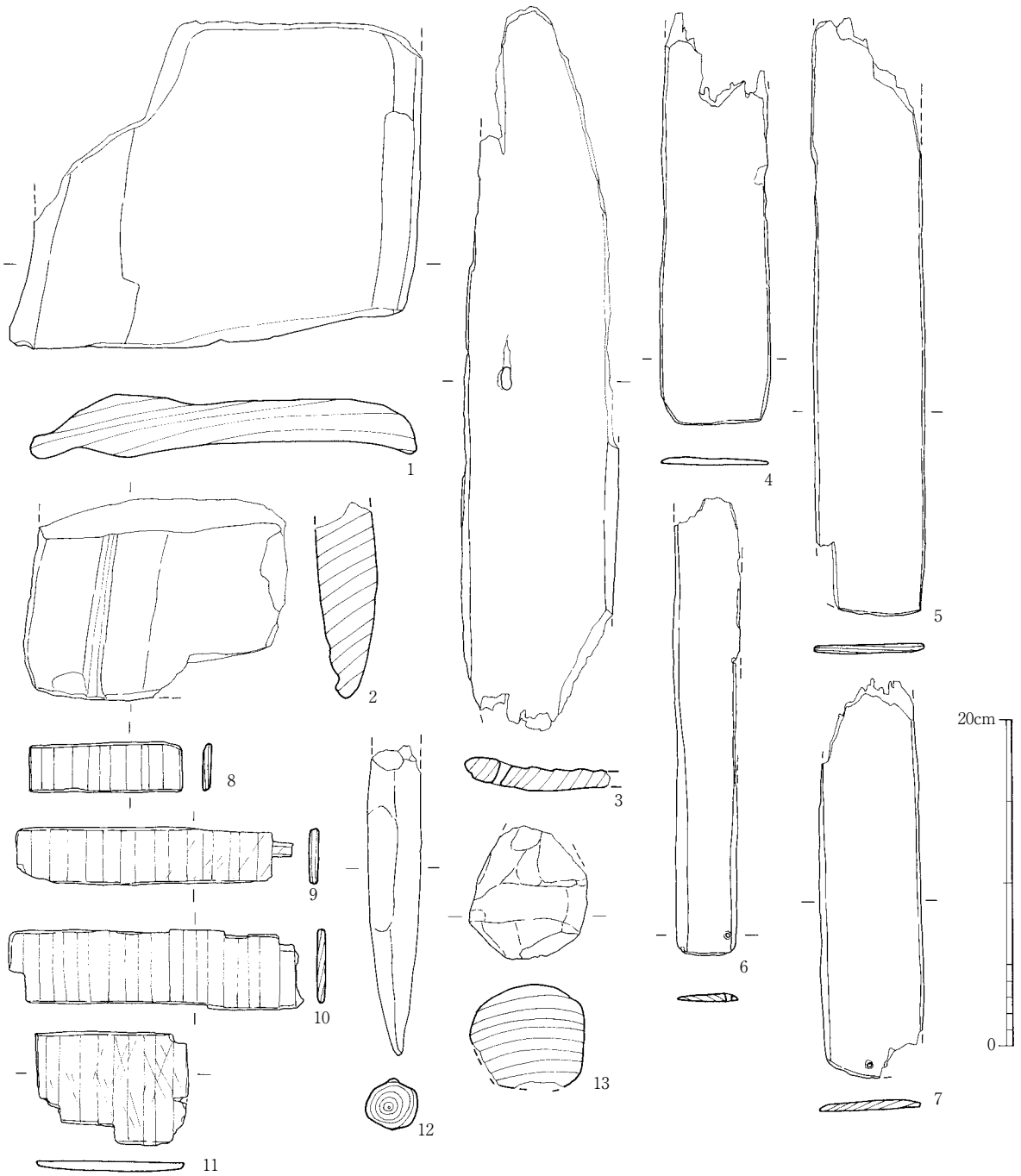
第102図　Ⅳ-C区1号井戸出土木製品実測図⑨（1/4）

第 103 図　Ⅳ－Ｃ区１号井戸出土木製品実測図⑩（1/4）



第 104 図　Ⅳ－Ｃ区１号井戸出土木製品実測図⑪（4 ～ 6 は 1/8、その他は 1/4）

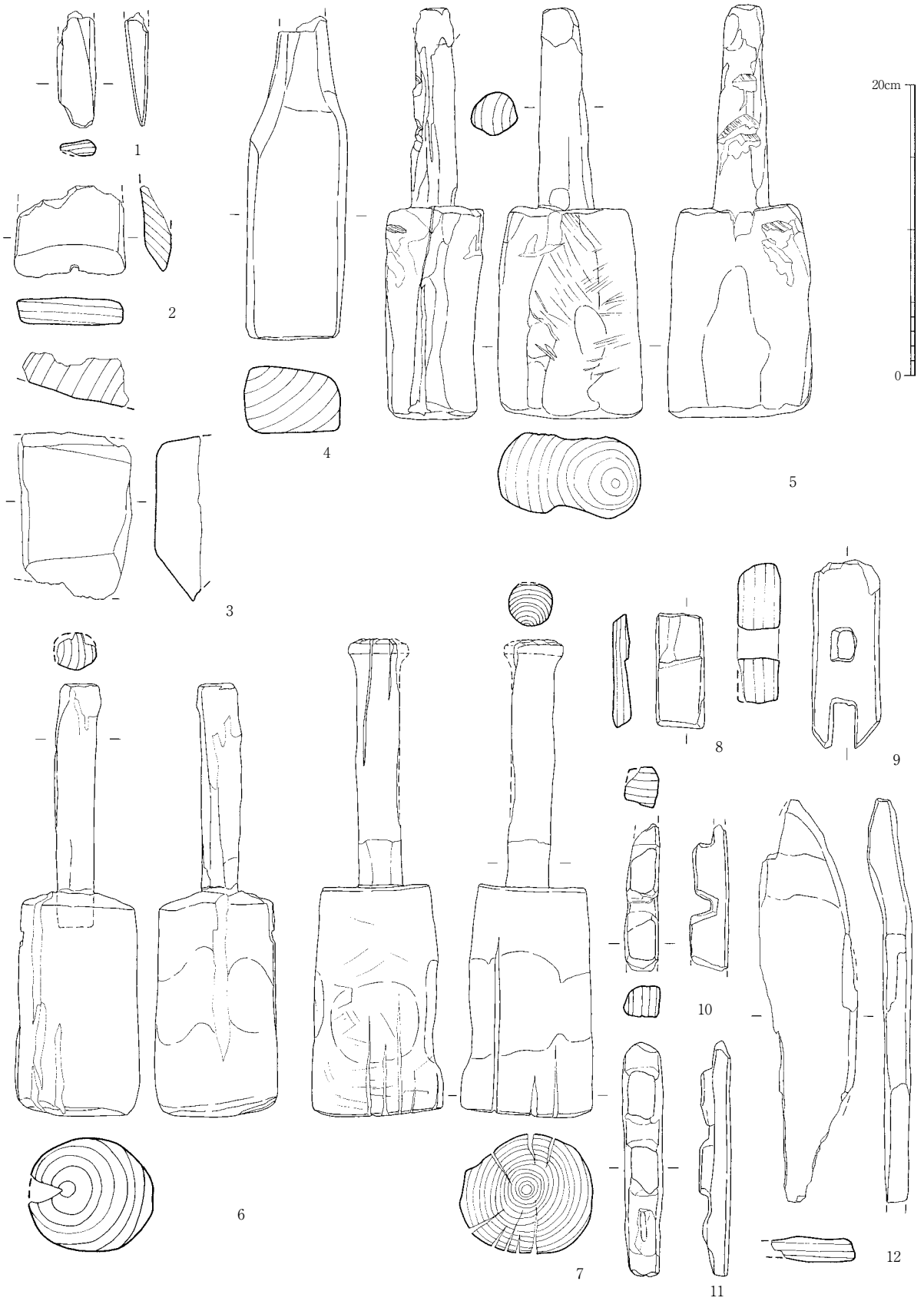
個体である。立板を固定するための孔が３対残存し、いずれも樹皮の紐が残存している。周縁がわずかに薄くなっており、立板を設置するためのものと考えられる。裏面には擦過痕が見られる。10 ～ 13 は大形曲げ物の板である。いずれも１対の孔が見られ、10 のみ樹皮の紐が残存する。13 は孔が斜めに穿たれる。第 111 図１～３は周縁部が薄くなり、１には孔が１ヶ所に穿たれる。３の一部は炭化する。蓋か。４～ 10 は小片の曲げ物板である。６は周縁部が薄くなり、底板と考えられる。８は孔が１対穿たれる。10 は大形曲げ物の板か。11･12 は転び箱である。11 は１ヶ所に孔が穿たれる。



第 105 図　Ⅳ－Ｃ区１号井戸出土木製品実測図⑫（1/4）

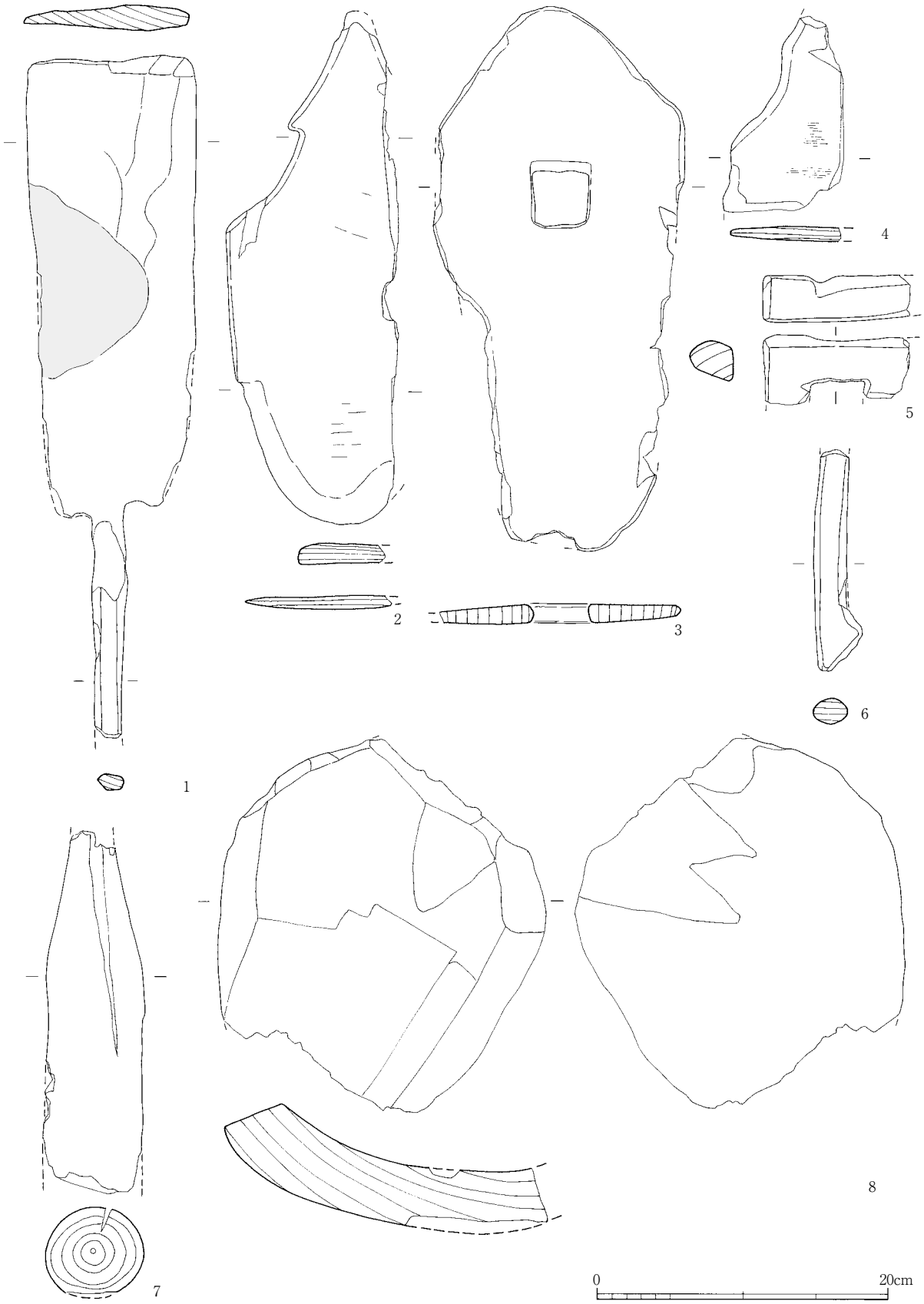
第 112 図１～５は燃えさしである。棒状木材の端部が炭化する。６～９は人形である。６は抉りを入れることで上端を丸くし、中央に孔が穿たれる。７は刳り込みを入れ頭部を多角形状に仕上げる。８は平面八角形を呈する。９は上半が平面円形、下半が中位に抉りを入れて８字形を呈する。赤外線写真を撮影したが、いずれも墨痕等は認められなかった。

10 ～ 12 は馬形か。10 は丁寧に削られており、下部中央付近には下から棒状のものを差込むための臍が作られる。11 は大きく欠損するが、鞍部分が残存しているものと考えられる。12 は頭部を欠損するが、中央に鞍を表現したと考えられる突出部が遺存する。13 は形代か。鳥ないしは馬形になる可能性がある。14 は舟形である。細長く棒状を呈しており、舳先部分は細く仕上げる。15 は剣ないしは槍形か。下位に緊縛痕が見られる。16 は形代か。抉りが２ヶ所に造り出され、下端

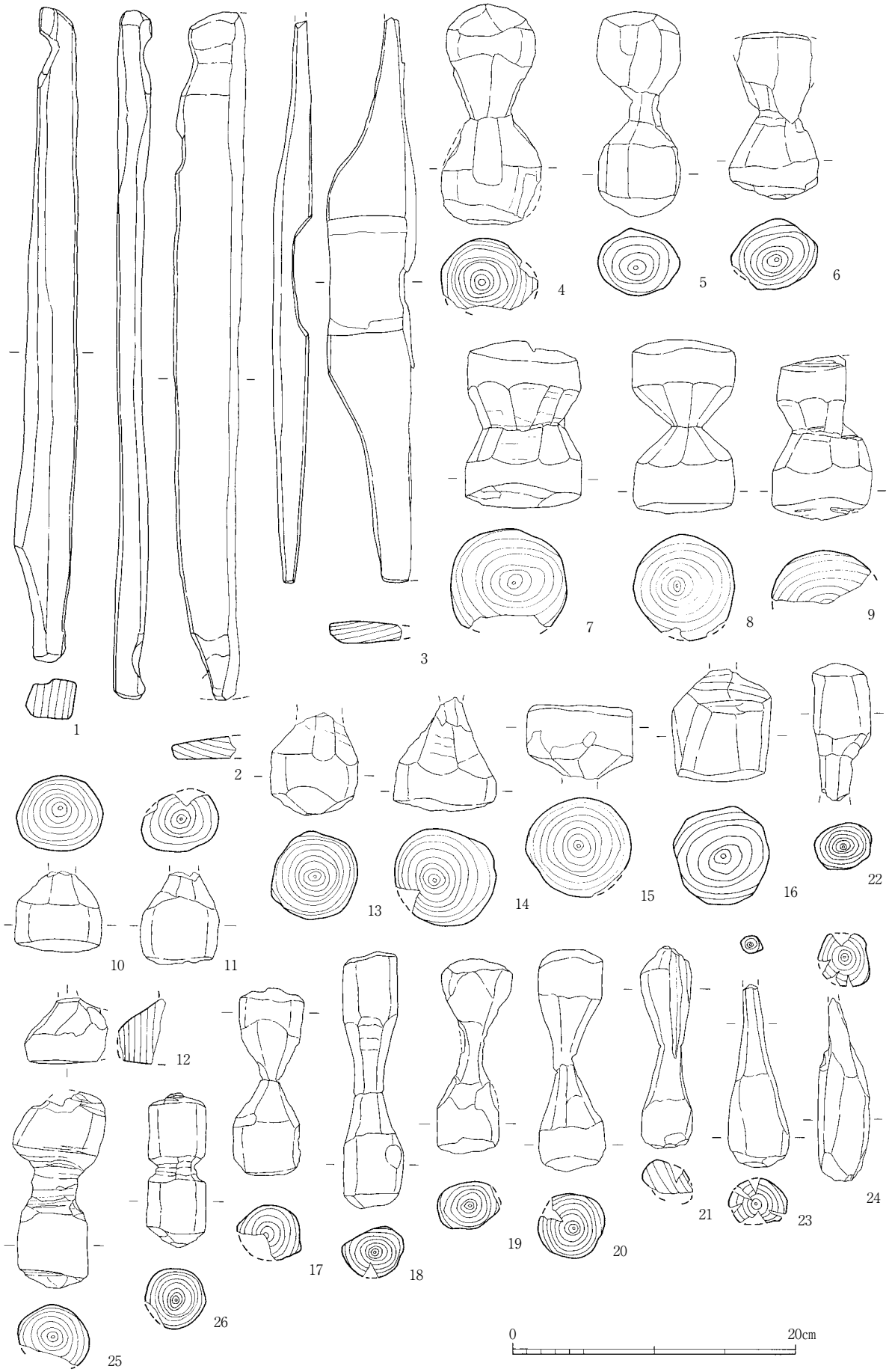


第 106 図　Ⅳ－C 区包含層出土木製品実測図①（1/4）

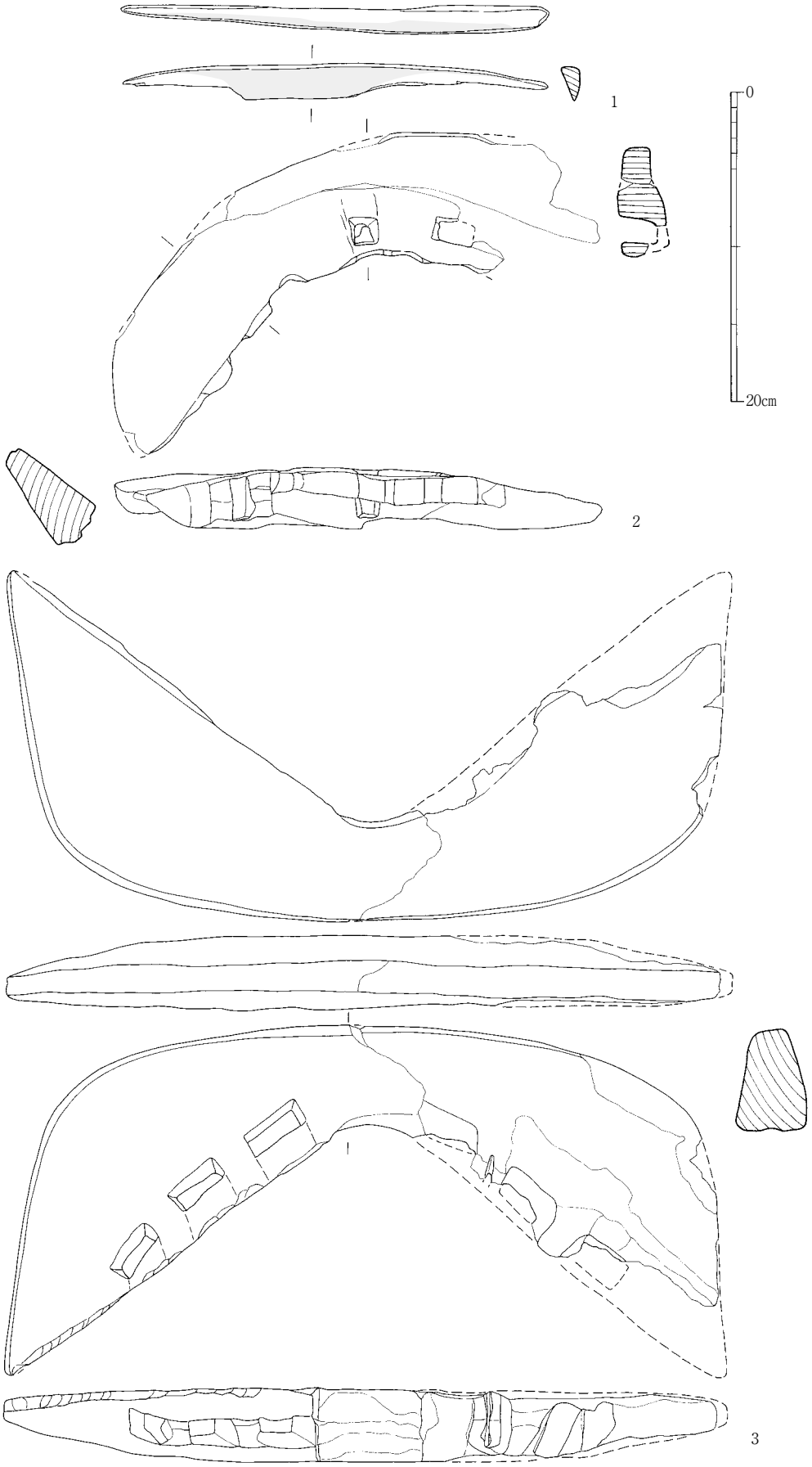
を細く仕上げる。側面の上位付近に深さ３mm 程の穴が穿たれる。17 は盾である。径２mm 程の孔が連続して穿たれ５列残存する。18 は衣笠の鏡板である。骨が入る孔が９ヶ所に穿たれており、１つには内部に径２mm 弱の木質が遺存している。



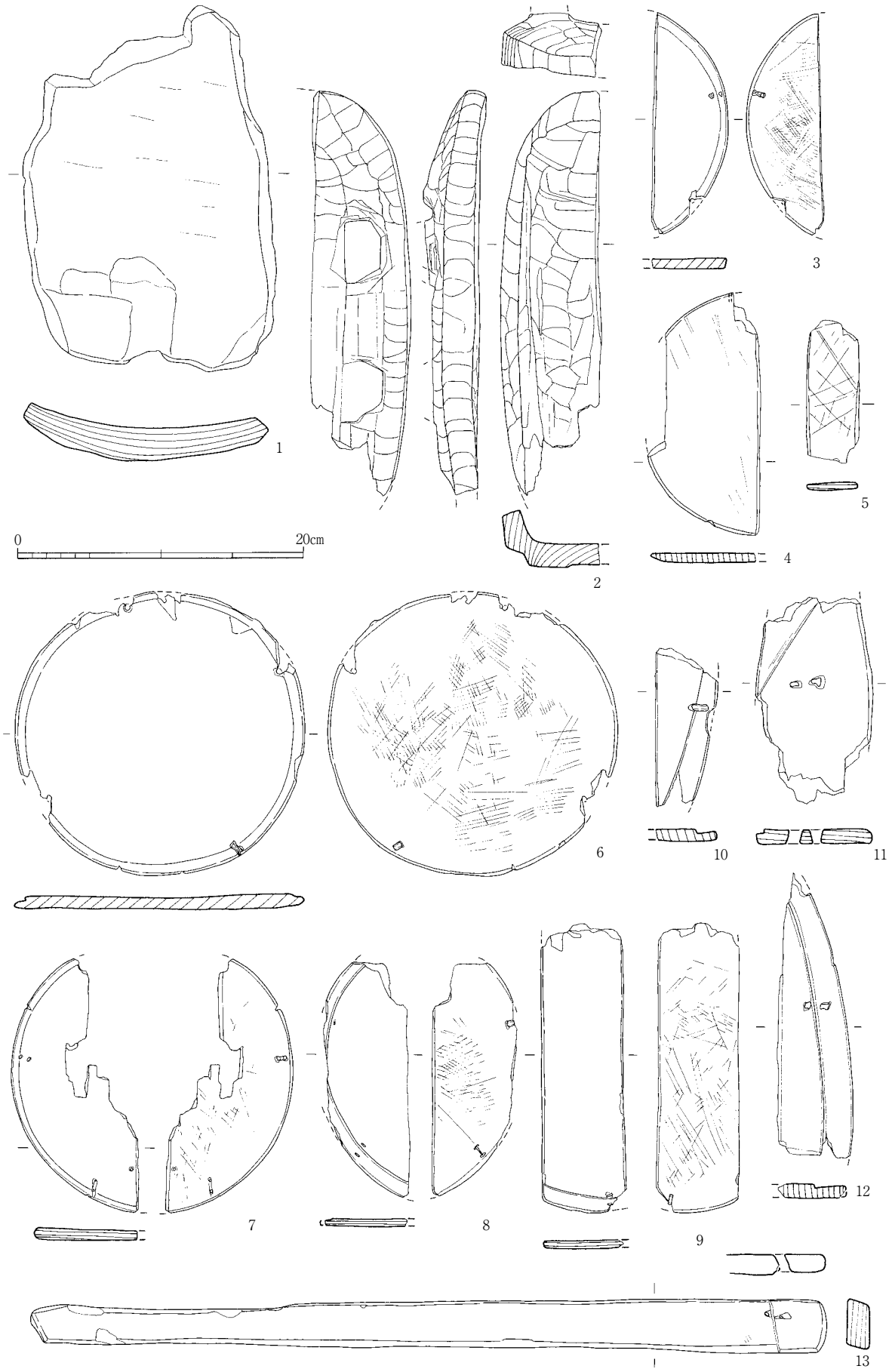
第 107 図　Ⅳ－C 区包含層出土木製品実測図②（1/4）



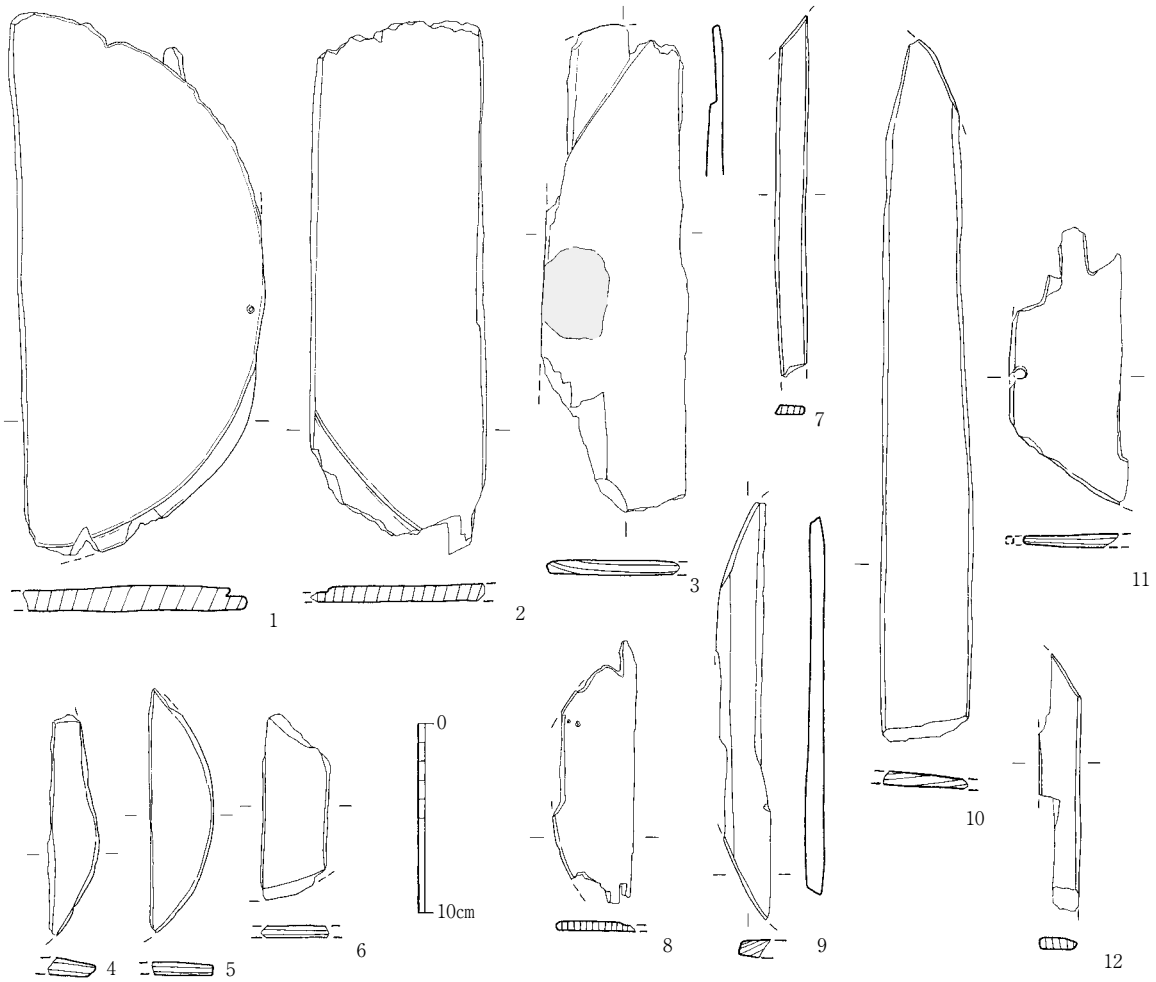
第 108 図　Ⅳ－C 区包含層出土木製品実測図③（1/4）



第 109 図　Ⅳ－C 区包含層出土木製品実測図④（1/4）



第 110 図　Ⅳ－Ｃ区包含層出土木製品実測図⑤（1/4）

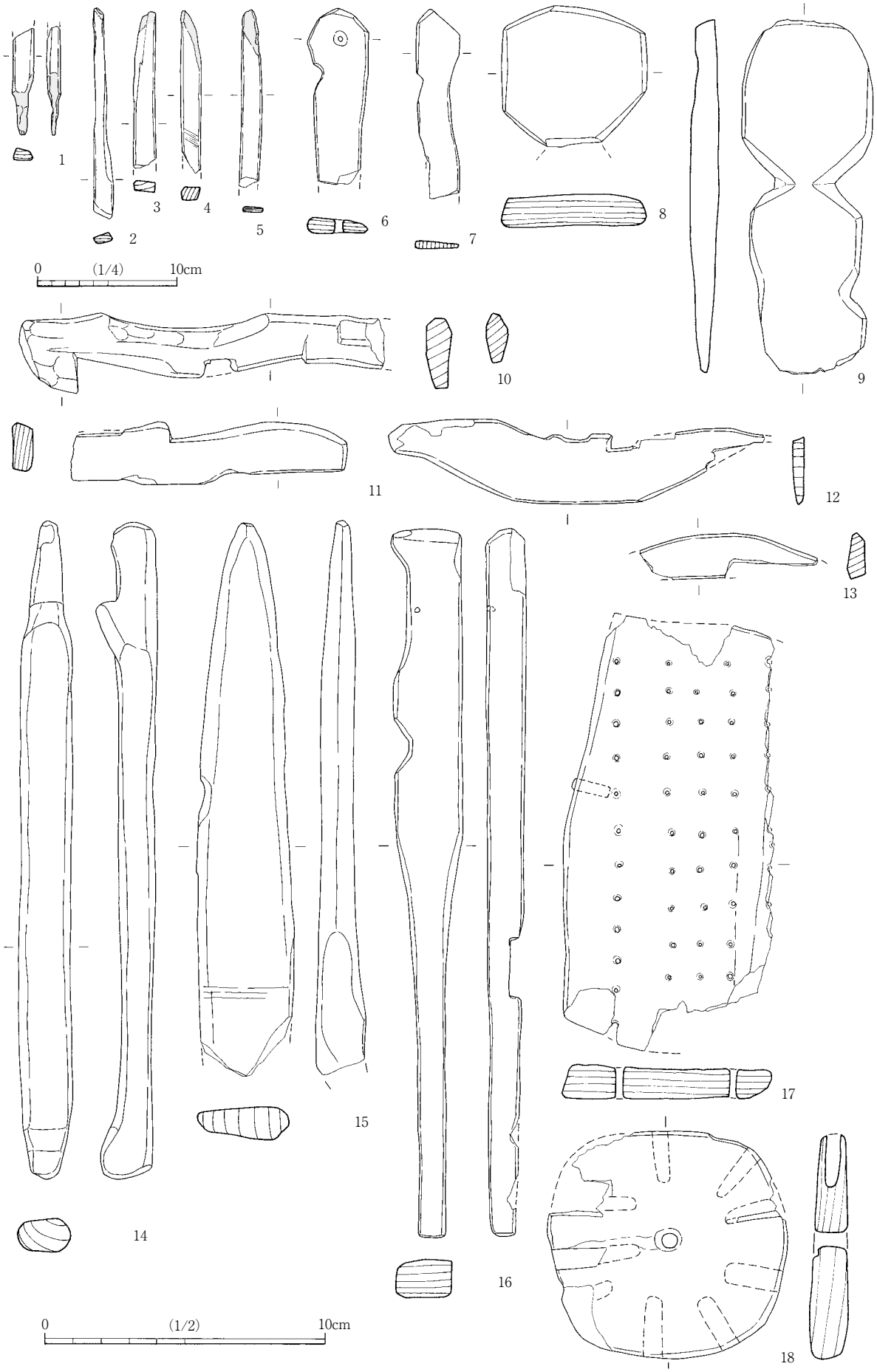


第 111 図　Ⅳ－Ｃ区包含層出土木製品実測図⑥（1/4）

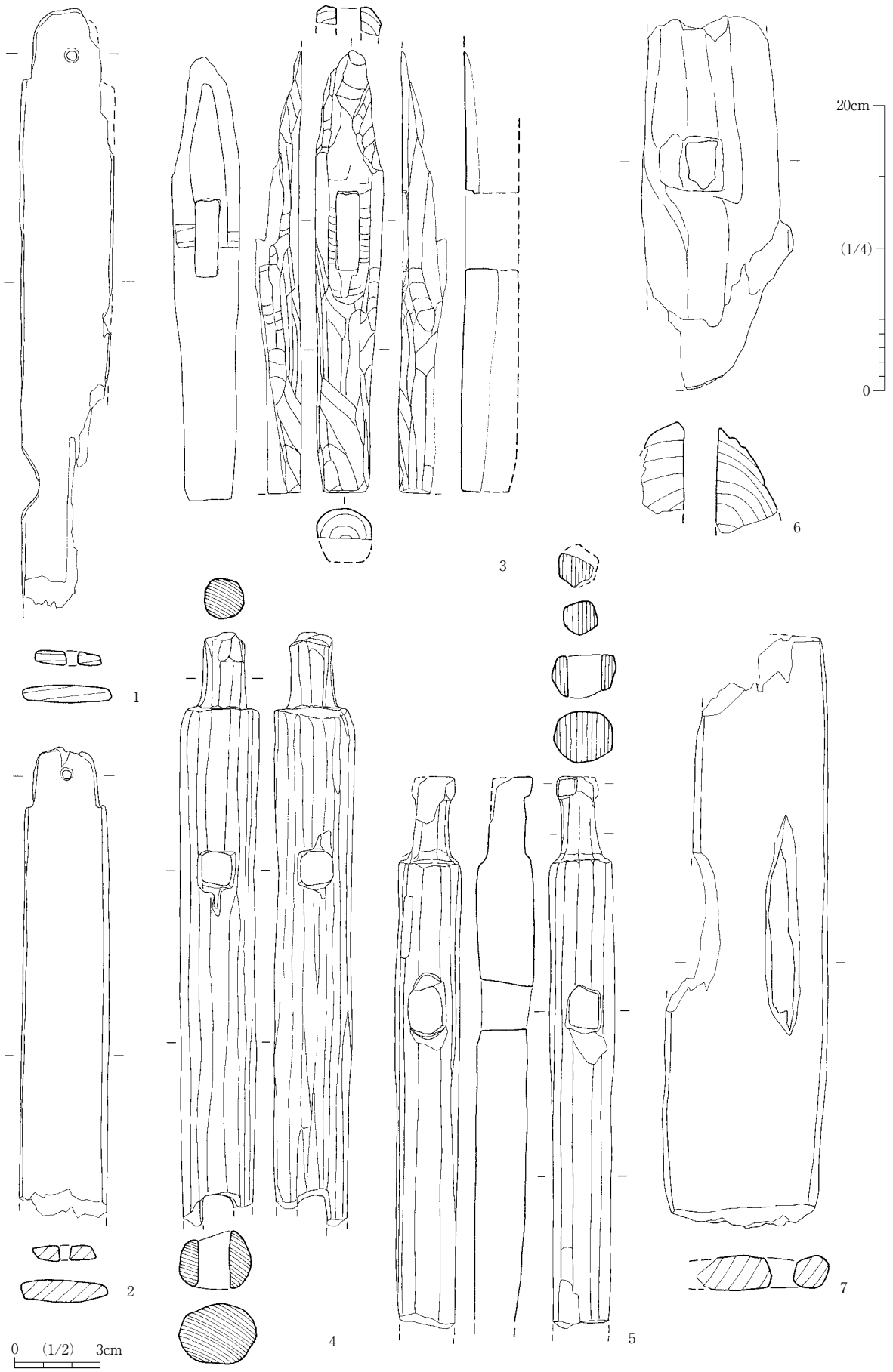
第 113 図１・２は荷札である。上端部が細くなっており、中央に孔が穿たれる。１は下位に抉りが施される。３は部材である。全体に細かい削りを施し、中央には長方形の孔を穿つ。裏面には孔に直行する臍が切られており、圧痕が見られる。何らかの別の部材と組み合うものと考えられる。４・５は部材である。上端が細く仕上げられ、５は端部が膨らむ。４は２ヶ所、５は１ヶ所の方形孔が穿たれる。６は部材である。中央に方形の孔が穿たれ、他の部材の差込口と考えられる。７は扉か。側縁部に長い孔が穿たれ、把手として使用したないしは把手がつけられていた可能性がある。

第 114 図１・２はねずみ返しである。出土時には接合していたものの、明確に接合していなかったため、別に実測している。中央に方形の孔が穿たれる。表面は腐食のため加工痕が見えづらい。３は台状木製品である。内面は上げ底状を呈し、外面は台形を呈する。たたりの台などの可能性がある。

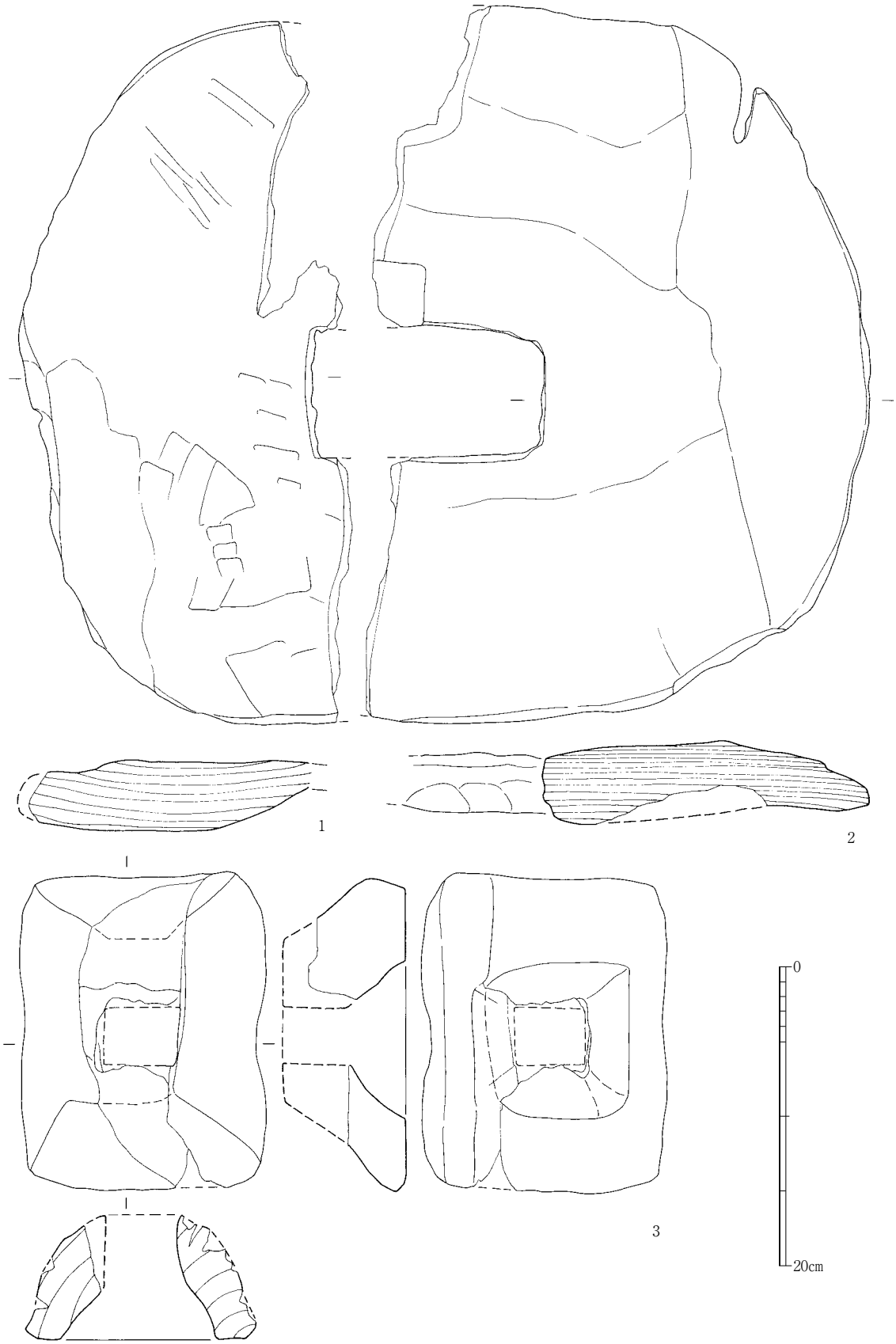
第 115 図および第 116 図１～12 は板状施設器具材である。第 115 図５は平面長六角形を呈し、大足などの可能性があるが、中央が薄くなるなどの特徴が見られない。６は上半が細くなり両面は平滑に薄く仕上げる。札などの可能性がある。７・８は刳り込みが施され、何らかの部材になるか。９は下半が屈曲する。容器などになる可能性がある。上端部付近がわずかに炭化する。10 は加工台か。四角形の板に細い突出部が付く。11 は表面にわずかに擦過痕が認められる。16 は下端が残存しており、鍬等の可能性がある。第 116 図１～５は厚く、井戸枠の一部ないしは井戸枠製作の際の残材か。４は両側に凹みが見られ、他の材の圧痕の可能性がある。６は井戸枠の残材か。下面に切断痕が見られる。７は残材である。上面に切断痕が見られ、鍬等の製作時の残材の可能性が



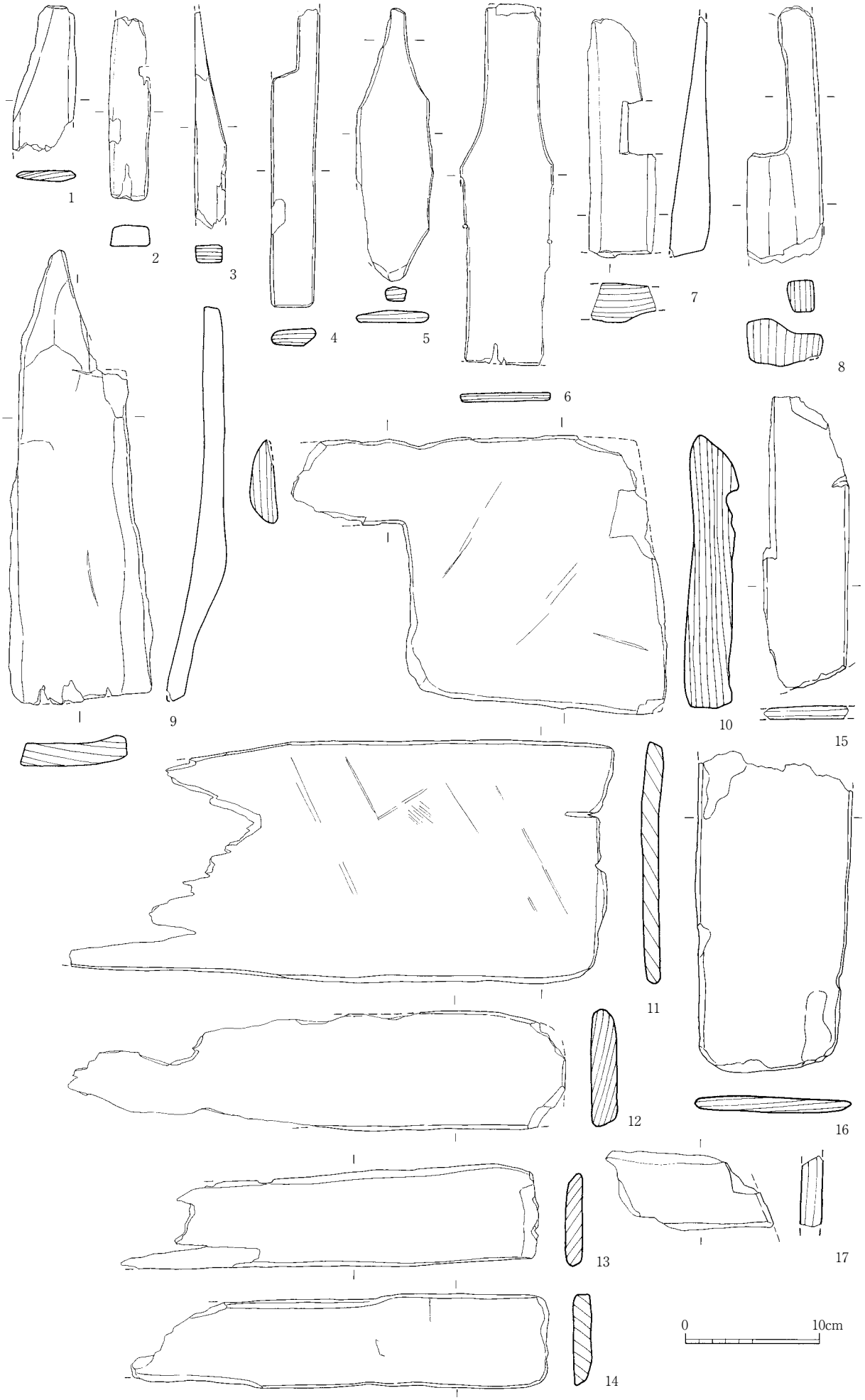
第 112 図　Ⅳ－Ｃ区包含層出土木製品実測図⑦（1 ～ 5 は 1/4、その他は 1/2）



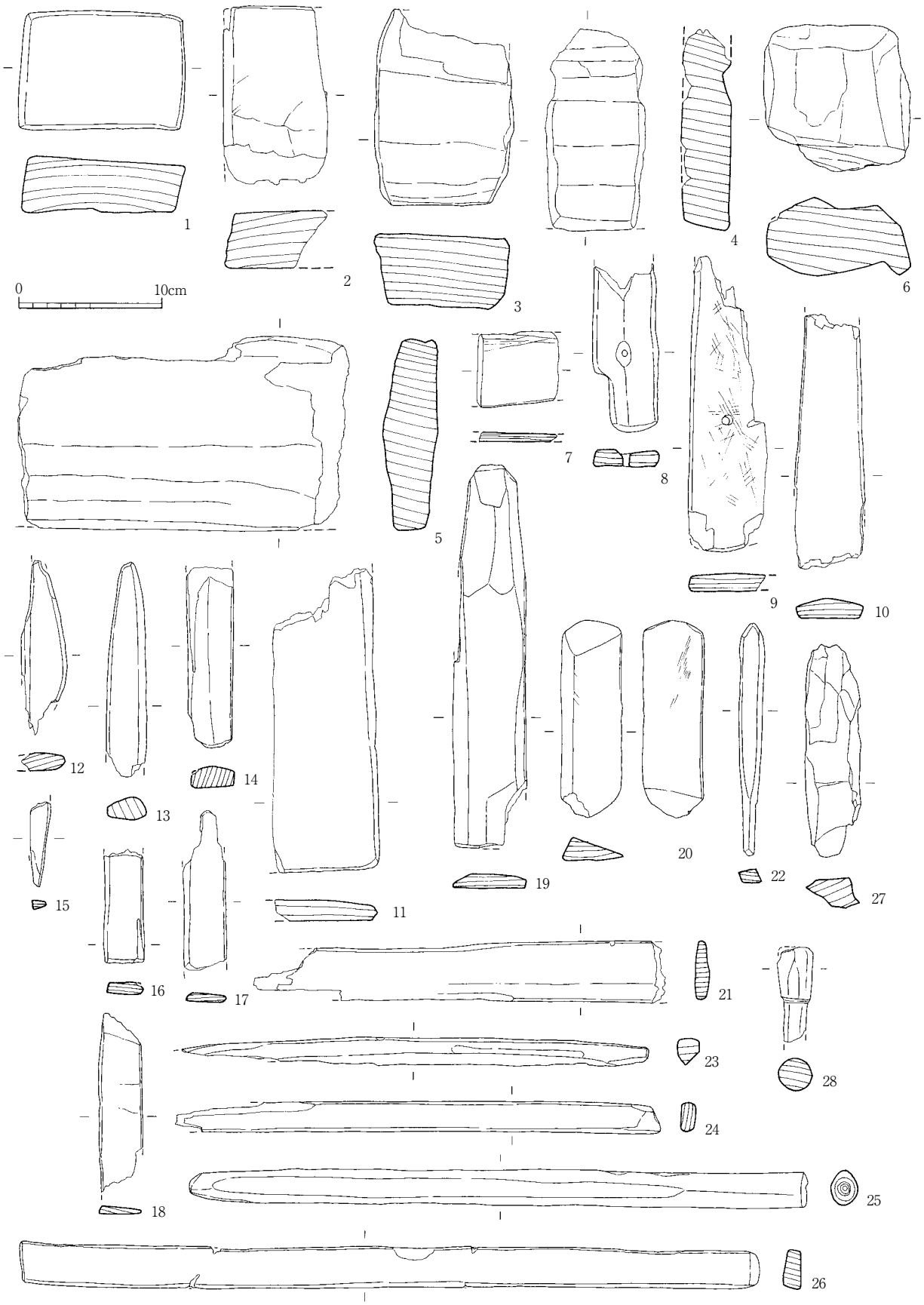
第 113 図　Ⅳ－C 区包含層出土木製品実測図⑧（1・2 は 1/2、その他は 1/4）



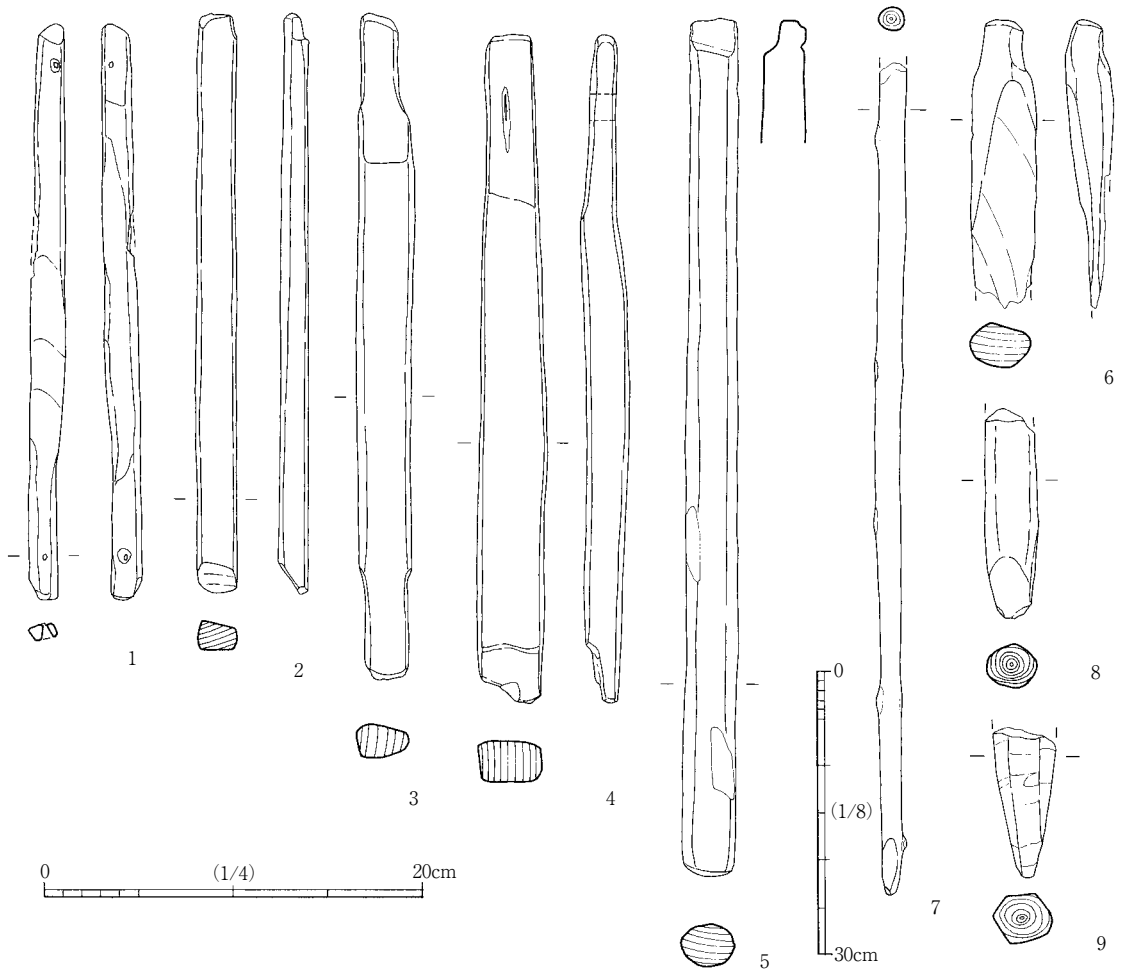
第 114 図　Ⅳ－C 区包含層出土木製品実測図⑨（1/4）



第 115 図　Ⅳ－C 区包含層出土木製品実測図⑩（1/4）



第 116 図　Ⅳ－Ｃ区包含層出土木製品実測図⑪（1/4）

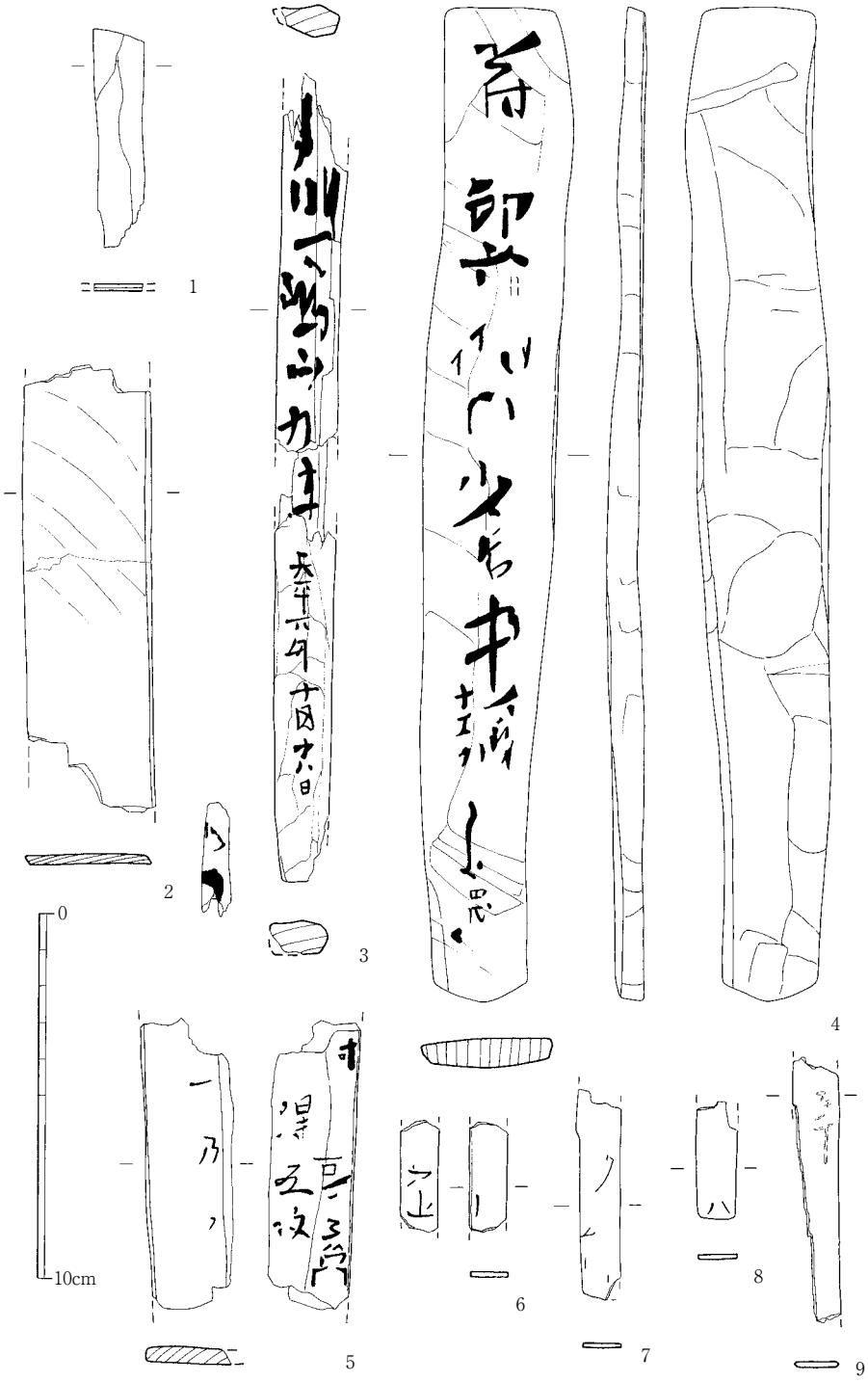


第 117 図　Ⅳ－Ｃ区包含層出土木製品実測図⑫（7 は 1/8、その他は 1/4）

ある。８～ 21 は板・棒状施設器具材である。８・９は中央に孔が穿たれる。８は側面に段が造り出され、部材の可能性がある。９は表面に擦過痕が認められる。11 は両面を平滑にしており、表面にはわずかに擦過痕が認められる。12 ～ 21 は細長い板･棒状を呈する。12 は側面が弧状を呈し、農具や容器、形代等の可能性がある。18 は先端を斜めに削り、ヘラ状を呈する。19 は両面を丁寧に削っており、先端がわずかに細くなる。20 は断面三角形を呈し、両端を斜めに削ることで尖らせる。

第 116 図 22 ～ 26、第 117 図は棒状の施設器具材である。22 は下端が細長い柄状を呈する。23 は先端が尖り、24 は両面を削りにより平坦にする。25 は先端がやや細く、丸くなっており、鍬等の柄の可能性がある。27 は削りにより３つの面を造り出すものの、破損しており、詳細は不明である。28 は端部が太くなっており、ゆはずや栓等の可能性がある。第 117 図１は両端部に孔が穿たれており、上端は表から、下端は裏からそれぞれ穿孔する。２は端部を削りにより薄くしており、差込式の部材の可能性がある。３は両端を細くしており、差込式の部材ないしは織機などの可能性が考えられる。４は下端を削り

文中写真 20　包含層木製品出土状況（南から）



第 118 図　Ⅳ－C 区出土木簡類実測図（1/2）

により薄くしており、上端付近には細長い孔が穿たれる。孔部分には鉄板等が嵌っていた可能性がある。５は上端部を削りにより薄くしている。６は杭ないしは楔か。１ヶ所を削って先端を尖らせる。７～９は杭である。７は先端のみ１ヶ所削り尖らせる。表面は枝を落としたのみの簡単な造りである。８は先端を４ヶ所、９は先端の円周４分の３ほどを４ヶ所削ることで尖らせる（城門）。

出土木簡類（巻頭図版５、図版 43・44、第 118 図）

出土した木簡および札についてまとめて報告する。墨痕が確認されたものに関しては木簡、その他については札として報告する。文字の解釈については（10）で別に報告し、ここでは形態などについて報告する。また、この他にも薄い板状の木は出土しているが、遺構出土のものや削りが丁寧

なもののみ図化している。特に1009号土坑では同様の木片が多数出土しており、木簡の削りカスないしは木簡自体の廃棄所であった可能性が考えられる。

１～５は包含層、６～９は1009号土坑出土である。１・２は札である。２はわずかに擦痕がみられる。いずれも墨痕等は認められなかった。３～９は木簡である。３は片面に墨書が見られ、下端はやや細くなる。他に墨痕のある破片が出土しているが、明確な接合位置が確認できなかった。４は両面に削りを施して平滑にし、表面にのみ墨書が見られる。上端は平面四角形、下端は三角形状を呈する。５は片面に２列の墨書が見られる。６～９は木片でわずかに墨痕が見られる（城門）。

(10) 木簡釈文

Ⅳ-C区

木簡状木製品が計９点出土した。内訳は文字が判読できる木簡が３点、墨痕が認められるが、判読できないものが５点、墨痕がないものが１点である。118－4が包含層（吉国451トレンチ）から出土した以外は、包含層（吉国452東側トレンチ　淡黒褐灰土）から出土した。

118－3　　戸川マ嶋山　九斗　天平六年十月十八日　　(221)・(19)・7　6081

上下両端折れ、左右両辺割れ。旧稿では２点の木簡として報告した[1]。その際、同一個体であることを予測していたが、その後の保存処置の際に接続することが判明し、これによって折れていた部分にかかっている２文字が「九斗」と判読できた。本来の形は不明だが、人名と日付が記されていることから、荷札の一部であった可能性がある。天平６年は西暦734年にあたる。川マ（川部）は、『古事記』允恭天皇段に大后の妹、田井中比売の名代として河部を定めたとある。西海道においては、『続日本紀』宝亀６年（775）４月壬申条に肥前国松浦郡の人として、川部酒麻呂がみえる以外では、はじめて確認された。

川部の意味について、漁獵を職とする川人部の一部をさいて設けたとする説もある[2]。先の川部酒麻呂は天平勝宝４年（752）に入唐した遣唐使第４船の梶師（かじし）であった。帰途、船尾に失火があり、梶を廻す酒麻呂の傍らから火が出たが、酒麻呂は手が焼け爛れても梶を離さず、火を消すという功績をあげた。この功をもって10階を授け、松浦郡の員外主帳に任じられ、さらに宝亀６年に至って従五位下を授けられた。松浦郡は古来、壱岐や対馬、さらには韓半島へとつながる海上交通の拠点であり、酒麻呂が梶師であったこともふまえれば、川部は水上交通や漁業に携わったとみられる。

118－4　・符　郡首□□少長□

・

272・37・8　6011

四周削り。下端を圭頭状に加工する。表面１文字目の「符」が墨痕鮮やかに遺存するが、それ以下の文字はかすれて不鮮明である。表面８文字目は「河」、「白」、「呂」の可能性がある。裏面にも墨痕があるが判読できない。

郡（評）首は『新撰姓氏録』右京諸蕃下に高向村主同祖、段姓夫公の後とみえ、また『坂上系図』に阿智王が率いて帰化したと伝える七姓漢人に含まれる渡来系氏族である。少長は、藤原広嗣の乱について記した『続日本紀』天平12年（740）９月戊申条に「企救板櫃鎮小長」とみえる鎮の指揮

挿 図	登録番号	図版番号	区	出土遺構	種 類	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	樹 種	残 存	備 考
86-1	80269	35	Ⅳ-C	土1001 №6	木製品	鋤	(34.00)	20.20	2.50	アカガシ亜属	0.9	
86-2	80023	35	Ⅳ-C	土1001 №8、9	木製品	下駄	22.60	11.30	6.85	環孔材(キリ？)	0.8	
86-3	80267	35	Ⅳ-C	土1001 №7	木製品	ねずみ返し	(45.50)	31.20	6.20	クスノキ科	0.8	同一個体
87-1	80271	35	Ⅳ-C	土1002 №12	木製品	ねずみ返し	(51.80)	(26.40)	8.30	クスノキ科	0.5	
88-1	80268	35	Ⅳ-C	土1002 №12	木製品	ねずみ返し	(33.40)	23.60	6.50	クスノキ科	0.3	
88-2	80136	35	Ⅳ-C	土1002 №13	木製品	結界杭？	39.90	3.30	2.00	ヒノキ科	1	
88-3	80036	35	Ⅳ-C	土1003 №15	木製品	板状器具材	76.10	7.20	1.50	ヒノキ科	0.7	
88-4	80230	35	Ⅳ-C	土1005	木製品	壷鐙	(29.70)	(10.30)	2.50	ニシキギ属	0.4	
89-1	80238	35	Ⅳ-C	土1006 №17	木製品	板状器具材	67.60	17.00	3.60	モミ属	1	
89-2	80009	35	Ⅳ-C	土1008 №26	木製品	井戸枠？	55.60	12.60	3.20	モミ属	1	
90-1	80265	36	Ⅳ-C	土1008	木製品	農具未製品	35.50	12.80	5.50	アカガシ亜属	1	同一個体
90-2	80275	36	Ⅳ-C	土1008	木製品	農具未製品	38.70	23.70	5.60	アカガシ亜属	1	
91-1	80227	36	Ⅳ-C	土1009 №34	木製品	鋤未製品	(27.40)	13.20	3.40	アカガシ亜属	1	
91-2	80076	36	Ⅳ-C	土1009 №36	木製品	杵	(32.10)		7.70	ツバキ属？	0.5	
92-1	80089	36	Ⅳ-C	土1010	木製品	鍬	24.60	(4.90)	1.40	アカガシ亜属	0.3	
92-2	80083	36	Ⅳ-C	土1010	木製品	鍬	(24.60)	(6.00)	1.80	アカガシ亜属	0.5	
92-3	80006		Ⅳ-C	土1010 №40	木製品	梯子？	(53.10)	10.60	3.85	アカガシ亜属	0.2	
92-4	80221	36	Ⅳ-C	土1010 №37	木製品	部材？	(58.00)	13.40	2.70	シイ属	0.8	
92-5	80133	36	Ⅳ-C	土1010	木製品	板状器具材	(42.35)	11.50	5.20	モミ属	0.4	
93-1	80219	36	Ⅳ-C	土1011 №41	木製品	鞍橋	(20.10)	(27.90)	6.40	コナラ節	0.8	
93-2	80218	36	Ⅳ-C	土1012 №42	木製品	砧	35.60	10.50	7.60	クスノキ科	1	
93-3	80019		Ⅳ-C	土1014 №45	木製品	鋤か鍬	(16.40)	(7.30)	0.90	アカガシ亜属	0.2	
93-4	80017	36	Ⅳ-C	土1014 №45	木製品	刀形	(29.60)	2.10	1.15	ヒノキ	1	
93-5	80058		Ⅳ-C	土1014 №45	木製品	棒状器具材	(9.70)	2.60	(1.40)	散孔材	不明	
93-6	80027		Ⅳ-C	土1014 №45	木製品	棒状器具材	(6.80)		2.00	散孔材	0.1	
93-7	80016		Ⅳ-C	土1014 №45	木製品	棒状器具材	(36.10)	2.90	1.30	ヒノキ	0.8	
93-8	80018		Ⅳ-C	土1014 №45	木製品	ヘラ状製品？	19.60	2.30	0.95	スギ	1	
93-9	80021	36	Ⅳ-C	土1014 №45	木製品	板状器具材	(19.30)	(4.20)	0.50	スギ	不明	
93-10	80025	36	Ⅳ-C	土1014 №45	木製品	板状器具材	(46.75)	8.20	2.00	スギ	不明	
93-11	80026		Ⅳ-C	土1014 №45	木製品	棒状器具材	(12.75)	3.60	1.20	コナラ節	不明	
93-12	80020		Ⅳ-C	土1014 №45	木製品	棒状器具材	(17.60)	2.50	1.20	スギ	不明	
93-13	80057		Ⅳ-C	土1014 №45	木製品	棒状器具材	(11.90)	1.35	1.10	ヒノキ	不明	
94-1	80257	36	Ⅳ-C	1号井戸 №1	木製品	井戸枠	(110.80)	(28.60)	4.80	クスノキ科	0.6	
94-2	80231	36	Ⅳ-C	1号井戸 №1	木製品	井戸枠	118.80	30.40	5.00	モミ属	0.8	
94-3	80070	36	Ⅳ-C	1号井戸 №3	木製品	井戸枠	39.30	9.70	4.05	モミ属	1	
94-4	80068	36	Ⅳ-C	1号井戸 №3	木製品	井戸枠	(20.55)	10.85	5.10	クスノキ科	0.2	
94-5	80251	36	Ⅳ-C	1号井戸 №2	木製品	井戸枠	(108.60)	(27.80)	4.00	クスノキ科	0.6	
95-1	80261	36	Ⅳ-C	1号井戸 №6	木製品	井戸枠	(16.70)	(10.80)	5.20	モミ属	0.1	
95-2	80263	36	Ⅳ-C	1号井戸 №6-②	木製品	井戸枠	778.50	(13.90)	5.20	モミ属	0.7	
95-3	80207	36	Ⅳ-C	1号井戸 №4-②	木製品	井戸枠	(112.80)	32.00	4.60	クスノキ科	0.5	
95-4	80259	37	Ⅳ-C	1号井戸 №5	木製品	井戸枠	118.40	(28.40)	5.20	モミ属	0.8	
95-5	80260		Ⅳ-C	1号井戸 №8	木製品	井戸枠	123.50	24.60	4.40	モミ属	1	
96-1	80253	37	Ⅳ-C	1号井戸 №9	木製品	井戸枠	125.00	28.60	4.60	モミ属	0.9	
96-2	80246	37	Ⅳ-C	1号井戸 №11	木製品	井戸枠	121.80	33.80	6.80	モミ属	1	
96-3	80256	37	Ⅳ-C	1号井戸 №10	木製品	井戸枠	116.80	29.60	4.80	モミ属	1	
97-1	80252	37	Ⅳ-C	1号井戸 №12	木製品	井戸枠	119.60	29.20	4.20	モミ属	0.9	
97-2	80233	37	Ⅳ-C	1号井戸 №13	木製品	井戸枠	127.00	24.20	6.00	モミ属	0.9	
97-3	80232	37	Ⅳ-C	1号井戸 №16	木製品	井戸枠	113.00	26.80	4.60	モミ属	0.9	
97-4	80258	37	Ⅳ-C	1号井戸 №17	木製品	井戸枠	104.60	21.60	4.20	モミ属	0.9	
98-1	80240	37	Ⅳ-C	1号井戸 №14	木製品	井戸枠	(95.00)	27.40	7.50	モミ属	0.8	
98-2	80243	37	Ⅳ-C	1号井戸 №14－②	木製品	井戸枠	(97.90)	(27.00)	8.70	モミ属	0.8	
98-3	80250	37	Ⅳ-C	1号井戸 №18	木製品	板状器具材	(72.10)	20.50	3.30	シイ属	0.8	
98-4	80245	37	Ⅳ-C	1号井戸 №15	木製品	板状器具材	(39.50)	21.10	3.50	シイ属(ツブラジイ)	0.3	
99-1	80249	37	Ⅳ-C	1号井戸 №19南	木製品	井戸枠	130.50	25.60	3.40	モミ属	0.9	
99-2	80236	37	Ⅳ-C	1号井戸 №20北	木製品	井戸枠	111.60	22.00	5.60	モミ属	1	
99-3	80237	37	Ⅳ-C	1号井戸 №21東	木製品	井戸枠	110.00	20.80	5.00	モミ属	1	
100-1	80239	37	Ⅳ-C	1号井戸 №22西	木製品	井戸枠	117.20	19.80	6.00	モミ属	1	
100-2	80235	37	Ⅳ-C	1号井戸 №23南	木製品	井戸枠	112.40	21.40	5.60	モミ属	1	
100-3	80234	37	Ⅳ-C	1号井戸 №24北－②	木製品	井戸枠	(93.20)	22.10	4.50	モミ属	0.8	
100-4	80244	37	Ⅳ-C	1号井戸 №24北	木製品	井戸枠	(19.70)	23.60	7.10	モミ属	0.2	
100-5	80241	37	Ⅳ-C	1号井戸 №25東	木製品	板状器具材	(30.70)	19.30	4.50	シイ属	0.2	
100-6	80255	37	Ⅳ-C	1号井戸 №25北－②	木製品	板状器具材	(41.80)	20.70	4.50	シイ属	0.3	
101-1	80247	37	Ⅳ-C	1号井戸 №26西	木製品	井戸枠	96.40	22.10	4.90	モミ属	1	
101-2	80262	37	Ⅳ-C	1号井戸 №27東	木製品	井戸枠	89.00	24.50	4.50	モミ属	1	
101-3	80254	37	Ⅳ-C	1号井戸 №28東	木製品	井戸枠	104.80	(17.00)	(5.00)	クスノキ科	0.4	
101-4	80242	37	Ⅳ-C	1号井戸	木製品	井戸枠	(26.50)	(22.20)	4.80	モミ属	0.2	
101-5	80196	38	Ⅳ-C	1号井戸 ⑧	木製品	井戸枠	(35.00)	17.20	3.90	モミ属	0.3	
101-6	80040	38	Ⅳ-C	1号井戸	木製品	板状器具材	15.60	11.90	3.50	モミ属	不明	
101-7	80063	38	Ⅳ-C	1号井戸	木製品	板状器具材	(12.30)	12.10	4.35	モミ属	0.1	

(　)は残存値

第７表　Ⅳ-Ｃ区出土木製品一覧表①

挿 図	登録番号	図版番号	区	出土遺構	種 類	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	樹 種	残 存	備 考
101-8	80061	38	Ⅳ-C	1号井戸	木製品	板状器具材	17.20	9.70	3.00	モミ属	不明	
102-1	80101		Ⅳ-C	1号井戸	木製品	板状器具材	19.50	(7.00)	3.95	モミ属	0.1	
102-2	80071		Ⅳ-C	1号井戸	木製品	板状器具材	(20.00)	(12.00)	5.00	モミ属	0.1	
102-3	80060	38	Ⅳ-C	1号井戸	木製品	井戸枠？	21.80	9.70	4.90	モミ属	不明	
102-4	80129		Ⅳ-C	1号井戸 ④	木製品	板状器具材	24.00	10.00	5.40	モミ属	1	
102-5	80059	38	Ⅳ-C	1号井戸	木製品	井戸枠？	(29.60)	15.50	5.10	スダジイ	0.3	
102-6	80001	38	Ⅳ-C	1号井戸	木製品	井戸枠？	53.20	(11.00)	4.35	モミ属	0.7	
102-7	80042	38	Ⅳ-C	1号井戸	木製品	板状器具材	37.80	12.95	5.00	モミ属	1	
102-8	80002	38	Ⅳ-C	1号井戸	木製品	井戸枠？	54.50	(9.90)	4.50	モミ属	0.4	
102-9	80008	38	Ⅳ-C	1号井戸	木製品	井戸枠？	(57.00)	(9.20)	(4.00)	モミ属	0.3	
102-10	80072		Ⅳ-C	1号井戸	木製品	板状器具材	(29.60)	(7.20)	4.90	スダジイ	0.1	
103-1	80039	38	Ⅳ-C	1号井戸	木製品	井戸枠	(42.80)	(16.20)	5.30		0.3	
103-2	80264	38	Ⅳ-C	1号井戸	木製品	板状器具材	65.60	21.50	6.00	モミ属	1	
103-3	80035	38	Ⅳ-C	1号井戸	木製品	板状器具材	71.10	16.10	5.00		0.8	
103-4	80034		Ⅳ-C	1号井戸	木製品	板状器具材	(58.70)	15.30	5.40	ツブラジイ	0.7	
103-5	80139		Ⅳ-C	1号井戸 ⑧	木製品	板状器具材	(32.30)	(7.30)	3.20	モミ属	0.1	
103-6	80028	38	Ⅳ-C	1号井戸 ④	木製品	板状器具材	55.80	15.30	3.90	モミ属	1	
104-1	80134	38	Ⅳ-C	1号井戸	木製品	板状器具材	(37.00)	12.20	3.40	モミ属	0.3	
104-2	80024	38	Ⅳ-C	1号井戸	木製品	井戸枠？	67.70	22.40	3.40	スダジイ	0.8	
104-3	80031		Ⅳ-C	1号井戸 ④	木製品	井戸枠？	(53.40)	18.30	3.00	ツブラジイ	0.7	
104-4	80012	38	Ⅳ-C	1号井戸	木製品	板状器具材	(66.20)	20.00	5.10		0.8	
104-5	80013	38	Ⅳ-C	1号井戸	木製品	板状器具材	(66.40)	20.50	5.10	スダジイ	0.5	
104-6	80011	38	Ⅳ-C	1号井戸	木製品	板状器具材	(63.30)	(13.20)	4.70	スダジイ	0.3	
104-7	80041		Ⅳ-C	1号井戸	木製品	板状器具材	(15.30)	(14.00)	3.00	クスノキ科	不明	
104-8	80007	38	Ⅳ-C	1号井戸	木製品	棒状器具材	(75.40)	4.20	1.30	スギ？	不明	
105-1	80149		Ⅳ-C	1号井戸	木製品	板状器具材	26.50	(20.10)	4.00	クスノキ科	0.1	
105-2	80128	38	Ⅳ-C	1号井戸	木製品	板状器具材	(16.20)	(12.35)	(3.75)	スダジイ	0.1	
105-3	80118	38	Ⅳ-C	1号井戸 ⑧	木製品	板状器具材	(44.40)	9.50	1.50	モミ属	0.8	
105-4	80121	38	Ⅳ-C	1号井戸	木製品	板状器具材	(25.20)	6.70	0.50	スギ	不明	
105-5	80166	38	Ⅳ-C	1号井戸 ⑧	木製品	板状器具材	(36.75)	6.90	0.60	スギ	不明	
105-6	80116	38	Ⅳ-C	1号井戸	木製品	箱？	(28.00)	3.80	0.50	スギ	0.8	
105-7	80120	38	Ⅳ-C	1号井戸	木製品	板状器具材	(24.50)	6.30	0.60	カヤ	不明	
105-8	80113		Ⅳ-C	1号井戸	木製品	曲物側板	(9.50)	(3.00)	0.60	スギ	0.1	
105-9	80112		Ⅳ-C	1号井戸	木製品	曲物側板	(16.85)	(3.40)	0.60	スギ	0.1	同一か
105-10	80111		Ⅳ-C	1号井戸	木製品	曲物側板	(18.00)	(4.90)	0.60	スギ	0.1	
105-11	80110		Ⅳ-C	1号井戸	木製品	曲物側板	(9.30)	(6.80)	0.65	スギ	0.1	
105-12	80117		Ⅳ-C	1号井戸	木製品	杭	(18.95)		3.20	散孔材	0.2	
105-13	80114	38	Ⅳ-C	1号井戸	木製品	編錘	(8.30)		7.20	アカガシ亜属	0.5	
	80209		Ⅳ-C	1号井戸	自然遺物	瓢箪				-		
106-1	80147		Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	楔？	(7.90)	2.60	(1.55)	散孔材	0.1	
106-2	80053	38	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	楔？	6.30	7.70	1.90	アカガシ亜属	不明	
106-3	80123		Ⅳ-C	東側Tr.包含層淡黒褐灰色土	木製品	板状器具材(楔?)	11.50	(7.80)	(3.80)	モミ属	0.7	
106-4	80175	39	Ⅳ-C	№3	木製品	木槌	(22.30)	6.80	4.60	クスノキ科	0.7	
106-5	80225	39	Ⅳ-C	№14	木製品	砧	28.40	9.90	5.60	イスノキ	1	
106-6	80226	39	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	砧	29.70	7.60	7.70	サカキ	1	
106-7	80222	39	Ⅳ-C	№30	木製品	砧	33.00	9.10	8.40	ツバキ属	1	
106-8	80073		Ⅳ-C	不明	木製品	栓？	7.85	3.30	1.10	ヒノキ？	1	
106-9	80075	39	Ⅳ-C	不明	木製品	大足	13.00	4.70	2.90	ヒノキ	0.8	
106-10	80093	39	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	大足	(10.10)	(2.45)	2.70	スギ	0.1	同一か
106-11	80094	39	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	大足	(16.00)	(2.65)	2.10	スギ	0.1	
106-12	80177	39	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	大足？	(27.70)	(6.85)	2.20	スギ	0.5	
107-1	80274	39	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	羽子板状木製品	(47.00)	11.80	1.80	ヒノキ	0.8	
107-2	80081	39	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	平鍬	35.40	(11.90)	1.65	アカガシ亜属	0.6	
107-3	80054	39	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	平鍬	37.40	17.30	1.50	アカガシ亜属	0.8	
107-4	80206	39	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	股鍬	(13.60)	8.20	1.20	アカガシ亜属	0.2	
107-5	80014	39	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	柄	(10.10)	(4.80)	3.20	環孔材	0.1	
107-6	80187	39	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	柄	15.05	3.20	1.80	アカガシ亜属	0.8	
107-7	80223	39	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	杵	25.00	6.90	6.00	ツバキ属	0.4	
107-8	80270	39	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	臼or容器	(22.60)	(22.50)	5.00	モミ属	0.1	
108-1	80126	39	Ⅳ-C	東側Tr.包含層淡黒褐灰色土	木製品	軛	26.20	4.15	2.90	スギ	1	
108-2	80004	39	Ⅳ-C	不明	木製品	腰当	48.60	(5.70)	2.30	モミ属	0.5	
108-3	80137	39	Ⅳ-C	№1	木製品	糸巻	(39.90)	(6.10)	2.50	ヒノキ	0.5	
108-4	80088	39	Ⅳ-C	№53	木製品	編錘	15.55		6.90	アカガシ亜属	0.6	
108-5	80127	39	Ⅳ-C	東側Tr.包含層淡黒褐灰色土	木製品	編錘	14.40		6.00	散孔材	1	
108-6	80192		Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	編錘	11.70		6.40	散孔材	0.7	
108-7	80092	40	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	編錘	11.80		8.00	散孔材	0.8	
108-8	80090	40	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	編錘	12.20		7.50	散孔材	0.9	
108-9	80190	40	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	編錘	11.65		(7.05)	散孔材	0.4	
108-10	80095	40	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	編錘	(5.75)		6.10	散孔材	0.5	
108-11	80096		Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	編錘	(6.60)		5.55	散孔材	0.4	

(　)は残存値

第７表　Ⅳ-Ｃ区出土木製品一覧表②

挿 図	登録番号	図版番号	区	出土遺構	種 類	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	樹 種	残 存	備 考
108-12	80176		Ⅳ-C	27	木製品	編錘	(4.70)		(5.80)		0.2	
108-13	80048	40	Ⅳ-C	包含層	木製品	編錘	(7.30)		6.20	ケヤキ	0.5	
108-14	80050	40	Ⅳ-C	包含層	木製品	編錘	(8.00)		7.30	ケヤキ	0.5	
108-15	80066	40	Ⅳ-C	不明	木製品	編錘	(5.30)		7.50	散孔材	0.5	
108-16	80091	40	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	編錘	(7.90)		7.10	散孔材	0.5	
108-17	80079	40	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	編錘	13.40		4.70	スギ	0.6	
108-18	80087	40	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	編錘	18.15		4.20	散孔材	0.8	
108-19	80029	40	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	編錘	13.70		4.90	散孔材	0.8	
108-20	80078	40	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	編錘	15.75		4.65	ツバキ属？	0.8	
108-21	80098		Ⅳ-C	包含層東側Tr.淡黒褐灰色土	木製品	編錘	14.35		3.60		0.5	
108-22	80080	40	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	編錘	(9.85)		4.10	散孔材	0.5	
108-23	80189	4	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	編錘	(12.90)		4.35	散孔材	0.5	
108-24	80077	40	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	編錘	(13.00)		3.70	散孔材	0.4	
108-25	80085	40	Ⅳ-C	№10	木製品	編錘	13.90		6.10	散孔材	0.7	
108-26	80191	40	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	編錘	11.00		4.20	アカガシ亜属	1	
109-1	80193	40	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	鞍？	27.40	2.20	1.80	カヤ	1	
109-2	80229	40	Ⅳ-C	包含層東側トレンチ	木製品	鞍	(20.90)	(31.40)	3.90	クスノキ科	0.5	
109-3	80228	40	Ⅳ-C	包含層東側トレンチ	木製品	鞍	22.70	(46.10)	4.60	ニレ属	0.8	
110-1	80195	40	Ⅳ-C	東側Tr.包含層淡黒褐灰色土	木製品	盤	25.70	17.70	2.20	散孔材	1	
110-2	80224	40	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	槽	(28.40)	(7.00)	(3.90)	カヤ	0.3	
110-3	80182	41	Ⅳ-C	27	木製品	底板	(16.55)	(5.20)	0.90	ヒノキ	0.3	
110-4	80099	41	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	底板	16.90	(7.80)	0.70	ヒノキ？	0.4	
110-5	80105		Ⅳ-C	不明	木製品	底板	(10.10)	(3.60)	0.60	ヒノキ？	0.1	
110-6	80135	41	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	底板	20.20		1.00	スギ？	0.9	
110-7	80119	41	Ⅳ-C	不明	木製品	底板	(17.75)	(8.90)	0.90	ヒノキ？	0.4	
110-8	80109	41	Ⅳ-C	不明	木製品	底板	(16.35)	5.95	0.55	ヒノキ	0.3	同一
110-9	80108	41	Ⅳ-C	不明	木製品	底板	(20.30)	5.85	0.55	ヒノキ	0.3	
110-10	80183		Ⅳ-C	27	木製品	曲物板	(11.20)	(4.30)	0.85	ヒノキ	0.1	
110-11	80132	41	Ⅳ-C	不明	木製品	曲物板	(14.40)	(8.10)	1.10	ヒノキ	0.1	
110-12	80086	41	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	曲物板	(20.10)	(5.40)	1.00	スギ	0.1	
110-13	80003		Ⅳ-C	不明	木製品	曲物板	(55.60)	3.80	1.60	ヒノキ	0.1	
111-1	80056	41	Ⅳ-C	不明	木製品	蓋板	(28.60)	(13.30)	1.40	ヒノキ	0.4	
111-2	80082	41	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	蓋板	(28.20)	(9.20)	0.95	ヒノキ	0.2	
111-3	80102	41	Ⅳ-C	不明	木製品	蓋板	(25.80)	(7.75)	0.90	ヒノキ	0.2	
111-4	80170		Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	曲物板	(11.70)	(2.70)	1.00	アカガシ亜属	0.1	
111-5	80044		Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	底板	(13.00)	(3.40)	0.75	ヒノキ？	0.1	
111-6	80045		Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	底板	(9.85)	(3.60)	0.70	ヒノキ	0.1	
111-7	80106		Ⅳ-C	不明	木製品	曲物板	(19.20)	(1.50)	0.60	ヒノキ	0.1	
111-8	80146		Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	底板	(14.00)	(4.30)	0.60	ヒノキ	0.1	
111-9	80173		Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	曲物板	(22.00)	(2.40)	1.05	ヒノキ	0.1	
111-10	80005		Ⅳ-C	不明	木製品	曲物板	(37.10)	(4.70)	0.70	スギ	0.1	
111-11	80067	41	Ⅳ-C	西側Tr.包含層淡黒褐灰色土	木製品	転び箱	(14.50)	(6.40)	0.70	ヒノキ	0.2	
111-12	80174		Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	転び箱	(13.60)	2.15	0.70	スギ	不明	
112-1	80148	41	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	燃えさし	(7.65)	1.50	0.90	針葉樹	不明	
112-2	80141	41	Ⅳ-C	東側Tr.包含層淡黒褐灰色土	木製品	燃えさし	15.10	1.45	0.60	ヒノキ科	1	
112-3	80142		Ⅳ-C	東側Tr.包含層淡黒褐灰色土	木製品	燃えさし	(11.20)	1.70	0.80	ヒノキ科	不明	
112-4	80143		Ⅳ-C	東側Tr.包含層淡黒褐灰色土	木製品	燃えさし	(11.65)	1.35	1.00	マツ属(複維管束亜属)	不明	
112-5	80185	41	Ⅳ-C	東側Tr.包含層淡黒褐灰色土	木製品	燃えさし	(12.65)	1.40	0.45	ヒノキ科	0.5	
112-6	80164	41	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	人形	(6.30)	2.20	0.60	ヒノキ	0.4	
112-7	80278	41	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	人形	(6.80)	1.55	0.30		0.3	
112-8	80165	41	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	人形	(5.20)	5.10	1.15	アカガシ亜属	0.5	
112-9	80180	41	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	人形	12.70	4.75	1.10	ヒノキ	1	
112-10	80201	41	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	馬形	(13.10)	2.70	0.95	ヒノキ	0.8	
112-11	80145	41	Ⅳ-C	東側Tr.包含層淡黒褐灰色土	木製品	馬形？	(9.90)	(2.25)	0.70	スギ	不明	
112-12	80030	41	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	馬形？	(13.45)	2.50	0.45	ヒノキ？	0.9	
112-13	80200		Ⅳ-C	東側Tr.包含層淡黒褐灰色土	木製品	形代	(1.65)	(6.40)	0.65	ヒノキ	0.1	
112-14	80186	42	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	舟形	23.60	1.90	2.20	ヒノキ	0.9	
112-15	80052	42	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	槍形木製品？	(11.90)	3.30	1.70	散孔材	0.9	
112-16	80178	42	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	形代？	25.50	2.30	1.45	ヒノキ	1	
112-17	80155	42	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	盾	(15.50)	(7.50)	1.20	モミ属	0.1	
112-18	80015	42	Ⅳ-C	不明	木製品	衣笠	8.60	8.10	1.35	ヒノキ	0.8	
113-1	80107	42	Ⅳ-C	不明	木製品	荷札	(21.00)	3.30	0.65	スギ	0.7	
113-2	80022	42	Ⅳ-C	不明	木製品	荷札	(16.50)	2.95	0.80	スギ	0.5	
113-3	80276	42	Ⅳ-C	不明	木製品	部材	(31.00)	4.90	3.30	マツ属(複維管束亜属)	0.3	
113-4	80266	42	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土東側Tr.	木製品	部材	(47.70)	5.50	4.20	ヒノキ	0.4	
113-5	80277	42	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土東側Tr.	木製品	部材	(38.70)	4.60	3.50	ヒノキ	0.5	
113-6	80037	42	Ⅳ-C	西側Tr.包含層淡黒褐灰色土	木製品	柱？	(26.20)	10.70	6.80	スギ	0.7	
113-7	80038	42	Ⅳ-C	西側Tr.包含層淡黒褐灰色土	木製品	扉？	41.50	11.50	2.50	スギ	0.7	
114-1	80272	42	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	ねずみ返し	48.00	(22.30)	4.80	クスノキ科	0.4	同一個体
114-2	80273	42	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	ねずみ返し	48.30	(33.00)	5.70	クスノキ科	0.5	

(　)は残存値

第７表　Ⅳ-Ｃ区出土木製品一覧表③

挿 図	登録番号	図版番号	区	出土遺構	種 類	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	樹 種	残 存	備 考
114-3	80220	42	Ⅳ-C	№29	木製品	台状木製品	21.50	16.60	8.30	ハイノキ節	0.9	
115-1	80124		Ⅳ-C	東側Tr.包含層淡黒褐灰色土	木製品	板状器具材	(10.85)	4.70	0.80	カヤ	不明	
115-2	80198		Ⅳ-C	東側Tr.包含層淡黒褐灰色土	木製品	板状器具材	(13.70)	2.90	1.55	ヒノキ	不明	
115-3	80199		Ⅳ-C	東側Tr.包含層淡黒褐灰色土	木製品	板状器具材	(16.10)	(2.25)	1.25	ヒノキ	不明	
115-4	80197		Ⅳ-C	東側Tr.包含層淡黒褐灰色土	木製品	板状器具材	(22.30)	3.30	1.30	ヒノキ	0.5	
115-5	80065	43	Ⅳ-C	不明	木製品	大足？	20.30	5.70	1.15	ヒノキ	0.9	
115-6	80162	43	Ⅳ-C	包含層	木製品	板状器具材	26.95	6.80	0.70	ヒノキ	0.9	
115-7	80184	43	Ⅳ-C	東側Tr.包含層淡黒褐灰色土	木製品	板状器具材	(17.05)	(4.90)	3.05	スギ	不明	
115-8	80194	43	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	部材？	19.10	5.70	3.50	ヒノキ	0.6	
115-9	80150	43	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	板状器具材	33.90	10.65	2.50	クスノキ科	1	
115-10	80151	43	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	台	(27.80)	20.80	4.10	クスノキ科	不明	
115-11	80062	43	Ⅳ-C	不明	木製品	板状器具材	(40.60)	17.90	1.40	スギ	0.7	
115-12	80032	43	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	板状器具材	(73.80)	17.50	4.00	クスノキ科	0.7	
115-13	80051		Ⅳ-C	№46、47	木製品	板状器具材	(30.90)	7.30	1.40	スギ	0.6	
115-14	80033		Ⅳ-C	№56	木製品	板状器具材	(61.00)	13.00	2.95	ヒノキ科	0.7	
115-15	80168		Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	板状器具材	(21.80)	(6.40)	1.00	ヒノキ科	0.1	
115-16	80046	43	Ⅳ-C	№46、47	木製品	鍬？	23.90	11.80	1.20	イスノキ	0.8	
115-17	80049		Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	板状器具材	(12.60)	(5.80)	1.65	スダジイ	0.1	
116-1	80100	43	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	板状器具材	8.50	11.60	3.90	ヒノキ？	1	
116-2	80171		Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	板状器具材	(12.40)	(7.20)	4.05		0.1	
116-3	80010	43	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	井戸枠？	9.70	(13.70)	5.10	モミ属	0.1	
116-4	80130	43	Ⅳ-C	不明	木製品	板状器具材	(14.10)	(7.00)	3.50	ヒノキ？	0.1	
116-5	80160	43	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	板状器具材	(23.10)	(13.60)	3.80	モミ属	0.1	
116-6	80069	43	Ⅳ-C	不明	木製品	残材？	10.35	10.20	5.70	散孔材	0.5	
116-7	80125		Ⅳ-C	東側Tr.包含層淡黒褐灰色土	木製品	板状器具材	5.30	(5.70)	0.70	ヒノキ	不明	
116-8	80074	43	Ⅳ-C	不明	木製品	板状器具材	(11.90)	4.60	1.30	スギ	不明	
116-9	80169	43	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	板状器具材	(20.80)	(5.40)	1.40	ヒノキ	不明	
116-10	80131		Ⅳ-C	不明	木製品	板状器具材	(17.80)	(4.80)	1.40	ヒノキ	不明	
116-11	80156		Ⅳ-C	不明	木製品	板状器具材	(21.30)	(7.50)	1.50	モミ属	不明	
116-12	80152		Ⅳ-C	不明	木製品	板状器具材	(12.30)	3.55	1.25	ヒノキ	0.2	
116-13	80140		Ⅳ-C	東側Tr.包含層淡黒褐灰色土	木製品	板状器具材	(15.00)	2.90	1.60	ヒノキ？	0.6	
116-14	80163		Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	板状器具材	(12.80)	3.20	1.50	モミ属	0.5	
116-15	80144		Ⅳ-C	東側Tr.包含層淡黒褐灰色土	木製品	板状器具材	(5.90)	(1.45)	0.70	スギ？	0.1	
116-16	80154		Ⅳ-C	不明	木製品	板状器具材	(8.05)	2.70	0.85	ヒノキ	不明	
116-17	80153		Ⅳ-C	不明	木製品	板状器具材	(10.30)	3.00	0.65	ヒノキ	不明	
116-18	80104		Ⅳ-C	不明	木製品	ヘラ状製品？	(12.30)	3.10	0.60	炭化	0.1	
116-19	80084	43	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	板状器具材	26.80	5.20	1.10	スギ	0.9	
116-20	80115		Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	板状器具材	13.75	4.20	1.70	スギ	1	
116-21	80172		Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	板状器具材	(28.80)	4.20	1.10	ヒノキ	不明	
116-22	80181		Ⅳ-C	27	木製品	棒状器具材	(16.40)	1.60	1.00	ヒノキ	0.9	
116-23	80122		Ⅳ-C	東側Tr.包含層淡黒褐灰色土	木製品	棒状器具材	(32.70)	1.90	1.50	ヒノキ	0.9	
116-24	80157		Ⅳ-C	不明	木製品	棒状器具材	(34.10)	2.10	1.10	スギ	0.8	
116-25	80158	43	Ⅳ-C	不明	木製品	柄?	(43.20)	2.50	1.90	アカガシ亜属	0.8	
116-26	80161		Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	棒状器具材	51.80	2.70	1.20	スギ	1	
116-27	80047		Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	不明	14.90	4.00	2.30	ヒノキ科	不明	
116-28	80097	43	Ⅳ-C	包含層東側Tr.淡黒褐灰色土	木製品	栓？	(6.80)		2.50	アカガシ亜属	0.1	
117-1	80103	43	Ⅳ-C	不明	木製品	棒状器具材	30.40	1.90	0.90	スギ	1	
117-2	80167	43	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	部材？	30.70	2.00	1.50	スギ	1	
117-3	80179		Ⅳ-C	№54？	木製品	部材？or 織機？	35.10	3.00	1.75		1	
117-4	80055	43	Ⅳ-C	不明	木製品	棒状器具材	35.20	3.50	2.20	スギ	1	
117-5	80159	43	Ⅳ-C	不明	木製品	棒状器具材	45.30	2.80	2.25	スギ	1	
117-6	80138	43	Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	杭 or 楔	(15.10)	3.20	2.60	コウヤマキ属	0.9	
117-7	80064		Ⅳ-C	№11	木製品	杭	(88.00)		2.80	カヤ？	0.9	
117-8	80188		Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	杭	(11.10)		2.70	クヌギ節	不明	
117-9	80043		Ⅳ-C	包含層淡黒褐灰色土	木製品	杭	(8.00)		(3.30)	散孔材	0.1	
118-1	80215	43	Ⅳ-C	東側Tr.淡黒褐灰色土	木製品	木簡？札？	(5.10)	(1.40)	0.20	未同定	0.1	
118-2	80217	44	Ⅳ-C	東側Tr.淡黒褐灰色土	木製品	木簡？札？	(12.40)	3.60	0.40	未同定	0.3	
118-3	80213	44	Ⅳ-C	東側Tr.淡黒褐灰色土	木製品	木簡	(10.50)	(2.00)	0.90	未同定	0.8	接合
118-4	80210	44	Ⅳ-C	№28	木製品	木簡	27.30	43.50	3.70	未同定	1	
118-5	80216	44	Ⅳ-C	東側Tr.淡黒褐灰色土	木製品	木簡	(8.00)	(2.50)	0.50	未同定	0.2	
118-6	80202	44	Ⅳ-C	土1009 №35	木製品	木簡？札？	(3.05)	(1.05)	0.15	ヒノキ	0.1	
118-7	80203	44	Ⅳ-C	土1009 №35	木製品	木簡？札？	(5.85)	(1.20)	0.15	ヒノキ	0.1	
118-8	80204	44	Ⅳ-C	土1009 №35	木製品	木簡？札？	(3.20)	(1.10)	0.15	ヒノキ	0.1	
118-9	80205	44	Ⅳ-C	土1009 №35	木製品	木簡？札？	(7.30)	(1.25)	0.20	ヒノキ	0.1	

(　)は残存値

第７表　Ⅳ-Ｃ区出土木製品一覧表④

官であろう。同じ記事に「京都郡鎮長大宰史生従八位上小長谷常人」がみえ、天平12年には、京都郡鎮の指揮官は大長・小長に分かれていなかった。京都郡鎮は木簡出土地の近くに所在したと推定されており、京都郡鎮に大長・小長が置かれた時期があったことが本木簡からわかる。

118－5　・□□□段（一町カ）

　　・□

　　得五段　　（76）×23×4　6081

上下両端折れ、左右両辺削り。表面「段」の上の文字は、１・２文字目が「一町」、3文字目が「五」または「三」の可能性がある。土地に関する文書と推測されるが詳細は不明。

この他、墨痕があるが、判読できないもの、墨痕のないものは、実測図の報告のみとする（酒井）。

【注】

(1) 酒井芳司・松川博一「福岡・延永ヤヨミ園遺跡」(『木簡研究』32、2010年）110～3頁

(2) 太田亮『姓氏家系大事典　第一巻』角川書店、1963年、川人部・河部の項、1667～8・1672頁

(11) 小結

Ⅳ－C区から検出された遺構の中で注目されるのは、頑強な板材を使用した板組の１号井戸である。板材は転用ではなく、この井戸のために加工された板材を６段以上、相欠き組で組み上げるもので、公的な施設に関連する井戸としての位置づけが考えられる。

また、包含層部分に彫り込まれた土坑からは、木製農具の未製品が出土しており、木材の水漬けが行われ、近辺で木製品の生産が行われた可能性が示唆される。この包含層からは、馬歯や木製の壺鐙が出土しており、遺跡の性格を検討する上で重要なものであろう。

いずれにしろ、今回の調査区は調査された遺跡の範囲のごく一部であり、今後、木簡や墨書土器など他の調査区と合わせて包括的に検討する必要があるであろう。

Ⅳ　化学分析

１　胎土（粘土）分析

（１）分析にあたって

本遺跡の竪穴住居カマドに使用された粘土をサンプリングし分析を行うことで、その粘土がどのような化学的な特徴があるのか、またスサなどの混和物が含まれているかどうか、さらに今後の土器胎土分析の基礎データとすることを目的に、Ⅳ－B区134・137号竪穴住居跡カマドに使用された粘土の化学分析を株式会社古環境研究所に委託した。結果は以下の通りである（大庭）。

株式会社古環境研究所

（２）はじめに

延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ－B区の竪穴住居跡より出土した粘土について、薄片観察および蛍光X線分析を行い、顕微鏡観察による鉱物組成ならびに化学組成を検討した。

（３）試料と方法

試料は、２住居跡（住134、住137）より出土した粘土２点である（第８表）。

分析№	種類	遺構	粘土の特徴
1	粘土	住134	灰黄色（2.5Y7/2）砂混じり粘土
2	粘土	住137	浅黄色（2.5Y7/3）砂混じり粘土

第８表　分析試料

分析は、粘土薄片を作製し偏光顕微鏡による観察と蛍光Ｘ線分析を実施した。以下に、各分析の方法について述べる。

（４）粘土薄片の偏光顕微鏡観察

粘土は、恒温乾燥機により乾燥させた後、電気炉を用いて750度６時間で焼成した。岩石カッターなどで成形した後、エポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドグラスに接着し、接着面と反対の面に平面を作製した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作製した後、スライドグラスに接着した。その後、精密岩石薄片作製機を用いて試料を切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作製した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

これら粘土薄片は、偏光顕微鏡を用いて薄片全面にみられた微化石類（珪藻化石、骨針化石など）と大型粒子の特徴およびその他の混和物について、観察と記載を行った。なお、ここで採用した各分類群の記載およびその特徴などは、以下の通りである。

［珪藻化石］

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、大きさは10～数百μｍ程度である。珪藻は、海水域から淡水域に広く分布する。小杉（1988）や安藤（1990）は、現生珪藻に基づいて環境指標種群を設定し、具体的な環境復原を行っている。ここでは、種あるいは属が同定できる珪藻化石（海水種、淡水種）を分類した。

［骨針化石］

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状からなる。海綿動物の多くは海産であるが、淡水産としても23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。したがって、骨針化石は水成環境を指標する。

［植物珪酸体化石］

主にイネ科植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、長径約10～50μｍ前後である。一般にはプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本やスゲ、シダ、トクサ、コケ類などに形成される。

［胞子化石］

胞子は、直径約10～30μｍ程度の珪酸質の球状粒子である。胞子は、水成堆積物中に多く見られるが、土壌中にも含まれる。

［石英・長石類］

石英および長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち、後述する双晶などのように、光学的な特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く、一括して扱う。

［長石類］

長石は、大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。

カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）に見られることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石は、花崗岩などケイ酸分の多い深成岩などに産出する。

［雲母類］

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で、風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状に剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。花崗岩などのケイ酸分の多い火成岩に普遍的に産し、変成岩類や堆積岩類にも産出する。

［輝石類］

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にビール瓶のような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。ケイ酸分の少ない深成岩類や火山岩類、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩類に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてケイ酸分の少ない火山岩類やケイ酸分の最も少ない火成岩類や変成岩類中にも産出する。

［角閃石類］

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は、細長く平たい長柱状である。閃緑岩のような、ケイ酸分が中間的な深成岩類や変成岩類あるいは火山岩類に産出する。

［ガラス質］

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄く湾曲したガラス（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山噴火により噴出した噴出物（テフラ）である。

［片理複合石英類］

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、片理構造を示す岩石である。雲母片岩や結晶片岩、片麻岩や粘板岩などと考えられる。

［砂岩質・泥岩質］

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、基質部分をもつ。構成粒子の大きさが約 0.06mm 以上のものを砂岩質、約 0.06mm 未満のものを泥岩質とした。

［複合石英類］

複合石英類は、石英の集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は、粗粒から細粒までさまざまである。ここでは便宜的に、個々の石英粒子の粒径が 0.01mm 未満のものを微細、0.01 ～ 0.05mm のものを小型、0.05 ～ 0.10mm のものを中型、0.10mm 以上のものを大型と分類した。微細結晶の集合体である場合には、堆積岩類のチャートなどに見られる特徴がある。

［斑晶質・完晶質］

斜長石や輝石・角閃石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなる岩石である。

［流紋岩質］

石英や長石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなり、流理構造を示す岩石である。

［凝灰岩質］

ガラス質で斑晶質あるいは完晶質構造を持つ粒子のうち、結晶度が低く、直交ニコルで観察した際に全体的に暗い粒子である。

［不明粒子］

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明な粒子や、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明粒子とした。

（５）粘土の蛍光Ｘ線分析

蛍光Ｘ線分析では、粘土よりガラスビードを作製し、蛍光Ｘ線分析を行った。

試料は、セラミック乳鉢で粉末にして、恒温乾燥器に入れ 120℃で乾燥させた後、デシケータ内で放冷し、1.8000g 秤量した。これを、無水四ホウ酸リチウム $Li_2B_4O_7$ と、メタホウ酸リチウム $LiBO_2$ を８：２の割合で調製した融剤 3.6000g と十分に混合し、白金製るつぼに入れ、ビードサンプラーにて約 750℃で 250 秒間予備被熱、約 1100℃で 150 秒間溶融させ、約 1100℃で 450 秒間揺動被熱してガラスビードを作製した。

分析は、フィリップス社製波長分散型蛍光Ｘ線分析装置 MagiX（PW2424 型）にて、検量線法による定量分析を行った。標準試料には、独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センターおよび米国標準技術研究所（NIST）の岩石標準試料計 15 種類を用いた。定量元素は、酸化ナトリウム（Na_2O）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化アルミニウム（Al_2O_3）、二酸化ケイ素（SiO_2）、酸化リン（P_2O_5）、酸化カリウム（K_2O）、酸化カルシウム（CaO）、酸化チタン（TiO_2）、酸化マンガン（MnO）、酸化鉄（Fe_2O_3）の主成分 10 元素と、ルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）の微量成分２元素の計 12 元素である。

（６）結果

以下に、各粘土について粘土薄片の偏光顕微鏡観察（第 120 図）と蛍光Ｘ線分析結果を述べる。

a. 分析№１：住 134

粘土薄片の偏光顕微鏡観察では、海綿動物の骨格の一部の骨針化石が少量含まれていた。その他では、イネ科植物の葉身などで形成される植物珪酸体化石が多く含まれていた。砂粒物では、斜長石（双晶・累帯）や石英・長石類が多く含まれ、角閃石類や輝石類あるいは火山ガラスや火山岩類などが含まれていた（第９表）。

分析№	種類	遺構	粒度	最大粒径	微化石類の特徴	砂粒物岩石・鉱物組成
1	粘土	住134	280μm－750μm	1.95mm	植物珪酸体化石多産、骨針化石(8)、胞子化石	石英・長石類、斜長石(双晶・累帯)》ガラス質〉斜方輝石、角閃石類、凝灰岩質、雲母類、複合石英類(微細)、ジルコン、カリ長石(パーサイト)、複合石英類(大型)
2	粘土	住137	250μm－650μm	2.32mm	植物珪酸体化石多産、骨針化石(7)、胞子化石	石英・長石類、斜長石(双晶・累帯)》ガラス質〉斜方輝石、角閃石類、雲母類、複合石英類(中型)、凝灰岩質、斑晶質、単斜輝石、ジルコン、複合石英類(大型)

第９表　胎土中の微化石類と砂粒物の特徴

分析No.	種類	遺構	粘土の特徴							砂粒の特徴								鉱物の特徴							植物珪酸体化石	その他の特徴
			種類	放散虫化石	海水種珪藻化石	淡水種珪藻化石	不明種珪藻化石	骨針化石	胞子化石	分類	片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ	石英	斜長石(双晶・累帯)	カリ長石(パーサイト)	ジルコン	角閃石類	輝石類	雲母類		
1	粘土	住134	水成					○	○	Bg		○	△		△		○	◎	◎	△	△	○	○	△	◎	深成岩類起源の斜長石多い
2	粘土	住137	水成					○	△	Bg		○	△	△	△		○	◎	◎		△	○	○	△	◎	深成岩類起源の斜長石多い

第 10 表　胎土中の粘土および砂粒組成の特徴

粘土の堆積環境は、骨針化石が含まれていたことから、水成粘土と判断された。また、砂粒組成は、斜長石や角閃石類あるいは雲母類が特徴的に含まれていたことから、主に深成岩類に由来する鉱物群と考えられる。砂粒組成としては深成岩類を主として火山ガラスからなるテフラを含む組成（Bg 群）である。なお、岩石の組み合わせは第 11 表に従った。蛍光X線分析では、二酸化ケイ素（SiO_2）が 61.3%、酸化アルミニウム（Al_2O_3）が 20.9% であった。その他では、酸化鉄（Fe_2O_3）が 5.20%、酸化カルシウム（CaO）が 1.94%、酸化カリウム（K_2O）が 1.61% などであった（第 12 表）。

			第１出現群						
			A	B	C	D	E	F	G
			片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ
第２出現群	a	片岩類		Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga
	b	深成岩類	Ab		Cb	Db	Eb	Fb	Gb
	c	堆積岩類	Ac	Bc		Dc	Ec	Fc	Gc
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd		Ed	Fd	Gd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De		Fe	Ge
	f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef		Gf
	g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Eg	Fg	

第 11 表　岩石片の起源と組み合わせ

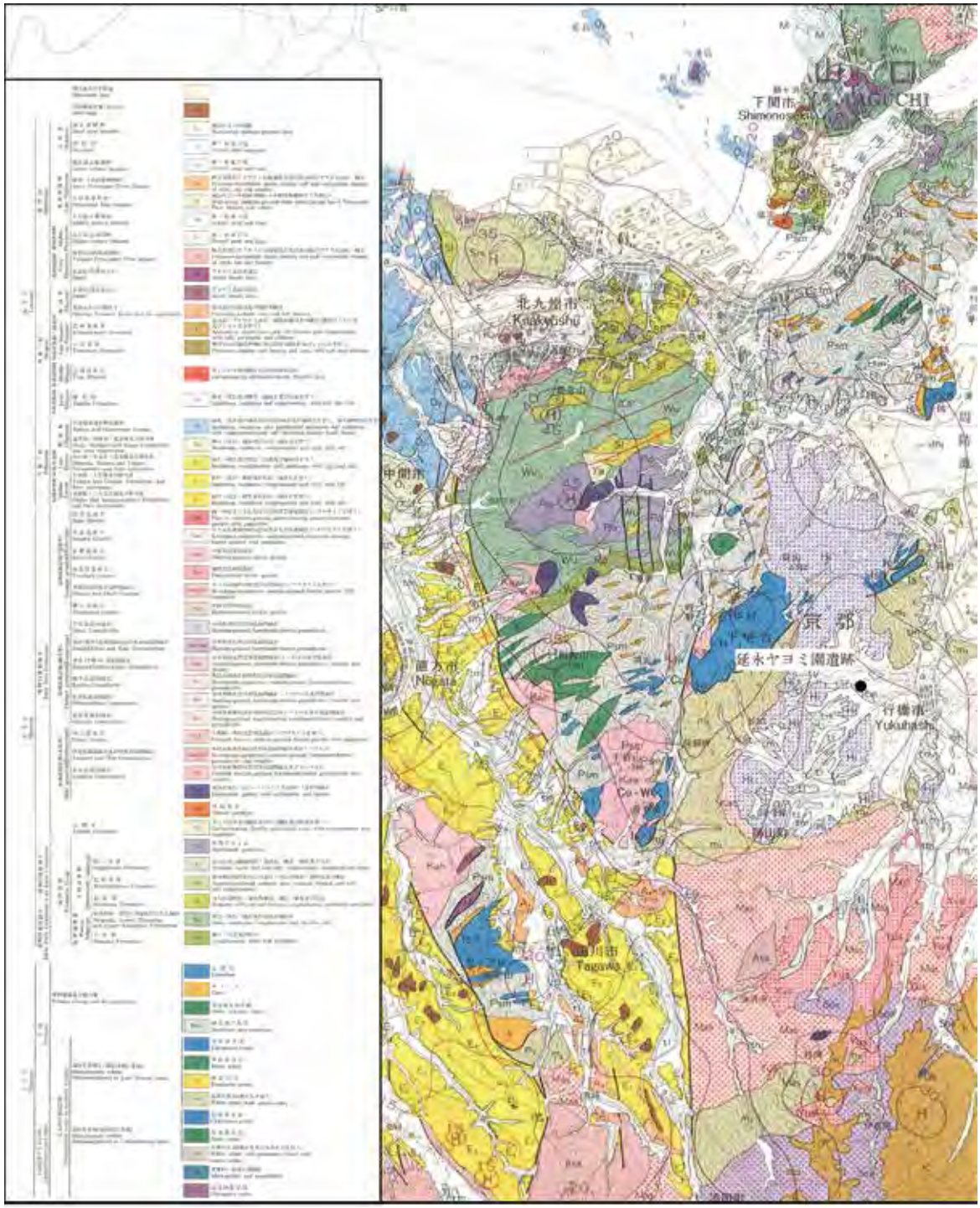
b. 分析№２：住 137

粘土部分では、海綿動物の骨格の一部の骨針化石が少量含まれていた。その他では、イネ科植物の葉身などで形成される植物珪酸体化石が多く含まれていた。砂粒物では、斜長石（双晶・累帯）や石英･長石類が多く含まれ、角閃石類や輝石類あるいは火山ガラスなどが含まれていた（第９表）。

粘土の堆積環境は、骨針化石が含まれていたことから、水成粘土と判断された。また、砂粒組成は、斜長石や角閃石類あるいは雲母類が特徴的に含まれていたことから、主に深成岩類に由来する鉱物群と考えられる。砂粒組成としては深成岩類を主として火山ガラスからなるテフラを含む組成（Bg 群）である。なお、岩石の組み合わせは第 11 表に従った。蛍光X線分析では、二酸化ケイ素（SiO_2）が 62.2%、酸化アルミニウム（Al_2O_3）が 20.9% であった。その他では、酸化鉄（Fe_2O_3）がと 4.36%、酸化カリウム（K_2O）が 1.69%、酸化カルシウム（CaO）が 1.60% などであった（第 12 表）。

分析No.	遺構	Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	K_2O	CaO	TiO_2	MnO	Fe_2O_3	Rb	Sr	Total
1	住134	1.80	0.86	20.9	61.3	0.101	1.61	1.94	1.26	0.064	5.20	104	340	95.1
2	住137	1.53	0.76	20.9	62.2	0.099	1.69	1.60	1.18	0.044	4.36	113	278	94.4

第 12 表　住居跡出土粘土の蛍光 X 線分析による化学組成（主成分：%、微量元素：ppm）

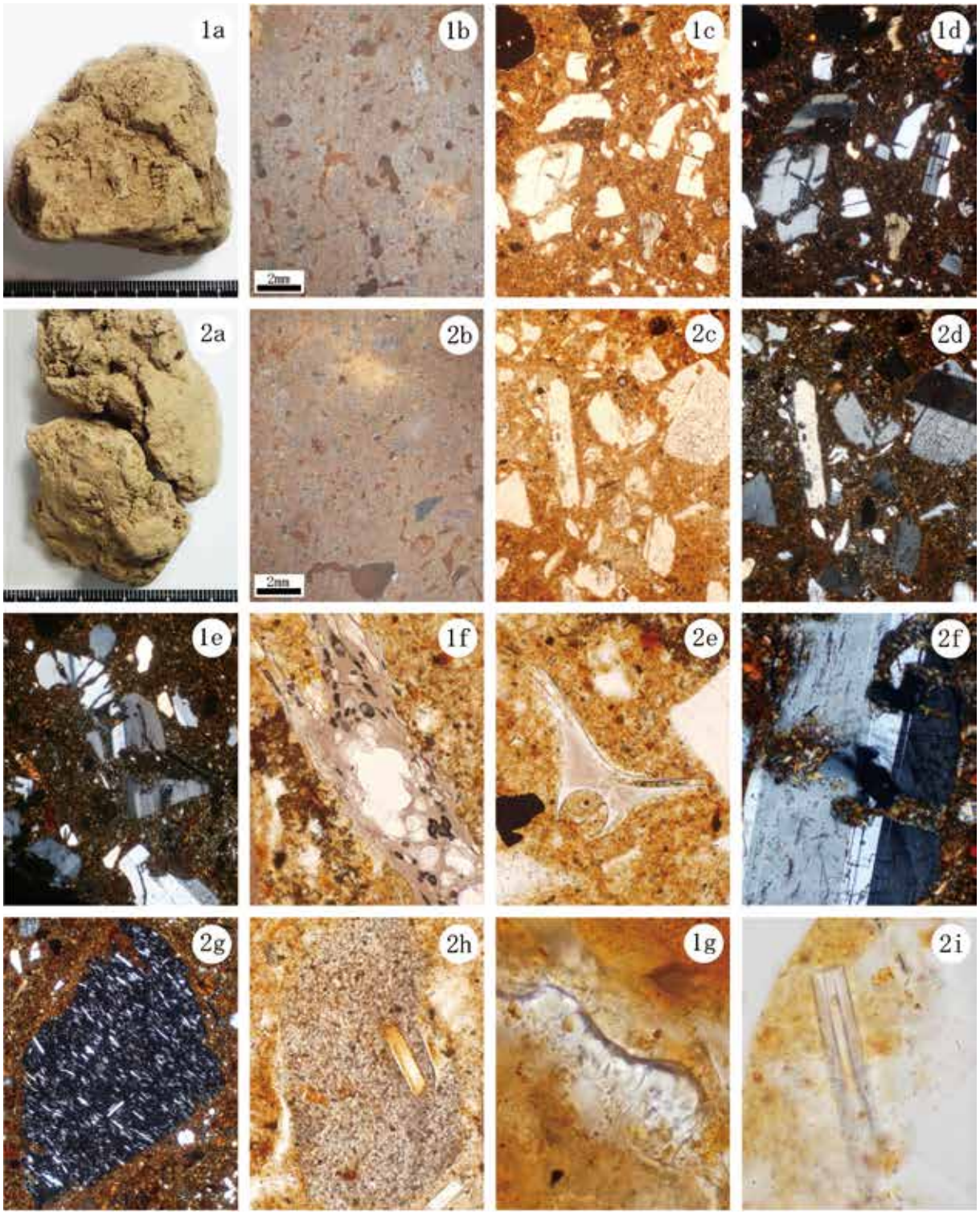


第 119 図　遺跡周辺の地質

（7）考察

粘土薄片の偏光顕微鏡観察と蛍光X線分析を行った結果、いずれの粘土も同じ特徴を示した。すなわち、骨針化石を含む水成粘土であり、砂粒組成が深成岩類とテフラからなる組成（Bg 群）であった。蛍光X線分析では粘土分を反映して共に酸化アルミニウム（Al_2O_3）が 20.9% と高く、粘土分の多い良質の粘土であった。

当該遺跡は、小波瀬川と長峡川に挟まれた段丘上に位置するが、この段丘は更新世後期に形成された中位段丘（第 119 図の記号 Tm）である。また、後期白亜紀前半の新期花崗岩類の平尾花崗閃緑岩（第 119 図の記号 Hi）や真崎花崗岩及び長府花崗岩（第 119 図の記号 Mas・Cho）あるいは勝山花崗岩（第 119 図の記号 Kat）が分布する。粘土中の砂粒組成はこうした周辺の地質を反映し



1a～1d. 住134出土粘土塊（分析No. 1）、2a～2d. 住137出土粘土塊（分析No. 2）、
1e. 虫食い状の粒子（500μm）、1f. ガラス質（100μm）、2e. ガラス質（100μm）、2f. 斜長石（100μm）、
2g. 斑晶質（500μm）、2h. 凝灰岩質（100μm）、1g. イネ籾殻の珪酸体（20μm）、2i. 骨針化石（20μm）

第 120 図　粘土試料と薄片の偏光顕微鏡写真

（a：試料、b：切断面、c：開放ニコル、d：直交ニコル、番号は分析No. に対応）

た特徴を示す。なお、火山ガラスからなるテフラは、中位段丘が形成される間に降灰したガラス質テフラと考えられる。

住居跡から検出された粘土塊は、遺跡周辺の段丘堆積物として分布する粘土を採取したと考えられる。

（8）まとめ

２住居跡（住 134、住 137）より出土した粘土２点について、粘土薄片の偏光顕微鏡観察と蛍光X線分析を行った。その結果、いずれも骨針化石を含む水成粘土であり、砂粒組成が深成岩類とテフラからなる組成（Bg 群）であり、粘土分の多い良質の粘土であった。

これら粘土は、遺跡が位置する中位段丘堆積物中の粘土と考えられる。

【引用文献】

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42（2），p.73 － 88.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p.1 － 20.

久保和也･松浦浩久･尾崎正紀･牧本博･星住英夫･鎌田耕太郎･広島俊男･中島和敏（1993）20 万分の 1 地質図「福岡」．通商産業省工業技術院地質調査所

２　延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ区における種実同定報告

株式会社古環境研究所

（1）はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べることで、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。ここでは、延永ヤヨミ園遺跡で出土した種実の同定を行い、当時の植生について検討する。

（2）試料と方法

弥生時代後期後半～古代、中世のⅣ−C 区包含層より出土した水洗選別済みの試料である。

同定は、試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

（3）結果

同定の結果、草本 1 分類群が同定された。学名、和名および粒数を第 13 表に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に形態的特徴を記載する。

・ヒョウタン類 *Lagenaria siceraria* Standl. 種子　ウリ科 16 粒：包含層

淡褐色で楕円形を呈す。上端にはへそと発芽孔があり、下端は波うつ切形を呈す。表面には縦に 2 本の低い稜が走る。藤下がヒョウタン仲間とするもので、ヒョウタン・フクベ・カンピョウが含まれ、このうちフクベ・カンピョウは食用になる。

遺構名	分類群		部位	個数
	学名	和名		
Ⅳ−C 区包含層　吉国452	*Lagenaria siceraria* Standl.	ヒョウタン類	種子 （破片）	15 1

第 13 表　延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ区における種実同定結果

（4）種実同定から推定される植生と農耕

栽培植物である草本種実のヒョウタン類は有用植物でもある。古くは縄文時代から検出され、弥

生時代以降は出土が多くなる。種子だけの検出であり、果皮が分解によって失われたのか、もしくは種子のみが投棄されたかのどちらかが考えられる。ヒョウタン類の果実には 200 ～ 300 粒の種子が入るが各遺跡とも検出数は比較的少ない。本遺跡も同様であり、主要作物として栽培された様相はなく、果実を器具に利用したり祭祀に用いたりするために適量栽培されたと推定される。

（５）延永ヤヨミ園遺跡におけるヒョウタンの利用状況

延永ヤヨミ園遺跡において、ヒョウタンの出土が認められるのは、本項で報告するものを含め、以下の遺構である。

果皮（Ⅳ－Ｃ区１号井戸、９世紀後半）、種子（Ⅳ－Ｃ区包含層）、種子（Ⅲ－Ｃ区 3014 号土坑、７世紀後半～８世紀初頭）、種子（Ⅲ－Ｃ区包含層）

果皮が認められるものは、本書で報告している１号井戸出土例のみである（p132）。ヒョウタンの口部分に横方向に孔が穿たれ、紐を掛けていたものと考えられる。その他は種子のみの出土であり、埋没時に果実の状態であったのか、種子のみであったのか判別できない。時期も７～９世紀の遺構出土例しかなく、通時的に利用されていたのか、当該時期に限定的に利用されていたのか判断できない。

現段階では、古代を中心としてヒョウタンの利用がなされ、９世紀代には少なくとも器具に利用した例があると言えるのみである（城門）。

【参考文献】

藤下典之（1982）菜畑遺跡から出土したメロン仲間 *Cucumis melo L.* とヒョウタン仲間 *Lagenaria siceraria* Standl. の種子について．唐津市文化財調査報告第５集菜畑遺跡，唐津市教育委員会，p.455－463.

藤下典之（1992）出土種子からみた古代日本のメロンの仲間、その種類、渡来、伝搬、利用について．考古学ジャーナル，354，ニュー・サイエンス社，p.7－13.

南木睦彦（1991）栽培植物．古墳時代の研究第４巻生産と流通Ⅰ，雄山閣出版株式会社，p.165－174.

南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p.276－283.

吉崎昌一（1992）古代雑穀の検出．月刊考古学ジャーナル No.355，ニューサイエンス社，p.2－14.

渡辺　誠（1975）縄文時代の植物食．雄山閣，187p.

1　ヒョウタン類種子　　2　ヒョウタン類種子　　3　ヒョウタン類種子　　4　ヒョウタン類種子

5.0㎜

第 121 図　延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ－Ｃ区包含層出土の種実

3　延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ−C区出土木製鞍に伴う分析報告

公益財団法人　元興寺文化財研究所　山田卓司

第 122 図　資料写真（保存処理前）と採取箇所

（1）分析対象

延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ−C区包含層出土鞍（預り番号 20120860 No.27、第 122 図）表面に付着する黒色塗膜と毛様観察箇所

（2）分析内容

黒色塗膜をピンセットにより微量採取し（第 122 図）、赤外分光分析を用いて塗膜成分を検討した。残り片をエポキシ樹脂に包埋後、光が透過する薄片を切り出し、永久プレパラートを作製した。生物顕微鏡を用いて断面観察を行い、塗膜の層構造を検討した。

毛様観察箇所からピンセットにより試料片を微量採取し（第 122 図）、エポキシ樹脂に包埋、横断面を金属顕微鏡で観察した。その後、断面方向の薄片を切り出し、永久プレパラートを作製した。生物顕微鏡を用いて断面観察を行い、毛様箇所を検討した。

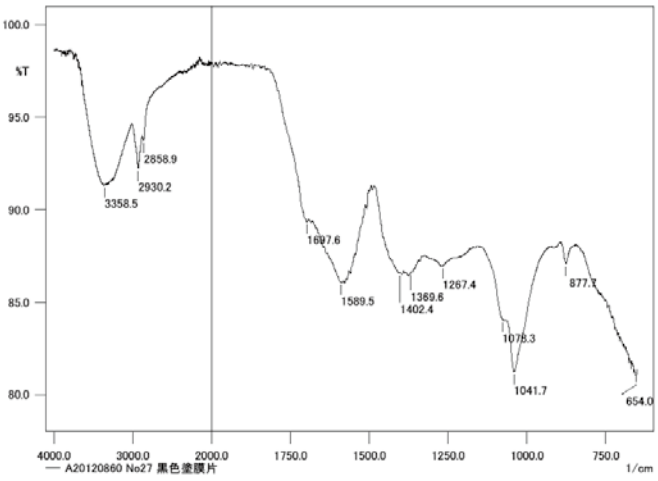
（3）使用機器

• 全反射フーリエ変換型赤外分光光度計（ATR-FTIR）【SensIR Technologies TravelIR】

試料に赤外線を照射し、そこから得られる分子の構造に応じた固有の周波数の吸収を解析し、化合物を同定する。全反射方式により、透過法では測定できない固体試料に適する。検出器 DLATGS を用い、分解能 4cm^{-1} で測定した。

• 生物顕微鏡【OLYMPUS　BX50】

• 金属顕微鏡【OLYMPUS　BH-UMA】



第 123 図　黒色塗膜片の ATR－FTIR 結果

（4）結果と考察

a．採取塗膜片について

微量採取した塗膜片の ATR-FTIR 結果より、2900、1700、1590、1400、1270 cm^{-1} 付近にピークを検出した（第 123 図）。ピーク形状から、塗膜片は漆膜と考えられた。

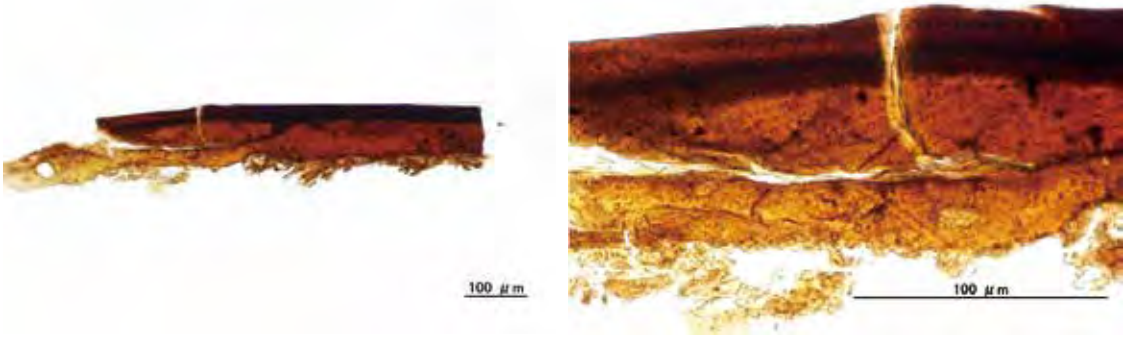
断面観察の結果より、木地に漆が染み込んだ層と、下から粒子を含む30〜50 μmの透明な黄褐色層、約15 μmの不透明な茶褐色層、微粒子を含む約15 μmの透明な茶褐

色層（2層の可能性もある）が観察された（第124図）。

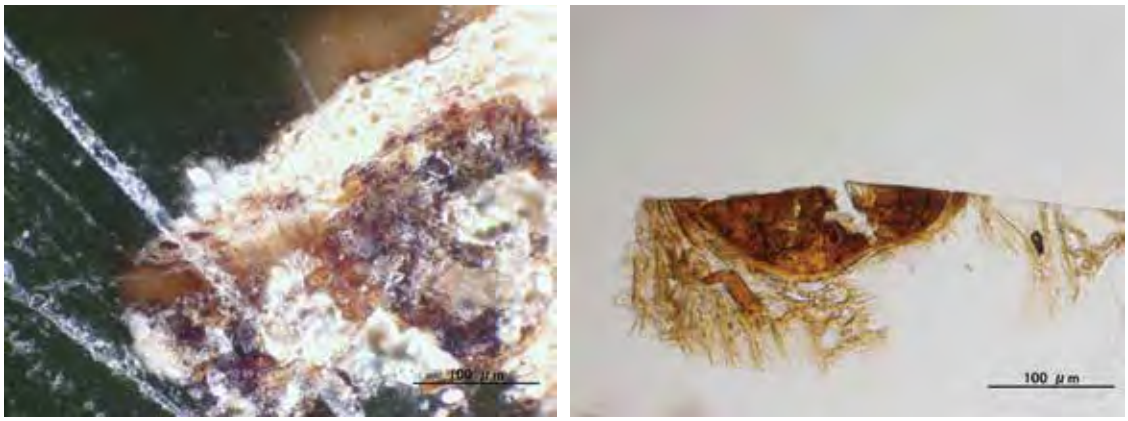
よって、この鞍では、生漆を木地に染み込ませ下地とし、透明な漆で層を滑らかにした後、油煙など微細な黒色粒子を含む漆を塗り、表面を透明な漆で整えたものと考えられる。

ｂ．毛様観察箇所について

横断面観察と断面観察の結果より、観察箇所の溝は約 200 μｍに及び、毛の可能性が考えられた（第 125 図）。毛様観察箇所に漆が染み込んでいる可能性も高く、種別を判断できる情報は得られなかった。



第 124 図　黒色塗膜片の断面観察（右図：左図の拡大）



第 125 図　毛様観察箇所の断面観察（左図：横断面、右図：断面）

Ⅴ　総括

１　Ⅳ−Ｂ２区及びⅣ−Ｃ区の遺構の変遷について

（１）はじめに

Ⅲ−１で先述したように、調査当時の状況と遺構の分布、報告書分量などの関係で、Ⅳ区は道路を境に北をＡ区、南をＢ区、谷部分をＣ区とし、さらにⅣ−Ｂ区は１・２区に分けて報告することになった。そのため、ここで行う調査区南西隅の一角に位置する当区（Ⅳ−Ｂ２区）及びⅣ−Ｃ区のみで遺構の変遷を検討しても当然遺跡全体の様相を理解するのは難しいが、今年度報告予定の国道 201 号事業に係る調査報告書３冊では、各巻で遺構変遷を検討している。本検討と合わせてご覧いただければ、本遺跡の国道 201 号に係る調査区における変遷過程についてはある程度解明できると考えている。

（２） 時期別変遷について

弥生時代後期～古墳時代前期

当区で最も古い時期の遺構は、弥生時代後期後半の 132・142 号住居跡である。本遺跡のこれまでの調査で弥生時代後期後半に集落が成立したことが判明しているが、当区竪穴住居跡の存在から集落成立当初より斜面にあたる当区まで集落が広がっていたことを確認できた。

この時期の 142 号住居跡の規模は床面積 25㎡を超えるのに対し、132 号住居跡が 16㎡程度と差があること、またベッド状遺構も 132 号住居跡が一方のみ付設に対し、142 号住居跡は二方に付設すること、さらに 132 号住居跡は住居主軸が等高線に逆らった形で北西－南東方向に振れるなど、時期は同一ではあるものの、違いが認められる。ただし、132 号住居跡も先学により豊前地域で早く成立すると指摘される４本主柱穴の住居跡である。

また 142 号住居跡からは搬入品と考えられる西部瀬戸内系の甕及び器台が出土し、そのうち器台は住居埋土下層に伴い、住居時期を示す可能性が高い。この種の器台は、行橋市辻垣下河原遺跡Ａ区１号溝に出土例があり、西部瀬戸内地域との交流の存在を示す資料である。しかし、本遺跡から出土した弥生時代後期～古墳時代前期に属する土器は、本遺跡が拠点集落であること、また立地も河川沿いである割には外来系土器の割合が少ないことが特徴の一つである。

時期は異なるが、Ⅳ−Ａ及びⅣ−Ｂ１区では７世紀末から機能したと考えられる道路状遺構、Ⅳ−Ｃ区では波止場の可能性がある谷に突き出す平坦面が確認されていることから、142 号住居跡で西部瀬戸内系土器が複数発見されたことは、谷及び山崎川に面する当区周辺が、弥生時代後期～古墳時代前期の本遺跡における他地域との交流空間の一つであったことを示す可能性がある。

古墳時代前期になると、122・135 号住居跡と当区は引き続き集落が営まれる。中でも 122 号住居跡は 6.7 × 5.2 ｍと本遺跡では比較的大きな竪穴住居である。また 122 号住居跡出土土器は､庄内･布留系土器の本格的な流入より少し前にあたる、在地系土器のみで構成された古墳時代前期前半古相の良好な資料である。なお、132・135 号住居跡の主軸がほぼ一致することは、135 号住居跡が 132 号住居跡に後続する住居跡である可能性を示している。

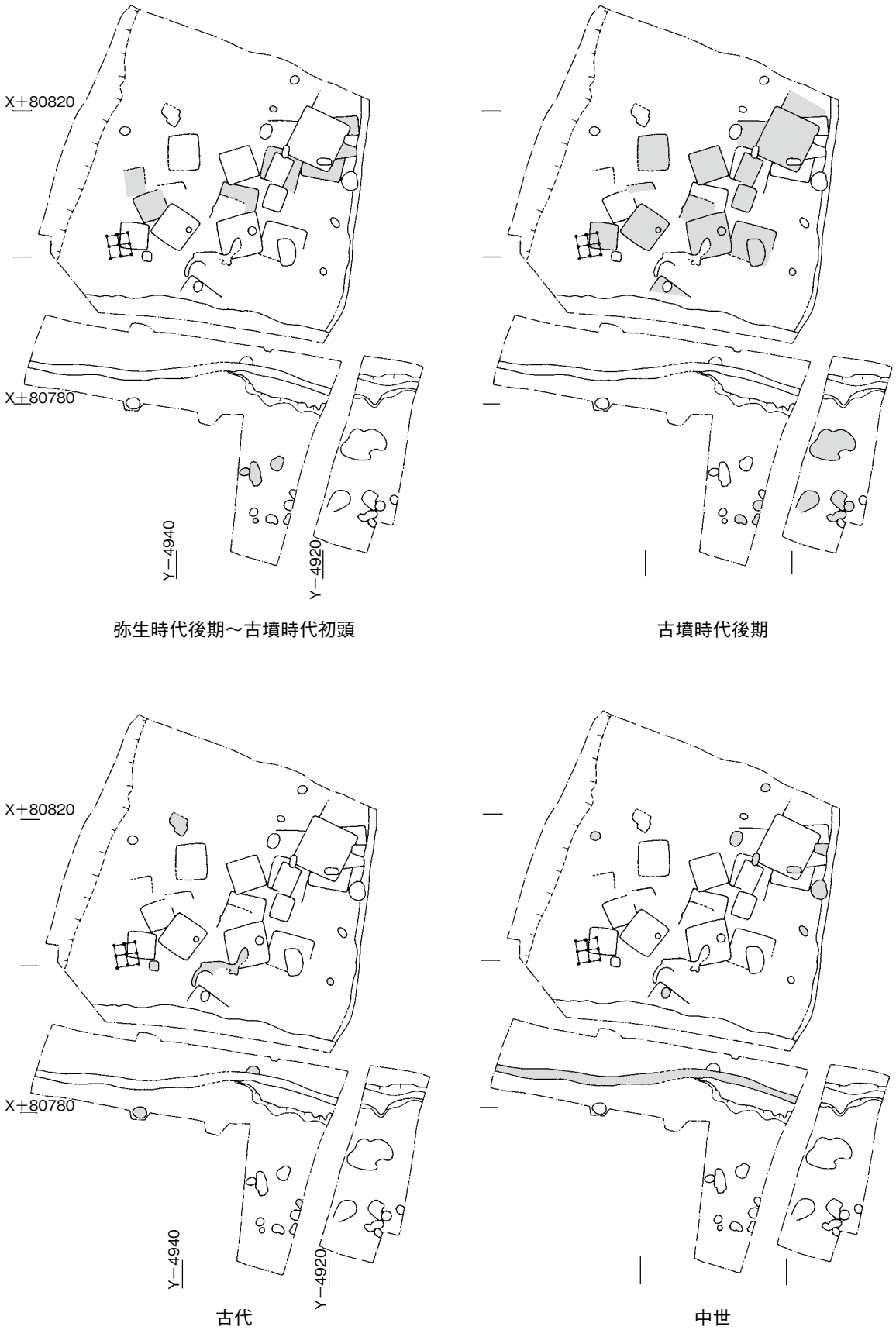
Ⅳ−Ｃ区では、古墳時代前期に属すると考えられる 1009・1010 号土坑から梯子、杵、鍬、鋤の未製品などの木製品が出土した。また未製品の存在から、古墳時代前期にⅣ−Ｃ区では木製品の水漬けが行われており、木製品が生産されていた可能性が高い。

古墳時代中期で確認された遺構は、121・138 Ｂ住居跡のみで、集落は一定程度継続するものの、前段階に比べ集落は縮小傾向にある。なお、Ⅳ−Ｃ区の包含層出土土器から古墳時代中期に属する土器も一定程度存在すること及び既往の調査から、古墳時代後期まで集落は小規模ながら継続していると考えられる。

また古墳時代中期に属すると考えられるⅣ−Ｃ区 1008 号土坑で農具未製品が出土し、古墳時代前期と同じく木製品生産を行っていた可能性がある。

古墳時代後期

これまでの調査から、古墳時代後期になると急激に集落が拡大して２度目の盛期を迎えることが判明している。当区でも古墳時代後期になり、竪穴住居跡にカマドが付設される段階以降、古墳時代後期前半～中頃と考えられる 133 号住居跡を皮切りに、古墳時代後期後半には 138 Ａ・139・



第 126 図　Ⅳ- B1 区・Ⅳ- C 区遺構変遷図（1/800）

140・141・143 号住居跡、次の後期末段階では 120・134・137・144 号住居跡と竪穴住居数が急速に増加することが確認できた。

主軸方位の検討では、134 と 144 号住居跡、138 A と 139 号住居跡、140 と 137 号住居跡、141 と 143 号住居跡と、主軸がほぼ一致するとともに住居規模もほぼ同様のもので、竪穴住居の建て替え関係を予測させる住居セットが認められる。これらの住居群は、後期後半の 140・141・143 号住居跡は切り合うこと、また後期後半の 139 号住居跡と 143 号住居跡は近接するため、後期後半段階でのこれらの住居の併存状況の検証は困難である。その他の住居セットでは、竪穴住居存続期間が 20 年程度を仮定すると、後期後半段階では 138 A・140・144 号住居跡、後期末段階では 137・139・134 号住居跡が併存していた可能性が高い。後期末段階の 137 号住居跡と 139 号住居跡は２m程度しか住居間の距離がないことから、確実な同時併存関係は検証できていないものの、141・143 号住居跡セットを含めると、7.1 × 6.9 mの大型住居である 120 号住居跡を中心的な存在とした５（棟）セットで一つのグループを形成していた可能性がある。

豊前地域の古代の集落については、吉田東明氏（吉田 2012）と小澤佳憲氏（小澤 2012）が検討しており、まず竪穴住居のサイズについては、大（床面積 40㎡弱）と小（床面積 15㎡前後）に二極分化する傾向があると指摘する。本遺跡Ⅳ−Ｂ２区では、120 号住居跡が床面積 40㎡弱で、134・140･141 号住居跡が床面積 25 ～ 30㎡弱、131･133･137･143 号住居跡が床面積 15㎡～ 20㎡、138 A・139 号住居跡が 10㎡前後と、４つに分かれ、多様な状況を示す。この時期の竪穴住居サイズの多様性については、先の小澤氏によると竪穴住居に居住する親族単位のサイズの多様性を示していると理解されている。当区で見られた住居セット関係及び住居群からなる単位集団の検討については、本遺跡調査の整理・報告がすべて完了した段階で、本遺跡内や地域内でどの程度普遍的であるかどうかの検証をすべきであると考えており、今回は存在の指摘のみにとどめておきたい。

また後期末の 134・137 号住居跡で確認したカマド廃絶時にカマドを粘土で被覆する行為は、カマド廃絶行為のみならず、竪穴住居内空間の在り方を考える上でも大きな成果である。詳細は本章３をご覧いただきたい。

７世紀前半には 131 号住居跡を最後に当区では基本的に竪穴住居跡はなくなると考えられており、146 号住居跡出土土器は８世紀に属するものの、住居形態及び土器も小片であることから、８世紀まで竪穴住居が存続していたかは今後の調査の進展に委ねたい。

谷部にあたるⅣ−Ｃ区では、1004・1007・1012・1013 号土坑が古墳時代後期に属すると考えられるが、これらの土坑から木製品の出土はほとんどない。しかし、古墳時代後期から古代の遺構として 1001･1003 号土坑があり、特に 1001 号土坑からねずみ返し、鋤、下駄が出土していることから、包含層出土土器の時期別の割合でいけば当区から出土した木製品のかなりの割合は古墳時代後期に属する可能性が考えられる。

古代

当区及びこれまでの調査成果から７世紀前半以降本遺跡では竪穴住居はなくなり、集落としては急激に縮小する一方、掘立柱建物から構成される一般集落的な状況は認められず、一般集落は別の場所に移動したと考えられる。

かわりに７世紀後半にはⅤ−１、Ⅱ−２区で官衙的配置が認められる大型掘立柱建物群が検出され

ている。また、７世紀末～８世紀には確実に機能し、一部10世紀まで存続したと考えられるⅣ-AからⅣ-Ｂ１区で検出された道路状遺構も確認される。このことから、Ⅳ-Ｂ２区では７世紀末～９世紀の遺構は確認できていないものの、Ⅳ-Ｃ区包含層から出土した８世紀後半に属する土器及び「天平六年」銘木簡、「津」銘墨書土器などの存在から、本遺跡は「草野津」が存在していた可能性が高く、遺跡としての在り方が大きく変わったと思われる。さらにⅣ-Ａ区からⅣ-Ｂ１区で検出された道路状遺構はⅣ-Ｃ区から丘陵上まで物資を運搬する道路であった可能性が高い。この「草野津」の考古学的検証については、本章５で詳述しているのでご覧いただきたい。

９世紀ではⅣ-Ｃ区１号井戸が確認されているが、通常官衙的な公的施設に伴う井戸形態である板材を桁状に組み上げた井戸であり、当該期の本遺跡の位置づけを示す資料として注目される。

10世紀前後になると、Ⅳ-Ｂ２区で調査区南端に等高線に沿うように配置された37・43号土坑、SX01が検出されている。特にSX01では、高台付土師器坏が溝状のくぼみに多量に廃棄された状態で出土した。このことは43号土坑北側で検出した多くのピット群は、掘立柱建物跡になる配置は確認できなかったが、集落縁辺のこの地に当該期の集落が存在したことを示す可能性がある。またⅣ-ＡからⅣ-Ｂ１区で検出された道路状遺構は、少なくとも10世紀まで存続したと考えられることから、この段階にも８世紀段階に存在した「津」的在り方が小規模ながら継続していた可能性がある。

Ⅳ-Ｃ区で出土した木製品は、包含層出土土器から古墳時代後期に引き続き、かなりの割合が古代に属すると想定され、８世紀まで継続した木器生産が認められる。一方、斎串や形代の存在から律令的な祭祀行為も行われており、さきほどの「草野津」の存在を示す証拠になるであろう。

中世

中世にはⅣ-Ｂ区では34・35号土坑のみ、Ⅳ-Ｃ区では11号溝のみと、中世段階には丘陵縁辺部である当区周辺の利用は低いと考えられる。その後中世以降のものと思われる総柱建物である９号建物跡があるが、近世以降当区は主に田畑として利用されていたと想定される（大庭）。

【引用・参考文献】

吉田東明 2012「豊前の古代集落」『古文化談叢』第68集　九州古文化研究会

小澤佳憲 2012「豊前地域の集落－古墳時代後期から奈良時代にかけての一考察」『集落から見た７世紀』第61回埋蔵文化財研究集会発表要旨資料　埋蔵文化財研究会

２　延永ヤヨミ園遺跡周辺の古墳時代初頭前後竪穴住居の構造

（１）はじめに

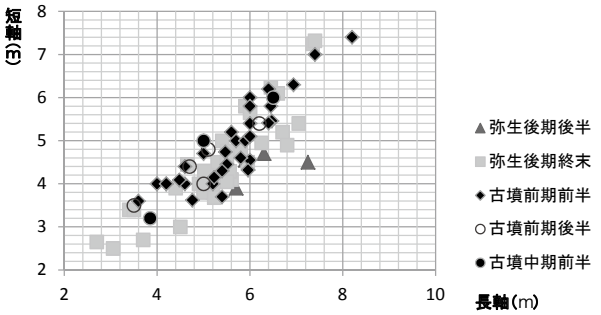
これまでの本遺跡の調査では、一度目の盛期である古墳時代初頭前後に属する竪穴住居跡が多数検出されているが、その上層では古墳時代後期の竪穴住居跡及び中世の溝・ピットなど多数の遺構が重複しているため、古墳時代初頭前後の竪穴住居跡の全形を知りえたものは少ない。

そのため、以下では本遺跡を含む京都郡内で検出された古墳時代初頭前後の竪穴住居について検討することで、本遺跡の竪穴住居跡の様相を明らかにしたい。

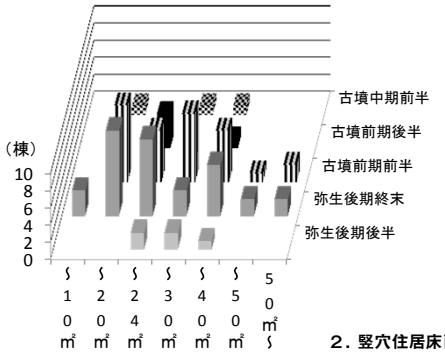
番号	遺跡名	住居番号	住居時期	平面	PL	長軸	短軸	面積	長短比	BN	備考	文献
1	延永ヤヨミ園遺跡	ⅣB-住121	古墳前期前半	方形	4	5.2	5.6	29.12	108%	N		本報告
2	延永ヤヨミ園遺跡	ⅣB-住122	弥生後期終末	方形	2	6.7	5.2	34.84	78%	E		本報告
3	延永ヤヨミ園遺跡	ⅣB-住132	古墳前期前半	方形	4	4	4	16	100%	B		本報告
4	延永ヤヨミ園遺跡	ⅢC-住13	古墳前期前半	方形		5.2	4	20.8	77%	N		大庭編2013
5	延永ヤヨミ園遺跡	ⅢC-住17	古墳中期前半	方形		5	5	25	100%	E		
6	延永ヤヨミ園遺跡	Ⅰ-住15	弥生後期終末	方形	4	5.3	4.5	23.85	85%	E		飛野2013
7	延永ヤヨミ園遺跡	Ⅰ-住16	古墳前期前半	方形	4	5	5	25	100%	B		
8	延永ヤヨミ園遺跡	Ⅰ-住25	古墳前期後半	方形	2	4.7	4.4	20.68	94%	N		
9	延永ヤヨミ園遺跡	Ⅰ-住29	古墳前期後半	方形		3.5	3.5	12.25	100%	B		
10	延永ヤヨミ園遺跡	Ⅰ-住34	古墳前期前半	方形	2	5	4.7	23.5	94%	N		
11	延永ヤヨミ園遺跡	Ⅰ-住49	古墳前期後半	方形	2	5	4	20	80%	B		
12	延永ヤヨミ園遺跡	Ⅰ-住50	古墳前期前半	方形		4	4	16	100%	N		
13	延永ヤヨミ園遺跡	Ⅰ-住71	弥生後期終末	方形		3.4	3.4	11.56	100%	D		
14	延永ヤヨミ園遺跡	Ⅱ-2住44	古墳前期前半	方形	2	5.5	4.45	24.475	81%	C		城門編2014
15	延永ヤヨミ園遺跡	Ⅱ-2住65	弥生後期終末	方形	4	4.65	4.45	20.6925	96%	N		
16	延永ヤヨミ園遺跡	Ⅱ-2住72	古墳前期後半	方形	2	6.2	5.4	33.48	87%	E		
17	延永ヤヨミ園遺跡	Ⅱ-2住102	古墳前期前半	方形	4	7.4	7	51.8	95%	N		
18	延永ヤヨミ園遺跡	Ⅱ-2住127	弥生後期終末	方形	2	5.95	4.5	26.775	76%	B		
19	延永ヤヨミ園遺跡	Ⅱ-2住131	古墳前期前半	方形	2	6	4.55	27.3	76%	A		
20	延永ヤヨミ園遺跡	Ⅱ-3住16	弥生後期終末	方形		5.15	4.1	21.115	80%	B		
21	延永ヤヨミ園遺跡	Ⅱ-3住20	弥生後期終末	方形		2.7	2.65	7.155	98%	N		
22	延永ヤヨミ園遺跡	Ⅱ-3住36	弥生後期終末	方形		3.05	2.5	7.625	82%	N		
23	延永ヤヨミ園遺跡	V-1b住7	古墳前期前半	方形	4	6.94	6.3	43.722	91%	D		岡田編2013
24	延永ヤヨミ園遺跡	V-1b住14	弥生後期終末	方形	2	4.5	3	13.5	67%	D		
25	延永ヤヨミ園遺跡	V-2住4	古墳前期前半	方形	2	4.2	4	16.8	95%	N		
26	延永ヤヨミ園遺跡	V-2住5	古墳前期前半	方形	2	4.2	4	16.8	95%	N		
27	延永ヤヨミ園遺跡	V-3住2	弥生後期終末	方形		5	3.9	19.5	78%	A		
28	延永ヤヨミ園遺跡	V-5住10	古墳前期前半	方形	2	5.8	4.6	26.68	79%	E		飛野編2014
29	延永ヤヨミ園遺跡	V-5住16	古墳前期後半	方形	4	5.1	4.8	24.48	94%	E		
30	延永ヤヨミ園遺跡	V-5住17	古墳中期前半	方形	4	6.5	6	39	92%	N		
31	延永ヤヨミ園遺跡	V-5住22	古墳前期前半	方形	4	6	6	36	100%	E		
32	延永ヤヨミ園遺跡	V-5住25	弥生後期終末	方形		3.5	3.4	11.9	97%	N		
33	延永ヤヨミ園遺跡	V-5住36	弥生後期終末	方形	2	5.2	3.8	19.76	73%	N		
34	延永ヤヨミ園遺跡	V-5住41	古墳前期前半	方形	4	5.7	5	28.5	88%	E		
35	延永ヤヨミ園遺跡	V-5住42	古墳前期前半	方形		3.6	3.6	12.96	100%	N		
36	延永ヤヨミ園遺跡	V-5住45-1	古墳前期前半	方形		6	5.8	34.8	97%	E		
37	延永ヤヨミ園遺跡	V-5住45-2	古墳前期前半	方形		4.6	4	18.4	87%	E		
38	延永ヤヨミ園遺跡	V-5住47	弥生後期終末	方形	4	7.35	7.25	53.2875	99%	B		
39	延永ヤヨミ園遺跡	V-5住48	古墳前期前半	方形	4	6.4	6.2	39.68	97%	E		
40	延永ヤヨミ園遺跡	V-5住68	古墳前期前半	方形	2	4.6	4.4	20.24	96%	D		
41	下稗田遺跡	Ⅰ-住27	弥生後期終末	方形	4	5.9	5.8	34.22	98%	E		長嶺・末永編1985
42	下稗田遺跡	Ⅰ-住37	弥生後期終末	方形	2	6.8	4.9	33.32	72%	E		
43	下稗田遺跡	Ⅰ-住59	弥生後期終末	方形	2	4.9	4	19.6	82%	N		
44	下稗田遺跡	Ⅱ-住5	弥生後期終末	方形	2	5.6	4.1	22.96	73%	E		
45	下稗田遺跡	Ⅱ-住6	弥生後期終末	方形	4	5	3.8	19	76%	E		
46	下稗田遺跡	Ⅱ-住10	弥生後期後半	方形	2	5.7	3.9	22.23	68%	N		
47	下稗田遺跡	Ⅱ-住12	弥生後期終末	方形	2	5.8	4.8	27.84	83%	N		
48	下稗田遺跡	Ⅱ-住13	弥生後期後半	方形		6.3	4.7	29.61	75%	A		
49	大久保掘生遺跡	住1	弥生後期終末	方形	2	7.05	5.4	38.07	77%	A		辛嶋2000
50	大久保掘生遺跡	住4	弥生後期終末	方形	2	5.5	4.45	24.475	81%	B		
51	大久保掘生遺跡	住7	弥生後期終末	方形	2	3.7	2.7	9.99	73%	B		
52	大久保掘生遺跡	住10	弥生後期終末	方形	2	5.4	5	27	93%	D		
53	大久保掘生遺跡	住11	弥生後期終末	方形	4	7.4	7.32	54.168	99%	N		
54	大久保掘生遺跡	住20	弥生後期終末	方形	2	4.4	3.9	17.16	89%	E		
55	大久保原田遺跡	Ⅱ-住2	弥生後期後半	方形	2	7.25	4.5	32.625	62%	C		辛島2009
56	大久保明神遺跡	住38	古墳前期前半	方形	4	8.2	7.4	60.68	90%	E	ベッド状遺構に15ヶ所の掘り込み	
57	大久保明神遺跡	住45	古墳中期後半	方形	4	7.5	6.7	50.25	89%	E		
58	大久保五反畑遺跡	住7	弥生後期前半	方形	2	4.6	4.2	19.32	91%	C		
59	大久保五反畑遺跡	住12	古墳前期前半	方形	2	5.4	4.3	23.22	80%	E		
60	大久保五反畑遺跡	住25	古墳前期前半	方形	4	6	5.4	32.4	90%	E		
61	黒田久保田遺跡	住4	弥生後期後半	方形	4	5.9	4.55	26.845	77%	D		辛嶋2012
62	黒田伊龍遺跡Ⅱ	住8	弥生後期終末	方形	6	6.45	6.24	40.248	97%	E		
63	黒田下原出口遺跡	Ⅰ-住1	弥生後期終末	方形	2	5.56	4.29	23.8524	77%	D		
64	黒田下原出口遺跡	Ⅰ-住2	古墳前期前半	方形	2	5.47	4.74	25.9278	87%	E		
65	黒田下原出口遺跡	Ⅰ-住4	弥生後期終末	方形	2	5.02	4.3	21.586	86%	E		
66	黒田下原出口遺跡	Ⅰ-住5	古墳前期前半	方形	4	6.47	5.46	35.3262	84%	E		
67	黒田下原出口遺跡	Ⅰ-住6	古墳前期前半	方形	2	5.23	4.15	21.7045	79%	D		
68	黒田下原出口遺跡	Ⅰ-住7	古墳前期前半	方形	2	4.76	3.62	17.2312	76%	D		
69	黒田下原出口遺跡	Ⅰ-住9	古墳前期前半	方形	2	4.48	4.09	18.3232	91%	D		
70	黒田下原出口遺跡	Ⅱ-住5	弥生後期終末	方形	2	5.51	4.76	26.2276	86%	E		
71	黒田下原出口遺跡	Ⅱ-住6	弥生後期終末	方形	2	5.01	3.99	19.9899	80%	E		
72	黒田下原出口遺跡	Ⅱ-住9	古墳前期前半	方形	2	5.96	4.32	25.7472	72%	E		
73	黒田下原出口遺跡	Ⅱ-住10	古墳前期前半	方形	4	6.4	5.41	34.624	85%	E		
74	黒田下原出口遺跡	Ⅱ-住11	弥生後期終末	方形	2	5.33	4.2	22.386	79%	D		
75	黒田下原出口遺跡	Ⅱ-住12	弥生後期終末	方形	4	6.25	4.95	30.9375	79%	E		
76	黒田下原出口遺跡	Ⅱ-住13	弥生後期終末	方形	2	5.23	3.68	19.2464	70%	D		
77	黒田下原出口遺跡	Ⅱ-住14	弥生後期終末	方形	2	5.5	4.05	22.275	74%	D		
78	黒田下原出口遺跡	Ⅱ-住20	弥生後期終末	方形	4	6	5.65	33.9	94%	E		
79	黒田下原出口遺跡	Ⅱ-住24	古墳前期前半	方形	4	5.9	5	29.5	85%	E		
80	山ノ神遺跡	SH001	弥生後期後半	方形	2	5.1	4.1	20.91	80%	A	住居屋外排水溝あり	末永2002
81	黒添・赤木遺跡	住8	古墳中期前半	方形	2	3.85	3.2	12.32	83%	N		木下編1987
82	木ノ坪遺跡	住23	古墳前期前半	方形	2	5.4	3.7	19.98	69%	D		
83	木ノ坪遺跡	住25	古墳前期前半	方形	2	6	5.1	30.6	85%	E		
84	木ノ坪遺跡	住28	古墳前期前半	方形	4	6.45	5.8	37.41	90%	C		
85	木ノ坪遺跡	住46	弥生後期終末	方形	4	6.6	6.1	40.26	92%	E		

大庭孝夫・進村真之　2013 『延永ヤヨミ園遺跡－Ⅲ区Ⅰ－』 一般国道201号行橋インター関連関係埋蔵文化財調査報告第1集　九州歴史資料館
飛野博文　2013 『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告－9－　延永ヤヨミ園遺跡Ⅰ区の調査1』 九州歴史資料館
城門義廣編　2014 『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告－11－　延永ヤヨミ園遺跡Ⅱ区2』 九州歴史資料館
岡田諭編　2013 『延永ヤヨミ園遺跡－V-1・2・3－』 福岡県文化財調査報告第238集　九州歴史資料館
飛野博文編　2014 『延永ヤヨミ園遺跡－V－4～7－』 福岡県文化財調査報告第244集　九州歴史資料館
辛島眞治　2009 『みやこ町内遺跡群Ⅲ』 みやこ町文化財調査報告書第4集　みやこ町教育委員会
末永弥義　2002 『山ノ神遺跡』 豊津町文化財調査報告書第26集　豊津町教育委員会
辛島眞治　2000 『久保地区遺跡群Ⅱ』 勝山町文化財調査報告書第9集　勝山町教育委員会
木下修編　1987 『黒添・法正寺地区遺跡群』 苅田町文化財調査報告書第6集　苅田町教育委員会
辛島眞治　2012 『みやこ町内遺跡群Ⅵ』 みやこ町文化財調査報告書第8集　みやこ町教育委員会
長嶺正秀・末永弥義編　1985 『下稗田遺跡』 行橋市教育委員会

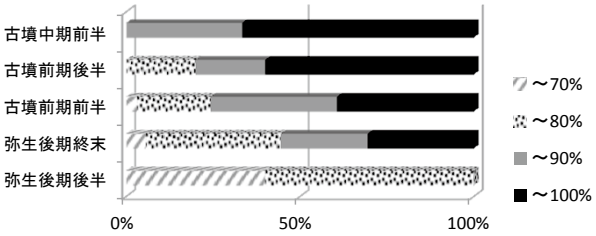
第 127 図　分析対象竪穴住居跡一覧



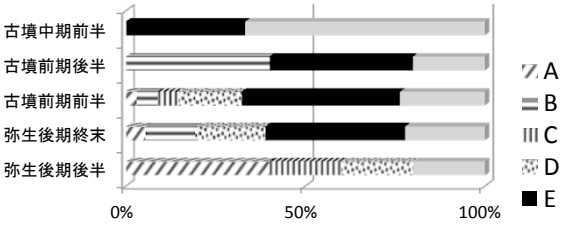
1．竪穴住居規模の推移



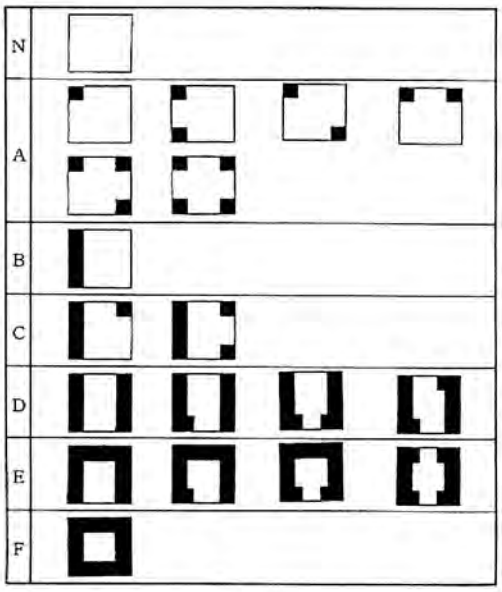
2．竪穴住居床面積の推移



3．竪穴住居長短比率

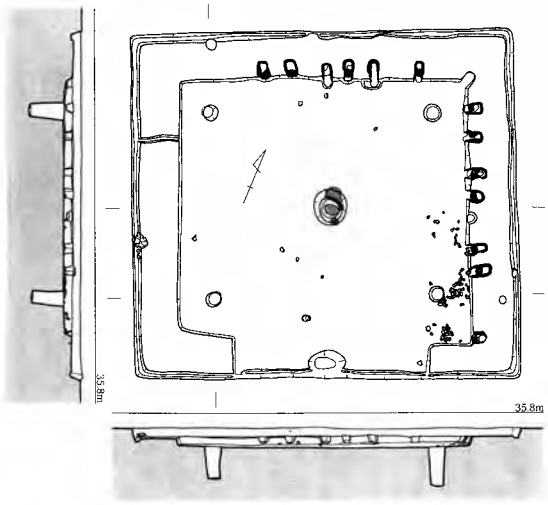


4．竪穴住居ベッド状遺構の推移

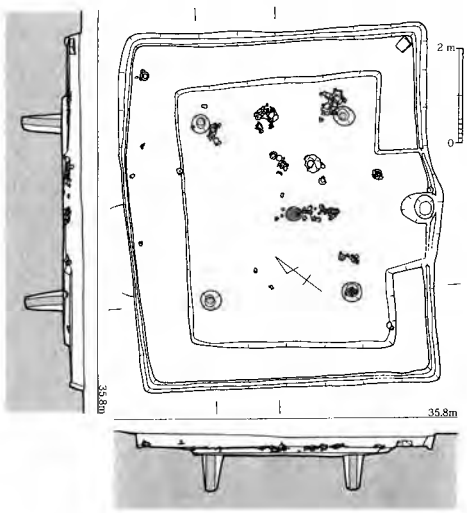


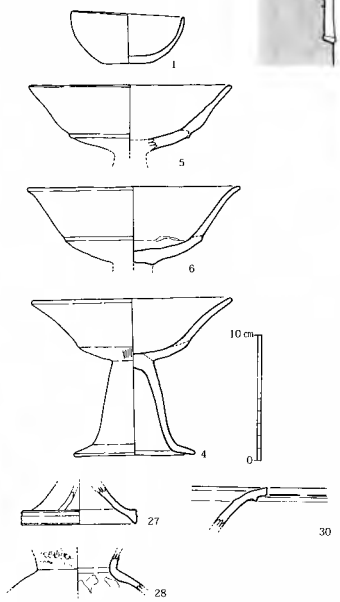
6．ベッド状遺構の分類（寺井論文より引用）

5．竪穴住居主柱穴数の推移

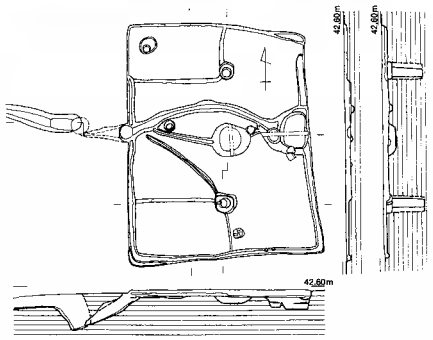


8．大久保明神遺跡38号住居（1/160）





7．大久保明神遺跡45号住居（1/160）・出土土器（1/6）



9．山ノ神遺跡SH001（1/160）

第128図　延永ヤヨミ園遺跡周辺における竪穴住居跡の変遷（1/6、1/160）

（２）竪穴住居の分析方法

本稿対象時期における北部九州の竪穴住居については、寺井誠氏による先行研究があり（寺井1995)、本地域の位置づけを明らかにするために、寺井氏の分析手法に則って行うこととしたい。

寺井氏は分析対象とする竪穴住居の条件として、「全掘もしくはそれに準ずる程度に調査され、全貌を知ることができるもの」とするが、本稿では時期や主柱穴が明確でない竪穴住居跡も参考資料として第127図の一覧表に掲載した。この第127図では寺井氏による集成に倣い、平面形・主柱穴数・法量（長軸・短軸）・面積・長短比・ベッド状遺構型式の順に表を作成した。このうち、ベッド状遺構型式については、第128図左中の寺井氏の分類によるが、簡単に説明すると、Ａ類は壁隅、Ｂ類は短辺の１辺、Ｃ類は短辺の一辺と壁隅、Ｄ類は両短辺、Ｅ類は三方、Ｆ類は四方に付設するものとし、Ｎ類はベッド状遺構のないものである。

（３）本地域における竪穴住居の分析

第127図の一覧表から、第128図にある竪穴住居跡規模の推移・面積推移・長短比、ベッド状遺構の形態推移図を作成した。これらを基に本地域の竪穴住居の分析を行いたい。

まず、竪穴住居の平面形態と床面積、長短比の時期変遷をみると、弥生時代後期後半では該当資料数は５例と少ないものの、長短比では80％以下の平面が長方形のみで、床面積では30㎡前後と小型のもののみで構成される。寺井氏は、豊前や筑豊では２本主柱の長短比の平均が80％以下を下回ることはほとんどないとするが、弥生時代後期後半の本地域では竪穴住居平面形態はより長方形を指向するということが明らかになった。

弥生時代後期終末では、竪穴住居規模が床面積25㎡前後を境に大小に２分化する。先の寺井氏によると、豊前では２本主柱では床面積30㎡を超えることはないとするが、本地域では後期終末段階で４例、古墳時代前期前半と後半で各１例ずつ30㎡を超える竪穴住居が認められ、２本主柱と４本主柱の場合の床面積の平均はほぼ同じである。寺井氏による住居規模が大きなもの－４本主柱、規模が小さなもの－２本主柱という構成ができあがるのは、今回の分析では古墳時代前期前半からと、寺井氏の分析よりも本地域は若干時期が遅れて成立し、中期前半までこの大－４本主柱、小－２本主柱という構成が続く。

また弥生時代後期終末段階の平面形態は、長短比の平均が80％を上回り、最大100％のものも出現するなど、この段階から正方形への指向が強まり、古墳時代前期前半、後半、中期前半と時期が下るに従い、より正方形への指向を強める。

次に竪穴住居ベッド状遺構ついては、まず本遺跡ではＮ類の割合が全体で４割弱とかなり高いが、(１)で先述したように上層遺構により削平された事例が多かったことによるものと考えられる。また床面積16㎡以下の小型住居のうち９/11棟が本遺跡のもので、そのうちベッド状遺構Ｎ類５例は、竪穴住居竪穴部のみ検出し、その範囲を住居跡としたことによる可能性が高いと思われる。

ベッド状遺構の型式変遷は、弥生時代後期後半ではＡ・Ｃ・Ｄ類と住居に占める面積が低いもののみ認められるが、弥生時代後期終末にＥ類が出現し、古墳時代前期前半にはＡ・Ｂ・Ｃ類は減少する一方、前期後半にはＡ類はなくなり、中期前半にはＥ・Ｎ類のみになる。このことは時期が下るに従い、ベッド状遺構が壁際での占有率を増加させるとした寺井氏の分析と同様の結果である。しかしながら寺井氏の分析時には、豊前地域では資料数が少なく、古墳時代前期後半にはベッド状

遺構がなくなる結果になっていたが、その後の資料数の増加により、古墳時代中期前半段階にも４割近く付設されている状況が今回の検討で新たに判明した。

また古墳時代中期後半と考えられるみやこ町大久保明神遺跡 21・45 号住居（第 128 図７）ではＥ類のベッド状遺構が付設されていることから、寺井氏が指摘する伝統的床面区分が本地域内陸部では古墳時代中期にまで存続することは､本地域の社会構造を考える上で非常に注目される。なお、みやこ町大久保明神遺跡 30 号住居は、出土土器から古墳時代後期後半であるが、Ｅ類のベッド状遺構が付設される。床面積約 90㎡の大型住居で主柱穴が８本存在することから、特殊な用途が考えられ、一概には比較できないものの、古墳時代後期までベッド状遺構を付設する意識が存在するということは先ほどの指摘と合わせ、本地域の特性を考える上で重要である。

本地域では、弥生時代後期終末以降、古墳時代中期までＥ類が４割近くを占め、このＥ類にベッド状遺構を付設しない一方の壁際に屋内土坑を付設するものがほとんどであることから、本地域の竪穴住居構造はＥ類＋屋内土坑が一般的であり、この屋内土坑上に梯子をかけ入り口部を構成していた事例が多かったものと考えられる（城門 2014)。

また床面積 40㎡を測る弥生時代後期終末のみやこ町黒田伊龍遺跡Ⅱ８号住居は主柱穴が６本ある。古墳時代前期前半古相のみやこ町大久保明神遺跡 38 号住居は床面積 60㎡を測る超大型竪穴住居であるが、ベッド状遺構を掘り込み、その掘り込み内部には焼土・炭化物が堆積する状況を確認した（第 128 図８)。住居内仕切り溝ではない、特殊な構造物の存在を示すものとして注目される。さらに本遺跡Ⅰ－15・16 号住居跡、みやこ町山の神遺跡 SH001 などでは住居内溝が住居外まで延びる排水溝の存在が確認されており（第 128 図９)、本地域における竪穴住居の排水構造を考える上で重要である。

以上、寺井氏の分析手法に則り検討し、寺井氏の検討結果とほぼ同様の傾向となったものの、近年の資料数の増加により、本地域では古墳時代中期までベッド状遺構を付設する事例があることが確認されたことは重要な成果である。今年度末で本遺跡報告書４冊が刊行され、当該時期の竪穴住居の事例が格段に増えることから、今後改めて検討の機会を持ちたい（大庭)。

【引用・参考文献】

寺井誠 1995「古墳出現前後の竪穴住居の変遷過程－北部九州の事例を基に－」『古文化談叢』第 34 集　九州古文化研究会

長嶺正秀 2008『瑞穂の国の成立Ⅱ－豊前地方出土品－』 苅田町教育委員会

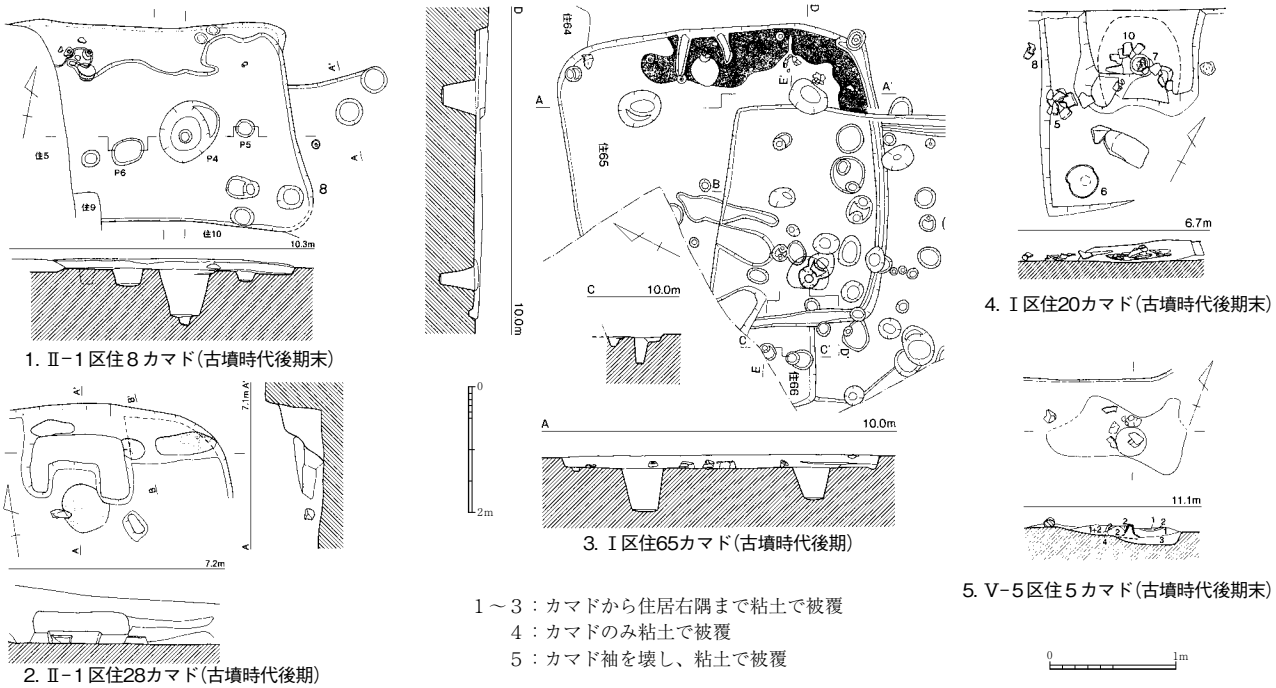
城門義廣 2014「Ⅴ－４－（２）住居跡入口の構造及び屋内土坑について」『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告－11－』九州歴史資料館

３　カマドの廃絶行為について

（１）はじめに

カマドは古来より「火」に直接的に関わるものとして竪穴住居内で最も重要な箇所であり、竪穴住居を廃絶する際には火落とし及び火移しなどの一連のカマド祭祀において、カマド封じやミニチュア土器などを用いた祭祀行為が行われたと考えられている（武田 1986)。

本遺跡におけるカマドは、集落としての最盛期にあたる６世紀後半～７世紀前半の竪穴住居に付



第 129 図　竪穴住居跡カマド廃絶行為の事例（1/60、1/120）

設され、その付設される方角は住居の北及び西がほとんどである。この検出されたカマドでは、住居廃絶時にカマドを粘土で被覆、カマド袖をほとんど破壊、支脚を抜く、カマド内に土器を意図的に埋めるなど、多種多様なカマド祭祀行為が確認できる。これらのカマド祭祀行為のそれぞれの在り方について検討するには、まずはカマドをきっちり調査し、その情報を記録することが重要であるが、多種多様な在り方を示すカマドの調査は非常に難易度が高く、容易なことではない。

その中でⅣ−Ｂ区 137 号住居跡カマドは、まず袖をほとんど壊し、その上に粘土を被覆しカマド封じ的な行為を行い、その粘土被覆を住居右隅まで行うという特徴的な事例を確認した。これまで報告された本遺跡のカマドの中にも類例を発見できたことから、以下ではこの特徴的なカマドの様相を若干検討してみたい。

（２）カマドから住居右隅まで粘土で被覆する事例について

まず 137 号住居跡カマドでは両袖とも基底部までほとんど壊し、土師器高坏を転用した支脚はそのままで、カマドから住居右隅にかけて黄白色粘土で被覆していた（第 32・33 図）。被覆行為は土層観察で住居埋土などの間層は確認できなかったことから一度で行われたと思われる。137 号住居跡カマドの廃絶行為としては、袖を壊す、粘土で被覆という２回の廃絶行為が確認できる。このような廃絶行為は、今年度報告の７世紀前半のⅢ−Ａ・Ｂ区 23 号住居跡カマド、古墳時代後期末のⅡ−１区８号住居跡カマド（第 129 図１）でも確認される。

またカマドから住居右隅まで粘土で被覆するのは同じであるが、袖を基底部までは壊さずある程度の高さを残すものに、古墳後期末の当区 134 号住居跡カマド（第 29 図）、古墳時代後期のⅡ−１区 28 号住居跡カマド（第 129 図２）、Ⅰ区 65 号住居跡カマド（第 129 図３）が存在する。

以上のことから、カマド～住居右隅まで粘土で被覆する行為は、袖の破壊度及び支脚や土器などの遺物も粘土内に包含するかという細かな違いはあるが、古墳時代後期後半～７世紀前半に一定程

度存在するものの、古墳時代後期の竪穴住居数からすると１％に満たない割合であることから、特殊な事例であることがわかる。一方、カマドのみを粘土で被覆する事例は、古墳後期後半の当区139号カマド（第36図）、古墳後期末のⅠ区20号住居カマド（第129図４）、Ⅴ−５区５号住居跡カマド（第129図５）など一定程度の割合で確認されており、最終的にカマドを粘土で被覆する行為はある程度普遍化した存在であったと推測される。

では137号住居跡のように、カマドから住居右隅まで粘土で被覆する行為を行うかということについては、カマド右側がカマドにとって重要な空間を構成していたからこそ、粘土で被覆したという視点で考えるとこの行為の一様相が明らかにできると思われる。

古墳後期後半の当区140号カマド（第37図）やⅠ区45号住居跡カマドが代表例であるが、カマド右側で甑や甕といったカマドで使用した土器が発見されることが多く、カマド右側がカマドで使用する土器や薪の保管場所など、カマドを使う上での空間であったと推測される。このことは、当区137号住居跡住居南西隅から甑や甕などの土器がまとまって出土しており（第32図）、カマド右側を粘土で被覆したためにカマド右側の位置より移動させたとも考えられる。

このことから、カマド右側がカマドを使うために必要不可欠な空間であったと考えられ、カマド右側まで粘土で被覆する行為が生まれたと推測される。なお、この事例は非常に少ないことから、食中毒など食に関わることなど特殊な要因に伴って行われた行為の可能性を指摘しておきたい。

（３）おわりに

カマドの調査は難易度が高い上に、袖とほぼ同じ粘土でその上を被覆する本事例はさらに困難な調査であること、後から考えるとカマド内外の粘土被覆下に有機質などの情報が残されていた可能性もあるなど、カマド自体の調査を改めて痛感させられた。この事例は、当時のカマドに対する思いのみならず、カマドと密接に関係する空間の封じこめという、竪穴住居内部の空間使用の一部も明らかになったといえよう。

また近年報告書が刊行された行橋市長井丸尾遺跡竪穴住居１は古墳時代後期、みやこ町黒田八田ヶ坪遺跡11号住居跡は７世紀前半の､オンドル状煙道を持つカマドであることが確認されている。

今後本遺跡を含む行橋市･みやこ町の過年度調査の報告書が続々刊行される計画であることから、本例のようなカマドの事例も増加すると考えられる。今後の調査の進展に期待したい（大庭）。

【引用・参考文献】

武田光正 1986「Ａ．古墳時代後期の竪穴住居と遺物に関する問題」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告８』福岡県教育委員会

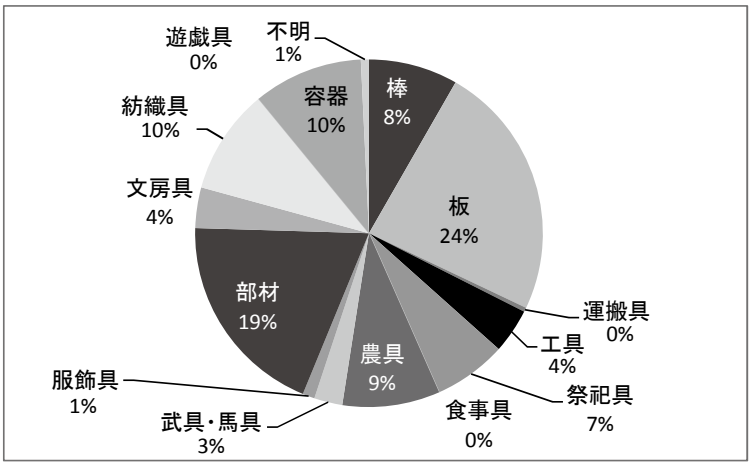
４　木製品について

Ⅳ−Ｃ区では土坑や包含層より多数の木製品が出土した。出土木製品を種類別に示したものが第130図である。器種不明品である板状器具材が最も多いが、次に部材･容器類･紡織具･農具と続く。しかしながら、遺構外出土の加工痕がほとんど見えない板状器具材は実測しておらず、細片になっていた遺物等もあり、どの程度実際の出土比を示しているものなのか不明である。時期は包含層出土のものは弥生時代後期～古墳時代後期・古代・中世のものが含まれる。個別では遺構出土のもの

以外は不明であるが、形態に特徴がある遺物を見ると、古墳時代後期～古代に属するものが多い傾向にある。

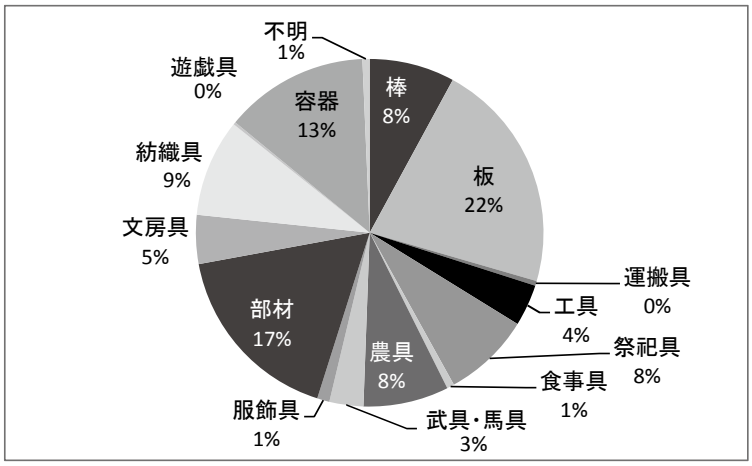
個別に見ていくと、運搬具は軛のみで、工具は砧・木槌・羽子板状木製品などが出土している。砧はいずれも円筒形のもので、１点は古墳時代後期に属するものである。祭祀具は形代・燃えさしが出土しており、形代に関しては人・馬・舟・刀など多種類が認められる。人・馬・鳥形はいずれも薄い板状を呈しており、古代以降に属するものと考えられる。農具は鍬や泥除けと考えられる未製品・ねずみ返し・大足などが出土しており、稲作関係資料が多く見つかっている。平鍬のうち１点は先端に鉄製鍬先を装着した痕跡が残るもので､古墳時代後期以降に属するものであろう。武器･馬具類は盾・鞍・鐙などが出土している。鞍は横幅に対して、縦幅が短い鞍が出土しており、形態的には古墳時代に属するものである。実際に１点は古墳時代後期の土坑から出土している。また、他の１点は黒漆が塗布された優品であり､これも古墳時代後期～飛鳥時代頃に属するものであろう。鐙は細長い刳りこみを持ち、踏み込み部には棒を差し込んでいたものと考えられ、古墳時代後期以降に属するものか。Ⅲ−Ｃ区と共に鞍と鐙が出土しており、また、Ⅲ−Ｃ区で鐙の未製品も出土していることから、当地で生産を行っていたものと考えられる。服飾具は衣笠・下駄が出土している。衣笠は時期不明であるが、古墳時代の首長の存在を示唆する遺物といえる。下駄は、形態的に古墳時代後期～古代の所産と考えられる。部材は９世紀の１号井戸から出土した井戸枠がほとんどであり、その他には、杭・梯子などがわずかに見られる。文房具は木簡の他、付札と考えられる荷札が出土している。紡織具は編錘がほとんどを占め、糸巻きが１点出土している。編錘は他にも小片が

Ⅳ区	N=267
棒	22
板	63
運搬具	1
工具	11
祭祀具	18
食事具	0
農具	24
武具馬具	7
服飾具	3
部材	51
文房具	12
紡織具	26
遊戯具	0
容器	27
不明	2



第 130 図　Ⅳ−Ｃ区出土木製品割合

Ⅲ･Ⅳ区	N=441
棒	35
板	95
運搬具	2
工具	17
祭祀具	36
食事具	3
農具	35
武具馬具	14
服飾具	5
部材	76
文房具	20
紡織具	40
遊戯具	1
容器	59
不明	3



第 131 図　Ⅲ・Ⅳ区出土木製品割合

出土しており、本来はより多くの出土品があったものと考えられる。形態的にはリボン形のものとダンベル形、木柱に刻みを入れたタイプがあり、リボン形のものはさらに独楽をつなぎ合わせた形態の太い円筒状のものと細身のものに分かれる。１ヶ所に孔をあけるタイプのものは出土しておらず、このような形態差が何に起因するものなのかは明らかではない。ただ、後述する京築地区内の他の時期を含む、他遺跡でも認められず、地域的な特徴である可能性もある。容器類は曲げ物板が多く、槽・盤が各１点見られる。地域内では古墳時代まで刳物が多いという指摘もあり、曲げ物類に関しては古代以降の所産である可能性があり、実際９世紀を主体とする１号井戸から１点出土している。板状器具材の中に、容器類の板が含まれている可能性があり、数はこれより多くなると考えられる。棒状器具材の中には、農工具の柄などが含まれる可能性がある。

Ⅲ・Ⅳ区共に数量を示したものが第 131 図である。Ⅲ−Ｃ区の木製品も合わせたものだがほとんど傾向は変わらないと言える。東九州自動車道の建設に係る調査を行ったⅠ・Ⅱ区でも中世の部材・井戸枠・桶ならびに古代の斎串などが出土しているが、点数はⅢ・Ⅳ区に比べて少なくこの傾向が大きく変わることはないと考えられる。

以上のように、多くの種類の木製品が出土しているが、時期がわかるものが少なく、時期ごとの出土量比や変遷は不明である。そこで他に京築地区内で木製品がある程度まとまって出土する遺跡を概観し、本遺跡の特徴をつかみたい。行橋市下稗田遺跡では弥生時代前期の木製品が出土しており、農具や案・矢板・杭などがある。築上町安武深田遺跡では奈良時代の編錘、弥生時代の杓子などが出土し、同町の宇留津川角遺跡では５世紀代に属する農具・部材が 700 点以上出土している。みやこ町池田遺跡では古代の築堤遺構内から杭や木樋が出土し、同町末江下前田遺跡では５世紀中頃の溝から木製品が出土しており「水辺の祭祀」の可能性が指摘されている。上毛町ハカノ本遺跡では 13 世紀後半～ 14 世紀前半の溝から農具や建築部材が出土している。同町安雲山田遺跡では６世紀末～７世紀初頭の農具や建築部材が出土している。苅田町馬場長町遺跡では８世紀末～９世紀初頭の建築部材が出土し、同町雨窪遺跡群では８世紀後半～９世紀前半と考えられる部材が出土している。

京築地区内の木製品を概観すると弥生時代前期・古墳時代中期の出土例が多く、古墳時代後期後半～古代の事例もいくつか認められる。基本的に形態は、他遺跡の古墳時代中期～古代例と本遺跡例で大きく差異はなく、農具や部材、容器類、編錘が出土していることも同様である。ただ、斎串や形代などの祭祀関連遺物や鞍・鐙といった武具・馬具関連遺物は他の遺跡ではほとんど認められず、黒漆を塗布した鞍などの精製品も同様に認められない。これらは、古墳時代前期や古代において、導水施設による祭祀を行っていた首長、「津」の管理を行っていた郡関連官衙の影響によるものと考えられ、本遺跡の特徴を木製品でも示していると言える。今後、時期の分かる資料が増えた段階で再検討が必要だろう（城門）。

【参考文献】

岩瀬透編 2012『蔀屋北遺跡Ⅱ』大阪府埋蔵文化財調査報告 2011－1　大阪府教育委員会

木下修・水ノ江和同編 1991『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告４』福岡県教育委員会

木村達美・井上信隆編 2007『みやこ町内遺跡群Ⅰ』みやこ町文化財調査報告書第２集　みやこ町教育委員会

木村達美編 2008『みやこ町内遺跡群Ⅱ』みやこ町文化財調査報告書第３集　みやこ町教育委員会

佐藤浩司 2006「豊前地域における弥生・古墳時代の木製品」『行橋市史 資料編』pp. 831−871, 行橋市史編纂委員会

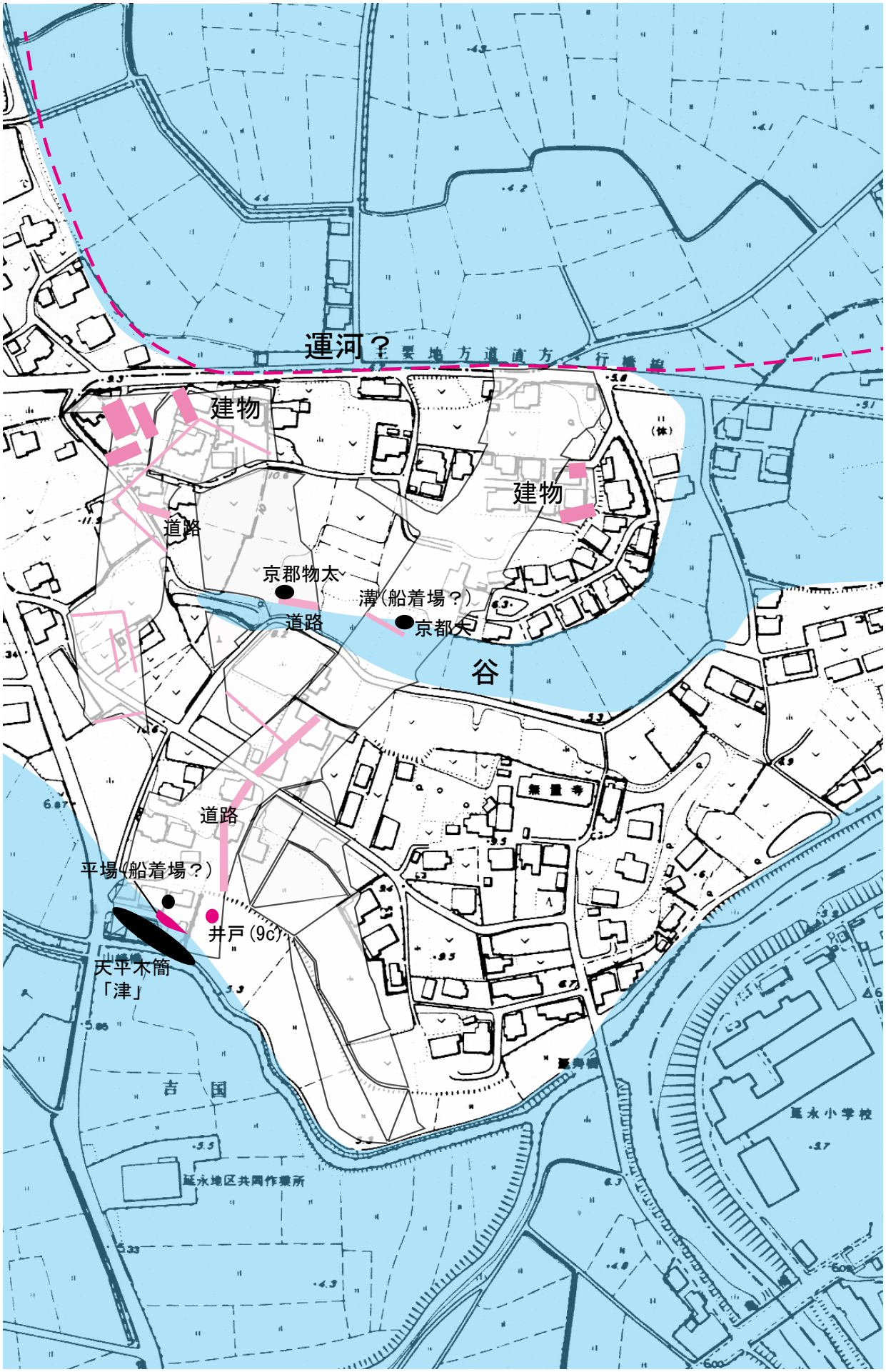
秦憲二編 2013『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告４』九州歴史資料館
秦憲二編 2013『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告７』九州歴史資料館
飛野博文編 2004『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告１』福岡県教育委員会
長嶺正秀・末永弥義編 1985『下稗田遺跡』行橋市文化財調査報告書第 17 集　行橋市教育委員会
細川修平編 2014『蛭子田遺跡２』滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会
本村充保 2006「遺跡出土下駄の全国集成に基づく編年および地域性の抽出に関する基礎的研究」『橿原考古学研究所紀要 考古學論攷』29：pp. 1－95, 奈良県立橿原考古学研究所
本村充保・高橋敦 2009「遺跡出土下駄に関する製作技法および使用樹種に関する基礎的研究」『橿原考古学研究所紀要 考古學論攷』32：pp. 53－83, 奈良県立橿原考古学研究所
山田昌久編 2003『考古資料大観８ 木・繊維製品』小学館
山田良三 1994「古代の木製馬鞍」『橿原考古学研究所論集第十二』（橿原考古学研究所編）pp. 35－59, 吉川弘文館
山本輝生編 2001『日奈古・宇留津周辺の遺跡と岩丸・福間の遺跡』椎田町文化財調査報告書第 11 集　椎田町教育委員会

５ 延永ヤヨミ園遺跡における津の考古学的状況

本調査区では包含層からであるが「津」と記された墨書土器が出土し、『類聚三代格』に記述のある「草野津（かやののつ）」である可能性が高いことがわかった。これまでも出土木簡などによって本遺跡付近に「草野津」が存在したことは指摘されており（酒井・松川 2010）、実際に「津」という文字が出土したことで、裏付ける形となったと言える。文献史学上の検討については、６で記述することから、ここでは、考古学的に確認できる「津」の状況について検討する。

延永ヤヨミ園遺跡で検出された古代に属する遺構は第 132 図の通りである。遺跡北西端（Ⅴ－２・Ⅱ－２区）ならびに北東端（Ⅲ－ＡＢ区）では７世紀後半～末頃の建物群が検出されており、北西では建物の軸から２時期あることが想定されている。いずれも側柱建物である。遺跡中央の谷部から西側に向かって（Ⅱ－１区）、また谷部と南側の低地部をつなぐ形で（Ⅳ－Ａ・Ｂ区）道路状遺構が検出されている。７世紀末～８世紀には確実に機能しており、一部 10 世紀まで存続したと考えられる。中央谷部（Ⅱ－１・Ⅲ－Ｃ区）ならびに南側低地部（Ⅳ－Ｃ区）で井戸が検出され、中央谷部の井戸からは「京都大」、「京郡物太」の墨書土器ならびに木簡、馬骨等が検出されている。時期は７世紀後半～８世紀代のものが多く、南側では、９世紀を主体とするものが検出されている。丘陵西側では溝状遺構が検出されており、道路状遺構と直行する溝やコ字形を呈するものなど、区画と考えられる溝も検出されているが、内部に建物等は見つかっていない。中央谷部では、杭が多数打ち込まれた状態で検出された船着場の可能性もある溝１条（Ⅲ－Ｃ区）も検出され、７～８世紀に属する。南側低地部（Ⅳ－Ｃ区）では包含層から「天平六年」銘木簡や「津」の墨書土器が出土し、その北側では比高差 60㎝程の低地部に突き出す平場が検出されており、これも船着場の可能性がある。遺跡北西に位置する延永水取遺跡では、丘陵裾部で同じく古代に属する運河状の溝が検出されており、椿市廃寺に向かう交通路と推測されている。本遺跡北側でもそれに続く運河状の遺構が存在していた可能性があるが試掘調査等では確認できなかった。

港や運河状の遺構は、古くは長崎県壱岐市原の辻遺跡で弥生時代中期の貼石をもつ船着場遺構が



第 132 図　古代遺構概略配置図（1/2,500）

	文字	遺跡名	所在地	備考
1	湊津	前稗沢遺跡	岩手県北上市	
2	□(津)	秋田城跡	秋田県秋田市	
3	大津郷	払田柵跡	秋田県大仙市	
4	津	沼田遺跡	山形県酒田市	
5	□船津運十人	古志田東遺跡	山形県米沢市	木簡
6	津長	荒田目条里遺跡	福島県いわき市	木簡
7	川津	宿宮前遺跡	埼玉県さいたま市	
8	津	蔵ノ坪遺跡	新潟県胎内市	
9	津	四十石遺跡	新潟県新潟市	
10	池津	中組遺跡	新潟県燕市	
11	津	戸水C遺跡	石川県金沢市	
12	津司	畝田寺中遺跡	石川県金沢市	
13	津	畝田寺中遺跡	石川県金沢市	
14	津三	中保B遺跡	富山県高岡市	
15	船津	村国遺跡	福井県越前市	
16	(津・湊)	三の宮遺跡	長野県松本市	
17	□(津)	坂尻遺跡	静岡県袋井市	
18	嶋津	坂尻遺跡	静岡県袋井市	
19	津	伊場遺跡	静岡県浜松市	
20	□(志)津	永田遺跡	滋賀県高島市	
21	廣津	鴨遺跡	滋賀県高島市	
22	廣津弥	鴨遺跡	滋賀県高島市	
23	太津	柚井遺跡	三重県桑名市	
24	中津家	長曽根遺跡	大阪府堺市	
25	馬津	良田平田遺跡	鳥取県鳥取市	
26	□津	出雲国庁	島根県松江市	
27	閉津	宝満山遺跡	福岡県太宰府市	刻書
28	津□	駄の原遺跡	熊本県山鹿市	地名か
29	津	延永ヤヨミ園遺跡	福岡県行橋市	草野津

第 14 表 「津」銘資料出土一覧

検出されているものの、古代においてもそれほど大規模な埠頭は例がない。本遺跡と同様「津」字墨書土器が出土している遺跡（第 14 表）を見ても、古代の港遺構は河川の開削により船溜りを作ったり、平坦面を作ったり、係留用の杭を敷設したような簡単な構造のものが普遍的であったと考えられる（船着場遺構に関しては『延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ区Ⅱ』参照）。

船着場遺構以外の要素を加味した上での港湾遺跡の認定条件として井上尚明氏（井上 2013）は、①埠頭遺構が存在する、②船が航行、停泊する水域が存在する、③監理・物資保管などの施設が存在する、という３点を挙げており、これに港湾遺跡と関連する遺物の出土をもって補強の材料とするとしている。また、港湾遺構を集成する過程で、①港湾遺跡関連文字資料、②河川や低地から出土する祭祀遺物、③運搬具としての俵の製作道具である木錘（網錘）の出土という共通点が認められることを指摘している。根津明義氏（根津 2005）は港湾遺跡と認識する際の指標を示しており、上記に含まれないところでは、⑤乗降場と考えうる硬化面や、これに該当する施設が伴うこと、⑦船またはその道具類が検出されること、⑧船または船道具を収蔵する施設や、あるいは船を修繕するドックなどが近隣に所在すること、⑪倉庫群や道路遺構、その他木簡をはじめとする文字資料など、船着場との関連が考えられる検出物や蓋然性との総合的機能論から、当該遺構を船着場と判断することが出来ること。などを挙げている。

このような条件において延永ヤヨミ園遺跡で検出された遺構・遺物がどのような状況であるかを検討したい。まず、埠頭遺構に関しては先に述べたように、明確ではないながらもⅢ−C 区の中央谷部で杭の立てられた溝、Ⅳ−C 区で平坦面が認められる。また、船の航行する水域に関しては、中央谷部では珪藻分析によってジメジメとした湿地性の環境が復元されており、上層では汽水性の珪藻も確認されている。丘陵南側に関しては、付近を山崎川が流れており、Ⅳ−C 区南側の試掘調査で湿地性の土壌が確認されている。また丘陵北側には場所は不明確ながらも運河の存在が予想されることから、第 132 図のように中央谷部・丘陵南側共に船でアクセスできる環境であったと推測される。管理施設や保管施設については、官衙的な建物が丘陵北西側のⅤ−１・２区で確認されているものの、倉庫群に関しては未検出である。谷同士をつなぐように道路状遺構が検出されている

ことから、その周辺に存在していたものと考えられるが、調査区外に延びている可能性も否定できない。

遺物に関しては、古墳時代後期に属するものであるが準構造船の竪板が中央谷部で出土している。そのため、少なくとも６世紀代までは船でアクセスできる環境であったことは間違いない。文字資料では「津」の墨書土器が検出されており、また郡符木簡の存在から、郡の役所的な機能があったことが示されている。祭祀遺物については、中央谷部および南側低地部で斎串のほか人形・馬形・鳥形・舟形などの形代が検出されており、Ⅱ－１区で井戸内から出土した馬骨も祭祀性が示唆されている。蓆を編む編錘に関しては、図化した中でも 30 点を越える点数が出土しており、米に関する物資を運搬していた可能性が指摘できる。

以上のように、延永ヤヨミ園遺跡では港に関連する考古学的物質がある程度まとまって検出されており、後に述べる文献史学の研究成果とあわせて考えると、『類聚三代格』に記述のある「草野津」であることは間違いないものと考えられる。ただし、「公私の船」が「意に任せて往還」していたと記述されることから、港に欠かせない倉庫が多く必要と想定され、今後周辺の調査を含めて検討が必要である。また、「草野津」は日常的な管理主体が郡としても、根本的には豊前国の国津と考えられることから、官道からアクセス可能であったことは間違いなく、みやこ町付近から刈田駅に抜ける官道と共に、津にいたる交通網の検証も必要であろう（城門）。

【参考文献】

安楽勉 2001「原の辻遺跡と港」『考古学ジャーナル』474：pp.7－10, ニュー・サイエンス社

飯坂盛泰編 2002『蔵ノ坪遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 115 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

伊藤雅文編 2005『金沢市畝田西遺跡群Ⅵ』石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター

井上尚明 2012『古代東国社会の成立と展開』

井上尚明 2013「古代の運河と港湾遺跡」『古代交通研究会第 17 回大会資料集　古代の運河』pp.47－58, 古代交通研究会

岡寺良編 2002『宝満山遺跡群　浦ノ田遺跡Ⅲ』福岡県文化財調査報告書第 169 集　福岡県教育委員会

熊本県教育委員会 1983『上鶴頭遺跡』熊本県文化財調査報告第 63 集

酒井芳司・松川博一 2010「福岡・延永ヤヨミ園遺跡」『木簡研究』32：pp.110－113, 木簡学会

舘野和己編 2002『飯塚遺跡』大分県国東町文化財調査報告書第 26 集　国東町教育委員会

飛野博文・小池史哲編 2001『農林漁業用揮発油税財源身替農免農道関係埋蔵文化財調査報告』福岡県文化財調査報告書第 159 集　福岡県教育委員会

飛野博文編 2014『延永ヤヨミ園遺跡Ⅴ－４～７区』福岡県文化財調査報告書第 244 集　九州歴史資料館

長嶺正秀編 2010『苅田町歴史資料館特別展　豊前地方の遺宝　律令時代と豊前国』苅田町教育委員会

根津明義 2005「内陸の水上交通にかかる考古学的一視点 –主に船着場遺構への認識をめぐって–」『石川県埋蔵文化財情報』13：pp.37－39, 財団法人石川県埋蔵文化財センター

山本崇・高尾浩司 2014「鳥取県良田平田遺跡の出土文字資料」『奈良文化財研究所紀要 2014』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

黒板勝美編 1974『新訂増補国史大系　類聚三代格』吉川弘文館

6　木簡・墨書土器からみた延永ヤヨミ園遺跡

ここでは木簡・墨書土器をはじめとする出土文字資料を中心として、文献史料からみた延永ヤヨミ園遺跡について述べることにする。本遺跡は、京都平野の西寄り、東に開いた馬蹄形をなす丘陵上に位置する弥生時代後期から古墳時代の大規模な集落遺跡、古代の官衙（役所）関連遺跡であり、杭が多数打ち込まれた船着場と推測される溝や谷に向かう道路状遺構など、遺構からも港湾と関係する施設である可能性が十分に考えられている。

加えて本遺跡では、木簡や墨書土器が出土し、その性格を明らかにする大きな手がかりを得た。179－1は京都郡不知山里（諫山郷）から納められた税物の荷札である。不知山里の下に人名があるかもしれないが、判読できない。裏面の物品名は、数量の単位が「束･把」ではなく、「石（斛）」であることから、頴稲（穂首狩りした稲の穂先）ではなく、穀とみられるので、籾と考えておく。この税目は何であろうか。『延喜式』主計上２諸国調には、正丁１人の調として米６斗とあり、同じく主計上３諸国庸には、正丁（21歳から60歳までの成人男子）１人の庸として米３斗とある。１斛＝10斗＝100升なので、これらを数人分組み合わせても、ちょうど１斛にはならない。したがって、調や庸の米ではないとみられる。

『令集解』田令１田長条の古記が引く慶雲３年（706）９月10日（『類聚三代格』では20日付）格から、田１町（10段）の租稲は15束で、田令３口分条から男が受給する口分田は２段であるから、男が納める租稲は３束となる。田長条の義解などから１束の稲をつくと米５升を得るとされるので、男１人分の租稲を穀に換算すると、米１斗５升となる。口分条から女の受田額は男の３分の２なので、この租稲を穀につくと、米１升となる。男女数名分が納めた租稲をついて舂米としたのであれば、１斛という数量を得ることはできる。田令２田租条の古記・穴記・朱説が引く貞説などによると、京に運ぶ舂米は、①あらかじめ田主（口分田を授けられた男女）が租稲をついた上で役所に納める、②納入された後に役所が田主に返して、つかせて納めさせる、③今行事として納められた後に役所が功賃を支給して、つかせて運ぶという方法がとられた。したがって、この荷札は①または②の方法で不知山里から数人分の舂米をまとめて納める際に付けられたものであろう。

ただし、神護景雲２年（768）７月28日以前には、西海道の五位国司と国司を兼帯する諸司の官人（在京）の位禄と季禄料の舂米は、西海道から運び出して京に輸送することが禁じられていた（『類聚三代格』巻６、大同４年〔809〕正月26日付太政官符）。したがって、この米は不知山里から京都郡に納められた後、西海道内の各国司の元へ運ばれて行ったのだろう。または後にみるように、豊前草野津（かやのの つ）から勝手に西海道外へ船で運び出された可能性もある。

いずれにしても、この荷札は、郡名が書かれていないことから、京都郡内での輸送を前提としたものであり、米が京都郡から別の場所に運ばれる際に外されて廃棄されたものとみられる。そのことは荷札が出土した本遺跡が京都郡衙の関連施設であることを示唆する。179－3の呪符が出土していることからも、本遺跡が官衙的施設である可能性が高い。

118－3は荷札の可能性があるが、９斗という税物の数量からは、調・庸の米であるか、租をついた舂米であるかは判断しがたい。「戸」は川部嶋山が所属する戸を意味し、上に戸主の名前があったのだろう。天平６年（734）10月18日の紀年銘を持つことは重要で、本遺跡がこの頃に官衙として機能していたことがわかる。

この他、８世紀後半の京都郡大領（長官）を意味する「京都大」銘墨書土器（土師器）、８世紀前半の京都郡物部大領を意味する「京郡物太〔大〕」銘墨書土器（須恵器）が出土した。隣接する企救郡大領に物部臣今継（９世紀前半の北九州市長野角屋敷遺跡出土木簡[1]）、『日本書紀』雄略天皇 18 年８月戊申条に筑紫聞物部大斧手といった人物が知られ、この地域の首長として物部氏がいたことも知られている。以上より、この墨書土器からも本遺跡が京都郡衙関連施設であり、大領が執務することもありうる施設であることがわかる。

118－４は、京都郡が発給した郡符であり、「少長」は京都郡鎮の指揮官である小長とみられる。筑前・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後の西海道６国においては、軍団兵士が上番して大宰府常備軍の兵士となっており、この差遣をつうじて大宰府は管轄下諸国に対して兵力を動員する権限を掌握した。大宰少弐藤原広嗣も乱を起こす際に、この権限を最大限に利用している[2]。登美・板櫃・京都郡の三鎮は本来、制度的に大宰府の管轄下にあった軍事拠点とみられ、このため大宰少弐であった広嗣は豊前三鎮を指揮下に置くことができた[3]。この他、三鎮は軍団の所在地や防人の駐屯地といった説、さらには本来、大宰府ではなく、西海道節度使の軍事拠点であり、節度使が天平６年（734）４月 21 日に停止された後に、その職務が大宰府に引き継がれため、鎮は大宰府の支配下に置かれたという見解もある[4]。いずれの説にしても、符の宛所が鎮であった場合は、京都郡の権限を越えた案件の可能性があり、発給主体は大宰府か豊前国であろう。ただ、木簡からは符の宛所である郡首某と少長との関係が明確に判読できないため、宛所が鎮であったとは断定できない。

さらに、郡符木簡の多くが宛所から召喚された人とともに移動し、発給主体に戻って廃棄されることをふまえると[5]、本遺跡が京都郡関連施設とみられることから考えて、118－４は、京都郡が発給した郡符とみるのが穏当であろう。その場合、郡首某に命令された内容は、少長に関わる事項であったと考える。なお、広嗣の乱の際、京都郡鎮の指揮官が鎮長のみだったのが、118－４にみえるように、京都郡鎮にも大長・小長が置かれた時期があった。その時期は確定しがたいが、あえて言えば、鎮が充実する時期は、節度使体制下であろうから、天平６年以前であったと考えておく。

そして本遺跡付近には、『類聚三代格』巻 16、延暦 15 年（796）11 月 21 日付太政官符が引く天平 18 年（746）７月 21 日付太政官符で、豊前国埼津・豊後坂門津とともに「官人・百姓・商旅之徒」が意に任せて往還し、ほしいままに国物を運び出すことを禁止した豊前草野津があったと推定されて来た。遺跡の東北東約 1.2kmには草野の地名が残る（現在の草野は奈良時代には海中であった）。

景行天皇の巡幸説話でも、天皇は周芳（すおう）の娑麼（さば）（現在の山口県防府市佐波）から船で長峡（ながおのあがた）県（福岡県行橋市長尾）に入り、この地を京（みやこ）と名付けたと伝える（『日本書紀』景行天皇 12 年９月戊辰条。京都郡の地名起源説話）。景行天皇の巡幸説話は、661 ～３年の百済救援戦争における斉明天皇の筑紫行幸に構想を得たとされ、そのルートは７世紀半ば過ぎの状況を反映している[6]。また九州でもっとも早い４世紀代から畿内型古墳の前方後円墳（京都郡苅田町・石塚山古墳）が築かれたように、豊前地域は古くから近畿と九州を結ぶ海上交通において、九州の玄関口だった。このように本遺跡が所在する京都郡は、７世紀以前から海上交通の拠点として機能していたのである。118－３に川部嶋山がみえるので、漁獵や航海技術を生業として来た川部が京都郡周辺にもいたことがわかる。７世紀以前から８世紀以降の草野津の時期にかけて、川部の一族は京都郡地域の水上交通や港湾施設の活動を支えていたのだろう。

郡符木簡を出土した遺跡として、静岡県浜松市伊場遺跡、滋賀県野洲市西河原遺跡、福島県いわ

き市荒田目条里遺跡といった、港湾などの郡家関連施設がみられることは注目される[7]。これは本遺跡が草野津であり、津が日常的には京都郡の管轄下に置かれていた蓋然性を高める。一般に地域の港湾施設は、地域の有力者の支配拠点でもあった。石川県金沢市畝田・寺中遺跡（加賀郡管轄の津司関連遺跡）や荒田目条里遺跡（磐城郡司の拠点である津関連遺跡）の事例から、地域首長の地域支配拠点は河川と結び付き、その河川を活用するために津を設定したことが知られている[8]。そして、９世紀前半の土師器である「津」銘墨書土器の本遺跡からの出土が確認されたことは、延永ヤヨミ園遺跡が草野津であることを決定付けた。発見された掘立柱建物６棟は７世紀後半～末のもので、船着場とみられる溝は７～８世紀のものである。118－３木簡から天平６年（734）前後に本遺跡が官衙として活動していたことが知られる。８世紀以降の建物は調査区外にあるのだろう。

文献史料によっても『日本書紀』の景行天皇の巡幸説話から７世紀後半より京都郡は、九州と近畿地方を結ぶ瀬戸内海の海上交通の拠点であったことが知られ、また『類聚三代格』から草野津は少なくとも天平 18 年（746）から延暦 15 年（796）まで機能していたことが確実である。すなわち草野津はおそらく前身から含めて港湾施設として、７世紀後半から８世紀末まで継続して稼働していたとみてよい。「津」銘墨書土器はその直後に続く時期の資料であり、この施設が９世紀以降も含めて草野津であったとする根拠として差支えない。

先の『類聚三代格』巻 16、延暦 15 年 11 月 21 日付太政官符にあるように、過所（通行証）は大宰府が発行し、これによって大宰府が西海道から物資を無断で運び出すことを規制した。実際の豊前・豊後三津での確認は、現地の官衙が行うことになる。鈴鹿・不破・愛発の三関や長門関は、関の所在地の国司が管掌していた[9]。本遺跡は豊前国府跡（京都郡みやこ町豊津）とも近い。したがって、三関等に準じれば草野津を管轄する現地の官衙は豊前国司であったろう。ただし、本遺跡出土の木簡や墨書土器の検討成果をふまえると、草野津の日常的な運営は、京都郡衙によって、地域首長の港湾施設と一体的に行われていた可能性が高いものと考えるのである（酒井）。

【注】

(1) 前田義人「福岡・上長野 A 遺跡」（『木簡研究』20、1998 年）214 ～ 5 頁

(2) 松川博一「大宰府軍制の特質と展開―大宰府常備軍を中心に―」（『九州歴史資料館研究論集』37、2012 年）41 頁

(3) 長洋一「広嗣の乱と鎮の所在地」（『九州史学』79、1984 年）3 頁

(4) 北條秀樹「初期大宰府軍制と防人」（『日本古代国家の地方支配』吉川弘文館、2000 年）185 ～ 9 頁

(5) 平川南「郡符木簡」（『古代地方木簡の研究』吉川弘文館、2003 年）190 ～ 1 ・196 頁

(6) 津田左右吉「クマソ征討の物語」（『日本古典の研究　上』1948 年）177 頁、永山修一「南九州の古代交通」（『古代交通研究』12、2003 年）24・26 頁

(7) 注 4 と同じ

(8) 平川南「古代における地域支配と河川」（『律令国郡里制の実像　下』吉川弘文館、2014 年）248 ～ 9 頁

(9) 森哲也「下関の成立」（下関市市史編集委員会編『下関市史・原始―中世』下関市、2008 年）279 頁

7　出土木製品の樹種同定

（1）はじめに

延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ−Ｃ区の調査では大量の木製品が出土している。本稿ではこれら木器の樹種同定の結果と器種による用材傾向について報告する。

延永ヤヨミ園遺跡は福岡県行橋市延永・吉国に位置する弥生時代後期から古墳時代・古代・中世にかけての集落跡である。遺跡は低丘陵上の全面に展開し関連遺構は谷地にまで広がっており、弥生時代末〜古墳時代を中心とする集落としては県下でも有数の規模をもつ遺跡である。出土遺物は、弥生時代終末〜古墳時代初頭、古墳時代後期、古代、中世の土器などが多数出土しており、木製品では容器・農具・工具・紡織具などの他に「戸川マ嶋山　九斗　天平六年十月十八日」と人名と日付が記された木簡などが出土している。また、隣接するⅢ−Ｃ区からは古墳時代後期の大型導水施設や奈良時代の「津」の文字が書かれた墨書土器などが出土しており重要性が指摘されている。

遺跡内の調査区はⅠ〜Ⅴ区にわかれ全体でおよそ45,000㎡の広範囲におよんでいる。本稿で扱うⅣ−Ｃ区の他、Ⅰ区やⅢ−Ｃ区からも木器が出土しており、これらの資料とあわせて検討することで当遺跡における木器の用材傾向を詳細に把握することが期待できる。

（2）資料

樹種同定の対象となる木器は279点であり、土坑・井戸跡・水場遺構・包含層などから出土している。遺物の時期は古墳時代（５世紀後半）から古代（７世紀末〜９世紀）と時期差があるが、一部を除き資料の中心は古墳時代後期と考えられている。器種は容器・農工具・紡織具や木簡や祭祀具、部材など用途は多岐にわたり、木簡には「戸川マ嶋山　九斗　天平六年十月十八日」と人名と日付が記された資料も出土している。

（3）方法

木製品の樹種同定は以下の手順により行った。はじめに木器の木取りや形状を観察し、破断面などできるだけ形状を損なわない箇所から、木口・板目・柾目面の切片をカミソリで採取した。採取した切片をプレパラートに載せ、その上からガムクロラールを滴下しカバーガラスを被せて標本プレパラートを作製した。標本プレパラートのガムクロラールが固化した後、光学顕微鏡（Nikon ECLIPSE E200）で観察した。各切片の組織構造を原生標本や参考資料と比較して樹種を同定した。

（4）結果

樹種同定の結果、木器279点の中から針葉樹８分類、広葉樹15分類が検出された。その内訳として、針葉樹はスギやヒノキなど166点、広葉樹はアカガシ亜属・シイ属（ツブラジイ・スダジイ）・クスノキ科・ツバキ属など93点、樹皮や未同定資料など20点である。木器の実測図を第86〜118図に示し、形状や出土遺構などの詳細や同定結果について第７表に示す。

この他、以下に器種毎による同定結果と用材傾向などについて記す。なお、器種の時期・用途・分類等は第７表に準じるものとする。

※本報告では樹種鑑定上の解剖学的記載や各断面の顕微鏡写真について紙面の関係上掲載するこ

とができなかった。不備について記してお詫びする。

容　器

容器は31点が出土しており、曲物蓋板・曲物底板・曲物板・盤・転び箱などがある。同定の結果、針葉樹４分類（26点）、広葉樹２分類（２点）が検出された。

蓋板は６点が出土しており全て針葉樹である。内訳はヒノキ５点、スギ１点であり、点数は少ないもののスギよりヒノキの使用率が高い傾向が見られる。蓋板は延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ−Ｃ区からも13点が出土しており、樹種はヒノキ（８点）・スギ（３点）・ヒノキ科２点である。Ⅲ・Ⅳ−Ｃ区共に点数は少ないがヒノキの使用率が高い。

底板は10点が出土しており全て針葉樹である。内訳はヒノキ７点、ヒノキ科３点である。蓋板と同様、全て針葉樹でありヒノキの使用率が高い。なお、第110図８・９（いずれも樹種はヒノキ）は同一個体である。底板は延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ−Ｃ区からも９点が出土しており、樹種はヒノキ（３点）・スギ（６点）・未同定（針葉樹１点）である。

曲物板は６点が出土しており全て針葉樹である。内訳はヒノキ４点・スギ１点・アカガシ亜属１点である。曲物板は蓋板または底板と考えられる資料であり、点数は少ないものの蓋板や底板と同様にヒノキの使用率が高い。曲物板は延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ−Ｃ区からも６点が出土しており、樹種はヒノキ（３点）・スギ（１点）・未同定（針葉樹２点）である。

曲物側板は４点が出土しており全て針葉樹である。内訳はスギ（４点）である。出土した曲物側板（第105図８～11）は全て完形ではなく破片化しているため接合箇所は明らかでないが、同一個体の可能性が高い。

盤は１点が出土しており広葉樹の散孔材である。盤は延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ−Ｃ区からも１点が出土している。Ⅲ−Ｃ区から出土した盤は針葉樹のスギである。本遺跡では盤の出土点数は少ないもののスギ・散孔材と針葉樹、広葉樹共に検出されている。

台は１点が出土しており広葉樹のクスノキ科である。台が出土したのは延永ヤヨミ園遺跡Ⅰ～Ⅴ区においてⅣ−Ｃ区の１点のみである。

転び箱は２点が出土しており全て針葉樹である。内訳はヒノキ（２点）である。転び箱が出土したのは延永ヤヨミ園遺跡Ⅰ～Ⅴ区においてⅣ−Ｃ区の２点のみである。転び箱も出土点数は２点と非常に少ないものの、上述する蓋板・底板等と同様にヒノキの使用率が高い。

上述する器種のほかに容器では箱・槽と思われる資料が出土している。箱は１点が出土しており針葉樹のスギである。槽は１点が出土しており針葉樹のカヤである。

服飾具

服飾具は２点が出土しており、下駄・衣笠がある。同定の結果、針葉樹１分類（１点）、広葉樹１分類（１点）が検出された。

下駄は１点が出土しており広葉樹のキリである。キリの下駄は遺跡出土の資料としては稀有である。下駄は延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ−Ｃ区からも１点が出土している。Ⅲ−Ｃ区出土の下駄は針葉樹のヒノキである。

衣笠は１点が出土しており針葉樹のヒノキである。衣笠が出土したのは延永ヤヨミ園遺跡Ⅰ～Ⅴ区においてⅣ−Ｃ区の１点のみである。

農　具